



案山子



2013年夏号

新潟大学文芸部

もくじ

■お題作品『花』

短歌『花』	ソロメロン	3
あかいはな	幼花	4
桜月夜	石川 うさぎ	5
隠蔽探偵	黒月 藍	7
Imitation flower	落谷アツムネ	8
魔法守護花☆トリカちゃん	sincot9	9
彼女たちにうってつけの花	高天 美月	10
月桂樹と薔薇	芳野 朔	11
アノ華語ルヤ	秋月 夢人	12

■通常作品

或る春の夜	落谷アツムネ	14
Daydream	川名 とけ	15
水彩迷走	夏村 晋	16
夢のような悪夢	幼花	17
六時三十八分までしかない時計	如月 杳	18
ハコイリムスメ	今畑 鏡	19
背徳者—神—	山吹 弓穂	20
背徳者—1 / 2 神話—	//	21
超能力者の誕生	諸木 夕	22
ショタ（もしくはロリ）のお遊戯	鯛漁逆冊	23
「英雄にならないか」と誘われた男	//	24
斯くして世界は揺るがない	雛夏至	25
本当にありそうで怖い話	落谷アツムネ	26
恋愛	Puney Loran Seapon	27
証拠	高天 美月	28
ジェネラル・ガーリッシュ	外衛 眞希	29
歯車の街	木材	30
神楽～秋～	東かおり	31
ブレイキングルール	祐輝	32

お題作品「花」

短歌『花』 (ソロメロン)

短歌『花』

ソロメロン

球根は雪の厚みに

じっと耐え

春を彩る新潟の花

こっち向く

ヒマワリみたいに咲く笑顔

太陽みたいに火照るほっぺた

雨に濡れ

青ざめたり赤らんだり

この花(こ)の心はちょっと不安定

風が吹く

淡紫の花揺れる

宇宙も僕もさらさら揺れてる

肌寒い

四月初めの椿達

桜の前にぼくらを祝う

お題「花」より

あかいはな

幼花

「この花も、あとひと月もすれば枯れ落ちてしまうんでしょう」

一面の秋桜畑の中、腰まで花の海に沈めながら、彼女は呟いた。到着してすぐに見せた、子供のような無邪気な笑顔を、今はもう眼前の彼女に見出せない。

「そうだな、枯れてしまうよ、ぜんぶ」

枯れない、だなんて嘘をつけるわけもなく、適当な励ましや慰めも思いつかなかった。秋晴れの昼下がり、涼しげな風に踊る秋桜は本当に波打つ海のようなようだ。この秋桜畑は、冬にはスキー場になってしまう。雪の季節が来るまでの間だけ、ここで秋桜は踊って客を引く。

そして、朽ちるのだ。

「どうして全部変わってしまうのかな。こんなにきれいなのに、いつかは無くなってしまう。この青空も、秋桜も、私たちの夏休みも——永遠じゃない」

きっと彼女は今、満たされているのだと思う。だからこそ自分を満たしているものが流れだし、零れ落ちて消えていくのをただ眺めていることしか出来ないことに、落胆しているのだ。

恐怖し、嘆いているのだ。

「変わらないものが欲しい」

「それは、どうしても必要なものではないだろう。今あるものが劣化しても、新しい何かがそれに代わるんだから」

「そんなの関係ないの。いつだって変わらないものが欲しいのに、どこにもない。でもね、分かっても求めずにはいられないんだよ。足元がおぼつかない恐怖を、私たちは本能的に知っているんだもの」

そうか、彼女にとっては、この心地いい時間こそが地面なのか。代わり、揺らぐ大地に直立できず、彼女は震えている。

彼女は脆い。今にも頬(くずお)れ、この海の底に沈んでしまいそうなほどに。

「怖いかな」

「怖いよ」

彼女の揺れる瞳の奥に、自分の姿を見る。鏡を見て初めて自分の姿を知るように、彼女の瞳が映す我が身から、自分の思いを知ることとなる。

「さくら」

彼女の名を呼ぶ。

「なに？」

彼女は儂げな表情のまま、か細い声で応える。

「不変をあげようか」

彼女は訝しげな表情を浮かべて首を傾げる。

「不変を、あげようか」

「変わらないものを、くれるの？」

彼女の表情が少し砕ける。途端、風がぴたりと止んで、静寂が二人の間に満ちた。

大学生の夏休みは少し長い。九月下旬のスキー場に、僕らは二人きりだった。彼女に歩み寄り、腕を強く引いて抱きしめた。

「僕らの夏休みを、永遠にしよう。」

その日、人気のない山の中腹に、一对の赤い花が咲いた。

首を垂れる赤い花卉と、放射状に広がる雄しべが夜露に濡れて、彼岸に手を振った。

僕らの時間は、ここに凍り付いた。

あとがき

落ちの意味が分かったかどうか心配です。彼岸花は誰もが見たことがある花だと信じて書きました。

さて、秋桜は真上に向けてしか花開かない種ですが、それに対して桜は、基本的に下に向けて花が咲く種です。秋桜は秋の桜だなんて言われてますが、花卉がなかなか離れようとせず萎んでから落ちるような根性のある花ですから、なんだか桜と一緒にするのは気が引けますね。ともあれ桜は日本人に古来から愛されてきた国花ですから、一緒にされて不名誉というわけではないですかね。好きです、秋桜（結論）

今回もう一本投稿しています。そちらが本番なので、「夢のような悪夢」の方をよろしく願います。以上、幼夏ちゃんでした。

桜月夜

石川 うさぎ

もうすぐ、春が来る。今年もまた、君を想う。

「ねえ、何組の子？ なにしてるの？」

初めて話しかけられたのは、中学に入学して一週間ほどたった頃。他人と話すのが苦手な私は、放課後、一人で校庭の桜の木の下で本を読むことを習慣にしていた。桜の木と言っても、まだ蕾。咲く気配はない。そして私は、人が来ないこの場所を結構気に入っていた。

「ねえ、……なにしてるの？」

ふわっと、春の香りがした。友達がない私は、まさか呼ばれているのが自分だとは思わず、思わず無視してしまった。

「ねえってば。そこの眼鏡の君！」

「え、私？ 私に用があるの？」

驚きつつ顔を上げると、そこには、人懐っこい笑顔を浮かべた男の子が立っていた。ピョンピョン跳ねている柔らかそうな茶色の髪。黒くて大きな目。ぼおーっと見惚れながら、美形さんだな。と思った。

「俺は翠、櫻井 翠。君の名前は？」

「わ、私は深月。宵宮深月。三組」

櫻井 翠。そう名乗った少年は、見るからにコミュ力高め、クラスの人気者タイプの男子。それに比べて私は、眼鏡で、陰気で、黒髪で。クラスのカーストの底辺にいるような女の子。明らかに、不釣り合いで。翠が、なんで私なんか話しかけてきたのか、皆目見当も付かなかった。困っている私を頭上から眺めながら、薄桃色の蕾が、微笑むように揺れた。

それから、翠は頻繁にここへやって来た。まあ、私が翠と会うのは、桜の木の下で私が読書をしている時、または宿題をしている時だけだったのだけれども。何が楽しいのか、翠はひたすら私に話しかけたり、私が翠に貸した本読んだりして、過ごしていた。私は、部活に入っていないから気にする必要はないけれど、翠は部活に出なくて大丈夫なんだろうか。私は心配になって、ある日の夕方、翠に訊ねた。

「ねえ、翠君。部活は行かないの？ 友達とカラオケとか、遊びに行ったりとかは？」

「ふふっ。『翠』で良ければ。部活は入ってないよ。カラオケ……？ 行かないよ。お金掛かるんだろ。時間は有限だ、有効に使わなきゃ」

部活をサボっているわけではない、ということに安心はしたけれど、疑問は増えていくばかりで、私は質問を続けた。

「じゃあさ、翠く……、翠はなんで私に話しかけたの？ 何でいつもここに来てるの？ 私には

、貴方と私がお喋りすることが、意義のある時間の使い方だとは思えない。」

「君にとっては意義のあることでなくても、俺にとっては有意義な時間かもしれないだろ？」

「質問の答えになってないよ。私はそういうことを聞きたいんじゃない。何で私なんかに話しかけたの？」

「可愛い女の子が、桜の木の下で本を読んでたから気になって。なんてね。理由が無いと話しかけちゃダメなの？ そんなことないでしょ」

翠が話さないって決めたらもうどんなに問い詰めても無駄で。そう、まさに、『暖簾に腕押し』っていう言葉がピッタリだった。

「そんなことよりさ、深月。この間借りた本に出てきた『ブラウニー』って何？ 食べ物みたいだけど」

「ブラウニーは、甘くて美味しいチョコレート味の焼き菓子だよ。翠、知らないの？」

「え、あ、ううん。そっか、猪口令糖かあ」

私が常々感じていた翠の不思議なところ。翠はとても頭が良くて物知りだった。特に社会が良くできる。私は馬鹿な方ではないと思うけど、わからない問題は普通にある。でも、私が訊ねて翠が答えられない問題なんてなかった。だけど、翠はカタカナ横文字に弱かった。驚くくらいに、知らないのだ。ブラウニーやティラミスなどのお菓子の名前だけじゃない、ゲームに関しても全くと言っていいほど無知なのだ。私が疑問に思っただけで訊ねると、いつもよく喋る翠が困った顔で言いよどむので、私は気にするのを止めることにした。そんなこと知らなくても、翠は翠。変わりはないのだし。校庭に、桜吹雪が舞っていた。

校庭で遊ぶ人が増え、少し騒々しくなっていて、桜が盛りを過ぎた頃。翠が来ない日が増えた。来ても、疲れた顔をしていて余り喋らない。私が心配になって『大丈夫？』と聞くと、頷きながら、ふわりと笑う。

翠は卑怯だ。そんな顔をされたら、私は何も言えなくなってしまう。そうこうするうちに、翠は週に1、2度しか来なくなって、来ても読書をしているか、寝ていることが多くなった。私は、最近忙しいのかな、なんて思って眺めていた。頭上の桜の木は葉桜になりかけていた。

ある日、珍しく翠が私より先に来ていた。そして私を見て、

「深月」

私を呼んだ。

「何？ 私はここに居るけど」

驚いて思わず不機嫌そうな言い方になってしまった。名前を呼ばれることが嫌だったわけではないのに。嫌がっている風に聞こえてしまったかもしれないと、私が心配していると、翠はいきなり抱きついてきて、

「え？ どうしたの、翠」

「深月、ありがとう……さよなら」

「え、うん」

呆然としている私を置いて、翠はそれだけ言うと走って何処かへ行ってしまった。数秒間、私がフリーズしていたとしても視界から消えるはずがない。でも、我に返って見回しても、何処にも居なかった。

次の日。理由は分からないけれど、嫌な予感がして。私は翠を探した。付けていた名札を思い出して、確か一年生だったと思って、一年生のクラスを端から見て回った。朝と昼休み、放課後に学校内を探して歩いた。次も日も、その次の日も。

苦手な同級生に勇気を出して話しかけてみた。翠を探すのに名簿を借りなければならなかったから。

同級生に話しかけられるようになって、それにきちんと応えるようになった。何処かに翠についての情報があるかもしれなかったから。

社会の成績が良くなった。翠の教えてくれたことを忘れたくなくて、教科書をよく読むようになったから。

初夏の香りがする頃に。私は、すっかり桜が散って葉だけになった桜の木の下に来ていた。何処かで気づいていた。翠はもう、何処にも居ないことを。私の中から翠が消えてしまうのが、ただ、怖かっただけ。いつの間にか、私の全ては翠を中心に回っていて。だから、私は独りが好きだと思っていたのに、独りでいるのが苦痛になってしまった。

「勝手な奴……。」

おもわず、私は呟いた。

風が吹いて、翠色の桜の木が笑ったような気がした。

それから一カ月過ぎ、二か月過ぎ、半年過ぎ、一年過ぎて、いつの間にか私にも『友達』と呼べるものが出来て。クラスにも居る場所が出来て。なのに翠がいた日々は、私の中で昨日の出来事みたいに鮮明なままで。本当に『月日は百代の過客にして』だな、なんて思う。

もうすぐ、春が来る。今年もまた、君を想う。

隠蔽探偵

黒月 藍

深夜。郊外の高級住宅街。

ここは、都心から離れているため、その静かさから人気の高い土地であり、必然的に、住む人間も資産家や名門一族の者に限られてくる。

そんな住宅街の一軒、大沢邸。

名門の出である女性が住むこの家から、突如、火事が発生した。

近隣の住民の通報で即座に消防が駆けつけ、鎮火。一室が炎上したものの、女主人は救助され、被害は最小限に抑えられた。

彼女の証言によると、

『居間に居た時、突然、花火のような爆発が起こった』

らしい。その発言から、その爆発は小規模のものだったこと、そして、その爆発による引火で火災が発生したと推定された。

しかし、消防による捜査の結果、火災の原因となった爆発源は見受けられず、自動発火装置などが存在した形跡も見あたらないため、この件は放火と断定された。

そこで、警視庁から放火の調査を行う刑事達が出向したものの、捜査は難航することとなる。

＊

朝日が消化剤や煤を照らす部屋の中で、警視庁に所属する女刑事、坂中ゆかり警部補は溜息をついた。

彼女は本来、殺人などの犯罪にあたる殺人犯捜査第三係の刑事であって、火災犯捜査係では無いからだ。

そんな彼女がここに居る理由は、火災犯捜査係の多くが出払っているためである。丁度本庁で手が空いていた彼女は、以前この部署に身を置いていた経験もあって、引っ張られてきたのだ。

本来なら深夜勤務が終了したら自宅でゆっくり休養する予定だったのに……。と、彼女はそんなやるせない不満を抱く。

そんな彼女の元に、一人の刑事が近づき、ゆかりは疲れの残った表情を慌てて取り繕う。

刑事の後ろには腕に包帯を巻いた一人の女性が立っていた。

顔には少しだけ火傷の後も残っていた。見た目は三十代くらいだろうか。

「坂中警部補。この家の主人の大沢真子さんです」

女主人は暗い表情をしている。家の一室が爆発したうえに、自身も危なかったかも知れないのだから当然だろう。

ゆかりは神妙な顔をして頭を下げる。

「この度は本当にお気の毒で……。身体は大丈夫なのですか？」

「ええ。爆発の直撃を受けなかったもので、軽い火傷で済みました」

と挨拶した後、彼女は大沢に質問をする。

「この燃えた一室は一体、何の部屋だったのでしょうか？」

「居間です。私が主に過ごしている部屋でした」

すると、隣の刑事が補則する。

「大沢さんは宝石、特にダイヤモンドを取り扱う方だったようで、この部屋には多くのダイヤが保管されていたそうです」

宝石や貴金属などの貴重品を蒐集する金持ちは多くいるが、ダイヤモンドだけを専門に集めるコレクターは初めて見た。

ゆかりは部屋の惨状を眺めながら話す。

「しかし、確かダイヤモンドは……」

大沢は沈んだ面持ちのまま答えた。

「そうです。分子の結合率が非常に高いために燃えやすく、炭素で出来ているために火災が発生すると――」

そう言って彼女はゆかりを部屋の置くに存在していたと思われる保管庫の前へ連れて行き、

「ただの消し炭になってしまうのです」

ゆかりが見ると、殆ど原型を留めていない保管庫の近くに、粉々になった、黒い炭がある。おそらく、ダイヤモンドの成れの果てだろう。

「確かに、これはダイヤモンドだったようです。燃え残りの一部に、非常に小さなダイヤの結晶が確認出来ました」

調べていた鑑識官が告げる。

世界一固い物質と言えど、高熱と爆風には耐えられなかったようだ。この消し炭が全てダイヤだと考えると、ゆかりは大沢が気の毒になった。

「先程電話したところ、放火でも火災保険は降りるそうです。ですが、業界でも貴重な品々ばかりでしたから……」

女主人の話を聞きながら、ふと、部屋の角を見る。植木鉢の破片と焦げた植物、零れた土と肥料が視界に入った。

「あれは何でしょう？」

大沢は「あっ」と言って、

「あれは、観賞用の植物です。昨日知り合いから戴いたもので、名前は――えーと、分かりませんが、とても綺麗な花でした。あんなに綺麗だったのに」

そう言えば、と彼女は付け加える。

「確か、爆発はこの花に水をあげて数分後だった気がします」

「成程。ところで、まだ何も証拠は見つからないの？」

ゆかりは周囲の警官に呼びかけるが、当惑した顔を見せるばかりだ。

「出火の原因ですら分からない有様でして。マッチ一本、ガソリン一滴すら発見出来ません」

刑事の一人は、本当に困ったと顔で語る。

すると別の刑事が慌てて彼女に近づき、こっそりと耳打ちする。

「実は警部補。鑑識からの報告によれば、今回の件。警部補には馴染み深い、例のアレが関わっているという見方が強いのですが……」

「例のアレって、まさか！」

ゆかりは驚愕した。まさか火災の現場でも関わるとは思わなかったからだ。

「しかも、大沢さんの実家もその筋の家柄だそうです」

ゆかりはますます驚愕する。あの女主人が、そんな……。

「既にあちらへの連絡は済みました。和藤(わとう)という方が来ます」

頭を抱える。この事件に彼が出てくるという事は、必然的に後々、「奴」の力を借りる必要が出てくる。

和藤。日本人とイギリス人のクォーターという、少し変わった青年だ。アレが関わる事件では何度も世話になる。

問題は、彼が全てを解き終わった後のことだ……。

彼女が再び深いため息をつくとき、奥から声が聞こえる。どうやら玄関の方かららしい。

「私は神社本庁のジョン・H・和藤という者ですが」

「英国人の神主？ しかもそんな人物が火災現場に何の用だ……？」

警備の者達が当惑しきっている。ゆかりは呼びかけた。

「今回の事件における重要人よ。通して差し上げなさい」

警備官は、わけが分からないと言った顔をしながら、一人の男を通した。

ジョン・H・和藤。彼は、現代に生きる魔術師なのだ。

＊

この世界は、ヒトが思うよりも少しだけ不思議が多い。

例えば、魔法、魔術。

社会の影に隠れる、このファンタジックな技術は、この世界に実在する。

進んだ科学技術が世の中を席卷する中、魔術は政府や教会、その他の宗教組織に秘匿されており、その業を背負う一族や信仰者がこっそりと継承しているのだ。

日本にも、呪術を管轄していた内務省の外局、神祇院が存在していた。しかし、戦後は連合国によって解体され、現在は「宗教法人神社本庁」が呪術師や霊能者を管轄している。

和藤の家系もその一つ。戦後にロンドンへと渡った、現在は神道と英国式魔術を取り扱うイギリスの名門一族である。

現在の嫡男のジョン・H・和藤は、神道研究のために祖父の祖国、日本へ来日し、現在は神社本庁に出向しているのであった。

＊

「すまないけど、警視庁から今回の件は極力、少人数であたるように厳命されたわ。これから私が呼ぶ者以外は撤収よ」

こう言って、坂中ゆかりは、魔術などというオカルトの世界を知る警察官以外を取り除き、英国青年の方を見る。

「舞台は整えたわ。始めて頂戴」

「ありがとう、坂中。それに、お久しぶりです、大沢さん」

和藤は今回の被害者である大沢に挨拶をした。どうやら顔馴染みらしい。

「和藤さん……あなた、警察への協力もしているの？」

「神道研究だけでなく、日本の魔術犯罪の概要も知っておきたくて。神社本庁の方に無理言って出向かせてもらっているんですよ」

「じゃあ、今回の件はもしかして？」

「ええ。我々お得意の『魔術』が関わった事件です。こちらの坂中警部補は一般の刑事ですが、我々の事情は飲み込んでいます」

「じゃあ、刑事さんも私の素性は知っているのね？　どうか、よろしくお願いします」

大沢はゆかりと和藤に頭を下げた。

「知り合いなの？」

ゆかりが訊ねると、

「俺達の業界は狭いんだ」

和藤はそう言って室内を歩き始めた。

「それにしても、爆発が小規模で済んで良かった。不幸中の幸いですね」

「ええ。でも、集めていたダイヤモンドが全部駄目になってしまったわ」

大沢の暗い声を聞くと、和藤も残念そうな顔をした。

「それは本当に残念です。大沢さんは熱心でしたからね」

ゆかりは、今度は大沢に質問した。

「もしかして、ダイヤも魔術に使うんですか？」

「ええ。宝石はその出来上がる過程で、地球の地脈から魔力を吸収しているの。私たちが大切な儀式を行うときにもよく用いられるのよ」

へえ、と呟くが、ゆかりはその筋の話には全く付いていけない。

「坂中、大沢さん。これは何です？」

部屋の奥から、和藤がこちらを呼ぶ。近づいてみると、彼が言及しているのは、先程見た植木鉢の破片と燃えて黒くなった肥料、殆ど燃えカス同然となった植物の茎だと分かる。

大沢は、先程ゆかりにしたように綺麗に咲いていた筈の花のことを話す。

それを聞いた和藤はしゃがみ込み、手袋を付けて花の残骸を調べ始めた。持ち上げたそれを穴が開くほど綿密に眺め、

「魔力反応がある……！」

「何ですって？」

素人のゆかりでも、それが何を意味しているのかは分かった。

魔術に使われるエネルギーの痕跡があると言うことは、その物体が術に関係があることを証明しているからだ。

「ちょっと車に戻る」

と言って和藤は部屋を離れ、数分後に分厚い事典を持って帰ってきた。

そして、慣れた手つきで手早くページを捲り、

「これだ」

ゆかりが覗き込むと、そこには一厘の花が載っていた。

《花火》

「魔力反応が残るこの植物は、おそらくこれだ」

和藤はそのページをこちらに向けながら説明する。

「室町時代。大陸から持ち込まれた花火を気に入ったとある将軍が、朝廷の陰陽師に作らせた魔導植物だ。御所の敷地内にたくさん咲かせて、手軽に花火観賞を楽しんでいたらしい」

「花火を咲かせる植物って……。魔術は何でもアリなのね」

「花火は中国から日本だけでなく、欧州にも渡っている。俺の故郷では『ファイアワークス』と表現するから、『花火』と表現する日本人ならではのマジックアイテムだな。育成の調節次第で、爆発の時期もある程度は決められるだろう」

ゆかりは気づいた。

「大沢さん、この花は誰から貰ったんですか！」

戸惑いながら大沢は答える。

「菊池(きくち)——英俊(ひでとし)という男から貰いました……」

その発言は、ゆかりと和藤を驚かせるのに十分な内容だった。

「菊池英俊？ 裏社会で騒動を巻き起こす危険人物じゃない！」

公安課の人間からよく聞く名前で、逮捕された暴力団のメンバーですら、その悪行から彼に恨みを抱く者は多いという。

和藤がそれに補則を入れる。

「奴は魔術業界の方面の人間でもある。悪名高い男だ。未だに逮捕することも出来ないため、神社本庁も躍起になって尻尾を掴もうとしているらしいが……」

大沢は目を下げ、

「実は昔、彼とお付き合いをしていたんです。でも、あんな性格の男ですから酷い別れ方をしてしまって。そうしたら昨日、彼からこの植木鉢が宅配便で送られて……。『昔お世話になった礼』って伝言が添えられていて。花に罪は無いので、しっかりとお世話しようとしていたんですが……」

「おそらく、大沢さんが水をあげてから暫らくすると、花火が破裂するように調節して育てていたのでしょう。水を吸って生長し切った後に発動したので、大沢さんが花火から目を離している際に爆発したと考えられます」

なるほど。大沢が爆発源に気づかなかったのはそういう仕組みか。ゆかりは納得し、思い当たったことを口にする。

「じゃあ、もしかして動機は別れた大沢さんへの復讐？」

「その可能性が妥当だろう」

それを聞いた大沢の目が見開かれた。かなりショックな事実だろう。

ゆかりは彼女の心中を察しながら、周囲の警官に指示を出す。

「菊池英俊を事件の重要参考人とするわ。本庁にすぐ連絡して！」

指示を受けた警官がすぐに散っていく。和藤の方は一段落ついたような顔をし、大沢は呆然とした顔をしていた。

「大沢さん、気をしっかり。これから警視庁の方へ来てもらいます。表のパトカーに乗ってください」

はい、と言い残して、大沢は玄関の方へと向かっていった。

それを見届けたあと、ゆかりは和藤の方を見る。

「ご苦労様。けど、あなたは良いわね～これで終わって。私はここからが始まりよ」

苦々しげに呟くゆかりの表情は重い。

「『あいつ』なら、多分すぐに引き受けると思うぞ。あいつも大沢さんとは知り合いなんだ。彼女のダイヤの仇はとってくれるさ」

そう。事件は終わっていない。魔術が関わった犯罪の場合、ここからが本番なのだ。

ゆかりは、近々顔を合わせなければならない、あの女の顔を想像して、ため息をつく。

「じゃあ、私も警視庁に戻るわ。あなたも帰っていいわよ」

ああ、と返事をしながら、和藤は事件が解決された筈の部屋を眺めていた。

「……本当にこれで正しいのか？」

消し炭になったダイヤを見ながら彼はそう呟いたが、ゆかりの耳には聞こえなかった。

*

昨日の件が終わった後、俺の携帯電話に坂中ゆかり警部補から着信が入った。菊池英俊は罪を認め、逮捕されたいらしい。また、その件で彼女が明日、俺の屋敷に来るということだった。

いや、正確には俺の屋敷の中にある一室の主に、彼女は用があるのだ。

そして現在。俺は家の廊下を歩きながら、坂中が来るのを待つと同時に、「あいつ」が帰るのを待っていた。

戦後、英国へと渡った我が和藤家だが、祖父は日本にも屋敷を遺し、日本に来る子孫はいつもここを使うことになっている。

しかし、だだっ広いため、その内の部屋の一つを、俺の神道研究にかこつけて付いてきた「あいつ」に貸しているのだ。

奴の部屋の前に立ち、扉に貼られた紙を見る。

そこには、『探偵事務所』と汚い字で書いてあった。

生粋のイギリス人に漢字は難しいだろうが、もう少しだけきっちりと書けないものか――いや、あいつはアルファベットも汚かった。

中に入ると、部屋を埋め尽くす様々な道具に圧倒される。

二人が来るまで暇なので、昔あいつが高額で手に入れた「一人用チェス」に興じることとする。

。 ヴィクトリア朝時代。孤独な老魔術師が作り上げた一品で、相手方の駒が勝手に動くのだ。難易度調整も出来る優れもので、退屈凌ぎにはもってこいである。

今でこそ、科学の進歩で、一人だけでコンピュータ相手にボードゲームが出来るようになった。孤独者に優しい時代になったものだ。

最初は鼻歌を交えながら楽しんでいたが、叙々に相手のビショップがこちらのキングに近づき、慌てる。

「うわっ。待った待った！」

しかし、無慈悲にも相手の方のチェス盤の淵に文字が浮かび上がる。

『It does(待った)not(無し)wait.』

「そんな殺生な！」

「……何を一人で寂しいことをしているの」

いつの間にかドアが開かれており、坂中ゆかりが立っていた。

「呼び鈴を鳴らしても誰も出ないから、勝手にあがらせてもらったわ」

白熱した戦いゆえに気づかなかった。

「それで、『奴』は何処？」

「まだ帰ってない。俺はちゃんと連絡をしておいたんだが……」

『Does(おい)it(貴様、)escape(逃げるのか)?』と表示されるチェス盤を片付けながら、彼女に弁明する。

「まったく。国家権力を待たせるなんていい度胸してるじゃない」

と坂中が文句を言っていると、

「ごっめーんっ！ ついつい寂れた置物屋で魔術用品を物色していたら遅くなっちゃった！」

突然ドアが開かれ、長い金髪をたなびかせた女子高生が、手に大きな紙袋を抱えて、騒がしく侵入してきた。

シャルロット・フォード。彼女は、イギリスにいた頃からの俺の妹分であり、名門魔術貴族の令嬢であり、

魔術に関わった事件の内容を、マスコミや裁判所に提出可能な「普通の事件」へと作り変えることを生業としている、

《隠蔽探偵》なのだ。

*

「遅いっ！ 警察を待たせるなんてどういう了見？」

「だって、用があるのはそっちの方じゃん——ってあれー？ 警視庁の捜査費用を着服して懲戒免職になった坂中ゆかり警部補が何でここに！」

「誤解を招く説明はやめなさいっ！」

「ごめんごめん。沖ノ鳥島署に飛ばされたのよね。毎日忙しい？」

「あそこは海上保安庁さえ滅多に来ないわよ！ いい加減にきなさい！」

相変わらず、この二人の仲は悪い。ウマが合わないのか、最初に会った時からずっとこれだ。

「まあまあ、二人とも落ち着いて。シャルロット。大沢さんの家の火事だが……」

だが、シャルロットの耳は俺の話を通りし、持っていた紙袋から大きな装置のようなモノを取り出した。

「じゃーん！ 私が先程、怪しい置物屋で購入したのはなんと、古代エジプトの神官が作った『探し物発見盤』なのだ！」

興奮した様子で、俺達に見せびらかす。

「この道具は半径五メートル以内の探し物を探知する優れものっ。古代エジプト言語しか反応しないのが難点だけど、早速使ってみましょう！」

そう言って、怪しげな装置にシャルロットは、付属していたらしき、ボロボロの言語表を見て、よく分からない単語を吹き込んだ。

すると、

「むむ、装置が坂中警部補の左靴に反応している！」

げっ、と驚く坂中を無視して、シャルロットは左靴を奪いとり、靴底から封筒を取り出した。

「おおっ、警部補のへそくりが、いち、に、さん……」

「返しなさいっ！」

靴を奪い取られるも、シャルロットは満足したようだった。

「今度は別の場所に隠した方がいいんじゃない？ ま、こんな使い方も出来るわけです」

相変わらず変な道具を買ってくるヤツだ。

「いくらしたんだ？」

「二十五万円。今月の私の全財産」

いつものことだが、もう少しまともな金銭感覚が身につかないだろうか……。

「というわけで警部補。捜査の協力費用早く寄越してね」

「まだ何もしてないじゃない！」

*

「ふむふむ。『花火』か～。あれ、私も欲しかったんだよねえ」

火災現場の写真を見ながら、シャルロットは呟いている。

「この消し炭は何？」

彼女の指は、燃え散ったダイヤを指していた。

「それが大沢さんのダイヤだ。全部炭化して燃えてしまったそうさ」

うわー、と声を漏らし、更に他の写真や、坂中の持ってきた証拠品を見ている。

「大沢さんの話によれば、放火でも火災保険は降りるのがせめてもの救いね。でも、あなた達魔術師なら、宝石ぐらい魔法で簡単に作れるんじゃない？」

坂中の台詞を聞くと、シャルロットは「はあ～、やれやれ」と両手のひらを上に向け、

「魔術っていうのはそんな簡単なモノじゃないの。特に宝石っていうのは、巨大なバイオスフィアでもある地球の地脈、竜脈から魔力を吸収して地中深くで作られるものだから――」

そこで彼女は言葉を切って屋敷の外へと駆け出し、いくつかの小石を持って来て机の上に置いた。

そして、魔方陣を書いた紙を用意し、その上に小石を移して両手をその上にかざす。

瞬間、机の上から閃光が放たれ、小石から小さな煙が上がる。その横ではシャルロットが息を切らせて立っていた。

「私の今日の魔力全部つぎ込んでこれよ」

坂中が極小の綺麗な粒が付いた小石を見つけた。

「あった。へえー、魔術師も大変なのね」

「ふん、警部補もこれでまた少し利口になったのかしら？」

そう言って、彼女はまた写真や証拠品に目を戻す。

「ようは、魔術を使わずにこの植木鉢が爆散すれば良いんでしょ？」

「ええ。でもあまり証拠は増やさないと貰えると助かるわ」

そう。この場合、よくサスペンスに出てくる時限爆弾が植木鉢に入っていたというパターンはよろしくない。火薬やタイマーの製造元、購入店をでっち上げて、なおかつ、彼らにも口裏を合わせてもらわなければならない。

また、現場に無かったモノをあったと証言すると、初動捜査にだけ参加していた事情を知らぬ警官にも、後で不審がられてしまう。なるべくなら現場にあったものを応用するか、完全に現場から消失出来るものが好ましい。

これを為すのが隠蔽探偵の仕事だ。俺のような一介の魔術師には出来ない。

俯きながら、シャルロットは写真と証拠を見ながら独り言を言っている。

「――植木鉢。――肥料。――炭化したダイヤ。――花火。――爆弾……」

そして独り言が終わった瞬間、彼女は頭を起こし、

「そうだ、この手があった！」

満面の笑みで叫ぶ。そして、俺と坂中を見て勝ち誇った顔をした。

「これから説明してあげるわ」

*

「まずは警部補。お願いがあるんだけど、あの植物は真水では無く、塩水で生長する特殊な花だったことにして欲しいんだけど」

「塩水？ だけど、普通そんなことしたら萎れると思うけど」

「仮定の話だから良いのよ。それに、最近のバイオテクノロジーの世界では、海水で育つ植物も研究されているから、そういう花だったことにしておいて」

「分かった。検察と裁判所にはそうしておく」

坂中は用意したメモ帳に書き込んでいた。

「次に、あの植木鉢は三層構造だったことにして。一番上が土と花。一番下の層が肥料と特殊な化学薬品。――なるべく気化しやすく発火点の低いモノが良いわね。そして中央にはティッシュとアルミホイルを巻いた備長炭」

「ん？ 何で肥料を土に混ぜないんだ？」

俺が訊くと、シャルロットはニヤリとして語る。

「三層目の肥料は爆薬よ。近年のテロリストが使う爆弾にも頻繁に用いられているわ」

「じゃあ、中央の層に用意する炭は何？」

今度は坂中が尋ねる番だ。

「小学校の自由研究とかでやらなかった？ 食塩水を浸したティッシュペーパーを炭に巻き、そ

の上にアルミホイルを巻く。そうすると、イオン反応で簡単な蓄電池になるから、低電力のオルゴールを繋げるとメロディが鳴り出す――って感じの実験」

「あー、やったかも……」

「私の筋書きではこうよ。」

まず、ティッシュに食塩水を含ませずに備長炭に巻き付け、その上にアルミホイルも巻く。それを何個か作る。直列に繋げたそれを真ん中の層に入れて、細い針金とか、――まあ、伝導線ね――を取り付ける。

そして、その伝導線を最下層に垂らし、そこにぎっしり詰まっているであろう、肥料の中に埋め込む。

ちなみに、三層目には水が入らないような工夫をしておく。爆薬が湿気るからね。

そして、菊池のメッセージに「この花は少し多目の濃い塩水で育つ」とでも書いてあったことにして、大沢さんが塩水を花にあげれば――」

「そうか！ そうすれば……」

「花にあげた塩水は最初、土に染み込む。でも、多めにあげればきっと下に垂れるでしょう。そしたら直列に繋いだ、強力な備長炭電池に流れ込み、電流が導線へ流れる。そしたらその強力な電気は三層目の肥料爆薬へ至り発火。そして……ドン！ と、こういうわけ。水をあげてから暫らくタイムラグが空くから、大沢さんも植木鉢が爆発したことには気づかない」

おお、と二人して感心してしまった。

「そうやって火事が起これば、残るのは花の燃えカスと黒こげの肥料。そして消し炭だけ。アルミホイルとティッシュも跡形も無くなっている筈よ」

坂中があっと言って、

「この場合、炭が残っても怪しくないのか。周りには炭化したダイヤの燃えカスが散らばっているから、まさか起爆装置だったなんて気づかれないわけね」

「そうよ。この爆弾なら、証拠は残らない……。上手くいくかは分からないけど、理論上、筋は通っていると思わない？」

得意げなシャルロットの表情を見て、坂中は少し悔しそうだ。宿敵の見事な捏造推理に感服している自分に、苛立っているのかもしれない。

「ま、所詮は辻褄合わせだから、細かい検証は警察の方でよろしく頼むわ、坂中警部補？」

そうして、坂中はすぐに和藤の屋敷を後にした。部屋を出る前に、シャルロットは捜査協力費用をせがみ、坂中に支払いを確約すると、

「ジョン！ 事件も終わったことだし、浅草に乗り出すわよっ！ すっごく怪しい店を見つけたの」

興奮した様子で騒いでいる。もう金は無いんじゃないかったのか？

「お金ならさっき入ったじゃない。後で返すから貸してよ、三十万円」

そんなに要求したのか！ まったく呆れてものも言えない。

すると突然、俺は何か、違和感のようなものに気づいた。まだ事件は終わってない。そんな予感がする。

「どうしたの、ジョン？」

俺は、どうしても今回の事件で気になった部分をシャルロットに話した。俺の話聞き終わった彼女は、

「ジョン。明日、大沢さんの邸宅に乗り込みましょう！」

*

そして翌日。現在時刻は午後二時三十四分。

大沢邸に訪れた俺とシャルロット、坂中の三人は居間が燃え落ちてしまったため、別の部屋へと通され、大沢さんと向き合って座って居た。

大沢さんの柔らかい表情を見ると幾分、落ち着きを取り戻したようだ。

しばしの歓談の後、シャルロットはトイレに立ち、俺と坂中、そして大沢さんの三人になった。

俺は意を決して、話を切り出す。

「そう言えば、菊池が逮捕されたことで、魔術業界の方も大パニックみたいですね」

「ええ。でも、捕まって本当に良かったわ。だって、もう襲われる心配も無いから」

彼女は穏やかに答え、紅茶に口をつけた。

俺も紅茶を一気に飲み干す。事件の決着をつけよう。

「『もう襲われる心配も無いから』……。確かにそうです。これで、菊池は塙の中で安全に暮らせるようになりましたからね」

彼女は紅茶をこぼした。きゃあ、すみません、と言って、布巾で紅茶を拭く。そして、俺の目を見た。

「何を言ってるんですか、和藤さん。私は、自分が菊池に襲われず、平和に暮らせるという意味で――」

「それが、あなた方の筋書きだったのですね？」

坂中の言葉に、大沢さんはますます動揺した。

「何を言ってるの……二人とも？」

「今回の事件で、どうしても気になる部分がありました。それは、何故花火の送り先にわざわざ菊池英俊の名が書いてあったのか？ そして、何故、菊池の贈り物を、貴方が疑いも無く受け取ったのか？ という二点です」

「花火はマジックアイテムですから、此処にいる和藤のような専門家が見れば、一発で凶器だと分かります。そうすれば、その送り主が犯人となる。そんなことは、考えればすぐに分かります。しかし、何故、菊池は自分の名前を書いたのでしょうか？」

大沢さんは黙って話を聞いている。

「それを、俺はこう考えました。もしかしたら、『菊池は逮捕されたかったのではないか？』と。そして、『逮捕されるために必要な犯罪の被害者として、大沢さんは協力したのではないかとね」

「この世に逮捕されたい人間なんか居るはずないでしょう？ それとも、菊池は懺悔し始めたとしても？」

「まさか。俺の知る限り、ヤツはそんな殊勝な人間ではありません。おそらく、彼は逃げたかったのでしょう。『自分の命を狙う、裏社会の組織』から」

俺は一息入れて、言い放つ。

「そして、貴方はそれに協力したんだ、大沢真子さん！」

目を伏せ、大沢さんは手で促した。

「続けなさい。つまり、私が共犯だと言いたいのか？」

「その通りです。わざわざ宅配便に書かれた犯人菊池の名前。危険事物である菊池と知りながら、その中身を素直に受け取るあなた。これは明らかにおかしいでしょう？」

彼女は再び紅茶を自分のカップに入れて、口元へ運ぶ。

「つまり、私が彼に協力して、刑務所に入れた手伝いをしたと。そう言いたいわけね？ あなた達は」

その問いに、今度は坂中が毅然とした態度で迎え撃つ。

「その通りです。大沢さん。私たちは、あなたと菊池が別れたとも考えていないんです。多分その関係はずっと続いているのでしょうか？ そして、菊池からこの計画を聞いたあなたは、協力を決めたんです」

大沢さんはあくまで冷静に言う。

「でも、そこまで言うなら証拠はあるんでしょうね？ この状況は、名誉毀損に成りかねませんよ？」

坂中が俺の方を向く。今度は俺の番だ。

「証拠はありません。全部状況と推測です。でも……」

「何かしら？」

「あなたのもう一つの犯罪の証拠なら、もうそろそろ出てくるでしょう。ほら、異様にトイレの長い私の妹分の足音が、だんだんと近づいてきますね？」

その瞬間、彼女の目が見開かれるのを俺は見た。

「まさか！」

バン！ と大きな音をたてて、シャルロット・フォードは室内に戻ってきた。右手にはキラキラとした物体がいくつも入ったビニル袋。左手には大型の古代エジプト製の探査装置。

「ふう〜。大沢さんの家、広いから時間が掛かっちゃった。でも、四階の屋根裏部屋でしっかりと見つけたわ。この、大量のダイヤモンドをね」

そして、シャルロットは真相を語りだす。

「菊池を刑務所に入れても、出所後のことは分からない。だから、貴方達は敵対する暴力団やら何やらに手打ち金を払うことにしたんです。

でも、名門の大沢さんでも、その途方も無い金は簡単に用意出来ない。そこで、」

彼女は右手に先程から持っていた袋を。そして、左腕に抱えた探査装置を床に置き、坂中が持ってきた、ダイヤモンドの消し炭を掲げる。

「二人は保険詐欺を思いついたんです。時価数億のダイヤは元恋人による放火で燃えてしまったと偽ります。本物のダイヤを隠すことで。そして、炭と、自分の魔術才能を使うことで！」

シャルロットは大沢さんに近づき、証拠品である、ダイヤの消し炭を取り出した。

「我々魔術師は、宝石を自分の魔力だけで作ることは叶いません。私もやってみましたが、どんなに頑張っても、砂粒一つぐらいの大きさが限界です。でも、」

シャルロットに迫られ、彼女は息を呑む。

「砂粒ぐらいの大きさでも良かったら？　これが、『元々ダイヤだった』と、鑑識に思わせることが出来れば良かったとしたら？」

つまり、彼女は火事の中、燃えた炭を魔術で加工し、極小のダイヤが付着した消し炭へ変え、あたかもダイヤモンドだったと思わせるように仕向けた。と、いうわけだ。

「大沢さんがダイヤの蒐集家だったのは有名です。こうして保険会社から火災保険を騙し取り、隠していた本物のダイヤも闇で売り捌く段取りで、手打ち金を用意しようとしたのです」

シャルロットの推理を聞いて、大沢さんは床に座り込んだ。「その袋に入ったダイヤを調べれば、私が保険会社に補償を要求した宝石の内容と一致します。

でも、私達はそこまで迷惑を掛けてはいない。そりゃ、消防署や保険会社は面白くないでしょうけど。傷付いた個人は誰も居ないはずよ」

しかし、彼女の弁明に、シャルロットは首を振る。

「駄目なんですよ、大沢さん。日本でもイギリスでも、魔法使いの家系に生まれた子供が最初に教えられることがあるでしょう？」

「……。『魔術は人類社会が脅威に晒された時、一般民衆を守るために神々から与えられた奇跡であり、公共の財産である』。たしか、こんな内容だったかしら？」

シャルロットは頷き、

「まあ、簡単なことです。誰も損してなくても、ズルはいけない。そうでしょ？」

笑いながら、シャルロットは大沢さんに語りかけた。

＊

彼女が犯行を認めたあと、数台のパトカーが到着し、大沢真子は連行されていった。きっと、彼女はシャルロットの言いたかったことを理解してくれるだろう。

まあ、菊池の方こそ、堀の中で頭を冷やして欲しいが。

「いやー、これにて一件落着！　ところで坂中警部補。捜査の協力費は？」

それを聞くと、坂中はとても気持ちの良い笑顔をした。

「無いわ」

「へ？」

「だって、被害者だったはずの大沢さんが共犯なら、『花火』の件だって簡単に隠蔽出来るじゃない。最悪、法廷で彼女にこう言わせればいいのよ。『私がマッチで火をつけました。その後、下水に捨てたので証拠はありません』。ほら、アンタの隠蔽推理は、全部用無し！」

「公僕の癖に汚い！　しかも私、昨日の夜に散財したから、ジョンに数十万の借金があるのよ！」

そう言って坂中の、今度は右靴を奪い取る。中から紙幣の入った封筒が出てきた。しかし、何故また靴に隠す？

「あった！ いち、に、さん……不景気過ぎる……。足りないわよ！」

「こら、待ちなさい！」

そんな二人の姿を見ながら、俺はシャルロットへ貸した金が返ってくることを祈った。

終

Imitation flower (落谷アツムネ)

Imitation flower 落谷アツムネ

こんなに暇なのだから、少し昔話をしよう。
この時期になると思い出す、ボクの忌まわしい初恋の話。

彼女はミサキ、美しく咲くと書いて美咲。保育園の滑り台で遊んでいた時に向こうが話してきたのをきっかけに、ボクは彼女と知り合った。

彼女は七月の終わりに生まれ、そのせいか何よりも向日葵の花を好んだ。小一の夏休みにクラスで育てた時だって、当番制を無視してまで水やりを一日も欠かさなかった。何故ボクがそれを知っているかって？ ボクも一緒に赴いていたからさ。

そこからしばらく時は流れて、あれは忘れもしない二〇〇三年六月六日のこと。梅雨に入りかけてジメジメと、人足おのずと遠のく図書室にボクは放課後呼び出された。

「私は、アツムネ君が好きです」

付き合ってください、と言わなかったのは幼さからくる無知のせいだと今は思っている。それにしてもボクにとって青天の霹靂だったことは言うまでもない。

ちょうど誰が誰と付き合っているだとか恋愛沙汰に興味を持ち始めたころで、少なくともボクらの間では女子に告白されることは何にも替えがたいステータスとなっていた。ボクは春が来たように浮き足立って、ボールを蹴っても本を読んでも自分が自分でないような感覚が付きまとった。そして……そのことを周囲に自慢して回った。

今もし過去に戻れるのなら腹を一発殴ったって気が済まないくらいだが、それができないのがこの上なく悔しい。ミサキはボクに告白したんだと友達やあまつさえ担任の先生に話している間、彼女は相当恥ずかしかったに違いない。勇気を出したやっとの行為を面白おかしく話題にされ、踏みにじられたら誰だって愛想を尽かすに決まっている。

事実、告白からちょうど一週間後、奇しくも十三日の金曜日にボクは同じ場所で自身の行いの意味を知った。

「みんなの前で、もう言いふらさないで。お願いだから」

梅雨だからといって、声まで湿り気を帯びるわけがない。彼女を前にボクは謝る言葉さえ口に出せないまま、場を立ち去る彼女を追いかけることもできないまま雨の音を聞いているしかなかった。

冷たい雨だった。

他人の心中など察せないまま、梅雨が明けた。気が付けば一学期は残すところ一週間で、その頃になるとボクは彼女の誕生日を意識していた。もちろん彼女の機嫌を損ねたのを忘れるほど都合のいい頭は持っていない。むしろ損ねた起源と信頼を回復するためのチャンスと捉えていた。

ミサキにプレゼント、とくれば贈り物は決まっている。しかし生憎その年学校で育てていたのは向日葵でなく西瓜、重ねて花屋へ花を買いに行くという知恵が全くなかったボクは折り紙を考えた。悲しいかな、小学生三年生の行動力なんて所詮こんなものである。

妹が持っていた教本をこっそり借りて、黄色と茶色のを気づかれない程度に拝借して……男子が折り紙をするのは恥ずかしいという小学生特有の風潮があって、学校ではできなかつたから誰にも気づかれないよう自分の部屋で作った。五つほど折った中で見栄えのいいものを二つ、「誕生日おめでとう」なんて下手な字のメッセージカードと一緒にティッシュに包んで引き出しの奥にそっと仕舞い込む。

それが、一学期の終わる四日前の話。

暑い日だった。

校長先生の話をして体育座りで聞いている間、ボクはこれから始まる夏休みのことを半分と、何故ミサキが隅でパイプ椅子に座っているのかを半分ずつ考えていた。これから表彰式でもあるのだろうか、なんて考えていた矢先のこと。

「最後になりますが、今日は悲しいお知らせがあります」

それを合図に、ミサキが脇で控えていた先生に促されて席を立つ。ボクは悪い予感が外れることを願ったが、もうそれは手遅れだった。

「この一学期で、皆のお友達がひとり遠くへ行くことになりました」

出発は明日、行き先は車で三時間半かかる県庁所在地ということをごここで初めて知った。それから教室に戻って帰りのHRをしている間、隣のクラスがお別れパーティでやけに騒がしかったのも覚えている。もし一緒のクラスなら転校することだってもっと早く知れただろうし、今日この後に花だけ渡すことだってできた。謝ることだって……

いや、それは今でもできるじゃないか。そう思い立って、ボクはHRの後に昇降口で彼女を待った。特定の女子を待ち伏せなんて知られたら芸能人のスキャンダルのように囃される、それは覚悟の上だった。

どれくらいその場にいただろうか。やっと姿を見せた彼女は一人きりで、呼びとめるのにさほど気は遣わなかった。

「あ、アツムネくん」

ええと、あの、

「うん」

その、この間にごめん。ああいうのは言いふらしちゃいけないって分からなかったんだ。

「ああ、それね。けっこうショックだったんだからね？」

……はい。

「今は全然気にしてないけどね。……それにしても、私なんかに告白されてそんなに良いものだったの？」

うん。

「そっか。かなり、嬉しい」

彼女は大人だった。ボクの手が届かない、遠い存在だった。

「アツムネ君に告白してよかった。……じゃあ、そろそろ行かなきゃいけないから」

うん……バイバイ。また会えたらいいね。

「うん！」

ミサキが大学へ進んだのかどうかさえボクは知らない。あれから十年経ったが結局のところ彼女と会うことは二度となく、彼女の存在は積み上げた本の一冊に変わり果てた。ただその一冊は大きく、厚く、ことあるごとに目を引く。

十年も経てば人を見る目なんて自然に備わるものだし、中学校や高校に進んでいれば出会いの数は小学校の比じゃない。加えてあの頃から既に魅力的だったのだから、今ごろ彼女はボクよりも素敵な人を見つけて仲良くやっていることだろう。それでいいし、それがいい。

おそらく、ボクはこれからも彼女を忘れることはない。

偽物の花は、決して枯れないので。

・あとがき

どうも落谷です。まず、チラシの裏に書くべきだったと謝罪させていただきます。

恋愛の話はまず成就させるかどうかで悩みますよね。僕は成就させないほうが圧倒的に多いです。多分、自分と重なって感情移入しやすいからだと思います。読後感のモヤモヤした話とか大好き。

元ネタ（というか落谷がインスパイアされたもの、敬称略）

・楽曲

古川本舗feat.初音ミク『girlfriend』

ナナホシ管弦楽団feat.初音ミク

『さよならレシエノルティア』

・マンガ

鶴巻和『野ばら』（『童話迷宮』収録、原作：小川未明）

魔法守護花☆トリカちゃん

Sincot9

出会いとは、いつも唐突なものである。

「あなたが華岡さん、ですよ」

とある一般的な高校生、華岡正臣の留守番中に鳴ったインターフォン。宅配便かとドアチェーンを外した彼の前にいたのは、一人の小さな女の子だった。伸ばした黒髪、白のシャツに青のオーバーオール。小学校三、四年生くらいだろうか。小柄な体をひょいっと折り曲げて、彼女はこう言った。

「初めまして。私、『母なる樹(マザーツリー)』の力で受肉した『魔法守護花』、トリカです。華岡さんを狙う『魔法花』からあなたを護るために来ました」

出会いとは、いつも唐突なものである。それが幸運か不運かはさておいて。

「あ、ちょっと何でドアを閉めようとするんですか。しかも全力で」

「手を放してくれ。悪いがプ○キュアは見てないんだ」

「○リキュアに受肉なんて生々しい設定が出てくるわけじゃないですか。ノンフィクションです」

「なるほど、設定はオリジナルか」

「だからノンフィクションですって」

「その年で『母なる樹(マザーツリー)』とは恐れ入るな。将来が楽しみな子だ」

「厨二属性付与でさらに痛々しく！」

間の抜けた会話をしながらわりと本気でドアを閉めにかかる華岡。だがその隙間は微塵も動く気配を見せない。

「ち、小さな女の子相手に本気出すとか、カッコ悪いですよ」

「お前を家に上げるなど本能が言っているんだ。わりとガチで」

「えー。こんな可愛らしいトリカちゃん相手にそこまで言いますか」

「自分で可愛らしいとかトリカちゃんとか言うな。っていうか、遊ぶなら自分の友達と遊べよ」

「そんなこと言って、どうせさっきまで暇だったんでしょ？」

「忙しかったぞ。ゲームするのに」

「うわ寂しっ。遊ぶなら自分の友達と遊んだらどうですか」

「別にいいだろ。それより、早く部屋に帰ってクエスト再開したいんだけど。轟竜の天玉がなかなか手に入らないし」

「うわー……華岡さん、それなかなかの残念ボーイっぷりですよ」

「楽しいから良いんだよ。ってか、いい加減帰れ」

「うう、ここまで拒絶されてしまうとは」

揺れ動きさえしない一枚板のむこう側で、トリカは苦々しげに言う。

「こうなったら、最終手段を使っちゃいますか」

「ふん、何をするってんだ」

「こうします」

その言葉と同時に、ドアの隙間から少小さな手が入ってきた。指が動き、ドアノブを握りしめる華岡のこぶしにそっと触れる。冷たさと、わずかにピリリとしたようなトリカの指はすぐに正岡から離れる。

「えいっ☆」

次の瞬間、トリカは手をドアの隙間から引き抜かれると同時に引いていたドアを放した。

「うわぁっ！」

哀れ全力でドアを閉めにかかっていた華岡は突然の勢いに耐え切れず、盛大に尻餅をつく。

「あいたたた……ん？」

何はともあれ玄関の鍵を閉めようとした矢先、彼は異変に気付く。体が動かないのだ。動け、動けと足に命令を出す、両脚は伸び切った状態のまま。それどころか強く打ち付けた尻の痛みも感じられない。

「ろ、ろういうころらよ、これ」

ろれつも回らない。体の自由が全くきかない。さらに悪いことに、

「お邪魔しまーす。もう、最初から意地悪しないで入れてくれたらこんなことしなくて済んだのに」

一度閉めたドアが無情にも開き、女の子が姿を覗かせた。ご丁寧に後ろ手で鍵を閉める徹底っぷりで。

「ああ、華岡さんもそのままじゃ不便ですよ」

女の子は、華岡が動きたくても動けないのを良いことにゆっくりと近づいてくる。こんなアブナイ人に付き合ってもロクなことはない。そう思って手足を動かそうとする華岡だが、やはり動かない。何をされるかわからないプレッシャーに押しつぶされそうになったところで、少女が彼の前でかがんだ。

「聞きわけのない子には、お、し、お、き、です」

ペチンッ。

デコピンである。情けない音から察するに、痛みは全くなかったのだろう。だが、華岡のこめかみがヒクッと動いた。

「そういう生意気なことをするのはこの手か？」

ビビビビビビッ。

「いたたたたた！ め、目にもとまらぬ速さでしっぺしまくるのをやめてください！」

「お前が、反省するまで、しっぺはやめない」

ビビビビビビビビッ！

「痛い痛い痛い痛っ、反省しますからあいあたたたた」

その姿を見て溜飲が下がったのか、華岡はしっぺをやめ、そこで一つの疑問を抱く。

「って、なんで身体が動くんだ？」

そう。ついさっきまで全く動かなかった腕は高速のしっぺを繰り返して、会話もスムーズにできる。

「ふふふ、よくぞ聞いてくれました！　これが私の『最終手段』です」

「訳が分からんのだが」

「私たち『魔法花』は『母なる樹』の力で受肉しています。その過程で元となった植物の効能や花言葉に合わせて様々な能力を行使できるんです。なので私は効能由来の能力『世界最古の麻酔薬(パラライザー)』を弱めに使って華岡さんの体の自由を奪った、というわけです。これで私がただの電波少女じゃないってわかったでしょ？」

「は、はあ……」

「ちなみに、さっきデコピンしたときに能力を解除したので今は大丈夫、というわけです」

「なあ、トリカ、だっけ。お前、何の植物なんだ？」

「もう、華岡さんったらニブいですね。トリカって名前と私の能力名『世界最古の麻酔薬』から想像はつくでしょ」

「と言われてもなあ。トリカ、トリカ……え、まさかあの」

なぜ彼女を、トリカを家に入れることに抵抗があったのか。それはまさしく、華岡の本能の呼びかけによるものだった。

「はい。私は世界最古の麻酔薬にも使われた薬草にして毒草、『綺麗な花にある猛毒』、トリカブトの魔法花です」

トリカブト。キンポウゲ科の多年草で、根に猛毒を持つ。その毒はアイヌ人がクマ狩りの際に矢に塗っていたという強力なものだが、花は小ぶりで美しく、根は漢方薬として用いられることもある。

「どうです、人の形を取ってもなおわかるこの小さく愛らしい姿。かなりのものだと思いますか？」

「帰れ」

「ちょ、流れを無視しないで下さいよ」

「猛毒を家に置いておくなんて耐えられるか！」

「いや、だから漢方にも使われてるんですってば」

「漢方は毒性を弱めてあるだろ。お前は原液百パーセントじゃん」

「普段はちゃーんと押さえてます。絶対に大丈夫です」

「その言い訳が通ったら原発誘致問題は起こらないと思うんだがな」

「ああ言えばこう言う……って、それどころじゃないんですよ」

「俺は今、お前という逼迫した状況に置かれてると思うんだが」

「そうじゃなくて、私がここに来た理由です！」

「ああ、なんか出会い頭に言ってたな」

「そうです。率直に言いますと、華岡さんは他の魔法花に狙われてるんです」

「へー」

「へーって、華岡さん。事の重要性をわかってませんね」

「いや、お前みたいな奴が何人も来たら嫌だけどさ」

「いいですか、私たち魔法花は本来植物であるところを強引に人として世界に存在しています。それゆえに、基本的に存在するだけでエネルギーを必要とするのです」

「なにその面倒な設定」

「いいから最後まで聞いてください。普通の魔法花は光と水から自分でエネルギーを生み出せますが、元の植物に光合成機能のない魔法花はエネルギーを他に依存しなければなりません。例えば、食虫植物。もしも華岡さんが狙われたら、粘液で身体を奪われて消化液でドロドロになるまで、なんてことに」

「……マジで？」

「マジです」

「何で俺なんだよ」

「んーと、どうも華岡さんは植物に好かれる体質みたいなんですよ。ご先祖に植物学者の方とかがいらっしゃったんじゃないですか？」

「そ、そんな理由で狙われたらたまらねえよ」

「ご安心ください。そのために私、魔法守護花トリカちゃんが来たんですから」

「てかどうしてお前なんだよ」

「トリカブトの花言葉の一つに『騎士道』ってのがあるんですよ。私、護衛任務は超得意なんです」

「だから、何でお前なんだよ」

「ふふふ。なんだかんだ言って、華岡さんのそばが心地良いからかもしれないね」

「やっぱり帰ってくれ」

と、その時。

ピンポン。

「インターホン、ですか。さっそく魔法花の襲撃！」

「攻めてくるんだったらこんな堂々と攻めてはこないだろ。とりあえず出てくるから、お前はどっかに隠れてろ」

「そんな、もし相手が悪意ある魔法花だったら」

「もし相手がクラスメイトとか母さんだったらお前の姿を見られるとすごい面倒なの。オーケー？」

「ですが……」

「オーケー？」

「お、オッケー……」

トリカが階段下の物置に隠れたのを見て、華岡は玄関に向かう。

「はい、どちらさま、で」

「あらあ、華岡くん。会いたかったあ」

ドアを開けた華岡が言葉に詰まったのも無理はない。ドアの向こうには、身長二メートルはあろうかという女性が立っていたのだ。日本どころか、世界でだってこれほどの身長は珍しいだろう。赤い髪に翡翠色の目。髪に合わせたような赤と白のチェック柄のワンピースを着こなし、黒いバッグを持っていた。

「え、あの、どこかでお会いしましたっけ」

「細かいことはあ、言いつこなしなのお」

そう言うと、彼女は突然華岡に抱き付いてきた。

「ちょ、ちょっと！」

「いいじゃない。こうやって抱き合っていると、幸せでしょ？」

「そ、それは……」

華岡は否定しようとした。だが、彼も普通の男子高校生。突然女性に抱き付かれればうろたえもする。その上、謎の女の体つきは、何というか、豊満だった。初めは何とかして逃れようとしていた彼も、その巨体に包まれるうちにだんだん何もかもがどうでもよくなってきた。

（もう、ずっとこのままでもいいかもしれないな……）

華岡がそう思い始めた時、彼女は甘い声で囁いた。

「だからあ、華岡くん。アタシとずっと一緒にいよ？」

「必殺『トリカ☆ティンクルスターきっく』！」

謎の技名を叫びながら跳び蹴りを放つトリカ。だがその鋭い一撃は空を切った。謎の女性はトリカの叫び声を聞くなり華岡を離し、横っ飛びで回避したのだ。

「何かと思えばあ、トリカブトじゃないのお。アンタみたいなバイオレンスな魔法花があ、どうしてこんなところにいるのよお」

「それはこっちのセリフです。ま、華岡さん目当てってのはわかっていますが」

「お、おいトリカ」

呆然としていた華岡が我に返る。

「今こいつ、お前のことトリカブトって」

「ええ、さっそくのお出ます。その巨体、なんとなく正体はわかります」

「はい、自己紹介しまーす。アタシは『巨大な腐臭』、ラフレシアの魔法寄生花、フレイシアちゃんでーす。よろしくねえ」

「ラフレ、シア……」

「一人目からある意味最悪の魔法花が来ましたね」

「でもラフレシアって、別に食虫植物じゃないだろ」

「もー、華岡くんひどいんだ。ワタシたちラフレシアはあ、ブドウ科の植物に寄生する寄生植物なのお」

「ということはお前も、俺からエネルギーを吸いまくったりとかするんだろ」

「大丈夫う、寄生するって言ってもお、華岡くんから毎日一食分くらいのエネルギーをもらうだけだからあ。死んだりとか極端なことはないよお」

「代わりに、一生ドギツイ腐敗臭がするようになるけどね」

「えっ」

「アタシが近くに入ればあ、花言葉の能力『夢うつつ(幻惑の花)』でごまかせるよお」

「根本的解決になってねえ！ っていうか、それでさっきから特に臭いがしないのか」

「あったりい。でもねえ、トリカブト、アンタはいらないのお」

ブブブブブブブ.....

「な、何の音だよコレ！」

「フレーシア、あなたまさか」

「最強クラスの毒草は私だけじゃどうにもできないからあ、お友達に手伝ってもらおうよお」

「華岡さん。ラフレーシアの腐臭は、もともと昆虫をおびき寄せて受粉させるためのものなんです

」

「へえ、そうだったのか。ってか、向こうがなんかしてくるぞ」

「いや、私は比較的大丈夫なんですけど華岡さんは免疫なさそうですし.....お気を確かに持ってくださいね」

「さあおいでえ、私のカワイイ『小バエの大群(リトルフライ・レギオン)』ちゃん」

ブブブブブブブッ！

フレーシアのバッグの中から、何万匹というハエが出てきた。その強烈な羽音と隙間なくうごめく黒色は、見る物を威圧するかのようなプレッシャーと、見る物によってはトラウマとなる光景を生み出していた。

「う、うわあああっ！」

「腐臭巻き散らかしたり、ハエを手下にしたり、女の子としてどうかと思うんだけどね」

「でもお、アタシとハエちゃんは仲よしだからあ。ってことでえ、邪魔だから消えてねえ、毒草さあん」

フレーシアの言葉を機に、ハエたちは一斉にトリカに襲い掛かった。意思を持つ黒い波が、小柄な少女の身体を呑み込まんとうねる。

「トリカあっ！」

華岡の叫び声も空しく、トリカの身体はハエたちに包まれ、あっという間に見えなくなった。

「ハエちゃんにとっては素早いからあ、避けるのは難しいんだよお。躲そうとしても超反応で追尾しちゃうけどお.....と、おまたせえ、華岡クン」

「いや待ってない。待ってないから」

「照れちゃってえ。ね、邪魔者もないしい、お姉さんとイイコト、しよ？」

「でもさ、それやっちゃったら俺、終始腐敗臭をばらまくようになるんでしょ」

「うん」

「じゃあ丁重にお断りします」

「ええー、どうしてえ」

「どうしても何もあるか！」

「そんなことよりも大切なことって、世の中にいっぱいあると思うんだあ」

「その後の人生と人間関係を全部ぶち壊してまでやることじゃねえだろ」

「大丈夫だよお。アタシしか考えられないようにしてあげるからあ」

「怖っ。い、いや俺ゲームの続きやんなきゃいけないし」

「ゲーム？ じゃあアタシと一緒にやろうよお」

「へえ、意外だな。魔法花もゲームするのか」

「じゃあさあ、マットと色付きサイコロ持ってきてえ」

「って、何するつもりだ」

「ツイスターゲーム」

「どさくさでいろいろする気マンマンじゃねーか！」

「照れちゃってえ。って、あれ？」

「何だよ」

「ハエちゃんたちの羽音が、しない」

「そうだ、こんな無駄話してる場合じゃ、って、うわあ……」

慌ててトリカのほうを振り返った華岡。そこには無傷で立っているトリカと、その周りにできた黒い山。もちろんよく見れば、それがハエであることがわかる。

「は、ハエちゃあああん！」

「うかつでしたね。生物に攻められても、私のまじかる☆アルカロイドにかかれば触れた瞬間に毒でイチコロですよ、つぶ」

「おい、顔色悪いぞ」

「さすがに何万匹のハエが自分に向かって飛んでくる光景はショッキングでした」

「あー、心中お察しします」

「まあ華岡さんが時間を稼いでくれたおかげで多少は回復しましたが。私が戦線に復帰すると信じて敵の気を引くとは、やりますね」

「わ、わりと素だったんだけど」

「……」

「……」

「とにかく、あなたの攻撃は私には通用しません」

「あー、ハエちゃんがあ」

「無視ですと！ 虫だけに」

「もうお前ボケなくていいよ」

「ハエちゃんも全滅しちゃったしい、今日のところはあきらめてあげるわあ。だけど、いつか絶対に華岡クンを振り向かせてやるんだからあ」

「悪いけど、それはたぶんないんじゃないかな」

「意地悪う。じゃ、フレーシアちゃんはキュートに去るのですう」

そう言うと、フレーシアは通りに飛び出してそのまま走り去っていった。

「なあ、追いかけてもいいのか？」

「今日のところは休戦です。このメンタルでまたハエを呼ばれたら、正直立ってられる自信が

ありませんし」

「そういえば、あのハエの死骸、どうすれば」

「ああ、あれ死んでませんよ？」

「え、だってお前さっき毒でイチコロって……って本当だ、いつの間にかいなくなってる」

「イチコロとは言いましたが、殺したとは言ってませんから。それに、無駄な命は奪わないのが騎士道ですから」

「でもそれって、次にあいつと戦うときにまた大量のハエと戦わなきゃってことじゃ」

「あ」

「がんばれよ、俺も今度殺虫剤買っておくから」

所変わって、ここは華岡家の居間。

「さて、これで信じていただけましたか、華岡さん」

「ああ、もしお前の助けがなかったら、今ごろ全身腐敗臭だったろうからな。ありがとう」

「どういたしまして。華岡さんにお仕えするのが私の幸せですから」

「……どうして、そこまでしてくれるんだ？」

「さあ、何ででしょうね。きっと前世で恋人同士とかだったんですよ」

「庭用の除草剤、どこにあったかな」

「軽いジョークを死活問題にしないで下さいよ！」

「冗談だよ。そういえば、あいつまたウチに来るのかな」

「まあ来るでしょうね。その時はまた撃退しますが」

「ということはお前、ウチの近くに待機してるってこと」

「いや、ここに泊めさせていただきますよ？」

「へ？」

「今日だって、近くに私がいたから対処できたんじゃないですか」

「いやそうだけどさ、お前みたいなのがいると……」

「ただいまー。正臣、荷物運ぶの手伝ってー」

「こういう時に面倒なんだよ！」

「あら、だれかお客さん？」

「こ、こっちに来る……おい早く隠れろよ」

「大丈夫ですよ、華岡さん」

「大丈夫じゃないんだよ！」

「ただいまー」

「お、お帰り。母さん」

「ただいま。あら、どうしたの、その綺麗なお花」

「お、花？」

言われて振り向くと、食卓の上に鉢植えが置いてあった。植えてあったのは、小ぶりの青い花をつけた植物。その花の色は、どこことなくあの少女のオーバーオールの色と似ていて。

「そういう、事か」

「ん、何か言った？」

「な、何でもない。これさ、友人が花屋さんからもらったらしいんだけど、かさばる物はあんまり部屋に置きたくないって言って持ってきたんだ」

「あらそうなの。ほんとうに綺麗な花ねえ」

「とりあえず、俺の部屋に飾っておこうと思ってさ」

「なるほどね。それより、買ってきた食材を冷蔵庫に入れちゃうから手伝って」

「はいはい」

「すぐに来てね」

そう言って、母親は玄関のほうへ歩いて行った。

「トリカァ……」

華岡がおもわずそうつぶやくと、鉢植えの葉が風もないのにヒョコッとゆれた。

あとがき

こんにちは。作者のSincot9です。「魔法守護花☆トリカちゃん」、お楽しみいただけただしょうか。

この作品を書こうと思ったきっかけは、最近知った事実が意外だったからです。要約すると、「麻酔は日本で生まれました。欧米じゃありません」ってことです。

記録が残っているものはもっと昔、中国とかインカ帝国なんかであったらしいのですが、実例として証明されているものは日本で江戸時代に行われた乳がんの手術が初なんだそうです。その際に使われた麻酔薬に、トリカブトという毒物の最メジャーが使われていると知り、魔法の力で女の子になったらどうなるんだろうという想像を抑えきれませんでした。実際には掛け合いメインの小説になってしまいましたが、皆さんのお暇をつぶすことができたなら幸いです。

ちなみに、花言葉というのは花を贈る際に一緒に贈るメッセージなので、美しい花にはたくさん花言葉があり、相手に贈って喜ばれない花には花言葉が少ないそうです。トリカブトの花言葉は、「美しい輝き」「厭世家」「人嫌い」「復讐」「騎士道」「栄光」だそうです。一部に怖いものが混ざっていながらもポジティブな内容もあるあたり、美しさの中に秘めた猛毒というトリカブトのイメージが見てとれますね。

よかったら、画像検索なんかで探してみてください。「これホントにトリカブト？」と面食らうかと思います。普通に綺麗な花です。

最後になりましたが、本作を読んでいただき、またこのくだらない駄文に付き合っていていただき、本当にありがとうございました。機会があれば、また次の作品でお会いできればと思います。

Sincot9

彼女たちにうってつけの花 （高天美月）

彼女たちにうってつけの花

The Perfect Flower For Lovers

とある夏の日の放課後。

夕陽が差し込む図書室に、レモンは居た。

参考書を読むふりをして、机の上に肘をつき、両手でチューリップのように顎を包みながら見つめる彼女の視線の先には、いつも無口なあの子が、いつもの席に、いつものように座っている。

その子は、まるで「文学少女」みたいに常に本を読んでいて、物静かで、大人びていて、そして、綺麗で……。

開いた窓から舞い込む微風が、その子の長い黒髪を靡かせる。肩に掛かった髪を白い指で押さえる仕種など、まるで、清楚な淑女そのものだ。

「自分なんかとは大違い」とレモンは溜息をつく。

あの子とは、幼稚園の頃からの幼馴染で、家も隣近所、遊ぶときはいつも二人一緒だったけれど、容姿も性格も、まるで正反対。

レモンは、平均よりも幾分小柄で、髪型もショートカットだし、どちらかといえば活動的で、運動も好きだし、得意だ。だから、年齢よりも幼く見られることが多いものの、交友関係は広い方だ、と自負している。

一方のあの子は、どうだろう。まず、レモンよりも十センチ以上は身長差がある。髪も彼女より長いし、いつも、教室の隅で、独り本を読んでいるイメージしかない。けれど、不思議と孤独な感じは受けないし、寧ろ、清々しくて、清潔さすら感じる。

そんなところにレモンは憧れ、真似をしようと何度も試みたけれど、どうにも駄目だ。これはたぶん、才能というか、細胞的に無理なのだろう。ショックだけど、まあ、こればかりは仕方がない。

だから、少しでもあの子に近づきたくて、不思議のヴェールを覗いてみたくて、今日は、ちょっといたずらをしてみたい気分、そして、あの子の驚く顔を見てみたい……、そんな気分なのだ。

レモンは参考書を閉じて立ち上がり、その子の背後に近付いていく。

「キイクちゃん！」レモンは、その子の名前を呼びながら、両眼を塞いでみせる。「誰だ？」

「図書室は、静かにしてね」けれど、キクは全く動じないようすで応える。「レモンちゃん」

「あはは……、ごめんごめん」レモンは笑いながら謝る。

「じゃあ、手を、離してくれる？」キクは淡々と言う。「本が読めないんだけど……」

「あ、そうよね、あたしったら、うっかり」レモンは指を一本ずつ離す。そして、キクの肩を抱きながら、顔を覗き込む。「ねえ、今日は何を読んでるの？」

キクは、レモンの両眼を見つめながら、文庫本の表紙を彼女に向ける。「『女王国の城』」

「ふうん……、それって、どんな話なの？」

「『不思議の国のアリス』の現代版……、みたいな感じ」

「へえ……」しかし、レモンはどちらも読んだことがなかった。「面白い？」

「何が？」

「その本が」

「これから、面白くなる」キクは応える。

「読んでる途中なのに、面白くなる、ってわかるの？」レモンは首を傾げながら尋ねる。

すると、キクは顎に人差し指を添えながら、「そうね、たとえば、数学の試験があるとして、レモンちゃんは、問題文をいくつか読んだとき、『これは解けそう』とか、『これは解けなさそう』とか、実際に解いたわけじゃないのに、何となく、そんな予感みたいなものを察知出来るでしょう？ それと同じ」

「うーん……、ちょっと、わかんないかも」レモンは人差し指で顛顛(こめかみ)を押さえながら、小さく唸る。「なあんか、もしかして、煙に巻かれたカンジがしないでも……」

「私も、よくわからないな」キクは言う。「全部、解けるから……」

「もう、どうせ、あたしはお馬鹿さんですよっ！」レモンは小さく叫んで、「この、このおっ！」キクの両脇に手を忍ばせる。「憎たらしいのよ、このおっ……、喰らえっ、必殺・こちょこちょおっ！」

しかし、その苦し紛れの抵抗も空しく、キクは冷ややかに言う。「だから、図書室では静かに……」

「くすぐりも効かないのか、この子はっ！」無視してレモンは腕を組み、唇を噛む。「こうなったら……」

そして、レモンは、咄嗟に思い付く。

キクを驚かせる、とびっきりの作戦を。

けれど、それは、なぜだか、無意識の内の出来事。

「えっ？」

思わず眼を見開くキク。

その指から、文庫本が滑り落ち、

ページの間隙から、白い花びらを象(かたど)た葉がはだける。

「レモンちゃん……？」

レモンは、気が付くと、

両手でキクの頬を包んでいて、

すぐ目の前にはキクの整った顔があって、

息を吸うたび、キクの香りが肺の中に染み込むみたいで……。

「レモンちゃん！」

キクはそう言って、レモンを躰から引き離れた。

「え？」そこで初めて、レモンは我に返る。「あれ、キクちゃん、あたし、どうしてたの？」

「どうしたも、こうしたも……」

「あれ、もしかして、あたし……」呟きながら唇を押さえると、かああっ……、と自分の頬が熱くなるのがわかった。鏡で見たら、たぶん、夕陽よりも真っ赤になっているだろう。「その……」

「レモンちゃん？」キクが、レモンの顔を覗き込む。

すると、レモンは咄嗟に視線を逸らしながら、急いで背を向ける。自分が何をしたのか理解したら、もう、キクの顔を見ることなんて、出来るはずもなかった。

だから、

「ごめん、あたし、帰るっ！」

そう言うと、レモンは一目散に駆け出し、キクから逃げるようにして図書室を後にした。

「きゃあ！ あたしったら、遂に、しちゃったのね……、キス！」

レモンは、部屋のベッドの上で、枕に顔を埋め、白い両脚をばたばたさせながら、独り、身を悶えていた。

「ホントの、ホントなのよね、これ……？」

彼女はそう呟くと、徐に(おもむろ)起き上がり、もう何度目になるのかわからないけれど、つい何時間か前に、確かにキクと触れ合ったばかりの唇に、ワイングラスの脚の(ステム)のように細い人差し指と中指を優しく当てる。

そうしていると、そのときの感触が、まるでメリィ・ゴーランドのように、くるくると、きらきらと、生クリームのように、白くて、甘い時間に、どっぷり浸かってしまったみたいで、あの、ふっくらとした、綺麗な唇は、とても、頭がくらくらして……。

「やだもう、恥ずかしい！」

そして、両手で熱い頬を覆い、「きゃあ！」と叫んで再びベッドに寝転ぶ彼女。

「もう、『幼馴染』って一線を越えちゃったのよね、あたし、あたしたち……」

あの、運命的なキスをした後から、ずっと、こんな不思議な気持ちに、苛まれている……、いや、のたうち回っている……、いや、すっかり悩殺されている、レモンであった。

眼を瞑れば、あの子の顔が……、普段見せない、あの、びっくりした顔が、脳裏に浮かび上がってきて、かといって、眼を開けていても、すぐ傍にあの子がいるような気がして、もう、頭が沸騰しそう。

「はあ……、キクちゃんは今頃、どうしているのかなあ……？」レモンは呟き、キクに想いを馳せる。「何だか、明日が、待ち遠しいような、怖いような……」

「はあ……、緊張するなあ」

教室に入るなり、レモンは呟いた。あれから、結局、一睡も出来なかった彼女である。

「やっぱり、何だろう、別に告白したわけじゃないんだけど、何となく、気不味いっていか……、違うなあ、あんな恥ずかしいことした後だと、そうよ、ぎくしゃくしそうなよね。あたしったら、ホント、もう……」

席に着いても、形のいい顎をチューリップのように両手で包んだまま、窓の外の青空に感情をダイヴさせたきり、なかなか浮上出来ない時間が続く。時折漏れる白い溜息だけが、青いキャンバスの上に何度も塗り重ねられていく。

「キクちゃんが来たら、あたし……、どうしよう、ああ、ホント……、どうなっちゃうんだろう？」

時計の針よりも早く刻む、心臓の音。きゅっと血管が収縮して、息が切れてしまいそう。真っ赤なアドバルーンに捕まって、どこまでも空高く、連れ去られてしまいたい気分。

そんなとき、

「あ……」

教室の扉を引き開けて入って来たのは、レモンが、今、最も会いたいののに、それでいて、今、最も会いたくないあの子。

「キクちゃん」つい名前が口をついて出てしまう。

いったい、どんな反応をするのだろうか、昨日、あんなことをした自分に対して……、ちょっと怖いけれど、でも、気になる。

じいっ……、と見つめていると、やがて、キクは口を開いた。

「おはよう、レモンちゃん」

けれど、その声の調子は、普段と何も変わらない。

「えっ？」あまりに意外すぎて、レモンは机に突っ伏しそうになる。

レモンは、てっきり、自分の顔を見た瞬間、昨日のことを思い出して、思わず頬を染めながら、でも、普段のクールなイメージを損なわないようにと、照れた顔を隠すように、そそくさと歩き去りながら、それでも、自分の席の近くまで来たときに、小声で囁くように、「お……、おはよう」なんて言ったりして、こちらが鼻血を出してノック・アウトしそうなくらい、可愛い反応を示すものだと思っていたのに、まさか、ここまで何も変化がないなんて、「昨日のあたしの煩悶は何だったのよ！」などと文句を言っても始まらない。

実際、そんなキクのようすを見ていると、本当のところ、昨日の出来事はすべて夢だったのかもしれない、と思い始めてしまう自分がいるから困る。

そんなときは、眼を瞑って、自分の唇に指を当ててみて、思い出す……、昨日の、あの、現実を。自分は、絶対に、キクとキスをした……、そう言い聞かせながら。

「レモンちゃん？」

「ひっ！」

自分の名前を呼ぶ声が耳元で聞こえると、レモンは思わず飛び上がってしまう。

急に現実に引き戻された気分だ、けれど、そうやってしまうと、さっき自分が見ていたのは夢だったのかしら、とってしまうが、それは違うはず……。

「どうしたの？ さっきから、びくびくして……」キクが苦笑しながら問いかける。

「い、いや、別に……」しどろもどろになりながら、レモンは応える。

「ヘンなの……」

この状況でヘンなのは、寧ろキクの方だろう、とレモンは思ったけれど、それを言ってしまうと、自分こそ昨日のことを引き摺っているみたいで、何となく癩に障る。

「ねえ、キクちゃん」話題を変えようとレモンは切り出す。

「何？」首を傾げるキク。

そして、咄嗟に眼を逸らしてしまうレモン。

彼女にとっては、今はもう、なぜだか、そんな仕種でさえ、まるで電気を帯びた導線のように、胸にいちいち突き刺さるのだ。こんなに近くで、真面に顔なんて見ていられない。

「い、いや……、何でも……、ない」レモンは言ったが、最後の方は、霧みたいに消えてしまう

。

「そう」それだけ言うと、キクはさっさと自分の席に着いてしまった。

レモンは、呆然とその後ろ姿だけを見つめるだけだった。

やがて、アルマジロのように両手で頭を抱えると、レモンは心の中で爆発した。

「もう、何なのよおっ！ 何で、あたしだけ、こんなに気を揉んでるのよ！」

結局、あれ以降、特別なイベントなど起こるはずもなく、授業は淡々と進み、昼休みの時間でさえも、キクと眼を合わせることはなかった。それは、何も変わらない、相変わらずの日常。けれど、吐いた溜息の数だけ、空の彩度が落ちていくみたいで、気付いたときには、夕陽がすぐそこまで迫っていた。

放課後まであとたった一時間、もしかしたら、きっと、このまま何事もなく今日が終わってしまっ、キクと交わしたあの口づけは、今度こそ、本当に、夢に消えてしまうのかもしれない

。

でも、それだけは嫌だ、とレモンは思う。

では、どうすればいいか？

「そんなこと、決まってるじゃない」窓際に座るキクを見つめながら、レモンは呟く。「今日もまた、図書室に行くのよ」

しかし、図書室のいつもの席に、キクの姿はなかった。

たまたま席を変えただけかもしれない、レモンはそう考え、念のため、図書室全体を隅々まで歩き回ったけれど、やはり、どこにも見当たらなかった。

「帰っちゃったのかなあ……？」レモンは、図書室の入り口に戻ると、不安げに呟いた。

微風が乳白色のカーテンを揺らす。

そのとき、

「もしかして、自分は、キクに嫌われてしまったのかもしれない」

と、レモンは初めてその可能性に思い当たる。

「そうよね、普通、そうよね……、キクちゃんのこと、何も考えないで、いきなりキスをしていて、そのくせ、自分は逃げ出して、それでも、今までの関係でいられるなんて、そんなこと、あるわけ、ないよね……」

レモンは俯く。

すると、何だか、急に躰から力が抜けてしまって、腰にも力が入らない。貧血みたいに、眼の前がちかちか点滅して、独りでは立っていられなくなる。レモンは、何か、支えになるものを探そうとして、手を伸ばす。

「レモンちゃん？」

耳元で囁く幻聴。

「ほら、捕まって……」

背後に何かがぶつかって、レモンは躰を寄せる。

遂に、眼の前が真っ暗になる。

「さあて、誰だ？」

「え？」

「忘れたとは、言わせないよ」

囁く声、そして、唇に何か覆いかぶさる。

「この、唇の感触を……」

「き」

レモンは口を開こうとする。

けれど、唇が塞がれていて上手く声が出せない。

それでも、レモンは何としても、叫ばずにはいられなかった。

「キクちゃん！」

視界を覆っていたキクの右腕が離れ、キクの顔が間近にあるのを確認すると、レモンは思わず泣き出してしまった。キクの胸に顔を埋め、彼女はすすり泣く。

「ほらほら、図書室の前で、泣かない泣かない」キクは苦笑しつつも、レモンの頭を撫でながら、図書室の奥の方へ歩いていく。

窓から真っ赤な夕陽が差し込んでいる。今は、風もなく、蜩も(ひぐらし)鳴いていない。とても静かな午後だ。

やがて、専門書が一面に詰められた、生徒などほとんどやって来ない場所に、二人は落ち着く。

「うう……、キクちゃん」レモンは涙を拭いながら呟いた。

「はいはい、何？」宥(なだ)めるようにキクは言う。

レモンはただ一言だけ、

「馬鹿」

「誰が？」

「キクちゃんの、馬鹿」レモンはキクを睨みながら、強調して言い直す。「来るのが、遅いわよ」

「仕方ないよ、掃除が長引いたのは、私のせいじゃないんだからさ……」

「あたしが、どれだけ心配したか、わかってるの？」

「わかるよ」

「嘘」

「本当だって」

「あたし、キクちゃんに嫌われちゃったんじゃないかって、心配だったんだから」

「自分からやっておいて？」

「ごめん……、それは、自分勝手よね」レモンは俯いて呟く。

「いや、そういう意味じゃなくって……、うん、ちょっと、意地悪だったね」キクが言う。

「意地悪」

「でも、正直に言うと、私は、嬉しかったんだよ、レモンちゃんの方から、あんなことをしてくれて……」キクは優しく言った。

「え……？」レモンはゆっくりと顔を上げる。

暫く二人は見つめ合っていたが、やがて、キクは、意を決したように言った。

「だって、私は……、レモンちゃんのことを、好きだから」

「え、キク……、ちゃん？」レモンは、信じられないみたいに訊き返す。

「昨日は、本当に、びっくりしたんだから」しかし、そう言うキクの表情は、相変わらずである。

「嘘！」レモンは飛び上がって言う。

「だから、本当だって」キクは苦笑しながらそう言ったが、少しだけ顔を曇らせて続ける。「でも……、私自身、まだ、全然、自分のことに区切りがついてなくて、自分が、レモンちゃんを好きなのは、随分前から、気付いてた……、けど」

「けど？」さらっと気になることを言った気がしたが、レモンは先を促す。

「けど……、自分がどうして好きなのか、とか、もしも、その気持ちを受け入れられたとしても、どんな風に、どんな顔をして付き合えばいいのか、全然、わからなくて……」段々と声が小さくなるキク。今では、立場が逆転しているみたいだ。「ほら、私って……」

「いいじゃない、別に」レモンは言った。

「え？」キクは顔を上げる。

「えっと……、こほん、そ、そりゃあ、あたしだってさ！」顔をこれ以上ないくらいに赤くしながら、レモンは切り出した。「そのお……、キクちゃんのこと、ずうっと好きだよ、ほら……、えっと、昨日みたいに、あ、あんなことをしちゃうくらいにさ！」

「うん」キクは頷く。

「そこはさ、ちょっとは、驚いてよ」レモンは笑う。「でも、他の人から見たら、結構、特殊だと思うの……、あたしたちの関係ってさ」

「そう、だから……」

キクは言いかけるが、それを遮るようにレモンが叫ぶ。

「でも、関係ない！」

「え？」

「他の人なんて、関係ないのよ！ だって、そのお……、あたしは、キクちゃんのことを好きなんだから！ あたしは、キクちゃんの全部が好きなんだから……、愛し合ってる恋人に、性別なんて、関係ないのよ！ そのままのキクちゃんが、あたしは好きだから、ずっと、何も変わらないでいて……」

一息に捲し立てるレモン。

言い終えた途端、せえせえと息を切らしてしまうほど。

それに、自分でも、見なくたって耳の先まで赤くなっているのがわかる。

そして、

「うふふ……」

堪えきれずに、笑いを漏らすキク。

「あはは、レモンちゃん……、今の台詞、最高！」

お腹を押さえながら笑うキクの眼には、うっすらと涙が浮かんでいる。

「もう、何よ！ せっかく、人がこんな……」

レモンは反抗するようにキクに詰め寄る。

すると、急に躰を抱き寄せられて、

「ありがとう、私も、レモンちゃんが好きだよ」

今度は、見つめ合いながらのキス。

レモンも、ゆっくりと両手をキクの背中に回し、ぎゅっと抱き締めた。

「キクちゃん……」

「レモンちゃん……」

真っ赤な夕陽が二人を照らし、汗ばんだ制服が肌に密着する。

それでも、回した両腕は離さない。

一度重ねた唇は、二度と離さない。

彼女たちの放課後は……、まだ終わらない。

「そういえば、そんなこともあったね」

レモンを抱きながら笑うキク。

「今となっては、恥ずかしい記憶だけど……」

頬を染めながら、応えるレモン。

「そう？ 私は、とってもいい思い出だよ」

首を傾げながら、レモンの頭を撫でる。

「そ、そんなの、あたしだって同じよ！」

レモンは慌てて言い返す。

「ふふ、知ってるよ」

「あ、もう……」

知らず、唇を重ねる二人。

今ではもう、すっかり慣れた愛情表現。

そんなキスをじっくり味わった後、唇を離すと、上目遣いにレモンが問いかける。

「ねえ……、キクちゃん、あたし、ふと思ったんだけどさ……」

「何？」

「『あたしたちにぴったりのお花って、何だろう？』って……」

「唐突だね」笑いながらキクが言う。

「いや……、何となくだよ、何となく」

「わかってるよ」

「キクちゃんは、何だと思う？」

「そうだね……」顎に指を添えて考えるキク。そして、「あれなんか……、きっと、私たちにぴったりだと思うよ」

「あれ？」

「ほら、レモンちゃんも憶えてるでしょ？ あの葉……」

そう言うキクが指差す先には、閉じられた文庫本から少しだけはみ出している、白い花びらを象った、一片(ひとひら)の葉。

「あれって……」

「そう、あれはね……」

キクは微笑みかける。

つられて、レモンも笑みを返す。

「百合の花だよ……」

そして、再び抱き締め合う二人。

そんな彼女たちの薬指には、今ではひとつの指輪が嵌められている。

「ねえ、キクちゃん」

「何？」

「大好きだよ！」

そう、二人で一緒に買った、お揃いの、婚約指輪が……。

生物学的には性別が明らかであるにもかかわらず、心理的にはそれとは別の性別（以下「他の性別」という。）であるとの持続的な確信を持ち、かつ、自己を身体的及び社会的に他の性別に適合させようとする意思を有する者であって、そのことについてその診断を的確に行うために必要な知識及び経験を有する二人以上の医師の一般に認められている医学的知見に基づき行う診断が一致しているものをいう。

『性同一性障害者の性別の取扱いの特例に関する法律 第二条』

性再適合手術（Sex Reassignment Surgery）とは

G I Dによる、心と身体の性の不一致を解消するために行われるもので、女性から男性の場合、男性から女性の場合とあり、それぞれ、外性器の形を変える手術のことを言う。

『日本S R S学会 JAPAN SRS CUNFERENCE』より

自分は、
どこまでで一つだろう？
生きていれば一つなのか？
生きているうちは、
どうにか一つなのか？

森博嗣『数奇にして模型 NUMERICAL MODELS』

解説

如月椎奈

高天美月氏は、「あとがき嫌い」で有名(?)である。

それは、氏のもうひとつの投稿作を見れば歴然であろう。そこで、今回、氏と最も親しい間柄である（と自負している）私・如月椎奈が、こうして、「解説」を書くことになったわけである。

氏の新作をいち早く読めるという喜びを胸に抱きつつも、どこか一抹の不安と重圧を感じている私であるが、氏の思惑に可能な限り肉薄出来るよう最大限の努力をしながら、それでは、心し

て「解説」を書き始める次第である。……

(この先は重大なネタバレを含んでいるので、未読の方はご注意を)

さて、高天美月氏は、「無類のミステリィ好き」として業界では有名だ(そんな噂を流しているのは私なのだが)。

そういう目線で、この『彼女たちにうってつけの花』を読み進めてみると、どうだろう。氏としては珍しく、ベタベタの(別に粘性が高いわけではない)「恋愛もの」ではないか! しかも、見ているこちらが赤面してしまいそうなほど、「王道の」……。

しかし、それは言ってみれば、非常に「ありがち」な話でもある、ということだ。私は意外に思った。暫く見ない内にすっかり宗旨替えでもしたのか、それとも、公の場に提供することも考慮して、幾分角を丸めたのか……、とはいえ、それはやはり杞憂であった。最後の一文を読んだとき、私は、またしても、見事にしてやられた! 思わず膝を打って、私はこう叫んだ。

「なるほど、これは、紛れもなく『ミステリィ』だ!」

いやはや(死語)、それにしても、氏の技巧には舌を巻くばかりである。ほとんどアンフェアすれすれの叙述が続くが、よく、最後まで事実を躲し得たものだ。特に、八頁のレモンの台詞、「愛し合ってる恋人に、性別なんて、関係ないのよ!」など、氏の得意顔が眼の前に浮かぶようである。「どうだ、まんまと騙されたらろう?」というイヤらしい顔が……。

「しかし」と私は首を傾げる。

確かに、氏の叙述は美しい。ラスト一行にも見事に騙された。

しかし……、逆に言ってしまうえば、「それだけ」なのである。今ではビデオテープのように使い古された「叙述トリック」、しかも、ありきたりな性別誤認の叙述とは、「意外」というより、寧ろ、「失望」に近いものを感じる。あれだけ叙述トリックを目の敵にしていた氏が、このような小説をよしとするとは、いくら、私が氏の第一のファンであるとしても、こればかりは言わずにはいられない。

「高天美月よ、君も墮ちたものだな!」

――しかし、それは、この小説が、あのまま終わっていた場合の話である。

私などが心配せずとも、氏は決して忘れてなどいなかった、第一信条である「読者を驚かせる」という、子どものような、それでいて純粋な心を。

「叙述トリック」などでは終わらせない、いや、それすら惜しげもなく踏み台にしながら、今まで築き上げてきた物語の根底をも覆す叙述を、氏はいとも容易くやってのけたのだ。

確かに、あそこで彼女たちの物語は終わったわけだけれど、私たち読者に対しては謎を明らかにしないまま……、いや、その謎すら、「自分で考えたまえ」と言わんばかりである。

そこで、私は(半分以上は意地からだ)、自分なりにその「謎」を考察してみた。左にそれを記す。読者たちの思考の手助けになれば幸いである(尤も、「的外れな意見でなければ」の話だが)。

①「性同一性障害」について

小説内の記述から、キクこそが、性同一性障害の男性であることは容易に推察出来る。

さて、それでは、いったい、何が「謎」なのか？ ヒントは、物語のラストに登場する「百合」の花である。

「百合」とは、女性同士の恋愛、つまり、「ガールズ・ラブ」・「レズビアン文学」の暗喩である。そこから導き出される「謎」といえば、そう……、

「女性のレモンと、性同一性障害の男性であるキクの、この恋愛関係は、『百合』と言えるかどうか？」

いや、もっと正確に言うならば、

「私たち『読者』は、この物語を『百合』として楽しむことが出来るか否か？」

ということである。

さて……、あなたは、どちらか？

②「性適合手術」について

しかし、謎はこれで終わらない。

こちらは、①を更に発展させた形態である。つまり、

「性同一性障害の男性であるキクが、性適合手術を経て、肉体的にも女性となった場合は、『百合』として見る事が出来るかどうか？」

ということである。

後者は、主に、①の質問に対して「否」と答えた者に対する挑戦であろう。

しかし、何とも意地の悪いことだ。氏の性格が捻くれていることがよくわかる（これは褒め言葉だ）。

③「自分の領域」について

最後の引用は、最早、今となっては、「いわずもがな」であるが、ここまで来たら、私が最後まで書いてしまおう。

③とは、つまり、

「肉体をどこまで欠損したら、『百合』として見られなくなるか」

ということだろう。

これは、①で、「楽しむことが出来る」と答えた人に対する挑戦だろうと思われる。全く、素直な人ではない。

以上のことから、これは、単なる学生同士の恋愛物語ではない、究極的に言えば、「人間の性とは何か？」という命題にも繋がる物語である、と言えるであろう。

また、高天美月氏は、「ミステリィ」について、以前私にこう語ったことがある。その言葉を

ここに引用し、私・如月椎奈の「解説」の締めとしよう。……

「ミステリイの定義？ そんなの、私なんかにはわからないな……、だってさ、私からすれば、殺人事件なんかよりも、男女の恋愛関係の方が、よっぽどミステリイだと思うよ……、たとえば、私と君みたいな……」

月桂樹と薔薇

芳野 朔

初夏の日差しが降り注ぎ、白いレースのカーテンがふわりと揺れる。

「こんなものしかありませんが、どうぞ」

若い女が出したカップには、コーヒーがたっぷり注がれている。ほろ苦い香りがふわりと漂う

。

「とんでもありません。ありがとうございます」

男はにこりと笑って礼を言う。

「いい香りですね」

男の言葉に、女はにっこりと笑う。えくぼがかわいらしいが、口元のほくろがやけに色っぽい

。

「ありがとうございます。そのコーヒー、私がブレンドしたんです」

「へえ、ご自分で。私はあまり詳しくないのですが、コーヒー豆の配合とかもご自分で？」

「はい。オリジナルブレンドですよ。香りづけに花びらも入れてるんですけど、コーヒーの香りとバランスを取るのが難しくて、苦労しました」

女は男の向かい側に座り、自分のカップを手にした。伏し目がちにカップに口をつける姿は、写真におさめたいほどである。

「お味はいかがですか？」

男の視線に気づき、女は小首をかしげる。ゆるく波打った豊かな黒髪がさらりと肩から落ちる

。

「おいしいです」

「良かった」

女の笑みから目を逸らし、男は部屋の隅にあるキャリーバッグに目をとめる。

「ご旅行に行かれるんですか？」

「ええ、フランスに。一度行って見たかったものですから」

「いいですね。食べ物もおいしいですし」

「はい。今から楽しみなんです。――刑事さんだと、あまりご旅行とか行かないんでしょう？」

」

「ええ、まあ。でも、仕事ですので」

「頼もしいです」

目の前の女は無邪気に笑う。男は照れ隠しをするように、軽く咳払いをする。

「えー、そろそろ本題に入らせていただきます。竹井桃子さん。こちらの男性に見覚えはありますか？」

男は一枚の写真を取り出した。眼鏡をかけた若い男が写っている。几帳面さが顔に出ている。

竹井はカップを置き、写真の男をじっと見つめる。

「――はい。私が開いている喫茶店によく来ていた今野さんです。最近お見かけしないと思ったら、まさか行方不明だなんて」

竹井は悲しそうに目を伏せる。

「あなたの経営している喫茶店――『ル・ロリエローズ』でしたね。その裏手で、被害者の携帯電話が発見されました。その通話記録を見たところ、最後に通話したのは竹井さんとなっていますが……」

「はい。二週間ほど前です。その日は私の作ったコーヒーが完成した日で、そのことについて電話しました。今野さん、コーヒーが好きだったので」

「作ったコーヒーというのは……」

「はい。今、刑事さんが飲まれているコーヒーです。どうぞ、冷めないうちに……」

竹井に促され、男はカップを口に運ぶ。くらくらするのは花の香りのせい、寝不足のせい。

「電話したのは夜ですね。かなり遅い時間ですが、なぜですか？」

「コーヒーが完成したら、すぐ連絡してほしいとおっしゃっていたので。今野さん、本当に楽しみにしてたんです――」

竹井はうつむき、目元に手をやった。

男は質問を中断し、コーヒーを飲みながら部屋を見渡す。部屋は竹井の経営している喫茶店の二階にあり、年頃の女性にしてはすっきりとしている。窓の下にはピンク色の花を咲かせた木が見える。ちょうど、今野の携帯電話が見つかった辺りである。

それにしても、今日は暑い。まだ六月だというのに。男はそっとネクタイをゆるめた。もともと暑いのは苦手で、なんとなく気分が悪い。

「……すみません。いろいろ思い出してしまって――あら、コーヒーがありませんね。お代わり、差し上げます」

「ああ、お構いなく……」

竹井はキッチンからコーヒーポッドを持ってきて、男のカップに注いだ。

「すみません。今、何時くらいでしょうか」

「えっと……ちょうど十時です。何か、このあとにご予定でも？」

「まあ、そんなところです。――なんのお話でしたか……そうそう、今野さんがコーヒー好きだったお話ですね」

「まあ、そうですね……。電話をした夜、今野さんとお会いになりましたか？」

「ええ」

竹井の返答に、男は大きく身を乗り出した。興奮のあまり、鼓動がはやまる。苦しいくらいだ。

「本当ですか？ どこで会いましたか？」

「喫茶店の裏で」

清水の大きな黒い瞳が、まっすぐ男を捉える。男が言葉を発する前に、竹井は淡々と語る。

「今野さんが悪いのよ。こんなきれいな花とひとつになれるのに。がっかりだわ」

「やはり、犯人は……」

男は胸を押さえる。先ほどから鼓動が変だ。言葉をうまくつなげられない。

「刑事さん、今野さんの携帯をよく見つけれましたね。というか、今野さんが私の店の常連だったことにこんなに早く気づくなんて。優秀ですね」

竹井は愛らしい笑顔を浮かべる。

「竹井……逮捕……」

男は立ち上がろうとしたが、床に倒れてしまった。竹井は席を立ち、男のそばにしゃがんだ。脂汗で額にへばりついた男の髪をそっとかき分ける。

「ねえ、刑事さん。喫茶店の裏にある、ピンクの花の咲いたあの木、なんだかわかる？」

男は荒い息を繰り返すだけだ。

「キョウチクトウっていうの。漢字にすると夾竹桃。大好きな花なんです。きれいな花よね。刑事さんの飲んでたコーヒーに入ってる花ですよ。本当に好きだから、竹と桃の入った名前を自分で自分につけたの」

女は立ち上がり、窓を閉めた。レースのカーテン越しに夾竹桃が見える。

「私、鈴蘭とかも好きなんです。あんなに可憐なのに毒があるなんて、とっても魅力的じゃありません？ 夾竹桃にもね、毒があるんです。花にも葉にも枝にも、果実にも。周りの土壌にも毒性があるんですって。なのにあんなにきれいな花を咲かせる。素敵だわ」

女は無邪気な声を上げる。

「だから、もっときれいな花を咲かせようと思ったの。あなたも手伝ってくれる、刑事さん？」

女はにこにこ笑っていたが、不意に表情をなくした。

「女性の言葉を無視するなんて、失礼ね」

淡々と言い放つと、女はキャリーバッグを手に取った。

「まあいいわ。それでは刑事さん、ごきげんよう」

女は完璧な笑顔を浮かべ、軽やかな足取りで部屋を出た。

青年は喫茶店のカウンターに座り、コーヒーを淹れる女をそっと見た。遠い異国の地で日本人に会えると、何とも言えない安心感がある。

「どうぞ」

「ありがとうございます」

にっこりほほ笑む女の頬には、かわいらしいえくぼができています。その可憐さが、口元のほくろの色っぽさを際立たせている。

「学生さん？ 一人旅の最中かしら」

「はい、そんな感じです。遊べるのなんて、学生のうちだけだと思って」

「そうね」

青年は照れ隠しをするようにコーヒーを飲む。花の香りのような、甘い匂いがする。

「お店の名前も素敵ですね。日本語に訳すと、えっと……キョウチクトウでしたよね」

「ええ。とってもきれいな花よ。でも、毒があるの」

「へええ。意外です」

「でしょう。それじゃあ、ゆっくりして行ってね」

青年は、他の客の注文を取りに行った女の後ろ姿を見つめる。

「いい人だな……」

青年は小さくつぶやいて、コーヒーをすすった。

あとがき

締切当日に書き始めたのに、慣れないことをしました。残りの一パーセントにかけた結果がこれです。推敲ですか？ 何それ(ry

でも、「花が咲いたよ」を送らずにすみません。

次は製本版ですね。明日から本気出すわ。

ここまで読んでくれた方、ありがとうございます。

アノ華語ルヤ

秋月 夢人

1

僕はいま梅の下でほうじ茶を飲んでいる。花は満開で、一目見れば心を奪われるに違いない。平日の神社が保つ静けさは、こういうところで効果を発揮する。白と赤——いや、あえて紅といったほうがいいだろう。見事なコントラストだと思う。二月の空にぴったりだ。

「お花見というと、桜をイメージするでしょうけど、梅の花も——」

僕の目の前に座った女性が話しかけてきた。そういえば、彼女も紅と白の衣装を身にまとっている。僕は会話のネタにできると直感して、梅の木のとっぺんを見上げた。彼女の様子をうかがいながら。

「桜(おう)栴(か)さんって、梅の花に似てますよね」

僕が視線を戻すと、桜栴さんの灰色の瞳が大きくなった。これは彼女がものごとくに興味を持ったサインだ。さて、どんな反応が返ってくるかな？

彼女は湯呑を手にして、優しく微笑んだ。

「それって私の服装が花の色と同じだからですか？ この裳着や袴とか？」

「……まあ、それもあるんですけど、なんというか……」

僕は心の中で舌をだした。すでに見透かされていたか。彼女の洞察力にはいつも驚かされる。現役の捜査一課の刑事が言うのだから間違いない。僕も湯呑を持ち上げてほうじ茶を啜った。

「ふう、桜栴さんのお茶は格別です」

「それはなによりです。今日はとびっきりのを用意したんですよ。この花に映えるようにって」

彼女はテーブルの上にある梅の枝を取り上げた。傷一つない白い肌、つややかな黒髪、思わず振り返ってしまいそうな顔立ち。髪を束ねている白いリボンもあいまって、映画のワンシーンのように見える。役者がセリフを読み上げるように、話が始まった。

「お花見ってというのは、けっこう歴史が古いんですよ。古代の歴史書——貴族の日記とかに書いてあったりするんです。そもそも花を愛でるという考え方は、きっと原始からあったのだと思うんです。私。根拠なんてないんですけどね」

彼女は枝を魔法のステッキのように振った。日頃から玉串（白木の棒に白い紙がついているやつだ）を使っているせいか、動きがさまになっている。

「芸術にも大きな影響を与えているんです。美術、音楽、文学、と数え上げればきりがありませんよ。とくに和歌には平安から現代まで、絶えず四季折々の花が詠みこまれていますからね。この神様も梅を愛した一人ですし」

「菅原道真には有名な伝説がありましたよね？ これも梅にまつわるものだったような……」

「飛び梅伝説ですね。道真が藤原時平の讒言によって九州へ流されるとき、梅の木が空を飛んで

ついてきたと伝えられてます」

「道真は梅が好きだったんですか？」

「そうかもしれません。京を離れる際にこんな歌を残しているんです……」

彼女はお祈りをするみたいに、胸の前で両手を組んだ。まるでそこにマイクがあるように見えた。

「東風吹かば 匂ひをこせよ 梅の花 主なしとて 春な忘れそ」

碧さんの声には独特の音というか、魅力がある。言葉にするのが難しいけれど、僕はエモーショナルな声だと呼んでいる。心の隅をつつくような、そんな感じだ。彼女はロックロールによく合う不思議な声を持っている。

「そのポーズだと、どうしても歌っているように見えますね」

「そうですか？ あまり意識はしてないんですけど……」

「僕の記憶のなかだと、桜椀さんがステージ上にいるところが再生されちゃって。すごかったなあ、ライブ」

「褒めていただくのはうれしいんですけど……面と向かって言われると、照れくさいですね。やっぱり」

彼女ははにかみながらちょこんと首をかたむけた。うっ、かわいい。つい口に出してしまいそうになる。僕はなんとか「かわいいですね」という言葉を飲み込んだ。いかんいかん、せっかくの雰囲気は台無しになる。

「でも、左遷されたときに詠んだものが有名になるなんて、なんだか複雑です」

「悲劇の主人公はだいたい辞世の句を詠んだり、名セリフを残したりしてますから。道真も一緒です」

「きっと悲しかったんだらうなあ、道真は」

「どうでしょうね。ひょっとすると、喜んでたかもしれませんよ」

彼女の顔には相変わらず微笑みが浮かんでいる。けれどもそれはさっきとは違って、いたずらっ子が見せるような、そんな表情だった。

「左遷されても、ですか？」

「道真に政治的な野心がなかったとは言えません。でも私は彼が骨の髄まで政治家だったとは思えないんです。道真にまつわる二つの漢詩集があるんですが――」

彼女はテーブルのう上に置かれた本の山から、分厚いハードカバーと和綴じの本を引き出した。どちらもシミや日焼けがあって、かなり古いものだと分かる。碧(みどり)さんは和綴じのほうを選んでページを開いた。僕が覗き込むと、和紙が漢字で埋め尽くされていた。漢文だからあたり前か。

「これは道真が流された後に作られた、菅家後集という詩集です。本自体は江戸時代に出版されたものですが――」

白くきれいな指が日に焼けて茶色くなった紙を行ったり来たりする。まるでピアノの鍵盤を叩いているようだ。彼女はしばらくそうしていたけれど、おもむろに顔を上げて僕を見た。

「これなんか、道真の気持ちがよく表れていますよ」

彼女はそう言うと、ゆっくり息を吸い込んで詠い始めた。僕は背筋をぴんと正して耳をかたむける。さっきも感じたけれど、やっぱり碧さんの声はすばらしい。僕は彼女のそれに全神経を集中させた。

朝(あさな)朝(あさな) 風の気勁(つよし)
夜(よな)夜(よな) 雨の聲寒(こゑさむ)し
老(お)いたる僕(しもべ)は 綿(わた)を要(もと)むること切(せつ)なり
荒(あば)れにたる村(むら)に 炭(すみ)を買(か)ふこと難(かた)し
茅屋(ぼうをく)の破(やぶ)るることを愁(うれ)へず
偏(ひとへ)に菊花(きくくわ)の残(そこな)はれむことを惜(をし)む
自(おのづか)らに年(とし)の豊(ほう)稔(ねむ)なることあれども
都(す)べて口に叶(かな)ふ食(くひもの)ぞ無(な)き

「この茅屋っていうのは、太宰府のことなんです。これを踏まえて読んでみると……久保さんはどう解釈しますか？」

いきなり話を振られてびっくりした。詩に聞き惚れてぼんやりしていた僕は大いにうろたえた。だからろくに考えもせずに答えてしまう。彼女の顔色をうかがうと、興味津々といった顔つきをしていた。

「あーそうですねえ、道真は屋敷が壊れることよりも、菊の花だとか自然の植物のほうが大切だなあ、みたいな」

言っではみたものの、現代語訳にはあまり自信がない。僕がそう言うと碧さんの表情がぱあっと明るくなった。おっ、これはもしかして……。彼女はパチンと手を鳴らして身を乗り出してくる。どうやら饒舌モードに入ってしまったらしい。こうなると彼女の語りはもう止めることはできない。僕はただ相槌を打つだけになってしまうけれど、案外この時間が好きだったりする。目を輝かせてしゃべる彼女の姿がどうしようもなく心を揺さぶるのだ。

「やっぱり久保さんもそう思いますか！ 第三句目の『偏に菊花の破るることを愁へず』が、道真の心境をうまく表現しています。役所の屋根に穴が空くより、菊や農民の様子に気を配っていたことが分かりますね。これは彼の晩年の作なんですけど、この頃になると自分の気持ちに整理がついて、周りの風景がよく見えるようになったみたい。昔と今の境遇を嘆くだけじゃないんだぞ、っていう意志表明の現れですね」

「確かに、なんかあきらめている感じがあるような……」

「諦観と言ってしまうえば、それまでなんですけどね。でも他の詩を見て思うんです。道真が新しい視点を発見したんじゃないかって。仏教の影響を強く受けたものや、竹馬の友であった紀長谷雄をいたわるものもあって、とっても興味深いんです」

「紀長谷雄も詩人でしたっけ？」

「ええ。和歌や漢文を得意とした人ですね。道真が流された後も手紙のやりとりをしていたそうですよ。彼は何度も道真の詩に出てくるんです。親友といって差し支えないでしょう」

「いいですね。親友って」

僕はこの時、自分が大学で国文学を学んだことに感謝した。かろうじて話についていける。理解できなくても碧さんの語りはおもしろい。けれど彼女の琴線にふれる言葉を出して、話が盛り上がるようにしたいのだ。そのほうが楽しいから。そんな訳で、大学で得た知識が少しばかり役に立つ。

「さっき詠んだ詩が入っている詩集も、紀長谷雄が編集したもので――」

碧さんの話はどんどん先へと進んでいく。こくんこくんと頭を動かすたびに、梅の花びらが舞った。僕の意識は彼女の声の波にもまれながら、いつしか思索の海へは沈み込んでいた。

彼女と出会ってから、もう一年ちかくが経つ。僕が仕事の途中でこの神社にふらりと立ち寄ったとき、彼女のほうから話しかけてきたのだ。そんなごく些細なことから、二人っきりでお茶をする仲にまでなった。女性と付き合うのが下手くそな僕にとって（どうしても遠慮してしまうのだ）、ものすごく稀有(けう)な例だと言える。まあ、上司の親戚ということもあって、親近感があるのかもしれない。それにしたって、ひさしぶりに緊張しないでおしゃべりできる女性と巡り合えたと思う。

最近碧さんを見るたびに、僕は心のなかでくすぶっているある疑問が顔を出す。

僕は彼女に好意を持っているんじゃないか。

彼女ほど容姿端麗かつ頭脳明晰という言葉が似合う女性を、僕は知らない。そしてこれから先も、彼女を超える人に出会える気がしない。碧さんが時折垣間見せる知性の輝きと澄んだ瞳は、僕にとってかけがえのないものだ。

もう彼女に一目惚れしたと言ってしまって、いいのかもしれない。そう考えればこの微妙な気持ちに踏ん切りをつけられる。僕はそう自覚しているのだが――。

いつもそこで職業病がむくりと鎌首をもたげてくる。

刑事という職業柄、人間の醜いところを嫌というほど見てきた。取調室で向かい合えば、誰もが自分の内側をさらけ出す。良くも悪くも、だ。外づらがどれだけアテにならないか、僕は身をもって知っている。

映画俳優並みの顔を持った保険金殺人犯がいた。彼は取り調べ中にこうつぶいていた。
――女なんてカネを搾り取るための手段だよ。

アイドル並みの顔を持った結婚詐欺師がいた。彼女は僕が手錠をかけた時、口元をゆがめてこう言った。

――男ってバカだから。

僕は無性に腹が立った。二人から送られてくる皮肉や軽蔑に耐えられなくなった訳じゃない。彼らが共通して持っていた意識に、我慢できなくなったのだろう。

男も、女も、欲望を満たすための道具にすぎない。あの二人の意識はまさしくそれだった。本当にいやな言葉だ。誰が言ったんだっけ？ 先輩刑事だったか、それとも大学時代の悪友だったか。

つまり見てくれがすべて、ということなのだろう。相手の性格や思想なんてどうでもいいのだ。世の男達（僕も含めて）は女性をそういう目で見てしまうことがある。僕はこのとき途方もな

い自己嫌悪に陥るのだ。

いくら顔や体が美しくてもそこにこだわるのは、彼女（彼）の本質から遠ざかるような、そんな気がする。美醜だけを問題にしたいなら、人形やお面を愛でればいい。もし美しさが数値化できたら、ロボットでもできるだろう。人間の奥深くにあるであろうどす黒いものをつかまなきゃ、本当の恋愛や友情なんてできないのだ。

碧さんは美人だ。だから好きになりました。それじゃあ何も変わらない。彼女は人形ではなく生きている人間だ。碧さんの想っていることを分かってほしいとしないで、好き嫌いを言えるだろうか。僕はどうしても彼女の内を――

「……さん、久保さん」

「へっ？」

碧さんの声で僕は我に返った。彼女の声が聞こえなくなるほど自分の世界に入り込んでいたらしい。それはまあ僕にとって珍しいことじゃないから、いいのだけど……。

「あの、桜栴さん、その」

「顔色が良くありませんけど、大丈夫ですか？」

全然大丈夫なんですよ、体調は。それより顔が……ものすごく近いです。澄んだ灰色の瞳に僕の腑(ふ)抜けた姿が写っていた。言葉がうまく出てこない。これが見とれるってことなのだろうか？ 碧さんがもう少し首をかたむけると、額と額がぶつかりそうだ。

「ひょっとして、疲れてますか？ ずいぶん大きな事件を担当されたとか、叔父から聞いたのですけど」

「いやいや、犯人が血気盛んな奴でしてね。逮捕するときに少々暴れたくらいですよ。アハハ……」

なんだか言い訳しているみたいだ。僕はさっきの回想を振り返る。自分の意志がいかに弱いかわかり知らされるのだ。こういうとき。顔を引っ込めたけれど、碧さんは心配そうな表情を崩さない。さて、どうやって取り繕おうか。僕が頭の中をこねくりまわしていると、彼女がポツリと呟いた。

「久保さんは真面目ですからね」

「碧さん、それって褒めてるんですか？」

「一長一短、でしょうね。職務熱心なのは褒めてよいけど……」

「よいけど？」

「あまり根を詰め過ぎると、過労死しますよ」

碧さんは困ったような顔をしながら、笑った。いやに現実味があって怖いんですけど。僕の返した笑いは、いくぶんかひきつっていたかもしれない。

「なるべく徹夜しないようにします」

「私も人のことを言えないんですけどね」

そう言うと彼女は頬杖をついた。憂鬱そうな碧さんもまた――って、またやってる。とことん学習しない男だな、僕は。とにかく話題を変えて態勢を立て直そう。

「そういえば、文ちゃん遅いですね。課外授業が延びてるのかな？」

「どうせ、どこかで道草食っているんでしょう。我が妹ながら困ったものです」

口ではそう言うものの、碧さんは涼しい顔をしている。たぶんこういうことに馴れてるのだろう。文ちゃんがどこにいるか、見当がついているのかもしれない。さすが姉妹といったところか。そんな他愛のないことをつらつら考えていると、神社の石段をパタパタと駆け上がる足音が聞こえてきた。

足音に気付いて僕が首を回すのと、見知った姿が現れたのはほぼ同時。噂をすればなんとやら、赤い鳥居に手をかけて息を切らしているのは、文ちゃんだった。

II

碧さんは急須に新しい茶葉を入れて、ポットからお湯を注ぐ。いっぽう僕はそれを横目で見ながら、自分の隣で始まった文ちゃんのマシンガントークの集中砲火を食らっていた。

「今日はなんの日が知ってる？ バレンタインデーだよ、バ、レ、ン、タ、イ、ン。日本中の女子高生がいっちゃん努力して、体も心もはって闘うところなんですッ！ もう乙女の聖戦といってもいい！」

「うん」

「やあやあ、恋い焦がれる女の一世一代のバクチとはア、このことだ。これが応援せずにいられるかってんだ！ あたしはこの日のためにどれだけ犠牲を払ってきたか分かる？」

「……うん」

「それをあいつは見事に踏みにじってくれたわけですよ。『俺じゃねーし』じゃねえよ！ チョコを盗むなんて言語道断！ 次会ったら、犯人だっていう証拠を突きつけてぶっとばしてやる」

「文ちゃん、少し……」

「ああッ、文芸部副部長のあたしがここまで手こずるなんて。ホームズ並みの灰色の脳細胞をこんなに苦しませるのは誰だ！」

「なんか違うような……ホームズじゃなくてポワ」

「チクショウ、あいつは一体どんなトリックを使ったっていうの？ ポートピア連続殺人事件以来だよ！ こんなにイライラするのは」

「はいはい。あなたが悩んでることはよく分かりましたよ。とりあえずこれを飲んで落ち着きなさいな」

こう言って、碧さんが文ちゃんの前に湯呑を置いた。湯気ともに香ばしいにおいが広がる。僕もおかわりをもらおうと。

「そう言われたって……」

「文、まずは何が起きたのか、順番に説明して。久保さんもどうしたらいいか困ってるわ」

文ちゃんはどこか不満そうに頬を膨らませた。僕と碧さんの反応が鈍いので、がっかりしたのかもしれない。

「お姉ちゃんが冷たい」

「そりゃあ、あなたと違って興奮してないから。文は感情の沸点が低すぎるのよ。久保さんもそ

う思うでしょう？」

「ぶーぶー、いつもそうやって他の人を味方にするんだもん。お姉ちゃんずるい」
僕には兄弟がない。だからこういう会話がうらやましくもあり、微笑ましくもある。

「僕も詳しく聞きたいな。文ちゃんがこんなに怒ってるから、気になるね」

文ちゃんは生まれつきのポーカークフェイスだ。怒っていた」と思ったら、次の瞬間泣き出すなんてざらにある。まるで仮面を付けかえているみたいだ。

「久保さんがそうおっしゃるなら仕方がない。やってやりますか！」

さっきの不貞腐れた態度はどこへやら、文ちゃんは顎に手を添えて目をつむった。このしぐさが芥川龍之介に似ているので、僕はこれを『芥川のポーズ』と呼んでいる。

「……今日はずいぶん気合いが入ってるね」

「ふっ、今のあたしはどんな謎でも解き明かす、超探偵なのだ」

「『超探偵』なんて……超えたらもう探偵じゃないでしょうに」

苦笑いしながら、碧さんがさりげなくツッコミを加えた。文ちゃんは無視することに決めたらしい。ポーズをとったまま、目を開けて語り始めた。

「あたしがあの忌々しい不可能犯罪に出会ったのは、四時間目の直前だった。あたしは日直だったから、戸締りを確かめて体育館に行こうとしたんだ。そしたらあいつが声をかけてきてさ。ちなみにあいつってのは、あたしが犯人だと確信している男ね。名前は菊池登で、野球部のキャプテンなんだ。で、何か用って聞いたら、教室に忘れ物をしたって言うんだよ。心の広いあたしは快く鍵を開けてやったんだ。あいつが出てくるまで空を眺めながら、みーちゃんのチョコのことを考えてた。クラスじゅうのチョコを集めてもかなわないくらい、すごい出来だったからさ。グローブを完璧に再現——」

「文ちゃん、それって事件と関係あるの？」

僕は話がちゃんと目的地に着くのかどうか不安になった。彼女の場合、脱線を重ねるとんでもないところに行く時がある。僕の心配をよそに、文ちゃんはニヤリとした。

「これが大有りなんだな。今回被害にあったのは、みーちゃんのチョコなんだよ。久保さーん、短気は禁物。あとみーちゃんのチョコは最初に鍵を閉めた時、ちゃんと机に置いてあったよ。ここがポイントだね」

女子高生にからかわれるなんてひさしぶりだ。男だらけの職場を思い出しながら、ひどく懐かしく感じる。

「こいつは失礼。文ちゃん、続けて」

「あいつが物を取って、あたしがまた鍵をかける。いつもと特に変わったことはなかったんだ。問題なのは体育館から戻ってきてからだよ。みーちゃんとあたしが教室へ帰ってくると——」

文ちゃんは唇を引き締め、真剣そのものとした表情を浮かべた。僕はお茶請けのせんべいをくわえながら、次の言葉を予想した。いや、できた。

「なァんと、みーちゃんの机の上にあるはずのチョコが消えているではありませんか！」

「.....」

僕と碧さんは湯呑を持ったまま、黙っていた。たぶん彼女の心にも僕と同じようなささやきが

生まれたのだろう。ポーズを解いて文ちゃんが誇らしげに胸を張っているのが、残念というか、とても痛々しい。

「密室からの消失！ この超探偵桜椀文があんなチャラ男に敗北するとはッ」

「……なるほど。犯人がほぼ確定なのはそういうことか」

「あたしはここでビビッときてね。もう誰がやったか分かっちゃったんだ」

「……部屋に入ったのが一人だけじゃあね」

「ちなみに教室は三階にあるんだ」

どうでもいいことを聞き流しながら、自分の口調について考えた。どうしても皮肉っているような言い方になってしまう。文ちゃんには悪いんだけど。

「その場であいつをとちめてやりたかったけど、まずはなくなったチョコを見つけなきゃね。あたしはゴミ箱から黒板の裏まで、這いつくばって探したんだ」

「それでチョコは見つかったの？」

「学校中を探したんだけど、ダメだった。あいつはどこに隠したんだか、まったく」

文ちゃんはぬるくなったお茶を一気飲みした。これだけしゃべっていればそうとう喉が渴くだろう。碧さんの方をうかがうと、両手を組んだその上に顎をのせていた。これは彼女が真剣なときに見せるしぐさだ。

「文、あなたのことだから、菊池君に喰ってかかったんでしょ？」

「もちのロンだよ！ 放課後、みんなの前で『犯人はお前だ』って言ってやったのだ」

僕は心の中でひそかに菊池君に同情した。ただでさえ気の強い文ちゃんに詰め寄られたのだ。彼女のペースに吞まれて、どうにも言い返せなかったに決まっている。

「文、まさか彼にキックとかしてないよね？」

「うん、おもいきり蹴ってやろうとしたよ。でもあいつが鼻血を出して捲し立てるモンだから、情けをかけてやったのだ」

「殴り合いにまでいかなかったわけね。ホントに……」

「あたしはハードボイルドじゃなくて、どっちかっていうと、安楽(アーム)椅子(チェア)探偵(デクティブ)だから」

文ちゃんは絶対にハードボイルドのほうだろう。拳銃を構えて敵を追い詰めるのがお似合いだ。本人が聞いたら怒るだろうけど。

「でも、あたしが鉄拳制裁するまでもなかったんだ。天罰が下ったんだよ。あいつは激論の最中にそっとほっぺを抑えてね。

なんだろうと思ったら、ぼそっと、『歯が痛い』って。ざまあみろ」

どんどん菊池君が不憫になっていく。泣きっ面に蜂とはこのことだ。少しフォローするべきだろうか。僕は。

「そういえば、そのみーちゃんだっけ？ 彼女が持ってきたチョコってどれぐらいすごいのか？ 文ちゃん」

「そりゃあ、数え上げたらきりがなくらい！ あたしが特に感心したのは、ホワイトチョコで文字が書いてあることかな」

「へえ、どんなことが書かれてたの？」

「それが見せてくれなくてさ。グローブの内側にあるらしいんだけど。鉄壁のガードだったね。あっ、忘れるとこだった。久保さんにチョコあげなきゃ」

「えっ、いいのかい？」

「義理チョコだけど勘弁してね」

文ちゃんからもらえとは想定外だ。てっきり友達だけに配るんじゃないかと考えていた。これもジェネレーションギャップなのだろうか？ チョコを最後にもらったのはいつだろう。

いやあ、嬉しい。

「文ちゃん、ちょっと確かめたいんだけど……」

「おおっ、何か気がついたことがあるようだね、久保巡查部長」

「文ちゃん、その口調はいかなものかと――まあいいや。菊池君は教室から出るとき、忘れ物以外に何か持ってた？」

「なーんにも持ってなかったよ。あたしも体のどっかに隠したのかも、と疑ったんだけど」

「怪しい素振りはなかった？」

「全ッ然。あいつが教室にいた時間も五分くらいだったし」

僕は文ちゃんが今まで発した単語を頭の中で整える。せっかくチョコを頂いたので、彼女のためにヒントだけでも導き出せたら。あれがこうで、これがあれで……。

あっ……。

「文ちゃんの高校って、校舎が二つあったよね。校舎同士どれぐらい離れてるの？」

「あーかなり近いよ。確か五メートルぐらいかな。どうしたの？」

僕は文ちゃんの質問に答えなかった。一つ突飛な想像ができてしまったから。ひょっとすると菊池君がどうやってチョコを消したのか、分かったかもしれない。

「文ちゃん、解けたかもしれないよ。この事件」

「そっか、解決しちゃったかー。ふえ？」

文ちゃんはポカンとした表情のまま、固まった。彼女のこういう姿を見るのはすごく新鮮だ。僕は彼女に流れを取られないように、力を込めて言葉を紡いだ。

「菊池君がどうしてチョコを盗む気になったのか、それは僕にも分からないんだ。いくらでも推測はできるけどね。出来心でつい、いたずらしたくなっただのかもしれないし、最初からねらっていたのかもしれないよ。とにかく、今そんなことはどうでもいいんだ。明らかにしたいのは彼のチョコの消し方なんだから」

「そりゃ、そうだけど」

「部屋のどこかに隠したわけでも、外に持ち出したわけでもない。そうなるともう残っているのは――」

僕はゴクリと唾を飲み込んだ。

「窓からチョコを落とすしかないと思う」

「……まさか」

「さっき文ちゃんは学校中を探したって言ったけど、校舎の外へ回ってみた？」

文ちゃんはただ首を横に振る。僕はここぞとばかりに畳み掛けた。威厳たっぷりかつもっともらしく。

「彼が野球部員ってことを含めると、屋上へ放り投げた可能性もあるんだ。とにかく、屋上や窓の真下に行くことをおすすめするよ」

III

文ちゃんは眉を寄せて唇をへの字に曲げている。説得力はあったつもりなんだけど。すぐには頷いてくれないか。僕は碧さんの様子が気になった。妹のすぎるような視線に対して、碧さんは目を伏せてきれいに揃えられた前髪をいじっている。これもまた彼女が脳をフル回転させているときの――ん？

碧さんの指の白さと髪の色が交わったとき、僕の自信は瞬く間に崩れていった。これって、彼女は納得していない？

「あたしも久保さんの推理に賛成だなあ。悔しいけどね」

しばらく沈黙が続いた。それを破ったのは、妹から姉へ向けた問い掛けだった。

「お姉ちゃんもなにか言ってよ！ さっきから黙りこくってさ」

じれったくなった文ちゃんがそう尋ねても、碧さんは静かに座っていた。まるで夢を見ているような、ぼんやりした目をしている。まだ脳内世界から抜け出せていないのだろう。

「……みーちゃん本人はショックを受けているようだった？」

姉の疑問形の独り言に応えたのは、妹だった。

「そりゃもう一日中しょげ返って、椅子に座ってたよ」

「……一緒に探したわけじゃないのね」

碧さんの独り言が僕の中でひっかかりを生む。てっきりみーちゃんも文ちゃんと共に、校内を駆けずり回っているとイメージしていた。相手にチョコを渡せないほうがマズイのではないのか？

「落ち込んでる親友に無理強いなんてしないもん」

「意外だね。被害者が血相変えて走り回る感じ、じゃないんだ」

「女の子の繊細な気持ちなんて、がさつな男には分からないよ」

むぐう、その通りでございます。僕のような愚鈍な男はなおさらだろう。碧さんは我関せずにしやべり続ける。

「菊池君とみーちゃんの仲は悪かったの？」

「いや、いいほうだったよ。そもそもみーちゃんは野球部のマネージャーだし」

「……なるほど」

はああ、と碧さんはため息をついた。悲しいような、苦しいような、曖昧な笑みを浮かべながら。僕はなぜだか風邪をひいてもいないのに寒気がした。

「ははあん、その顔は思いついた時のだな！ お姉ちゃん、早く教えて」

碧さんはゆっくり髪をかきあげると、僕の眼を覗きこんで気の毒そうにこう言った。

「久保さんの仮説は面白いし……それに救いがあります。けれども、もしこの説が正しいならば、こんなに事件がこじれることはなかった」

「巡査部長の推理が間違ってるってこと？ 矛盾してるどころあった？」

「そういうことじゃないの。ただ私が久保さんよりも文の高校を知っているから――要は、知らないことがあるの」

碧さんはますます申し訳なさそうな表情を浮かべる。僕が『知らない』ことってなんだろう？

「あの高校は校舎の周りが花壇になっているんです。例の窓の下もそうだよな？ 文」

文ちゃんはコクリと肯いた。ほんの少し前までたけり狂っていた人間とは思えない素直さだ。好奇心旺盛な、子供らしさが表れている。

「花の世話は環境委員と用務員さんがやっていたはず。そして委員会の当番は毎日あったから…
…チョコは遅かれ早かれ見つかってしまうわけです」

文ちゃんのがっくりと肩を落とし、僕は恥ずかしさで顔が火照った。碧さんが気の毒がったのは、このためか。

「……落ちたところ、用務員さんのお気に入りの場所だった……あつたら落し物で届けるよね、ふつう」

あからさまにがっかりされると、こっちにもくるものがある。僕は努めて明るく振る舞おう。環境委員の当番とか、用務員の見回りとか生徒じゃなきや分からんし……えっ？

「桜椀さん、すいぶん詳しいんですね」

「一応OGですから」

さいですか。碧さんが文ちゃんと同じ制服を着ているところを想像できない。あまりにも巫女服が板についているからだろうか。

「私がこれから述べることは、仮説ですらない、妖しい巷説(こうせつ)です。その点をよく肝に銘じておいてください」

『巷説』という古語が飛び出したとたんに、背中を冷たい汗が伝わった。彼女がこの言葉を使う瞬間、いつも僕の心にピキリとひびが入る。常識を非常識に、不可逆を可逆に。彼女はそうやって僕をたぶらかす。死体が空から降ってきた夏の日も、無数の首くくりを見た秋の日も、そうだった。

「いっつもお姉ちゃんは前置きが長いんだから。さっさと行ってよ」

僕は空を飛んでいるような、ふわふわした感覚を味わっていた。文ちゃんがこれでもとばかりに急かす声が、遠く、遠くなる。碧さんはやっぱり曖昧模糊とした笑みを浮かべて、語り始めた。

「教室を離れる際、菊池君に不自然なところがなかった、という話題があったでしょう？ この時私はチョコがダメなら、どんなものが持ち出せるのか、考えていたんです」

碧さんの瞳が一際大きくなった。彼女の表情で曖昧になっていた部分がじょじょに消えていく。

「チョコを包んでいる袋や紙だったら――ポケットの中に隠し持てるかもしれない」

「それじゃ意味ないじゃん」

文ちゃんがすかさず喰いつく。それがどうした、という含みもあるのだろう。言葉尻に少し鼻にかかったところがあった。

「万が一、自分以外誰にも見えないような、魔法の袋があったらどうしますか？」

「お姉ちゃん、SF談義はそれくらいに――」

妹は姉の仕掛けに気がついていない。もうすでに伏線が貼られているのに。

「シンプルにチョコレートがどういうものか、分かってしまえば勝ちなんです。そう、魔法は...
...幽霊見たり枯れ尾花、ですね」

「魔法の正体は一体――」

あせったせいか、舌がもつれて滑舌が悪くなる。後半は自分でも何を言っているのか聞き取れなかった。すごく、貧乏揺すりがしたい。種明かしはまだですか？

碧さんは妊婦が胎児を慈しむみたいに、手をお腹に当てる。

「胃袋ですよ。菊池君はその場でチョコを食べてしまったのでしょうか？」

晴れ切った空に僕と文ちゃんの呻き声が響いた。

IV

「根拠はあるんですか？」

刑事の習性でついそんなふうにも口走っていた。『巷説』なんだから尋ねても仕方がないのに。一方文ちゃんは頭を抱えたまま、ピクリともしない。

「暗示している程度なら――『鼻血』と『歯痛』ですね」

「それがどう関わってくるんです？」

碧さんは指を折りながら答えてくれた。

「まずチョコレートを食べると鼻血が出る、という風説があります。そのうえ甘いお菓子は虫歯を悪化させますよね？」

もうぐうの音も出ない。これは百点満点の解答ではなかろうか？ 茫然としていると、そばで椅子を引く音がした。文ちゃんがおもむろに立ちあがったのだ。

「あたし.....学校に行く。まだあいつ部活してると思うから」

もしも碧さんが呼び止めなかったら、学生カバンを引っ掴んで、文ちゃんは駆け出していたに違いない。

「待ちなさい！」

その声は研ぎ澄まされた日本刀並みに鋭かった。この場合光るという表現があっているか分からない。それでも僕の内では銀色の輝きがぐるぐる回っていた。

「話はまだ終わってないよ」

境内のちょうど真ん中で、文ちゃんはストップした。そして肩をすくめてくるりと振り返った。

「真実が明らかになったのに？」

「真相はまだ語られていません」

「真実イコール真相でしょ」

いつのまにか碧さんが文ちゃんの真後ろに立っていた。ちょうど彼女の黒髪に、垂れ下がった梅の枝がかかっている。動いた拍子に花が舞った。

「私にとって、トリックなんてどうでもいい存在なんです。文、あなたは『真実』にだまされて、大事なことを見落としてる」

僕は花びらに写ったあるものを見てしまった。

眼(まなこ)。

碧さんと同じ灰色の眼だった。

「どうして菊池君がチョコを食う気になったのか、分かりません。消す方法の『真実』に行きあたっても、彼の『真相』にはたどり着けないと思いませんか？」

錯覚とは恐ろしい。一度思い込んでしまうと、しばらく治らないのだから。眼の周りを靄(もや)が漂い、視界をかすませる。

「この事件を物語として読むならば、こんな解もあるんです。彼は机に置いてあったチョコを誤って割るか、落としてしまった。彼はとりあえず壊れた品の状態を確認したでしょう。当然ホワイトチョコのメッセージも目に入る」

靄が僕と文ちゃんをがんじがらめにする。それは耳や鼻から入り込んで、体を湿らせた。

「そのメッセージが愛の告白で、自分宛だったら――」

そうか、彼はみーちゃんを傷つけれなかったんだ。悪気がなかったとはいえ、チョコを壊してしまったから。いっそ謝るより……………。

靄が脳味噌へ侵入してきたらしい。神経に雪が積もって思考がおぼつかなくなった。碧さんの言う『真相』は正しくて……『真実』は誤り……じゃなくて……正しさってなんだっけ？ 悪意でもない……善……答えは一つで……。そうだ、あいつだ。

「混沌(カオス)だ……まるで化け物だ」

「そう、意味も形も変わってしまった鶴のように」

僕の戯言が眼に吸い込まれていく。

文ちゃんが息を呑む気配がした。

碧さんは文ちゃんに背を向ける。それにあわせて靄が立ち昇り、艶やかな髪の毛と重なって灰色になった。

「真実は二者択一なんだよ！ 犯人かそうじゃないか！」

文ちゃん、それはいけない。だって――

「善悪のような二項対立で理解できるほど、世界は単純じゃない。一生かけても追いつけないくらい複雑なの」

文ちゃんは無事だろうか。あんないっぱい靄に囲まれたら、遭難してしまう。だから音を――

「この世界は不思議に満ちているのだから」

灰色の壁から垣間見えた碧さんは、哀しそうに笑っていた。

白日夢から覚めたのは、文ちゃんがいなくなり、少し経ってからだ。あまりにボーっとしていたので、僕は碧さんに下から覗きこまれる、という失態を演じた。

「やはりお疲れのようですね」

碧さんの労(いたわり)の視線が僕にはつらい。直前まで妄想にふけていました、とは言えないよなあ。

「文ちゃんは結局どうなりました？」

「しょんぼりしてましたよ。私がきついことを言いましたから」

遠回しとはいえ、自分の探偵としてのやり方を批判されたゆえに、そうとうへこんでいるだろう。

「かわいそうに、文ちゃん」

「もっと柔軟な考えができるようになれば、変わるんですけど」

碧さんは赤い鳥居を眺めながらそう独りごちる。会話の接ぎ穂がなくなって、わずかな間、静寂が訪れた。僕と彼女はしばらくお茶を飲み、のりせんべいをかじった。

「……表裏一体なんですよ」

「今回の事件というか、事故ですか？」

パキン。碧さんはせんべいを二つに割って弄んでいる。告白しようとした男の子に、チョコを食われた(盗まれた)女の子の気持ちなんて……。複雑だろうな、としか頭に浮かばない。

「チョコを盗み食いされて告白が成功するなんて、道真みたい」

さすが碧さん、言い得て妙だ。左遷されて歌が有名になってしまった菅原道真、チョコを渡さずに告白できたみーちゃん。どっちも似た者同士なのかもしれない。

「不思議な感じがしますね」

「不思議は次から次へやってきますから。お祓いしても、新しいそれが湧いて大変なんです」

果たして碧さんが不思議だと信じているものなんて、あるのだろうか。いつも不思議や怪異を論破してお祓いを施す。それが彼女のスタイルだ。

でも、僕にとって一番ファタジックなのは碧さんだ。あの夢も……まさかね。

「せっかくだから、文ちゃんのチョコを開けてみますか！ 桜栴さんも食べます？」

碧さんはようやく柔らかく微笑んだ。僕もつられて頬を緩める。自然に笑うのがやっぱり気持ちいい。

星形のチョコレートが袋に五つ入っていた。

早速一口。……これは……難しい。

世の理を二律背反で分けるなんて、不可能なんだ。このチョコの味だって――

「どうですか？」

「甘くて、苦いです」

あとがき

編集長！ お許してください！ まさか締切当日が葬式とかマジビビるー（震え声）。岸田さんやあに一さんやTUMENECOさんやRDさんみたいな、タイトルセンスが欲しい。碧さんと久保君コンビの長編を書きたい。切実に。あとこの小説を読んだあと、一つでもいいので参考楽曲を聞いてみてね！ この小説をより楽しめるよ（たぶん）。

参考文献

日本古典文学大系『菅家文集・菅家後集』

参考楽曲（敬称略）

次のページから始まるよ。

岸田教団&明星ロケッツ『アノ華咲クヤ』

『感傷の摩天楼』

『sleep disorder』

TaNaBaTa 『魔法のシュークリーム』

『ひとしづく』

『スターオーシャン』

FELT 『Hail Storm』

『My Black』

TUMENECO 『星さえ掴むこの瞳で』

『君と僕のナナイロストーリー』

凋叶棕 『ロストドリーム・ジェネレーションズ』

『be your shield』

発熱巫女〜ず 『Two Fates』

じゃねっと亭 『signal"irregular"』

『手を握る幻想の物語』

『ただ今を告げる軌跡』

Misty Rain 『星影のメモリア』

『Trick Star Magic』

君の美術館 『上白沢慧音の随想』

『博麗霊夢の望郷〈ノスタルジア〉』

回路-kairo- 『Blaze』

『Flower』

『守りたいこと』

サリー 『OR』

『或る古来から覗く点線』

ぴずやの独房 『the unleash』

	『Clair de Lune』
幽閉サテライト	『ヒトリシズカ』
少年ヴィヴィット	『ノスタルジア』
	『Reflection Blue』
MN-logic24	『サクララブコミュニケーション』
Get in the ring	『Nightmare Counselor』
overTuner	『君がいない夜に』
	『ブックメーカー』
魂音泉	『One's Own Way』
劇情テノール	『meimei』
鶯	『初恋』
Mystery Circle	『so What?』
	『現世メランコリィ』
monochrome-coat	『Laininamiver』
鉄腕トカゲ探知機	『黒猫少女』
	『春一番』
Judgement	『花鳥風月』
	『みずいろ』
Cakebox	『不死身のガールフレンド』
	『動くな、死ね、蘇れ』

一般作品

或る春の夜 ~Tenjin Dream.

落谷アツムネ

九州が梅雨入りを宣言した日
高校二年生に進級したボクは
昼休みナツメに呼び出された
「天神祭に行こう」だってさ
返事には三秒と要らなかった

学校の目の前の大きな公園を
色鮮やかな屋台が埋め尽くす
夕暮れ時だったからだろうか
学制服や運動着が珍しくない
人混みの中をボクとナツメは
距離を取りつつ並んで歩いた
けれど現実はそう甘くなくて
ボクとナツメは単なる友達で
ボクのこの思いは一方通行で
きっと届くはずのないことを
誰一人として知ることはない

「.....あれ、ナツメじゃん」
その声に聞き覚えはなかった
「もしかして〇〇ちゃん？」
それはおそらく中学の友達で
ナツメの顔が急に明るくなる
「確か卒業式以来だよな？」
「うん。すごく久しぶり」
ボクの知らないナツメが居た

ボクは二人からそっと離れた
止まった時が動かないように
一人ふらふらと公園から出て
自転車のペダルに足をかける
自分がとてもみじめに思えた

遠ざかってゆく祭りの喧騒は
この上なく切ないプレゼント

その夜ボクは十七才になった

・あしがき

チラシの裏その2。やっぱり成就しない。
天神祭みたいな神秘的な空気は大好き。以上。

Daydream

川名 とけ

不意に、意識が浮上した。

朝が来たのかと思って目を開けるが、そこに広がっていたのは自分の部屋などではなく白い、ただひたすらに白い光景だった。上も下も右も左も前も後ろも全てが白く染まり、自分が立っているのかそれとも浮いているのかすらあやふやな空間の中に僕はいた。

ここは何処だという疑問で頭の中が埋め尽くされる。ここに来るまでの記憶を順々に辿っていくと、最後に記憶に残っているのは布団の中に入ったということだ。

「これは夢、なのか？」

俗に言う、明晰夢という奴なのだろう。睡眠中でありながら、夢であることを自覚することができる夢。それが一番しっくりくる答えだ。今まで一度もそんなものを体験したことなど無かったが、何故だかそう確信できた。

「なら、これが僕の夢なのか……」

改めて辺りを見回して僕は苦笑した。周囲は相変わらず白一色の酷く殺風景な状態のまま変化はない。あまりにも空っぽな光景だ。もしや自分の頭の中はこんな風にすっからかんになっているのだろうか。

そんなことを考えていた僕の横を不意に何かが通って行ったような気がした。それがきっかけになったかのように少しずつ、だが確実に周囲が変わり始めた。ふわふわと漂っているような状態から一転し、何か地面の様なものを踏みしめているように感じたかと思うと、今度は周囲にじわりと様々な色が滲み始め、さっきまでただの色でしかなかった白が僕の周りを包む霧に変わっていく。その霧も段々流されていき、一つの景色が目の前に広がった。

そこはどこまでも続く広大な草原だった。今や足をつけている地面には青々とした短い草が並び、空はどこまでも広がっていて細長い形の雲がいくつかふわふわと浮かんでいた。

「———」

ふと誰かの声が聞こえたような気がした。誰かいるのかと周囲を見回して人影を探すと、いつの間に現れたのか、視界の隅で白い布がちらついた。その正体を知ろうと、白い何かが見えた方向に身体ごと向ける。

「あ……」

それは自分と同じくらいの年齢に見える少女だった。

少女を見て最初に思ったことは、白い、だった。少女の向こう側が見えそうなほどその肌は白く、それなのに全く病的な印象を受けない。触れただけで壊れてしまいそうな華奢なシルエット。少女の身体を包む純白のワンピースには汚れひとつ見ることはできない。

少女の印象とは対照的にしっとりとした濡羽色の髪は肩ほどまで伸びていて、時折風に吹かれ

てさらさらと流れている。しかし僕が最も惹かれたのは、まだ若干の幼さが残る顔をこちらに向け、ただ僕のことを見つめてくるその目だった。髪と同じ色のその瞳には深い知性が感じられ、静かで穏やかな湖面を思わせる。どこまでも深いその瞳に僕は吸い込まれてしまうような錯覚を覚えた。

此処が夢の世界であることを一瞬忘れてしまうほど、僕は目の前にいる少女に目を奪われた。夢中であるはずなのに、顔が熱い。どくどくと自分の中で鼓動を刻む心臓が全身に向かって高速で血を送り出すのを感じる。自分自身の身体が自分以外の誰かの手によって動かされているみたいでどこかぎこちない。彼女と視線が合うだけで緊張で身体が強ばり、気恥ずかしいような思いが身体を駆け巡る。

この瞬間、僕はこの少女に恋をした。誰が何と言おうとこれは恋なのだと確信する。相手が夢の中の、一夜で終わる泡沫の幻だろうが関係ない。欺瞞でも決してたどり着くことのない幻想であっても構わなかった。夢の中の白い少女を愛おしく思い、彼女に愛される存在でありたいと僕はそれだけを願った。

後は一直線だった。喜ばしいことに僕は寝る度に彼女がいる夢を見ることができた。理屈などはどうでもいい。ただ、また会うことができるという事実だけがあれば十分だった。僕は少しでも長く彼女といるために睡眠時間を多く取るようになった。家に帰ればすぐに寝るようにしたり、学校でも少しでも寝ることを努力した。

夢の中では彼女と様々なことをした。ずっと二人で喋っていたこともあった。鳥のように大空と一緒に飛ぶこともあった。ちょっとした冒険をしたこともあった。夢の中は全てが思い通りだった。

生活の大半を睡眠に費やすことの弊害として成績も落ち始めたし、周りの反応も良くはなかったが、全く気にならなかった。夢の世界で愛しい彼女と会う事に比べればそんなことは些細なことではなかった。

深刻な問題が発生した。今までの大量の睡眠が原因なのか、僕は不眠症に陥っていた。眠りたくても寝ることができない。無理に寝ようとしても少しの刺激で意識が覚醒するような浅い眠りしかできないのだ。駄目だ、この程度じゃ彼女に会うことができない。この状態が続くことは、永遠に彼女に会えなくなることを意味していた。そう考えるだけでも目の前が真っ暗になって倒れてしまいそうになる。いや、いっそ倒れることができればいいのに。それすらも僕にはできなかった。これは僕にとって絶望以外の何物でもない。

何とかしなければならぬ。なんとしても彼女に会わなければならない。焦る気持ちはあるのだが、どうすればいいのか、まるで想像が付かない。睡眠薬も片っ端から試してみたが、駄目だった。最早自然にどうにかなることを祈るしかない状態だった。

今また祈るような気持ちで瞼を閉じるが、意識が夢の中へと落ちていく気配は一向にない。くそっ、と悪態を吐いた。一つこぼれるとくそ、くそ、くそと悪態は連鎖していく。状況の最悪

さに頭を抱えた。

「くそ……どうすれば、どうすれば――」

「――――」

その時、不意に懐かしい声が聞こえた気がした。

「……………っ！」

がばりと顔を上げ急いで辺りを見回すと、そこに彼女はいた。白い肌、華奢な体躯、吸い込まれてしまいそうな瞳は見間違えようがない。まぎれもなく僕の愛する彼女だった。

「ああ……」

思わず溜息がこぼれた。最近は全く会えなかったためか、今まで以上に愛おしく感じる。今すぐに彼女の元へ駆け出したい。見れば彼女も満面の笑みでこっちに来てほしいというように手招きをしていた。

「ああ……今すぐ行くよ」

そうして僕は彼女の元へ駆け出した。

『――次のニュースです。昨日の13時40分頃、〇〇県××市△△町の自宅付近で横たわる少年の遺体が発見されました。少年の遺体の状況と死亡推定時刻から、警察は自殺と事件の両方の面から捜査を進める方針です。では、次のニュースです――』

水彩迷走

夏村晋

別に嫌いになったわけじゃないんだけどさ、と彼女は髪をいじりながら呟くように言った。

「私たち、付き合ってる意味ないよね」

怒っているわけでもなさそうな、悲しいわけでもなさそうな、諦めたような彼女の言葉で、半年ほどの交際期間は幕を閉じた。

付き合っている意味とは。

一人になってしまった教室で、アクエリアスはぼんやりと考えた。自分は彼女が好きだった。彼女も、自分に対して好意を抱いてくれていたと思う。少なくとも、最初の内は。

お互いが好きだったから。それだけで、アクエリアスにとっては十分に付き合っている意味を成していたはずだった。しかし彼女にとっては、次第にその有効性は薄れてしまったのかもしれない。

自分自身はどうだったのか。アクエリアスはまだ彼女を好きだと思っていたが、教室を去っていく彼女を結局追いかけるはしなかった。それが答えだ。

「……帰るか」

濡れた鞆を肩に引っさげ、どっと疲れたように重い体でのろのろと教室の出口へと近づいた。自分を最後に誰もいなくなる教室の電気を消すべく、照明の電源にすれ違いざま手を伸ばす。掌がべちんとやる気のない音を立てて電源に当たると同時に、教室の照明は全て落とされた。

教室から出ると、三步も歩かない内に後ろから聞き慣れた声に呼び止められた。

「あれ、アクエリアスじゃん。まだ教室にいたのかよ」

振り返ると、友人で同じクラスのリーブラがこちらに向かって歩いてきていた。本人の軽薄さを引き立てようとしているとしか思えない人工的な金髪に、その隙間からシルバーのピアスが光っている。

アクエリアスの顔を見たリーブラはぎょっとしたように目を見開いて、うわっと声を上げた。

「お前、何その顔」

アクエリアスにも、今の自分の表情が非常に暗いものである自覚はあった。

リーブラは愛想笑いをを使うほど気を遣う相手ではないことに加え、正直なところ応対自体が面倒臭かったので表情も何も変えないまま必要最低限の言葉で答える。

「別に」

「別になって、何もなかった顔じゃねーだろ、それ。この世の終わりみたいな顔しやがって」

「うるせー」

そっとしておくというスキルを持ち合わせていないリーブラは、眉根を寄せてアクエリアスを凝視していた。

理由を見抜こうとしていることがありありと分かるリーブラの視線に居心地が悪くなる。別にこいつになら理由を言ってしまっても良かったが、このように訝しがられるとかえって言い出しづらかった。

「お前は何してんの」

「俺？」

こいつの頭で見抜かれることはないだろうが凝視されるのも嫌だったので、話題を逸らそうと逆に問いかければ、きょとんとしたような顔になった。それから照れたようにふにゃっと相好が崩れる。

ああ、そうゆうこと。

リーブラのその表情だけで大体の理由は察せた。

「エリーゼさんを捜してたんだ。見なかったか？」

思っていた通り、アクエリアスの一つ上の姉であるエリーゼの名前が出てきた。アクエリアスは四人兄弟の末っ子であり、エリーゼの上には更に姉と兄が一人ずついる。

リーブラは現在、エリーゼに一直線に恋をしていた。ちなみに、一直線だけでなく一方通行である。リーブラ自身も良くも悪くも進むことしか知らないので、直進した挙句ひらりとかわされ、そのまま地球一周して戻ってくるような恋は成就には程遠いような気がしている。

「見てないな」

「ちえー。ん、待てよ。エリーゼさんか、エリーゼさん」

リーブラは目を伏せて考え込むような仕草をした。そうかと思えば、ニヤッと唇を歪めてアクエリアスを見やった。

何だ、この嫌な顔。

「もしかしてお前、振られたの？」

見抜かれやがった。

「え。凶星？」

固まったアクエリアスを見て、歪めた唇はそのままだに「マジで？」と更に問いを重ねてくる。言葉に詰まった様子は誰がどう見ても肯定の意味になるのは分かっていたが、かと言って何も答えられなかった。

その様子を見て、リーブラは盛大に噴きだした。

「ぶっは、お前ダッセー！」

ゲラゲラと遠慮もせず笑う友人を前に一瞬啞然とする。

そしてすぐに、恐らく生気が欠落していたであろう顔と頭に熱い血が上った。

「ぎゃー！ 危なっ、親友に対して何ガチで攻撃してんだよ」

「その親友が振られたって一のに慰めの一つもなしに爆笑ってなんなんだよ！」

勢い任せに振り下ろした鞆が、避けようと身を振ったリーブラを掠って廊下に叩き付けられる

。その鞆はそこに捨て置いて、間髪入れずに首を腕で捕らえてギリギリと締め付けた。

「そんなに怒んなって、ダサかったからつい」

「お前は俺を鎮めたいのか煽りたいのかどっちだ！ だいたいエリ姉(ねえ)に振られまくってるお前に言われたくねーよっ」

「俺は振られてねーもん。まだアピール期間で恋人まで漕ぎつけてないし痛い痛い痛いギブギブギブ」

首に回した腕に更に力を込めると、リーブラは両手を挙げて降参した。首から腕を外して抱えていた頭を粗雑に捨て、放置されていた鞆を拾い上げる。捨てられたリーブラは首に手を当てて、痛そうに首を右に捻っていた。

「そういえば、どうして俺が振られたって分かったんだ」

「俺がエリーゼさんと付き合えたとして、もし仮に万が一億が一、エリーゼさんに振られたらそんな暗い顔になるかなーと思った」

納得できるような納得できないような。

こいつが振られた時、果たして自分のように暗い顔になるだけで済むのだろうか。

「ま、ドンマイ。悪いことあったんだから良いことあるって。じゃあ俺は急用を思い付いたからもう行くわ」

リーブラはそう言ったかと思うとアクエリアスに背を向けて、最初にやって来たはずの方向に駆け出してしまった。

急用を“思い付く”って何だ、とも思ったが、それを聞く暇もなかった。去っていく後姿を見届けていると、一度だけその背中が翻って、二人の目が合う。

「今日はゆっくり帰れよー」

それだけ言うとまた背中しか見えなくなり、後姿が遠ざかっていった。派手な金髪が視界から消える前に、アクエリアスも体の向きを変えて、昇降口を目指して歩き出した。

階段を下りて廊下を歩いていると、前方で二人の女生徒が楽しげに立ち話をしていた。それはアクエリアスが良く知る二人で、その片方がアクエリアスを目に止め、あっと声を上げた。

「アクエリアス先輩」

その声にもう一人もアクエリアスの方を見る。

「アプリコットちゃん、エリ姉」

遅れてアクエリアスを見た方の女生徒は、先ほどリーブラが捜していたエリーゼだった。腰ほどまで長く、どちらかといえば茶に近い髪が、首の動きと共にほんの少しふわりと揺れる。

エリーゼを見て、エリーゼを捜していたと言いながら最終的に反対方向に走って行ったリーブラを思い出した。どんなに一途に想っても、あいつはあまり恋愛運がないらしい。

最初にアクエリアスに気付いた方の女生徒はリーブラの一つ年下の妹、アプリコットである。見るからに軽そうで目つきも悪いリーブラとは全く違い、ほんわかした雰囲気笑顔が可愛い彼女は、アクエリアスよりも二つ年上のアクエリアスとエリーゼの兄、イーダスの恋人でもある。

目が合った者全てを魅了できそうな、くりっとした大きな瞳でアクエリアスを見止めたエリー

ぜは、片手を口元に持ってくると、わざとらしいくらい女の子らしい仕草で、えっと驚いた。

「やっだあ。アスってば何でそんな暗い顔してるの」

さっきも見たなこの反応。

「体調悪いんですか」

唯一、アプリコットが心配そうに気遣ってくれた。傷心のせいかな、その心遣いに温かな気持ちになる。先ほどは爆笑されたので尚更だ。

「いや、大丈夫。ありがとう」

「でも、すごく疲れた顔をしていますよ」

それは振られたせいだけではないだろう。しかし、原因の一端は君の兄貴だと言うわけにもいかず、心配そうなアプリコットに笑って誤魔化す。

「あ、わかったあ」

心配など欠片もしていなさそうな顔で、エリーゼがぼんっと両手を合わせた。

「アスったら振られたんでしょ」

だから、何でばれるんだ。

「アスってばダッサあい」

この反応までさっきと一緒にか！

合わなそうに見えて、実はエリーゼとリーブラは似ているようだ。先程と同じように言葉に詰まったアクエリアスに、エリーゼがきゃらきゃらとこれまた遠慮なしに笑う。その横でアプリコットは凍り付いていた。

「……っうるせえ」

「やだ、こわあい」

睨むものの、馬鹿にする気満々の瞳と一緒にそう返される。

リーブラとは違い、確かにエリーゼは生まれてこのかた振られたことはなければ、自分から告白もしたこともないはずだった。それでもアクエリアスが知る限りでは、長期間男が絶えたことはない。今は珍しくフリーらしいが、その気になればいつでも誰かと付き合うのだろう。全てはエリーゼの気分次第だ。

そんなエリーゼからダサイと言われても、憤りばかりが募って正しく反論することができない。歯を噛みしめて睨みつけるのが精一杯だった。

そんなアクエリアスの視線さえ余裕綽々でいなし、完全に上から目線で、まあ、と続けた。

「今回はアクエリアスがどこまでも悪いもんねえ」

「は？」

エリーゼの分かりきったような口調に、一瞬素で返事をしてしまった。

「あ、ごめーん。今回は、じゃないかあ。今回も、だよねえ」

「待てよ、エリ姉は何も知らないだろ。勝手なこと言うなよ」

「何も知らない？ エリーは姉としてよーく知ってますう」

アスの行動パターンくらいならね。

エリーゼを睨む目に再び力を込める。アクエリアスとエリーゼとの間に火花が散った。エリーゼの横ではアプリコットが二人を止めようか否かと逡巡して、結局動けずにいた。

ほんの数秒間の沈黙の後、口元に笑みを浮かべたまま、エリーゼが先手を打った。

「前のクリスマス、アスは何してた？」

再び「は？」と言いそうになるのをぎりぎり飲み込む。

前のクリスマス。問いかけられて、何をしていたかはすぐに思い出した。

「...軽音楽部のクリスマスライブ」

「イヴは？」

「そのリハ」

それを聞いて、目の前の大きな瞳は、ますます人を馬鹿にした色を強めた。エリーゼの質問は続く。

「一緒に帰った回数は？　そもそもデートの回数は？」

「そんなこと聞いて何になるんだよ」

そう言いつつも、頭は素直に回答を探していた。

軽音楽部とバスケット部を兼部しているせいもあって、放課後はとにかく忙しい。放課後どころか、軽音楽部の練習及びバスケット部の練習試合で休日も潰れることなんてざらにある。彼女は特に忙しくない華道部だったから、放課後に待たせるのも悪くて先に帰ってもらうことが多かった。休日もしかり。彼女が練習試合を観に来てくれることもあったが、それをデートと換算すべきかどうか。そうすると実質のデートの回数はあの時とあの時とそれから...

え、待てよ、それにしたって半年も付き合ってた、なんでデートの回数とか数えられるんだ。

アクエリアスの言葉は無視して、エリーゼの質問は続く。

「二人でご飯を食べた回数は？　手を繋いだ回数は？　誕生日のリサーチは？　彼女の好きな食べ物は？　苦手な食べ物は？　好きな色は？　そもそも、彼女に興味はあったわけ？」

完全に返す言葉を失った。エリーゼはその様子を見ると、もう回答は求めていないようで、先ほどと同じ言葉を、相変わらず笑みの絶えない口から発した。

「アスってばダッサあい」

この言葉に感情的に反論することが、本当にダサイことくらいは、アクエリアスにもよく分かっていた。

「似たようなことを昔もやってたよねえ？　駄目だよ、一回の失敗でちゃんと気付かなくっちゃ。ねー、アプリコットちゃん」

「え、いや、あのその、えっと、」

「次はちゃんと大事にできる子と付き合えるように、今回は自分のダサさを噛みしめればあ？」

じゃあエリー達はこれから職員室に用があるからばいばい、と言うと、うなだれているアクエリアスの方を見ようともせず、エリーゼは手だけひらひらと振って歩きだした。

アプリコットはこのままここにいるべきかエリーゼを追いかけるべきか、迷ったように二人を交互に見た。しかし、エリーゼがアプリコットに呼び掛けると、アプリコットは一度だけアクエ

リアスに向き直り、

「アクエリアス先輩、お疲れ様です」

それだけ言ってエリーゼを追いかけた。

アクエリアスは二人の足音が遠のいてから、壁に背中をどんっと打ちつけて呟いた。

「言われなくっても噛みしめるっつーの」

もはや胸の内を占めるのは振られたショックよりも自己嫌悪の方が強かった。

「そりゃ振られるわ」

彼女がかつて、自分に告白してきた時のことを思い出した。そして、自分が返事をした時の笑顔と、つい先ほど別れを切り出した時の諦めたような表情が重なった。

彼女を踏み台などと思うつもりもなければ、開き直すつもりもない。それでも、何かを学ばなければ、あまりにも彼女に対して失礼なのだろう。

「ダサいなあ」

昇降口から出ると、まだ外は昼間のように明るかった。日が落ちるより前に帰るのは久しぶりだ。

一度立ち止まって空を仰ぐ。風が緩やかに髪を揺らした。

「アクエリアス！」

見上げていた首を戻したその時、突然名前を叫ばれた。誰の声を認識する暇もなく、視界の右から白っぽい物体がアクエリアスの顔をめがけて迫ってきた。

反射的に手を出してその物体を掴む。掴んだ手の中を確認すると、それは炭酸の缶ジュースだった。

「うわ、よく掴めたな。ナイス反射神経」

視線を上げると、そこにはへらっと笑って昇降口から出てくるリーブラの姿があった。缶ジュースが飛んできた方向もそちらからなので、この缶ジュースはリーブラが投げたのだろう。

「あっぶねーな、お前俺に殺意でもあんの」

「悪かったって。アクエリアスの名前を呼ぶのと、缶を投げるので時差が生じた。ま、それはやるから受け取れよ」

リーブラはそのままアクエリアスの横に並ぶと、眠そうにんーっと伸びをした。

「こんな時間にアクエリアスが帰んの珍しいじゃん。部活は？」

「どっちも休み。本当に珍しいことに」

その滅多にない休みだったから、本来は彼女と一緒に帰ろうとしていたのだ。結局は振られて意味がなくなってしまったわけだが。

そこまで思い至らないのか、リーブラは休みという台詞を聞いて嬉しそうに笑った。

「じゃあカラオケ行こうぜ。駅前のカラオケ屋、今安いんだよ」

そう言うとアクエリアスが答える前に歩き出した。特に異論はなかったもので、半歩後ろからそれに続く。

手に持ったままの缶ジュースの存在を思い出し、改めてそれを見るとアクエリアスの好きなグレープ味だった。折角だからまだ冷たい内に飲もうとプルタブに手をかけた瞬間、ふとその手が止まった。

「おい、リーブラ」

「ん？」

振り向いたリーブラの顔をめがけてプルタブを開ける。プシュッと小気味の良い音がして、薄紫の液体がリーブラへと飛び散った。うわっと悲鳴を上げ、もろに炭酸ジュースを被ったのを見て、思わずアクエリアスは噴きだした。

「何で炭酸なのに投げたんだよ」

「てめ、飲み物を粗末にすんじゃねーよ」

「粗末にしたのリーブラだろ。覚えとけ、炭酸は振ると飛び出るんだ」

金髪から滴がしたたり落ちて、リーブラが顔をしかめる。

「こんなベトベトじゃカラオケ行けねーじゃん」

そう言うとグラウンド内に設置してある水道へ向かって走り出した。その姿にまた笑いが込み上げる。

笑ってないでタオル貸せ！ と叫ぶ言葉を受けて、アクエリアスも地面を蹴って、水道へと駆け出した。

了

あとがき

受験期に現実逃避を兼ねて、名前をつけてキャラクター化していたボールペン達を題材にしたので、名前に違和感があるでしょうが彼らは日本の普通の高校生です。

夢のような悪夢 (幼花)

夢のような悪夢

幼夏

人間は、本当に驚いたとき何の反応も示せなくなるとはよく言うけれど、その真偽のほどを体感によって証明することになるろうとは、微塵も思っていなかった。誰だって私同様、驚きのあまり瞬きさえままなくなるだろう。朝起きたら、見知らぬ男が最高のスマイルでこちらを覗き込んでいたら。

「やあやあ、おはようございます。今日は何とも気持ちの良い朝ですねえ！」

「……っ！」

男が突然、高らかな声を上げつつ道化た動きを見せたその瞬間、ようやく私の理解力が現実を飲み込んだ。

不審者に部屋を侵された。

反射的にベッドから飛び降りて、もたつく足を引きずりながら部屋の隅へとたどり着く。しかしたどり着いて壁に背をぴたりとつけたところで、自ら自分を窮地に追い込んだことに気が付いた。退路を断たれたのだ。壁から出口へと繋がる動線上に、男が立っている。男の身長は身長一九〇センチ、肩幅もそれなりにあるために、地べたに座り込んだこちらから見れば壁同然である。

「な……だ、だれな……」

まともに発語することも叶わないほどの動揺が全身を占拠する。男の目を睨み付けているのは、目をそらした瞬間飛びかかれるのではないかという恐怖心故であった。

「ああ、もう、そんな目で見ないで下さいよ。感じちゃうじゃないですか☆」

「きゃあああああああっ！」

ようやく、叫び声が喉から飛び出した。しかし誰一人として家族がその声に気付かないのは、先日のリフォームの際に部屋を防音使用にしたからだろうか。リフォーム業者の腕の良さをいっそ恨みさえした。

「大きな声を出さないでください、僕は不審なものではありませんよ？」

「ふ、不審です！」

不審だった。それはもう、銀行の前でマスクにサングラスの男がうろうろしているのと同じ位不審だった。つまり、この日本という国において燕尾服にブーツで女性の部屋に突然現れるような男は、銀行強盗に匹敵する脅威であるということだ。まず、部屋に土足で上がるなんてアメリカンライズされているにも程がある、顔は東洋人丸出しのくせに。

「落ち着いてください、僕は君の悩みを解決しに来たんですから。君は最近困っているでしょう、僕はぜんぶ知っていますよ」

「は……？」

体育座りで部屋の隅に縮こまったまま、呆気にとられた。

「君は高杉乃花さんを疎ましく思っていますね」

男が変わらずの笑顔でそう言い放った。笑みを浮かべている、というよりは、『笑顔が顔面に張り付いている』ように見えた。

「それは……」

「そして、高杉乃花さんが毎晩夢に出てくることに困っているでしょう、悩んでいるでしょう、毎朝起きたらいやな汗をぐっしょりかいているでしょう」

「……」

そこでようやく男から視線を外す。彼のわざとらしく上がったと、その口から吐き出される言葉のギャップに耐えられなかった。彼の言うことは紛れもない事実で、なぜそれを知っているのかという疑問よりも、言い当てられたショックが大きかった。

「……出てってよ」

「お望みとあらば退出いたしますが、あなたが真に望んでいるのは高杉乃花さんがこの世界から退出することではないですか？」

再び男を睨み付ける。自分の瞳が動揺に滲んでいるのを自覚しながらも、そうするしか術がなかった。しかし混乱の中では、本来雄弁であるはずの目さえもが、ただひたすらに饒舌であった。

「そんな目で見ないでくださいって、言ったじゃないですか。自己紹介が遅れましたね、僕の名前はアルプです。『アルにゃん』って、呼んでください」

アルプは、もともと吊り上がった口の端を、余計に吊り上げて言った。

「ところで、僕と契約しませんか。」

もう何も言えない。ただでさえ愚鈍な中学生女子の脳味噌は、キャパシティオーバーで既に悲鳴を上げている。

「僕と契約すれば、高杉乃花さんがあなたの夢に毎晩出てきては得意げに微笑みかけてくれることがなくなるどころか、この世界から彼女を消すことができますよ」

「どういうこと……？」

「あなたの最大の望み、高杉乃花の消失を現実の事象にして差し上げようということです。」

「契約したとして、それが実現可能だとして、メリットがあるのは私だけでしょうか？ なぜそんなことを……」

彼は人間ではないのかもしれない、というのは先程からうすうす思っていたことだった。彼の提案を飲めば、本当に高杉乃花が消えてなくなるような気がしていた。それはすべて、この男の絵にかいて貼ったかような笑顔と雰囲気、一九〇センチのサイズがありながら感じ取れない存在感、いや、『生命感』故であった。

彼はきつく笑った顔のまま、明るい調子で答える。

「契約は、僕が楽しむためにするものです。暇なんですよ、毎日。しかしただの約束では、途中で君が利益を被るだけ被って、僕の楽しむ間もないまま幸福な日常生活に浸ろうとしてしまうかもしれない。だから、『契約』するんです。途中で、僕の娯楽を君が取り上げてしまわないように。」

しばらく、何も言わずに考えた。いや、何も言えずに、思考しようと試みていた。結論は、出なかった。

「返事を急ぐ必要はありません。契約したくなったら、いつでも声をかけてください。僕は常に君のそばにいて、『契約しよう』の一声を待っていますから。呼びつけてくだされば、すぐさま参上いたします。ただし、屋外で呼びつけるのは得策とは言えませんね。どうやらこの格好は、悪目立ちしてしまうようなので。」

アルプの口調は道化そのものだ。わざとらしいしゃべり方がひどく耳につく。彼は「それでは」と軽く会釈をして、部屋の戸から出ていった。すぐに跡を追って戸を開けたが、彼の後ろ姿をそこに見出すことはなかった。

*

「高畠さん」

背後から愛らしい声私を呼んだ。振り返ると、そこには『美少女』という言葉がよく似合う女子生徒が立っていた。

「環境委員会のアンケート、集計お願いできないかなあ？」

「どうして？」

「どうしてって、高畠さんは副クラス長でしょう？ だから、お願いします。」

ぺこりと小さくお辞儀して、こちらにアンケートの束を突き出してくる。この女はいつも面倒事を人に押し付けてばかりだ、環境委員会のアンケートは環境委員である自分の仕事だろう、などと内心悪態をつきながらも、その束を受け取ってしまう私がいた。

「ありがとう、さすが高畠さん！」

女子の私から見ても可愛いと思える微笑みを私に向ける彼女――高杉乃花は、3か月前に東京から来た転校生である。

誰から見ても見目麗しく、落ち着いた雰囲気反して快活な性格の彼女は、転校してきて数日でクラスの人気者になった。そこまでは全く問題がなかったのだが、1か月ほどして個人的な問題が生じた。

中谷啓介が、授業中、その視線を高杉乃花に向けていることに気付いたからである。

彼女に熱い視線を送るのは、もちろん彼に限ったことではない。彼女は誰に対しても友好的で、男性陣が彼女に心惹かれる気持ちは分からないではない。しかし、問題は中谷啓介がそのうちの一人であるということなのだ。

私にとって中谷啓介は唯一無二だった。最早いつからか分からないくらい昔から、私は彼を見つめている。

中学二年の春、同じクラスになれた喜びをかみしめ、彼がクラス長になるに合わせて副クラス長の任に就いた。しかし、夏休み明けである、彼女がこのクラスにやってきたのは。

転校生は狡い。私は春口、この四十人クラスにおいて三十九分の一の注目を彼から浴びた。しかし彼女は、一分の一、百パーセントの注目を彼から浴びたのだから。当然、注目は等分される

ものではないし、彼女は特別目を引く外見なのだから、こんな単純な考え方をするのは間違っているのだが……それでも、そう考えていなければ心のバランスを保てないほどの大事件だった。

中学生にとっての「恋愛」は、大人から見たら餓鬼の遊び程度にしか見えないのだとは思うけれど、当の本人からしてみれば大変比重の重い項目なのだ。つまり、高杉乃花を毛嫌いする理由は単なる嫉妬である。

彼女が夢に出てくるようになったのは、二週間ほど前である。原因は明らかだった。その日、中谷啓介と高杉乃花は教室の隅で歓談していた。運の悪いことに、私の当時の席は教室の一番端に位置しており、二人の会話を耳にしまったのである。

「花って字、俺は好きだな。いい名前だと思うよ、乃花って」

中谷啓介のこの一言がやたらと胸に刺さったのは、私の名前が「高畠愛花」だからかもしれない。名前なんて本当はどうでもよくて、ただ彼女の気を引きたいがために言った一言なのはわかる。しかし、どうしても、「私の名前にも花の字は入っているのだ」と、意味もなく声を大にして言いたい気持ちになった。さらに私の気を病ませたのは、その直後に彼女がとった行動だった。彼女はこちらを向く。しっかりと私と目が合った。

そして、笑ったのだ。

どういう意味の笑みであったのかは、分からない。しかし、心の内を透かし見られて、勝ち誇る意味で笑ったように見えてしまった。それが悪夢の始まりである。

毎晩、夢に出てくる高杉乃花は、私を見つめて笑うのだ。目をそらそうとすれば、いつの間にか間合いを詰められて頬を抑え込まれ、ひたすらに笑いかけられるのだ。そして彼女は私にこう言う。

「高畠さんじゃ、無理だよ」

彼女は微笑んだまま。彼女の、愛想を凝縮したような笑みが私に襲い掛かり、嫌な汗が背中を伝う感触で目が覚めるのだ。

私は環境委員会のアンケートを無造作に鞆に詰め込んだ。そして、机に突っ伏して闇に頭をうずめた。

*

「お帰りなさい、どうですか、契約する気になりましたか。」

「する」

「おや、即答とは驚きました。」

アルプが相変わらずの作った笑顔で私を出迎える。こんな温かみのまるでない笑顔でも、高杉乃花の笑顔よりはずっとずっとましだった。アンケートの束が契約を決めさせたのかもしれないし、あるいは今日色濃く悪夢を回想したことが、そうさせたのかもしれない。

「契約したら、明日からもう高杉さんはいなくなるの？」

鞆を下しながら、アルプに問う。

「正確には、君が夢の中で彼女と目が合った瞬間に、彼女はこの世から消えます。まあ、君が目

を覚ました時にはいなくなっているわけですから、あながち『明日』と言っても間違いではないかもしれませんね。」

「いなくなったら、みんな高杉さんがいたことを忘れるの？」

「みんな忘れますよ。彼女の母親さえ、彼女を産み落とした事実からして忘却します。本当の意味で『なかったこと』になるんですよ。世界は、彼女が存在しないことを前提とした造りに修正されるでしょう。ただし、君だけは彼女がいたころの記憶を持ち続けることになります。仕方がないですよ、願いをかなえたことさえ忘却してしまえば、元も子もないですからね。しかし安心してください、彼女が夢に出てくることはありませんので。」

「ふうん……」

夢に出てきさえしなければ、自分の中に彼女の記憶が残るのは構わなかった。ただ、中谷啓介の心から、彼女の存在を消してしまいたかった。

「それでは契約のサインを」

彼がどこからともなく一枚の羊皮紙を取り出した。手渡された羽ペンには、青いインクが付いているのがわかる。

「ご安心ください、ボールペンしか使ったことのない君でも、簡単に使える仕様になっていますから」

さあ、と促されて、羊皮紙にペン先を付ける。漢字で丁寧に「高畠愛花」と綴ると、羽ペンは蒸発するように手元から消えていった。

「ご契約ありがとうございます、最高の明日が訪れますよう……」

羊皮紙を丸めて胸元に入れると、アルプはまた今朝のように、戸から外へ出ていった。……羽ペンと同じように、溶けるように消えればかっこいいのに。

＊

高杉乃花は私に微笑みかける。私は目をそらさずに彼女に相對する。

高杉乃花は私に歩み寄る。微笑みを浮かべたまま。

高杉乃花の細めた目の隙間、黒い瞳に私の目が映る。

高杉乃花は微笑んだ。とびっきり、憎たらしい笑顔で。

＊

汗はかいていなかった。

久しぶりに気持ちの良い朝だ。カーテンの隙間から差し込む陽ざしに手をかざす。その熱を感じるが早いか、カーテンレールの下をパステルピンクの遮光布が滑った。記念すべき高杉乃花の消えた朝は、雲一つない晴れだった。

＊

学校に行ってようやく、彼女がいなくなったことを実感した。窓際の列から机が一つなくなっている。出席番号四十一番のロッカーは空っぽだ。ほかの女子より少し高い、彼女の声は教室のどこからも聞こえない。

そして何より、中谷啓介の視線は正しく黒板に向かうようになった。

私は、高杉乃花がいなかった頃と同様に、仲の良い友達と歓談した。中学生女子の良く知られた特性として、『グルーピング』がある。グループの中では秘密が共有され、情報が共有され、多くの時間が共有される。基本的に排他的な性質を持つため、中学生女子にとってグループに所属することはとても大切だ。高杉乃花を思い出す。彼女はどのグループにも所属しないが、つまはじきにもされない中間的な存在だった。グループ間を渡る、渡り鳥のような。彼女の社交性による特性だったのだと思うが、そんなことはどうでもよかった。もう彼女はここにはいない。私には仲間がいて、思い人がいて――何の問題もない、健やかな日常が眼前に横たわっていた。

この幸福が、ずっと続くはずだった。

*

一面の芝生に、雲一つない空。緑と青の境界線に、涼しげな風が吹いている。風は草木を揺らし、髪を躍らせた。木漏れ日の下に、見慣れた顔が並ぶ。四人の少女がこちらに手を振った。

私の足取りは軽い。半ば飛ぶように木陰に駆け寄ると、きらきらと差し込む木漏れ日が私にも注いだ。

芝がさんざめく。風が頬を撫でて走り抜け、たとえようもない暖かさが体を満たした。

見慣れた少女たちと、たわいもない会話をしながら、微笑みあった。

ここが居場所だ。

合唱する新緑を見上げてから、少女らの顔を見回した。

全ての瞳に、私の顔が映し出されてかすかに揺れていた。

*

目を覚まして、ようやく先程見ていた映像が夢だったと気づく。大抵、夢を夢だと認識できないものだ。夢だと分かっていたら目覚めなかったのに、と思った経験は誰にでもあるものだと思う。

今日がまさにそうだった。夢の中で味わった幸福感の余韻が、まだ体の奥に残っているように感じる。何気ない日常にこそ幸福が詰まっているもので、「何気ない日常」なんてものは、激動する日々の合間にしか存在しない。それを「日常」と呼んでいいのか最早わからないが、ともかく「平穏な日々」と言うものほど素敵なものはない。

夢に戻らずとも、登校すればそこに「何気ない日常」が転がっているのだからと、意気揚々登校した。

*

結論からいうと、そこに日常なんてなかった。

そこにあったのは、悲劇の結末だ。

「どういうことなの！」

校舎の中で最も人通りの少ない、第二体育館脇のトイレで、私はアルプを呼び出した。

「どういうこともこういうこともないですよ、今朝、君は夢の中で彼女らと目が合ったでしょう？」

「は……？」

確かに、夢で友人たちと目が合った覚えがある。しかし、まさかそれが原因で全員「なかったことに」されてしまうだなんて、思ってもみななかったのだ。

「高杉さんを消してくれさえすればよかったのに！今すぐもとに戻してよ！」

「おやおや、何を仰っているのですか。契約を今更破棄にはできませんよ」

「何を言って……」

アルプが胸元から一枚の羊皮紙を取り出す。丸めてあって若干癖のついた羊皮紙を両手で引き伸ばし、私の眼前で広げて見せた。

「ほうら、上から三行目、四行目をご覧ください」

三行目、四行目には、こう記されていた。

【効果の範囲は以下の通りとする。

以後夢に登場した者の内、目が合った者全て。】

「目が合った者、全て……」

口が勝手に四行目を音読する。零れるように発された言葉は、自分でも驚くほど露骨に震えていた。

「契約内容に準拠して、高杉乃花さんは確かにこの世から退出しました。しかし、決して高杉乃花さん個人を消すという契約を交わした訳ではありません。契約書を読んでいなかった、あなたの責任です。全て！」

アルプはいつも通りの笑顔でそう言い放つ。トイレの個室に彼の陽気な声が反響した。

「取り消せないの……？」

「もう一度契約書を見せなくてははいけませんか？ 契約書の最後には『この契約はいかなる理由があろうとも破棄できないものとする』としっかり書かれているでしょう。第一、僕はちゃんといいましたよねえ、契約をするのは、君が途中で僕の娯楽を取り上げないためだ、って。」

目の前が真っ白になるという現象を、生まれて初めて体感した。視界が徐に白んでゆき、何も見えなくなっていく。不可領域と同時に広がる口内の苦味に顔をゆがめながら、遠くから聞こえるアルプの声をかすかに聞いた。

「全ての幸せは誰かを踏みにじって成立するんです。踏みにじらせていただきますよ、僕の快樂のために。」

*

どこまでも続く廊下に、扉はない。

両側の窓は全て開け放たれ、一つの窓につき一つの月が見える。見慣れない色の月が、それぞれの窓から差し込んで、廊下の床に色とりどりの月影を落とす。

どこまでも続く廊下に、人影はない。

終わりの見えない廊下の先は、うっすらとした暗闇に満たされている。赤、青、緑……と、その元を通るたびに私の全身がブライトカラーに染まる。その色は、さながらセロファンを通した舞台照明だ。

どこまでも続く廊下に、風はない。

しかしセーラー服のスカートが、自ら靡いて翻る。ふと、足を止めた。意図的にとめたというよりは、足がぬかるみにとられたように動かなくなったのだ。よく見ると、廊下が見慣れた学校のそれに酷似していることに気付く。遠くに滲む漆黒に目を凝らすと、無いはずの人影が浮かび上がってきた。

どこまでも続く廊下に、一人の男が佇んだ。

肩幅はさほど広くない。体格からして同年代であるように思われた。

男は廊下の先を見ていて、こちらを振り返ることはない。黒髪に黒い服で、今にも再び闇に溶けてしまいそうだった。

途端、夜空を飾っていた星が一斉に空から零れた。星のスコールに目をとられていた時、彼も同時に窓の外を見つめていた。

今なら彼の横顔を、覗き込めそうだ。

しかしその瞬間、月光の照明が一度に落ちた。

*

ベットの上で、不思議なくらいにはっきりとした目覚めを感じた。覚醒、と呼んでもいいような。

体を起こし、自分の身に起こっていることを回想して絶望した。昨日トイレで視界を失ってから、ここまでの記憶が、まったく無い。そのあとの授業に出たのか、どうやって帰ってきたのか、何もかも分からなかった。

「……はあ。」

起床早々、ため息が出た。

重たい体を引きずって、学校へ向かった。

*

世界は、人間五人分の歪みをいとも簡単に飲み込んだようだ。

環境委員会のアンケートを、男子生徒二人が集計している。中谷啓介はいつも通りの日常を送っている。そして、私には友達がいない。

女子中学生にとって、自分の所属するグループを失うことは居場所の喪失を意味する。高杉乃花のような渡り鳥になれるほどの社交性は、持ち合わせていなかった。

教室の隅、会話する相手もなく外を眺めていた。そんな時、後ろから声をかけられた。

「今日、天気いいね。」

「え、あ、そだね……」

振り返ると目の前に、中谷啓介の姿。

向こうから話しかけられたのは何時ぶりだろう。少なくとも、思い出すのに時間がかかる程度には昔の出来事だったはずだ。

「メアド、交換してほしいんだけど」

中谷啓介は携帯をとりだして軽くゆすった。応じない訳がない。でも、その行動の原因がわからずに困惑した。

アドレスが赤外線でやり取りされるのをぼんやり眺めながら

「どうして突然？」

と問いかけた。

「前から、気になってたんだ。高畠さん、いつも一人でいるから、最初は心配して眺めてたんだけど……そしたら段々、話してみたくなったんだ。」

彼の言葉をきき、頬が蒸気するのがわかった。告白されたかのような錯覚をし、心臓の高鳴りが教室中に響いているのではないかとさえ思った。

アドレスを交換し終わると、彼は携帯をしまいながら私にお礼を言った。そして私の机から離れる動作をしながら、こういったのだった。

「花って字、俺は好きだな。いい名前だと思うよ、愛花って」

蒸気した頬が、冷水を注いだかのように冷めるのを感じた。

*

どこまでも続く廊下に、佇む人影が浮かび上がる。

輪郭が以前よりもはっきりとして見えるのは、窓の外が暗闇ではなく、紺碧の空だからであろうか。月明かりはブライトカラーからパステルカラーへと色味を変え、廊下の床は本来の木目を淡く覗かせている。

どこまでも続く廊下に、相変わらず終わりは見えない。

先が見えてもよさそうな明るさの中でも、廊下に終わりは見えない。私の足は床に吸い付いた

ように動かないままだ。目線の先の彼は、今日は窓の外を食い入るように眺めているため、横顔がはっきりと見える。パステルブルーの月明かりに照らされた彼の横顔は、この数年間食い入るように見つめ続けた横顔と、寸分違わぬものだった。

私の存在には気づいていない様子で、彼は外を見る。

どこまでも続く廊下に、風が吹いた。

少し湿ったその風は、甘く香る。それはいつかどこかで感じた、切なさを含む甘さだった。

*

戦慄した。

夢に現れた男性の正体が中谷啓介であることを、確かに認識してしまったからだ。運がいいのか悪いのか、夢の全容を完全に記憶している。

どうにかして、夢に彼が出てこないようにしなくてはいけない。このままでは、夢の中で彼と目が合ってしまう、そんな思考が自分の中に居座って消えないのだ。とりあえず、無い頭を捻って出した結論は、『彼に近づかないこと』だった。夢は記憶の整理とよく聞くうえ、その日に見聞きしたことが夢に大きく影響しているのは実感として明らかだ。単純ではあるが、その対策が最も有効であるように思われた。

*

それから数日、メールを無視し続けていた私に彼が疑問を抱いてしまった。結果、彼は私に愛想を尽かした。

と、なるはずであった。

「俺じゃダメかな」

この日、早朝の教室で二人きりになった。日直の仕事のため、私が早くに来ることを知っていた彼が、早朝に教室を訪れたのがその理由だった。

「……」

関わらない。そう決めたのだ。

「聞ってる？」

彼が私の顔を覗き込んだ。人間の少ない教室では、声がやたらと反響して耳にこびりつく。

関わってはいけない。関わってしまったら、彼がこの世界から消えてなくなってしまう。

「……ないで」

「え？」

「私に関わらないで！」

正確に発音できたかどうか定かでない、掠れて震えた金切り声で叫んだ。直後の沈黙に耐えきれず、啞然とした彼を残して教室を飛び出した。

行く当てなどない。教室に戻るわけにもいかないし、母親のいる家に帰るわけにもいかなか

った。結局私が選んだ先は、保健室だった。

*

どこまでも続く廊下に、明かりが差す。

今までとは比べ物にならないほどの光量が、両側の窓からなだれ込む。パステルカラーの月明かりは、最早月とは思えないようなパッションカラーで廊下の床を彩った。足は動かない。足どころか、頭の方から足の先まで硬直している。

どこまでも続く廊下は、相変わらず先が見えない。

暗闇に溶けていた廊下の続きは、光にのまれてまたもや見えない。

光の中、学生服姿の男子生徒が目に入る。見慣れたその後ろ姿は、ゆっくりとこちらを振り帰り――

彼の瞳が、まっすぐ私を見据えた。

彼は、悲しそうに微笑んだ。

*

「いやあああああああああ！」

上体を跳ね起こし、耳を塞いで叫んだ。喉の奥から掠れた絶叫が吐き出され続けるが、声にはならない。息が細くなった気道を擦りながら外に出ていく。喉の渇きと全身を伝う滝のような汗が、必要以上に激しい感情の乱れを示していた。

いつの間にやら横たわっていたらしき保健室のベッドに汗がじっとりと染みているのを視界の端にとらえながら、手の震えと戦った。

「アルプ！」

大声でその名を呼ぶ。背後から、わざとらしい笑顔顔を顔面に張り付けた男が現れた。

「おやおや、お呼びですか」

「どうしてくれるの！これじゃあ、本末転倒じゃない！」

叫び声が保健室にこだまする。

「はは、面白いことを言いますね。もし彼がこのまま夢に出てこなかったとしても、君は彼となかよくすることも出来ずに、友達のいない孤独と契約したことへの後悔の念に堪えながら生きなくてはいけなかったのですよ？ いいじゃないですか、早めに彼が消えてくれて」

彼はにっこりと笑う。その笑顔顔を滅茶苦茶に破壊したい衝動が全身を貫くものの、震える手足がそれを許してはくれない。

「この先、夢に出る人がみんな消えていくんでしょう！お母さんやお父さんが出てくるかもしれないし……そうしたら、私までなかったことになっちゃうんじゃないの？」

感情をそのまま言葉にして吐き出す。涙の滲んだ瞳で彼を睨み付けるが、彼は「さあ」とでも

言いたげに首を傾げた。

「ふざけないで！こんなおかしい、どうにかしてよ！」

「君はどちらが理不尽なことを言っているのか冷静に考えた方がいいですよ。……まあ、事態を収束させるためのヒント位なら、あげてもいいかもしれませんが」

彼のその一言に、私は当然、希望を見出した。どんな方法でもいい、この状況を何とか打開したかった。

「ヒントは、卒業アルバムです。小学校の卒業アルバムを端から端まで見返せば、答えが必ず見つかるはずです」

彼の無感情な笑顔に、私は初めて微笑み返した。

*

ページをめくる。ひたすらめくる。

端から端まで、すべての写真と文章を舐め回すように見た。そこには、あったはずの中谷啓介の写真はない。仲の良かった友人の写真も軒並み消失している。どの写真にも、一人ぼっちな私が映り込んでいた。一番大きく映っていたはずの、校外学習の写真でさえ、私は端っこで申し訳程度にピースをしていた。

いくらアルバムを眺めても、答えは見つからなかった。そこには、自分が犯した過ちの証拠が並んでいただけだった。

ページをめくる。ひたすらめくる。

そうするうちに、いつしか私の意識は夢に溶けていった。

*

真っ白な空間に、一人ぼっちだった。

周りには誰もいない、何もない。

世界の端は廊下同様に見えなかった。視力の限界を尽くしても、めぐり一周360度、何もなかった。視認できるのは、床が存在してその上に自分が立っているということだけだった。

呆然と空虚の中に立っていると、後ろから足音が聞こえてきた。振り向かずに、その足音が近づいてくるに任せる。足音は、私の真後ろでぴたりと止まった。

背後に人間が存在しているという感覚がある。それは熱を感じ取っているのか、呼吸を感じているのか――なんにせ、アルプにはなく人間にはある『生存感』がそこにはあった。

私はゆっくりと振り返る。

そうして、事態は急速に収束するのだ。

背後に立っていた人間と目が合う。

黒い瞳の奥に、私の姿がはっきり見える。

背後に立っていたのは、小学校時代の私だった。

あとがき

「アルプ (Alp)」はドイツ語で「夢魔」を意味する言葉です。ドイツ語履修してるのでドイツ語使いたくなって...てへ☆ 次はもっとほのぼのしたやつ書きたいなあ、いや、書きます。ハッピーエンドっていいよね！ おいおい誰だよ、人の不幸でメシウマ2000%とか言ったやつ、アニメ二期かよ、皆ハッピーが一番だろ。とか、初回からバッドエンドぶち込んだ私が言います。てへ☆ (本日二回目)

こんな駄文を読了して下さった方、ありがとうございます大好きです。キャラ●ルコーンスイートポテト味 (キャラメルなのかポテトなのかははっきりしろ) の次くらいに好きです。

安心して下さい、次頁から始まる作品は私の万倍面白いですから。以上、幼夏ちゃんでした。

六時三十八分までしかない時計（如月沓）

六時三十八分までしかない時計

如月 沓

僕たちの一日は、他の人と同じように、午前零時から始まる。朝は、当然それからだ。

午前零時ちょうど。部屋に一つある、ベル式の目覚まし時計が鳴る。ちょうど僕の枕元にあって煩い。まだ鳴り始めて数秒しか経っていないが、直ぐに止めても問題はない。僕達の中に、一瞬のベルの音で起きない者はいないから。

全員が一斉にベッドを抜けだして、中庭にある井戸で顔と手を洗う。直ぐに朝食があって、少しでも遅れると鉄拳が飛び、罰を受けることになってしまうので、皆我先にと冷水に手を突っ込んでいる。冬場はこれだけで死んでしまいそうになるけれど、罰のほうが怖い。

今朝は誰も殴られなかった。かじかんだ手で食前の祈りを済ませると、そこかしこから食器の音が聞こえ始める。聞こえると言っても僅かなものだけど。食事を静かに摂れないような輩は総じて処罰の対象だ、っていうのを皆知っているから。

食事が終わると、僕たちは一人ひとり違う仕事を課される。サボったらもちろん、罪人だ。仕事は廊下の雑巾掛けから、子守りまでいろいろあったけど、「外」に出られる仕事は一つも指示されたことがない。

今日の僕の仕事は、中庭の掃き掃除だった。

午前六時三十分。罰はこの時間に科される。今日の受刑者は僕を含めて三人。一人は掃除中に飾ってあった花瓶を割ってしまったから。もう一人は、「外」に出ようとしたから。彼には、この施設で最も重い罰が与えられるはずだ。可哀想に。

そして僕は、「お気に入り」だから。

罰が始まる前に、きっかり五分間、説教が行われる。何をしたからここにいるのだ、とか、罰として何をやる、とか、自らを省みよ、だとか。人が増えるとその分適当になり、少ないとその分長くなる。この間二人だけだったときは、異様なほど（五分が数日に思えるくらい）に自制と自重の大切さを説かれた。

それから、仕置。尻を叩かれるとか、水に沈めるとか。実際の内容は、ご想像にお任せしよう。

そうして僕は、「お気に入り」らしい僕は、それを見ながら、見せられながら、施設の大人の慰み者になるのだ。

毎日のように、この石畳の仕置場に呼ばれるので、ついに気の失い方も覚えてしまった。無反応な人形を求める彼らだから、僕に意識があろうとなかろうと、気にも留めない。

初めは痛みでしか出来なかったそれも、もう慣れたものだ。今では三分ほどで落ちることができるようになった。いらぬ感覚を、視覚を、聴覚を、触覚を、一つずつ、すべて捨てるイメージ。

最後に見た文字盤が示すのは、午前六時三十八分。僕の一日はそこで終わる。

なので、ここから先は僕の一日ではない。仮にぼくとでもしようか。

腹痛で目を覚ますのは、石が敷かれごつごつした床ではなく、いつもの、他の子供のものより少しだけ柔らかいベッドの上。時間は、午後十二時ちょうど。僕達にとってはもう「夜」だが、ぼくたちにとって、普通の人にとっては昼間であることを、僕は知っている。ぼくは、「お気に入り」だから。

「夜」に起き出すのは、脱走に次ぐ罪になるが、それも「お気に入り」の特権か、建物の中を自由に歩きまわることさえ許されていた。それどころか、彼らの同僚か何かのように扱われることもあった。

「おう、腹の具合はどうだ？」

「西棟のトイレは誰か入ってたな」

「女でも連れ込んだか？」

「ここの誰が女に縁があんだよ」

「風船の女ならよく使ってるじゃねえか」

「うっせ」

そんな会話が、ここの子供であるはずのぼく——おっと、僕の前でなされるのだ。慣れてきてはいるが、「昼間」の罰を見ているとどうしても、彼らが突然豹変して僕を鞭打つのではないかと、思ってしまう。自然、ぼくも僕も、直接話題が振られた時以外は喋らないようになった。

時折、（僕を含む）子供たちの様子を訊かれる。例え子供たちが脱走の計画を立てている最中でも、ぼくの答えは決まっている。

「とてもいい子たちですよ」。密告者には褒美を、なんて風潮もあるようだけど、自分の属する集団を売りたいとは思わない。子供たちが褒められそうな事柄は詳細に報告するようにしているが。

売りたいとは思わないが、保身のために、仕方なく売ってしまうこともある。夜中に、休憩室まで聞こえた子供の声を誤魔化せるほど、言い訳は上手くない。ぼくも、罰は怖いのだ。

——ぼくは一体何なのだろう。欲望のはけ口にされて、その代わりに、少しばかり他の子供達より優遇されている。子供たちの一部であるかと言われれば間違いはない。が、彼らの一部であることも、少なからず確かだ。

ぼくは、誰を裏切れば、裏切ったことになるのだろうか。もう裏切ってしまったのだろうか。彼らの休憩室で、僕には絶対味わえない、炭酸飲料が入ったペットボトルを傾けながら考えていた。

明日も零時起きだろう、そろそろ寝ないでいいのか。そう言われるのは大体、午後六時頃だ。彼らは酒が回り始めたのか、かたかた笑いながら同じ事を繰り返し宣っている。

「お気に入り」にも、当然罰はある。午前零時に間に合わなくて困るのは、僕だ。酒呑に帰巢を告げて（聞こえていなかっただろうけれど）、部屋を出た。

塩化ビニルが足に張り付く。この季節は乾燥しているとはいえ、人いきれで少し暑いぐらいの休憩室は、足の裏に汗をにじませるのには十分だった。ぺたぺたぺたぺた、足を出すたびに音がした。他の子供に悪いと思い、履物の支給は断った。彼らに謝られたが、謝るくらいなら、初めからしなければいいのに。特権を謳歌する僕には、とても言えない。

僕のベッドのある部屋に戻ると、いつもどっと眠気が押し寄せる。布団をかぶってからの僅かな時間は、時計を見て過ごすことにしている。

午後六時三十八分。ぼくの時間はここまでだ。

「裏切り者」

「裏切り者」

罵る声で目が覚めた。体中が痛い。正面に天井が見えるので寝転がっているのだろうが、何かで縛られているのか体は動かない。首も回らなかったが（物理的に）、続いている声で、子供たちに囲まれていることはわかった。

怒号の中、一人分の足音がした。間もなく、一番仲のよかった子供が視界に入る。

「裏切り者」

刺さる。

「わたしたちを置いて歩く夜は楽しかった？ 大人と喋るのは楽しかった？ ジュースは美味しかった？」

決る。違う、それは僕じゃない。周りの人垣（と思しきところ）から、何か硬いものが飛んでくる。

「きみは靴は履かないんだね。私たちに申し訳ないって？」

「ごめん、僕は」

「謝るくらいなら、さあ！」

彼女の突然の大声に、場が静まる。

「はじめから、やらなければいいのに」

あとかぎ

僕っ子が書きたかったです。

可愛い僕っ子が書きたい。というか可愛い男の子が書きたい。この際男の娘じゃなくてもいいです。男の子書きたい。

男の子の可愛さって何で決まるんでしょう。きっとこの世界には原因が一つしかない出来事なんてない、つまり男の子の可愛さも様々な要素が複雑にからみ合って生まれているのです。だか

らだれか男の子（の可愛さ）を解きほぐすテクニックをください。もしくは可愛い男の子をください。男の娘だとベターです。切実。

マインドブラスト。脳みそを吸い取られた！

ハコイリムスメ

今畑 鏡

「アイを与えないでください」

6月10日月曜日。平和通り。そんな謳い文句の書かれた段ボール箱の中。そこで少女は、退屈そうな、何かを嘆いているような顔でひょこりと体育座りしている。その姿を僕は何時間も眺めている。お互い変態だ。

大学生で文芸部の僕は、小説のネタが浮かばず、締め切りに追われていた。家の中に居てもどうにもならないからもんだから気晴らしにでもと街に顔を出すことにした。家の中に居てもPC画面を眺めるだけで何にも新鮮さがなかったし、インスピレーションが浮かばなかったからだ。ただ、自分の無能さを環境のせいにはしているようにも見えるが。

月曜の午前中から街をTシャツにジーパンでぶらぶらする僕。今日の講義が全休だからこそできる行動である。

当然、平日なんだから休日に比べて人通りは少ない。居るのはゆったりと散歩する老人と早歩きをするサラリーマンとOL、ぐらいだ。

そこで異質な存在である僕…… いや、もう一人いた。

少女は、段ボール箱を小脇に抱えて僕の前をトコトコと歩いていた。

少女の背丈は、僕の肩方ぐらいだから150センチぐらいか、小さいな。髪型は、ゴールデンポイントと呼ばれる横を向いたときにあごと耳の上を結ぶラインの延長上より高い位置で髪を一つにまとめたポニーテール。服装は、白黒縞模様のノースリーブに首元の広い水色Tシャツの重ね着とベージュのチノパンである。

何で段ボール箱なんて抱えているのかと思った僕は、暇だし興味もあったから少女の跡をつけることにした。これではまるで僕が変態みたいじゃないか。

5分ぐらい歩いただろうか。ちょうど日陰ができているところで少女は辺りをキョロキョロしだした。その時、不意に少女と目が合った。ストーカーだとバレたのか？ やはり通報されるのか……。

しかし、それは杞憂に終わった。なんと少女は、段ボール箱と組み立てると段ボール箱にキュッキュとマジックで何かを書き、その中で体育座りし始めたのだ。段ボール箱にはかわいらしい筆跡で、

「アイを与えないでください」

と、書いてあった。

「な、何だ……？」

僕は不思議に思った。まず、少女がなぜ段ボール箱の中で体育座りしているのかが理解できなかった。まるで捨てネコ、捨てイヌではないか。

しかし、それを超える最大の謎は、段ボール箱に書かれた謳い文句だ。「アイを与えないでください」……………？

捨てネコとか捨てイヌの入った段ボール箱には、「かわいがってください」とか「お世話してあげてね」とか書かれているのが定番だろう。だが、それを打ち消すような「アイを与えないでください」という言葉。

僕は彼女のことが気になった。ということで、近くの古本屋で立ち読みをしつつ観察することにした。これはただの観察であって、決してストーカーではない。

1時間ほど経っただろうか。段ボールの中で居座る彼女の目の前を通り過ぎるサラリーマンたちは、まるで嫌なものを見たような苦虫を噛んだ顔して見て見ぬふりをして通り過ぎる。やはり、自分の事情が一番大事で他人にかまってやる心の余裕がないのだろうか。

日が高くなって太陽がまぶしく照りだした。時計を見ると12時を指している。昼食をとるためか、人通りが増えてきた。

相変わらず少女は段ボールの中で居座っている。飽きないのだろうか？ 日陰に座っているから暑くはなさそうだ。

少女の前を通り過ぎる人々は変わらず見て見ぬふりをして通り過ぎる。しかし、ある変化があった。一人のOLが何回も少女の前を歩いているのだ。最初は二人組で、その次は一人で、その次は……

僕が気づいてから、OLは5回も少女の前を通り過ぎた。彼女は何を思ってそんなことをしているのだろう。

そして6回目、OLは少女にコンビニ袋を手渡した。どうやら、袋の中に軽食と飲み物が入っているようだ。少女がお腹をすかせているのではと心配したのだろう。

OLはひどく緊張しているようで、手をしきりに動かしている。もしかしたら冷や汗をかいているのかもしれない。他人がやらないことをやるにはそれなりの勇気が必要なんだろうな。

OLは、肩の荷が降りたようで、軽い足取りでその場を後にした。僕も腹が減ったし、少女も昼食を食べるなら自分もコンビニで何か買おうか。

その矢先、今度は老人が少女に話しかけた。老人も少女と同じ段ボール仲間らしく、段ボールを小脇に抱えていた。違いがあるとすれば、清潔感のある身なりをしているか否かというところだろうか。少女の身なりは清潔感があるように見えた。対照に、老人は伸び切ったひげ、ぐしゃぐしゃの頭で清潔感がない。

老人と数秒話したら、少女は事も無げに、先ほどOLからもらったコンビニの袋を老人へ手渡した。そして、老人は何度か頭を下げてその場を後にした。

少女はまた体育座りを始めた。僕は、彼女が昼食をとらないのなら僕も思い、昼飯を断念した。ホント、何やってんだ？ 俺。

しばらくたったので、時計を確認すると16時を少し過ぎていた。人通りも増えてきたように感じる。学生の下校時刻だからだろう。

小学生とはとても正直な生き物である。段ボールに入った少女を見つけると、わーっと小学生数人が近づいてきた。

何でそこに入ってるの？ いつからそこにいるの？ なんて言って少女を質問攻めにしているのかもしれない。しかし、店内にいる僕に話し声は届かない。

やはり小学生というべきか。飽きるのが早い。つまらなくなったら走ってどこかへ行ってしまった。もしかしたらこの後、公園で遊ぶのかもしれないな。

続いて、スモッグを着た幼稚園児とその子のお母さんが少女の前を通り過ぎた。お母さんは、少女を見せまいとその子の手と引っ張ってそそくさと行ってしまった。教育に悪いものは見せたくないのか？ ん？ そもそも、段ボールに入った少女は教育に悪影響なのか？

夕日も沈んで辺りがどんどん暗くなってきた。少女はというと、そんなのお構いなしに段ボールに入ったままそこに居続けている。一体いつまでいるのだろうか。

僕の方がなんだか焦り始めた。というのも、ずっと本屋に居るものだから本屋の店員が僕をマークし始めたのだ。そりゃあ8時間以上も本屋にいるのだ。怪しまれるのも仕方がない。

平和通りでは家路を急ぐサラリーマンが増え始めた。しかし、見て見ぬふりをする人ばかりだ。少女の行動も意味不明だが、僕はだんだんと少女を無視して通り過ぎる人々に違和感を覚え始めていた。

そろそろ本屋が閉店しそうな22時少し前。少女に動きがあった。

急に段ボール箱を畳んで移動を始めたのだ。僕も慌てて本屋を出る。すると通りの向こう側から蛍光色のビブスを着た数名の大人が歩いていた。そう、青少年指導員である。どうやら少女は、補導されるのを恐れて移動したらしい。それより、少女はどこへ？ 僕は少女を探し始めた。

ものの数分で少女は見つかった。どうらや、指導員が見回りを終えたところで新たに居を構えたらしい。「アイを与えないでください」という謳い文句もそのままだ。何がしたいのか？

僕はというと、少女にバレないように近くのベンチで携帯をいじるふりをしつつ、少女を見ていた。自分の行動理由がよくわからなくなってきた。やはり変態なのか。

そろそろ僕は腹も減ったし、帰ろうかと思い始めた。それもそうだ、時計は23時を示している。少女はというと人通りの減ってきた平和通りで段ボール箱に入ったままである。その時、「そこのネーチャン、そんなとこで何してんの？」

金髪にピアスの見るからにチンピラな男二人組が少女に話しかけた。

「もしかして、今ヒマ？ よかったらさ、俺らとお茶しない？
楽しいぜ？」

男らはナンパを始めた。少女は話しかけられたが、何も答えず、無視をしている。

「あれ？ もしかして無視してる？ 無言ってことはさ、オッケーってことだよな？」

なんという独自解釈。と、男らは少女の腕を掴んで強引に連れて行こうとする。

「ちょ、ちょ、ちょっと待てよ」

僕は考えるよりも早く、男たちに声をかけた。行動を起こしてから気づく。これはヤバい。「はあ？ あんたどちら様っすか？ これから俺たちこの子と楽しくデートするんですうけど！」

男らは氣勢強く僕に話す。ど、どうすれば……

「あ、あのさ、勘違いしてるようだけど、その子さ、僕の妹なんだよね」

咄嗟に嘘をついてしまった。

「妹？ 嘘つくんじゃねえぞ、おい！」

男らは増々キレ気味に大声を出した。ええい、これなら勢いに任せるしかない！僕は近くの車を指さして、

「あっちの車で親が待ってるからさ、今日はこの辺で、じゃ」

と早口で言って少女の腕を掴んでその場から逃げた。もちろん、全部デタラメの嘘である。だから、車なんてものも無いから男らに追いつかれないように僕のアパートまで全力で走った。

しまった、僕は自分の行動を後悔した。なんと、少女を自宅まで連れ込んでしまったのだ。初めてのことである。

少女は、猫のようにちょこんと座ったままである。そりゃあ知らない男の家にいるんだ、当然の反応だ。

僕はとりあえず、客人のもてなしにホットミルク一杯を少女へ与えた。少女は虚ろな目でホットミルクを見たが、飲もうとはしない。僕は少女に質問することにした。

「なんであんなことをしてたの？」

少女は一言、

「アイを与えないで欲しかった」

と、言った。ますますわけがわからない。

「でもさ、あんなことしてたらあいつらみたいな変な男らに襲われるかもしれないんだぞ。そこんどこ分かってるのか？」

「ごめん」

少女は、下を向いてそう言った。そして、

「あなたは私をずっと見ていたよね。なんでそんなことしてたの？」

どうやら、僕の存在はバレバレだったようだ。

「なんで君がそんなことをしているのか気になったからだよ。僕は一度気になると、それが頭から離れなくなる正確でね、例えると、外出中に家の鍵をかけたかどうか気にし始めると鍵のことで頭がいっぱいになっちゃうんだよ」

僕は正直に少女に答えた。少女は続けて、

「じゃあさ、私の前を通り過ぎる人たちを見てどう思った？」

と、質問した。

「見てて思ったことか？ そうだな…… 君の存在を見て見ぬフリをする通行人の多さには驚いた。人間ってこんなに薄情なのかって思ったよ。自分が大事でほかの人には構ってられないん

だなんて。あとさ、君に話しかけたり、何かを与えてくれる人もいたけどさ、それは見て見ぬフリができないから仕方なく行動しただけであって、優しくしている自分エライっていう自己満足でしかないと思った。だってさ、段ボール箱にいる君をそこから出してあげることが最大の救いなんだから。上辺だけの付き合いで留めておきたい、深入りするのを避けたい、そんな魂胆が見えていたよ。結局、みんな自分勝手だった。自分がどれだけ苦しまないか考えて過ごしているんだな」

「あなたってとてもひねくれているのね」

「そうだな、君のことを何時間も観察してたんだ、それなりに狂ってるかもな。でも君も僕くらい、いや、僕以上にひねくれてるよ。まさに変態だ」

「そうかもね」

少女の硬い表情が、少しだけゆるんだような気がした。しかし、僕は少女に告げなくてはいけないことがある。

「でも、一番の構ってちゃんはおんただろ。通りで段ボール箱に入って、『アイを与えないください』という謳い文句。おんたは、一番自分自身が大切に、誰かに振り向いて欲しかっただけだ。だけど、それは他人へ自分を押し売りしているだけだ。でも、それだけじゃない。指導員が来た時は逃げたよな。仕事として自分に話しかける奴らは避けたわけだ。ホント、自分勝手な女だな」

僕は非常に失礼な言葉を少女に浴びせた。少女は、肩をプルプルと震わせながらこちらを睨んでいる。自分を批判されて喜ぶ奴なんていないからな。そして、少女はお返しとばかりにカップに入ったホットミルクを僕の顔に浴びせた。

白い液体をぶっかけられた僕の顔は、ベトベトしてとても不快だ。でも僕は話を続ける。

「だけど、今回の経験はとても役に立ったよ。お礼にあんたの悩み解決しようか。どれ、後ろ向いて」

「え……？」

少女は目を見開いてこちらを見る。少女はかなり戸惑っているようだ。

「あんたが動かないなら、僕が動く」

僕はすばやく少女の後ろへ回った。そして、少女の脇に両手を当てて…… めいっぱい少女をくすぐった。

「え…… ええ！ あはははははははは！」

少女は現状が理解できないようだ。少女は笑いながら、体をくねらせて逃げようとする。だが、僕の両腕はそれを許さない。僕はひたすらに少女をくすぐった。

……お母さん、僕はまた一つ変態の階段を一つ、いや、数段に上ったようです。

どれくらいくすぐったらうか。少女は泣き笑いしている

さすがに可愛いそうに思えてきた。僕だって紳士だ。限度くらいわきまえている。僕はくすぐるのを止めた。

少女は泣き笑いしている。それからだんだんと笑みが消え始めて…… 少女は吐き出すように声を上げて泣き始めた。

「なーんだ。そこにしっかり『アイ』があるじゃないか。」

「—————！」

愛花は顔お真っ赤にして照れた。

「照れちゃって、可愛いやつだな」

「—————！ バカ—————」

愛花はまた蹴ってきた。

「ところでさ、愛花。昨日何も食べてないだろ。よかったら、朝ご飯食べて行くか？」

「うん！」

愛花は、昨日とは打って変わって満面の笑みを浮かべた。

あとがき

私は、ラブライブの楽曲、ぼーかりおどPの楽曲をヘビーローテーションしてこの作品を書いています。初めてだらけの今回。「ルビ振り」に苦しめられました。天元(てんげん)突破(とっば)とかやっと思えるようになりました。

背徳者—神—

山吹 弓穂

「汝は神を信じますか」

「……はあ」

誰もいない礼拝堂。木々のざわめきが響き、浮ついた賑やかさがひっそりと沈んでいく。昼下がりのゆるりとした陽射しが色とりどりのステンドグラスを照らし、天井を仰げば偉大な父・キリストの神々しき姿が鮮やかに描かれている。

薄汚れのくたびれた制服を着たケイは、その清らかさをどうしても好きになれなかった。穂の暗い世界に足を突っ込んだ自分が浮き彫りになり、見下されているようで、卑屈と言おうか、頭を押さえつけられている気分になる。そんな風にしか物事を捉えられない捻くれた自分にもっと嫌気が差す。

威厳を示す全ての象徴、大きな十字架の許には、黒づくめの神父が聖書を片手に佇んでいた。すらりとした長身が一身に陽を受け、影となり顔立ちがよくわからない。

「もう一度訊きます。汝は神を信じていますか」

遠く離れた席に身を縮めて座るケイに向かって、神父が繰り返し問いかける。ケイは茶色に染めた髪を払うと、不貞腐れた表情でふいっと横を向き、

「知りませんよ、そもそも神様なんていないんじゃないですかあ」

「ほう、いないと」

「だってそうでしょう、神様が私達に何をしてくれます？ 何をしてくれるわけでもないと思うけどなあ」

わざと大きい声を出し、精一杯の皮肉を投げつけてやった。わあんと大理石に響き渡り、波紋となってすぐに鎮まっていく。後に残るのは、沈黙に耐える彼らの息遣いだけ。

言ってしまった。聖職者に対する最大の禁句であり、侮辱。だってそうではないか、神の恩恵が本当にあるのなら、自分はこんな不良少女と呼ばれることなどなかったはずなのに。所詮悪人を俗世から切り離し、追放するだけのお高くとまった存在でしかないのではないか。自分の素行の腐敗を全て神に擦り付ける、こんなに卑怯な奴に墮落してしまったのかと、ケイは惨めな思いに駆られ、そっと唇を噛んだ。

「ほう……」

かっ、かっ。流れる静寂をさまようように、靴音が響く。それがこちらに近づいてくることに気づき、ケイははっと口元を強張らせた。分かっていた、神父の逆鱗に触れることなど、分かっていた。だがここで怯めば敗北を認めたことになる。喧嘩を売った以上、自分から折れてなどなるものか。どくんどくと、緊張に頭が痛くなるほど心臓が強く打たれる中、ケイは必死で余裕を装った。

カツン、と靴音が途切れた。ケイの体に大きな影が落とされる。さあいったいどんな神への敬

愛の言葉で説教してくれるというのか。やれるものならやってみろ、と半ばやけくそになって身構えていると。

ぐいっと、突如顎を掴まれ、無理やり上を向かされた。

「ふごお！」

「これはこれは面白い……」

クックック。喉の奥から漏れる笑いは邪悪な思惑を含む。ケイはなまじりが裂けんばかりに目を見開き、背中を走る悪寒に身体を凍らせた。視界いっぱいを支配するのは、耳元までバツクリ口を裂いて笑い、鋭く尖った光を瞳に宿す凶相の神父だった。

「今日はゆっくりと語らいができそうだ。お話でもしょうか、神について」

ケイの通う高校はミッションスクールだった。しかし全生徒が敬虔なキリスト信者かといえ、そうではない（ごく一部は病的なまでの狂信者）。私立ゆえにお金持ちセレブが多数を占め、後は英語を学びたい者や学力相応の者がほとんど。

毎週日曜日には礼拝がある。しかし、単位には関係ないのでサボタージュを決込む者もいる。それだけなら学校側も構わないのだが、ケイの場合は品行不正の不良少女であるので質が悪い。教師たちも狼の扱いを持って余していた。

そこで博愛主義のキリスト教学校であることを利用し、建前だけでも神父に改心させようということになったらしいのだが。

（懺悔……これって懺悔の一環？）

なぜか場所は学内喫茶店。今は授業中なので、ケイと神父以外誰の気配もない。ウェイターが時々怪しげな視線を向けるが、神父はどこ吹く風で紅茶を傾けている。

この状況をどう捉えるべきか。警戒心というか困惑というか、注文した麦茶に手をつけないままじっと自分の手を睨んでいると、神父がふっと鼻で笑うのが聞こえた。

「そう牙を剥かんでもいい。言っただろ、神について語らうだけだ」と

「ざ、懺悔しないんですか」

「荒ぶる少女狼を捻り潰して無理やり悔い改めさせるのも一興だが、生憎説教なんぞ信仰心のない奴にするほど俺もお人好しじゃない」

「うわあ……」

現役神父の言う台詞かこの悪人面。がらりと変わった口調と、聖職者とは思えぬ性悪な性格に、ケイは本気で身を引いた。そんな彼女の反応に、神父が口角を吊り上げた。

「来栖恵さん、といったな。君は神を信じないと？」

「え？ ああ、まあ……」

「なるほど」

頷いて、神父はカップを口につけた。その仕草がとても優雅で胡散臭さが増す。ますます訳が分からない。神父の癖に無神論者ですかあ？ と嫌味を込めてケイが言うと、神父はカップを置いて鼻を鳴らした。

「神の存在の有無は誰にも言えることではない。ただ言うと、神は非常に非力で残酷なものだと

いうことだ」

「非力……？」

神が非力など、考えもしなかった。むしろ、そう思うことすら許されることではないと頑なに考えないようにしていた。いつ、どこで、どのように仇をなすか分からないから――突飛な論に思わずぎよっとするケイだが、神父は至って平然としていた。

「君も言ってただろう。神は何をしてくれるわけでもない」と

「そりゃ……神様が本当にいるなら、何で嫌なことが毎日起きるんだろう、平等に恩恵が貰えないんだろう、自分ばかりこんなに落ちぶれるんだろうって思っただけで」

考えてみれば、単なる愚痴と甘えの象徴なのだろう。悪ぶる自分を正当化するための粹がりなのだろう。そう言いかけて情けなさに喉がつまり、ケイは俯く。

神父が目を細めた。

「悪人正機だな」

「え？」

「浄土真宗の言葉。悪人の自覚を持つ者こそ浄土へいけるとというのが本来の考え方だ。だが俺なりに解釈を変えると、悪を犯す者こそが自分と向き合う、ということだ」

「えーと……」

「道を外れた奴は、善人から疎外される。ゆえに、罪悪感があろうとなかろうと、必然的に何らかの形で己の悪事と向き合うことになる。そういう奴は、神に対して敏感なんだ。神を呪う奴もいれば許しを乞う奴もいる。要は、善良でぬくぬくと育ってきた平和な善人よりも、悪人のほうがより深く己とも神とも向き合うのさ、良くも悪くも。この場合悪人の定義は難しいがな。犯した罪に自覚のないサイコパスもいれば、蟻一匹の殺生で酷く悔いる罪深い奴もいるしな」

「ふーん……」

神父が仏教を語るとは妙な話だ。

「で、悪人達は考える。神なんていない、こんなに自分が不幸になっても、神は助けない」

「それがいけないんじゃないんですか、私が言ってもアレですけど」

「だが、それが神の全てを表していると思わないか」

神父が手を組み、薄く笑ってそう問うた。凶悪でありながら無邪気であり、ケイの戸惑い振りを愉快に思っているように見える。はいともいいえとも言えず、渋い顔で結局ケイは首を捻るだけだった。

「なぜ救わない？ なぜ恩恵を与えない？ 規模を大きくしようか、なぜ飢餓が起きる？ なぜ戦争が終わらない？ なぜ差別がなくなる？ 答えは、神が救わないから、そしてそれに人間が甘えているからだ」

「……極論じゃないですか」

「神と呼ばれるものの近くにいるからこそ、そういう論を唱えられる」

ククク、と神父は喉を鳴らした。

「聖職者的に論じれば、非力というのは厳密に言えば違うな。世界の創作者を神と仮定しよう。神は人間の世界の理で起きることの一切を傍観するだけの存在。例えるなら、ケースの中のウサ

ギを観察するのと一緒だ」

「……何のために」

「戯れ。人間だってペット見たり映画見たりするのに、重要な使命があるわけじゃないだろう。神も同じで、自分で作ったもので戯れる。それだけ」

「見てる、だけ……」

これはあくまで想像でしかないがな、と付け加えて、神父は一旦話を止めた。ふうと短くため息をつき、再び紅茶をじっくり味わう。それカフェイン入りじゃないのかよ、と今更ながら心の中で突っ込みつつ、ケイは神父が今しがた述べたことを頭の中で反芻した。反芻した上で――何だか胸の奥に石が詰まるような、しこりの残る感じがした。

「……どうかしたか」

ケイの様子に気づいて、神父が怪訝な目を向ける。え？ とケイが思ったときには、がくんと体中から力が抜けて、項垂れる格好となっていた。肩が小刻みに震え、顔から徐々に血の気が引いていく。

「私が前に一度礼拝堂に来たとき、神父さん言ってたじゃないですか、『神はいつもあなた方を見ています。信じる者は救われるのです』って」

「……ああ」

「本当にそうなら……」

――神はなんて傲慢なんだろう。

ケイは幼い頃、よく教会に通っていた。儀式やしきたりなど右も左も分からなかったが、慈悲深い笑みをたたえるマリア像の前で、ただひたすら祈った。神様、神様と舌の皮が剥けそうなほど、口の中で神の存在を唱えた。

幼心に信じていた、頑なに。

しかし、その幼く淡い希望は音を立てて砕け散り、砂となって風化していった。残されたのは深く膿んだ傷と、乾ききった現実の闇。

馬鹿の一つ覚えのような祈りは、神に対する禁断の、焦がれるほどの一途な恋にも似ていた。叶わぬ思いは、一思いに踏まれて無下にされ、雨の中捨てられた女の屈辱に似ていた。痛みにも似た感情が目の前を真紅に染める。純粹無垢の少女には、あまりにも酷な仕打ちだった。

「見てるだけなのに……信じる者は救われるって何ですか。一体何なんですか」

きゅうっと喉が引きつる中、しゃがれた声を辛うじて押し出し、ケイがそう呟いた。目の前にいる、神と人間との仲介者たる彼を、堪らなく憎らしく思った。今までの神に対する身が裂けるような憎悪を、全部まとめて彼にぶつけてしまいたかった。身体が壊れそうなほどの破壊衝動が、彼女の芯をズンッと突き上げた。

だがケイが暴れだすのを制するように、神父が鋭利な視線を彼女に向けた。それから考え込むように目を伏せ、おもむろに口を開いた。

「『信じる者は救われる』、大まかな事情を抜かして考えると、こう定義つけたのは十二使徒だ。現在をキリストが贖った、故に神を信じれば人類は救われるシステムになった、と。信じれば救われるなんてどの宗教にも必ずある文句だ。阿弥陀仏を唱えれば浄土に往生できる、題目を唱

えれば難を逃れる」

俯いていたケイの顔が、さっと険しくなる。神父が言ったら世も末だがな、と自嘲めいた付け足しをして、神父は続けた。

「『信じる者は救われる』という文句を信じた奴の中で本当に救われた奴がいるのはなぜか。神の贖罪を受けたか、一途に信じたそいつの報いか。だが何にせよ、ただひたすら信仰するだけでは決して救われない。百歩譲って神が信じる者を救うとしよう。そこに契約関係が生まれるのは知っての通り。契約したからには相互に見返りが必要になる」

「見返り……？ だってアガペーは……」

「何かを与え与えられる関係には、少なくとも何らかの思惑が絡む。神が求めているのは信仰心、人間が求めているのは恩恵。『信じる者』を救済の対象にしている時点で、愛が無償ではないことを示していると思わないか」

そこで耐え切れなくなったように、神父は小さく吹き出した。ひっとケイが悲鳴を上げるのにも構わず、肩を大きく揺らし、クククと衝動を抑えるように低く笑う。愉快そうに歪められた目の奥には、自嘲と蔑みと仄かな怒りに満ちた、どろりとした感情が燻っていた。暗く鋭い光の宿った瞳が、ケイの肩越し、遙か遠くの存在に向けられ、ケイはぞっとするのを禁じえなかった。首を絞められるような圧迫感、射抜かれるような恐怖――せりあがる鼓動、じわじわと額に滲む冷や汗。

殺される。ごくりと喉を鳴らしたとき、神父はまた口を開いた。

「神との契約が純白で穢れていないものと思ったら大間違いだ。信仰というキーワードが絡んでいる、実際は泥臭いものなんだよ」

そう言うと、それまで浮かべていた邪悪な笑みを解き、神父は元の涼しげな表情に戻った。ケイは見えない角度でほっと息を吐き、しかしどこか拭いきれない複雑さを抱えながら、彼を恐々と伺った。

「話を戻そう。信じる者の中で救われる奴が出てくるのはなぜか。神との契約があろうとなかろうと、結局は自分の手で救いの意志を裏付けるしかないんだ」

「裏付け？」

ケイが首を捻る。神父はそれに答えず、続けた。

「自分から行動しなければ誰からも見放される。それはどの国の理にも、どの宗教の教義にも共通していることだ。それ以前に動物の本能だからな。さあ、道から外れた者はどうするか。神に仇をなそうとする外道となるか、善人として立ち直るか、はたまた何もせず朽ちるか」

ずっと、神父の目がケイの顔を覗き込んだ。ケイはドキッとなって少し身を引いた。彼の瞳はさっきとは打って変わり、とても柔らかく力強い色に満ちていた。

「負けん気か、神の恩恵を欲するためか。動機が不純だろうと何だろうと、結局は自ら行動して勝利を得るしかない、それが『信じる者は救われる』だ」

ケイはきょとんとなり、目をしばたかせた。神父の目は悪戯っぽく動き、どうた？ と問いかけているようだった。ケイはそれに答えようと、何か言葉を発しようとした。しかし、かああっと湧き上がる想いに気持ちが空回りし、喋ろうとしても唇をパクパクさせるのが精一杯だった。

何か言わなきゃ負けた気がする、せめてその余裕の表情を一瞬でもいいから崩してやりたい。なぜかそんな気持ちに駆られて慌てて言葉を探そうとしたが、神父がそれを見越したようにふっと笑った。

すると、隔離された空間から解放されたように、わあっと世界の音が溢れ返った。はっとなって廊下を見ると、がやがやと生徒達の姿が思い思いに乱れていた。

「授業が終わったようだな、さて場所を変えようか」

ぐっと残りの紅茶を飲み干して、神父は立ち上がった。そしてケイの、一口もつけられていない麦茶を一瞥し、

「奢ろう。早く飲んでしまえ」

「……ふん」

悔しさに顔を赤くし、ちょっとした悪態をつきながらケイは一気にコップを傾けた。ぐびーっ、タンッ、ごっくん。うがい飲みとは色気ないと笑われ、舌を突き出してやった。

十分程度して次の授業のチャイムが鳴り、再び校内に静けさが訪れる。風にそよぐ花々に導かれながら、二人は礼拝堂への道をゆっくりと辿った。

「まあどれだけ神について語ろうと、神の有無など、結局分からず仕舞いなんだが」

外へ一歩踏み出た途端に降り注がれる陽の眩しさに目を細めながら、神父が再び語りだした。

「君が無神論者として礼拝堂に来ることなく、やんちゃなことをしても全く問題ない」

「ないんだ」

「反対に、熱心に通い続けてもある日どこかでぶつり切れて、墮落する者もそれなりにいる。見てると面白いぞ」

「しょ、性悪……」

うげえ、とケイは舌を出した。そし終始気になっていた質問を呟く。

「何で神についてあれこれケチつける人が神父なんだか」

「ケチをつける、ね。生易しいよ君は……」

ククク、と例の喉から漏れる笑い。ぞっと背筋に悪寒が走り、嫌な予感がしてケイは恐る恐る彼を見上げた。恐怖でいっぱいに見開かれた視界に映るのは、顔に影を落とし口をぱっくり裂いて笑う、凶悪人面の神父だった……しまった、何か踏んでしまったと蒼白になって後悔するが既に遅し。

「神の定めたパラダイム、もしくは人々が神に抱くパラノイア、これらを見せしめ、己の感受性そのまま奔放に振舞う。それがどんな結末を生むか分かるか」

「……えーと」

「迫害、もしくは戦争。パラダイムに背き、神の怒りに触れた、もしくは人々の穢れなき理想を犯そうとした者は追放され――背徳者となる」

神父はそこまで言うと、歩む足を止めてケイに向き直った。つられて足を止めたケイは、ぬうっと威圧的に見下ろされ、怯えたように身体を竦めた。にい、と彼の笑みはいっそう深くなった。

「『神はいつもあなた方を見ています』……ククク、確かに俺はそうだった。だが、神はいつも

見ているだけ――繰り返すが、神とは気まぐれで傲慢で残酷、そして非力。俺はそれを、説教を介して羊どもに教えてやっているんだよ、神に反逆した背徳者として」

背徳者――その言葉だけがケイの耳に残り、頭の中で永久に繰り返されるように木霊した。そしてそれに縛られるように微動だにできず、意識が吸い込まれていく……。

さああと風が砂を舞い躍らせた。二人を取り巻く空気が急降下し、息を呑むだけで喉から芯へと冷たさが伝わる。

瞳を捕らえられて固まったままのケイに、神父がおもむろに手を差し伸べた。

「どうだ、一緒に来ないか、『背徳者』の世界へ」

その響きが嫌に不気味で、ケイはびくっとなった。恐る恐る手を見る彼女に、神父はべろりと舌を出し、

「そう怯えなくてもいい。案外いいものだぞ……」

欲望を押さえ込むように喉の奥で笑う神父の背中から、ばさりと漆黒の翼が広がった――ように見えた。羽がはらはらと雪のように舞い落ち、陽の光を浴びて青く輝く。

神父の背後に渦巻く不透明な闇を感じながら、ケイはただごくりと唾を飲み込んだ。

ようこそ、背徳者の世界へ――。

背徳者— 1 / 2 神話—

山吹 弓穂

「コアラのようになれ」

文庫本に目を落としながら、神父が言った。

「コアラというのはユーカリを食べる。ユーカリは有毒性の植物だ。コアラは消化する中で毒を体内に取り込むことで天敵からの防御を図る。普段プリチーでトロイからってなめるなよ。要は、どんなにむかつくことも苦しいことも辛いことも吸収して強くなれってことだ。苦勞は若いうちに買えっていうだろう。以上」

「こらーっ、適当な説教してんじゃないこのエセ神父！」

礼拝堂。いつもは信者達が並ぶ席に神父がふんぞり返って腰を下ろし、のんびりと本を読んでいる。その目の前で、縄でぐるぐる巻きにされた状態で正座しているケイが、どう考えても彼女をこき使う適当な理由を述べているとしか思えない彼に対して思い切り喚いた。

「適当じゃない。皆均一な説教の仕方では理解を得られると思ったら大間違いだ。釈迦も相手が変わるたびに例えを変えて説法したらしいしな」

パタンと本を閉じると、神父が呆れともつかない実に冷ややかな目線をケイに向けた。

「大体君が問題を起こすたび、先公がこちらに寄越すのどうにかならないか。実に対応が面倒くさい」

「私だってわざわざここに来るより校長室で停学処分を言い渡される方が楽だわ！」

そう、最初に神父と『語らい』をして以来、何を勘違いしたのか「来栖恵が大人しくなった」と教師の間で専らの噂となっていた。それからというもの、何か一悶着起こすたびにこうしてケイは礼拝堂に送り込まれる羽目になったのだ。さっきも暴れまくって体育教師の手でお縄になったばかり。

「まあ君をこき使う口実ができるしありがたいといえばありがたい」

「……どこから突っ込めばいいのその爽やかなまでの横暴さ。てかやっぱりこき使う気満々なんじゃない。いつも放課後に呼び出しては雑用させてるじゃないのよ！」

「分かっているお暴れる君の短気な性格が悪い。さあじっとして」

神父はそのそりと立ち上がると、ケイの背後に回った。

「何する気？」

「縛られてたら仕事にならないからな」

ザクッ。軽快な音とともに、はらりと縄が足元に滑り落ちた。不意に訪れた解放に、ケイははっと自分の身体を見下ろす。嫌な予感がして恐る恐る振り返ると……鎌を片手にニタリと笑う凶悪面の神父がいた。

「ぎゃああああ！ 死神だあああああ！」

蒼白になって叫ぶケイの脳天に、ゴチンと鉄拳が入った。

「馬鹿野郎、いいか、今度縛られるときには後ろ手になる際、グーの手を向かい合わせにするんじゃなくて並列にしろ。そうすれば手を縛られてもちょっと動かせば隙間ができて抜け出せるから」

「だからどこから突っ込めばいいのよその変な知識」

「いいから、早速仕事だ。床をモップ掛けしろ」

「はいはい、分かりましたよーだ」

見えない角度で舌を突き出し、ケイは清掃用ロッカーに向かった。

どぶ臭いバケツを取り出し、外の水道へ行って水を汲む。

(全く何であんな性悪神父にこき使われてんだろう)

ドボドボと底に叩きつけられる水の音を聞きながら、ケイはぶつぶつと神父に対する呪詛を吐いた。

――一緒に来ないか、『背徳者』の世界へ。

差し出された手と、ぞっとするほど歪んだ笑み。思い出ただけで喉の奥が冷え、背筋が凍りつく。

期待するようなまなざしを向けられる中、硬直したケイの答えは――出なかった。停止した思考回路。渴ききった口から何の言葉も発せられなかった。本能的に危うさを感じた結果の警鐘だったのかもしれない。

そんな彼女を暫くじっと見据えた後、神父が笑みを絶やさぬまま告げた。

――すぐに答えなくてもいいさ。ただ君には素質がある。背徳者の素質が。

可笑しそうにそう言った後、神父は差し伸べた手を引くと踵を返し、すたすたと歩いて行ってしまった。

(知るかつの)

ドン、とバケツを置いて、ケイは波打つ水にモップを勢いよく突っ込んだ。

あの日以来、その話題について両者とも一度も触れることはなかった。しかし神父から幾度となく向けられる意味深な視線が獲物を狙う猛禽類を思わせ、時々ケイは崖っぷちに追い込まれたような気分になる。

ばしゃばしゃ。十分に絞りきれないモップで床を殴るように拭きながら、ケイはため息をついた。

すると、きゃあきゃあと華やいだ歓声がどこからか聞こえてきた。振り返ると、外で神父に群がる女生徒たちの姿が見られた。実に清らかなクリスチャンを思わせる彼女達は、熱心に神父に教を乞うている。そんな彼女達を見下ろし、神父は快く頷いて何やら滑らかな口ぶりで説いていた。

騙されるな少女達！ そいつは聖職者の皮を被ったとんでもなく性悪な極悪人だぞ！ ……叫びたいのをぐっところえ、半ば八つ当たりでケイはモップを動かした（後で床がびしょびしょだと神父に殴られた）。

(そもそも背徳者って何?)

けだるさと高揚感が入り混じり、落ち着きのないざわめきが廊下に漏れる。神父の酷使からやっとのことで解放され、行きかう生徒の間を軽やかな足取りですり抜けながら、ケイは考えた。『背徳——道徳にもとり背くこと (広辞苑第六版)』

電子辞書で引いたときの事を思い出し、そのときと同じようにケイは首を捻った。

道徳に背くといえ、自分も確実にそのカテゴリに当てはまるのを否定できない。小学校で習った「やってはいけません」をことごとく破っているし、今もやんちゃが絶えない。だが辞書の言葉そのままを受けて考えると、いくら自分が派手な例とはいえ、皆多かれ少なかれ道徳に背いているものではないだろうか。

(それとも次元が違うってことかな)

まるで英国の紳士の如く優雅な仕草で差し出された、紳士の大きな手。一般人が日常で行う「ずるい」こととは一線を引いた、後戻りのできない特殊な世界に誘われているのだろうか。

拒もうとしてもそれを頑として許さぬ、神父の鷹のように心を抉る視線。

神父は自分に何を求めているのだろう。あのどろりとした感情が燻る仄暗い瞳は、一体何を見て何を愉快たらしめているのだろう。幾度もそれを探ろうとして、深みに入ろうとするたびにぞっと恐怖に手足の自由を奪われた。それ以上深淵に行ってはならないと、危なげな好奇心に歯止めをかけているのだろうか。

(ま、何にしる厄介な相手に捕まったな。下手したらポリ公より質悪いかも)

次の授業のために、ロッカーから資料集を取り出しながら重いため息をつく。そのまま湿った気分を背負って教室に入ろうとすると。

「ちょっとあんた」

突如鋭い声が降りかかり、振り向くとケイはいつの間にか取り囲まれていて、ぎょっとなった。

「えーと、何でしょうか」

短いスカートにパーマ茶髪、おまけに厚化粧のイカモノなお姉様方が数人。とりあえずおずおずと下手に出てみるも、一人のきつい声でぴしゃんと弾かれた。

「何でしょうか、じゃないよ。あんたにちょっと話があるの、一緒に来い」

「でも私、授業が」

当然だが雲行きがよろしくない。一応申し出(というか脅迫)を断るも、盛大な舌打ちとともに襟首やら腕やら掴まれ、「いいから来るんだよ!」とど根性ガエルのような声で怒鳴られ、ケイはずるずると連行されることになった。

(もう～嫌! 放課後以外に神父と会う理由をこれ以上増やさないで!)

心の中で嘆くが、元より反逆児である彼女の声など誰の耳にも届くはずがない。

実は彼女がお縄になる大半の原因が、誰かしらの理不尽な絡み。本当ならば自分の暴走も正当防衛の範囲にカウントされてもいいはずだ、とケイは常々思っているのだが、短気な性格が災いして彼女に軍配があがることはまずない。

着いた先は閑静な裏庭。そこにはお姉様方とは別に、仲間らしき男子達が待ち構えていた。だらりと舌を出し、姿勢を崩すことで相手を威圧しようとする姿は、彼らの程度の悪さを露にしていた。類に漏れぬそのイカニモな彼らに、ケイはうわっと顔をしかめた。

どんと肩ごと突き飛ばされ、よろめいているところにさっと男達が囲む。淀んだ色の目で、舌からなめるようにねめつけられ、何ともいえない気持ち悪さと吐き気を覚えた。

「てめえ」

一人がひん曲がった口を開いた。

「最近妙に調子こいてんじゃねえの、ああ？」

「はあ……」

「デカイ顔してんじゃねえぞクソビッチ！」

「――……」

「――……」

一人の罵りを皮切りに、一斉に罵声を投げつけられた。それに加勢して、後方からお姉様方の野次が飛んできた。

煙草臭い唾が飛んできた。頭からワーワーと汚い暴言を浴びせられた。ズベ公、尻軽と謂れない濡れ衣で詰られた。蔑みに満ちた笑いと、下種に崩れた口元。繰り返される痛罵、面罵、罵倒――黙ってそれらを身に受けていたケイは、ふっと沸騰した後のお湯の如く、虚無感の中に揺らいでいた。

何で誰も分かってくれないのだろう。

自分は力強さを誇示したいわけでも、目立ちたいわけでも、好き勝手気ままにしたいわけでもない。ただ、必死なだけ。彼女自身も意識上気づいていないが、押し潰そうとする全ての圧力に全力で抗って、私は生きてると叫びたいだけ。ただただ、目の前の見えない大敵と必死で戦い、生還することを望むだけ。生きたいだけ。

うまく生きることができない、そのもどかしさ。喉を掻き切ってしまいたいほどの葛藤。息も詰まるほどの漠然とした想い。誰も理解しない――分かってくれない。

頭ごなしの後ろ指に、背中が火傷の如く、ひりひりと疼く。

「……一緒にしないでよ」

なおもはき続けられる罵詈雑言に消え入りそうなほど、か細い声で呟く。その後、ふつつつと足の裏から、憎悪にも似た灼熱の炎が沸きあがった。

「煙草吸って酒呑んで下半身緩めて都合よく粹がってるだけの中途半端なあんた達と……一緒にしないでよおお！」

わあああああっ。何か壊れる音が耳の奥で響いた。悲鳴に近い遠吠えが口を焼く。

劇場に踊らされるまま、ケイは男達に突っ込んでいった。そこでぷつりと、記憶が途切れた。

ぴちゅん。

一滴の雫が頬に落ちる。その冷たさにゆっくりと瞼を上げると、壮大なキリストの天井画が目映った。直後、かっとな体が火を噴いたように熱を帯びた。

「うう……」

「気がついたか」

あまりの暑さに小さく呻くと、聞き覚えのある声がした。ゆるゆると顔を傾けると、信者達の席にどっかりと腰を下ろし、本を読んでいる神父の姿が。ぼんやりと霏に包まれていた頭がやっと、ああここは礼拝堂かと認識した。ケイは今、同じく信者達の席に横たわっていた。

ズキズキと節々に鈍い痛みが走る。たまらずケイが唸ると、

「無理に動くな、何せ多勢のリンチだからな」

パタンと本を閉じ、神父はのそりと立ち上がった。ケイの額に置かれたタオルを取り、傍らの洗面器で静かに洗う。生ぬるさの除かれたそれが火照った頬に当てられ、心地よさにケイは目を細めた。

「よりによって一日に二回もやらかすとは。まあ今回は一対大勢。さすがにお前に非を押し付けられることはなかった、安心していい。今頃や面は校長室で停学処分を受けているだろう」

「んで……」

「あ？」

(どうして私はここにいて、無罪になってるの)

焼け焦げた喉から、言いたい言葉が最後まで紡がれることはなかった。だが彼女の虚ろな瞳から悟ったのか、神父はふんつまらなそうに鼻を鳴らし、

「せっかくの下僕をみすみす失うなんてもったいない。それに然るべき行為には然るべき処罰を与えねば、愚か者というのは付け上がる」

(げ、下僕……)

どこまでも嫌な言い草。がっかりすると同時に、神父がどのような根回しをしたのか想像するのが凄く恐ろしかった。

――調子乗ってんじゃねえよ。

不意に、絡まれた不良らの罵声がよみがえった。

いちいちこんな下らない暴言に突っかかるなんて、なんて自分は子供で小さいのだろう。自分に対する、蔑みにも似た哀れみを抱いたとき、じわりと奥から苦い思いがあふれ出た。

「いっそ、心まで汚れたら少しは気も楽になれるのに」

涙で濡れ、壊れそうなほど震えた声でケイが呟く。ひく、ひくとしゃっくりがこみ上げ、唇を噛んで抑えようとするたび、体が軋む。痛い、痛い、痛い。全身が斬られていくように、痛い。泣くもんか、悔しい、泣くもんか……。

寄せては返る静寂の中に響くのは、少女の枯れかけた苦しげな嗚咽。しばらく遠い目をして沈黙に徹しているだけの神父だったが、ふっと短くため息をつくとき、

「君の負けん気の強さは、人間的魅力であり長所だ。だがその長所は、同時に逆手に取られやすい。つけ込まれないようにしろよ、不良らからも先公からも、俺からも」

ケイはズッと鼻を吸って神父を見上げた。瞬きをした拍子に、目尻に溜まりかけていた涙がまた頬を伝う。ぐちゃぐちゃな顔の彼女を一瞥し、神父は顔色一つ変えずに続けた。

「言っただろ、コアラのようになれと」

「何ソレ……嫌がらせに大人しく耐えろっての」

鼻声でケイが苦々しく返すと、べちっと額を叩かれた。じわんと衝撃が体中に走り、悶絶。微かに呆れの滲んだ口調で、馬鹿か君はと神父が首を振った。

「悪に毒されるというわけじゃない。世の中の理不尽な攻撃を跳ね返すだけの強靱な精神を持って、ということだ。まあ君の耐え性のなさには黙って岩に知りでも敷かれてると言いたいところだが」

「一言どころかワンセンテンス多い……」

相変わらず容赦のない毒舌ぶりに、なんだか恥じらいもなく泣いた自分の方が阿呆に思えてきた。むしろやすやすと不良らの挑発に乗った自分を、不動の性悪神父を前にしてとてつもなく愚かしく思った。いっそどこかの穴にでも飛び込んでやるから埋めてくれ。

すっかり脱力してしまったケイに向かい、神父が意味深な表情を向けた。

「だが、背徳者というのはそういうものかもしれないな」

背徳者という単語に、ケイが思わずギクツとなる。

「そういうものって……」

「純粹に正義を慕いながら。正義に背かざるを得ない自分に限界を感じ、悪に身を落としたいと願う——だが意固地か臆病か、悪に染まりきれず、常に罪悪感にかたどられた十字架を背負う。だからふとした拍子でどちらに転ぶか知れない。良心に目覚めるか、潰されるか。背徳者は道理と罪悪の境界人、故に案外脆い」

「それでコアラ……」

「そういうこと」

そこで一旦話がまとまりかける雰囲気は漂ったが、ケイは引っかかるものを感じ、

「さっきから聞いてると私、背徳者決定？」

「正確には候補、もしくは原石。君にはなかなかの素質があるよ」

「全然褒められた気がしない……」

「まあ、背徳者は倫理的叛逆児だからな。でも君の場合はまだ十代。将来性に溢れているし、世間を全く経験していないマージナルマンだ。このまま『不良少女と呼ばれて』みたく成功物語を歩む可能性が無きにしも非ず」

「古いなあ」

「だが、背徳者になるのも悪くないぞ。正しい始点は一方向だけからしか物事を捉えられない。しかし捻くれた見方というのは無限にある。背徳感に追い詰められながら、己にあった可能性に巡り会えるかもしれない」

すっと神父がケイに歩み寄り、無防備に垂れた右手を取った。そのまま彼の口元に寄せられ、ケイはぎょっとした。指にかかる熱い吐息が意識を妖しく絡めとる。え、う、と言葉になっていない声を発し、硬直する彼女を神父はじっと見据えた。

「どうだ、来栖恵さん」

一緒に来てくれる気になった？

逃がすまいと彼女を捉える涼しげな瞳。その奥にはどろどろと濁った、一種の執着とも言える

機微の感情が蠢いていた。だがそんな些細なものに気づくはずもなく、試されているものだと単純にケイは捉えていた。ふうむ、と伏目がちになってしばらく考える風だったが、やがて振り切るように再び神父を見やり、

「せっかくのお誘いだけど、保留にしといてよ」

ほう、と神父が片眉を上げた。ケイは一句一句慎重に言葉を探り、強く固い意志を宿らせた瞳を、神父の向こう側に広がる未来へと向けて、自分が今思っていることを伝えた。

「よく考えると何が道理で何が背徳かってよく分からないし。今はそんな難しいこと考えるより、大人になることに専念したい。喧嘩してばっかじゃ身が持たないしね。私のこと誰も分かってくれなくても、もういいの。お天道様に威張れるような生き方ができればそれでいいの」

そう簡単に境界線を踏み越えるほど私は軽い人間じゃないんだから。

きらきらと輝く満面の笑みで、済ましながらケイがそう言い放った。

二人の間の時が自然の力によって止められる。暫く穏やかな沈黙に思考を預け、互いを試すように彼らは見つめ合っていた。だがやがて、堪えかねたのか、神父がクッと喉の奥で一つ笑うと

、

「それならそれで、君の思うようにすればいい。俺にとめる権利はない」

及第点だったのか、満足した顔で頷き、握っていた彼女の手をそっと元の位置に戻した。くるりと踵を返し、少し外に出る旨を伝えて歩き出す。その飲み込まれそうな大きな背中に向かって、ケイが待ったをかけた。

「どうして神父さんは背徳者にこだわるの？そんなに神様を憎んでる？」

出会ったときから心の内に抱き、今の今まで切り出せなかった疑問。今なら聞き出しても許してくれる、そんな気がした。だから、ケイは思い切ってそうぶつけてみた。扉に手をかける寸前、ぴたりと神父が足を止めた。

涼しげな瞳の中に宿るのは、蛇のように這いつくばった、それでいて激しい憎悪。日の光を詰るためにあるような、どろどろとした濁った瞳。いつもその目で聖書の台詞を追い、キリストの磔刑を尊び、十字架の向こうに思いを馳せる。そんな荒ぶる破戒の神父が、そこまでして紙の近くにしようとするものは何か。

ごくりと喉を鳴らして、ケイは鼓膜が破れそうなほどの静けさの中、緊張に突き上げられる鼓動に耐えて答えを待った。ぐっと食いしばる奥歯が痛い。暫く無理やりに止められた空気の流れがふわっと解放されたとき、神父は自嘲気味にふっと笑った。

「勘違いをしてはいけない、君は俺の言ったことを聞いていないのか」

「え？」

「神を慕わなければ……俺はただの冒涇者だ」

そう告げて、例の独特の笑い声を上げながら、神父は立ち去っていった。

一人ぽつんと残されたケイは、雷に打たれたように硬直していたが、身体の奥底に溜まっていた深いため息をついた。ほんの少し掠った神父の唇の感触が、じんと指先に甘く噛み付いてくる。未だに軋む身体に鞭打って、自力で寝返りを打ちながら、暫く先ほどの神父の言葉について考えてみた。

(冒読者.....)

どろどろと濁った瞳の中に垣間見たのは――痛みにも似た、熱くとても切ない感情だった。思わず、じわりと涙が滲みそうになるほどに。暗く醜い分感情の一切が、一瞬で消し飛んでしまうほどの、美しい感情だった。慕いながら憎む、そんな矛盾に対して自分はとてつもない親近感を覚え、また哀れにさえ思った。慕っているのに憎むしか道が残されていないことが、どうしてもやるせなかった。

神父の言っていた背徳者の本質とは何か、少しだけ理解できたような、それでもやっぱり理解できないような。興奮にも似た浮遊感に思考がはっきりしなくなり、奇妙な感覚に陥る。

「でも、私は負けないもん.....」

自分は絶対背徳者の世界に入らないようにしよう。ケイはそう決心した。慕う中で憎むなんて悲しすぎて心が壊れそうなこと、私にはできないもの。どうせなら真正面から日の光を慕えるようになりたい。背徳者の世界から少しでも逃げ切るために、自分をもっと自分の中の確かな部分を磨いていかなければならない。負けてたまるもんか。

「長い戦いになりそうだわ.....」

申し出を保留という形で断ったとはいえ、これで神父との縁が切れるわけでもなし。たぶん、いや確実にこき使われる毎日が続くのだ。段々と脳内を支配する憂鬱に、さっきまでの無敵な気分が萎えていくケイだった。

「長い戦いになりそうだよ.....」

一転の曇りのない、光を反射して青く輝く空。一匹の鷹が弧を描いて美しく飛ぶ。その堂々たる泣き声に耳を傾けながら、神父は可笑しそうにぼそりと呟いた。その口は、ゆるりと鋭い三日月の形に歪んでいた。

Fin

参考曲 「1 / 2 神話」

参考資料「高校倫理 実教出版」

あとがき

宗教臭くなってしまいましたでしたが読者様の信仰の自由になんら影響がないものでありますのでご安心ください。はじめまして、山吹です。『1 / 2 神話』でぴんときた方、私と語り合える方だと思います。ぜひぜひ一度は語り合ってみたいものです。

超能力者の誕生

諸木 夕

思ってもみなかったことが突然起きるというのは人生において別段珍しいことではない。ただ、それが良い方向に向かうか、悪い方向に転ぶかは人それぞれである。

ついさっき、俺が珍しくやる気になって勉強していた時だ。

うっかりして消しゴムを床に落としてしまった俺は、軽く舌打ちしてから落ちたそれを拾い上げようと手を伸ばした。だが次の瞬間、驚いたことに消しゴムのほうが自分から俺に向かってものすごい速さで飛んできたのである。消しゴムがそんなアグレッシブな動きをするなんて（というか自分から動くなんて）予想しているはずもない。当然、俺は消しゴムの弾丸を避けられず、弾丸は俺の眉間に見事命中。俺の眉間にはくっきりと消しゴムのシルエットが刻まれてしまった。

最初、俺は訳が分からなくて、怖々と消しゴムを遠目から観察していた。しかし、かなりの時間見つめていても消しゴムは全く動く様子を見せなかった。俺は「夢でも見ていたのか」と思い、再び消しゴムに手を伸ばした。すると、とたんに消しゴムは俺のほうに向かって飛んできた。俺は思わず「うわっ！」と声を上げて、とっさに手で顔をガードした。幸い、2度目の直撃は避けられ、消しゴムは俺の手の中に納まった。消しゴムを握りしめた手のひらを恐る恐る開いてみる。自分から動く様子はないようだ。

ここで、俺はなぜかもう一度消しゴムを床に置いた。恐らく好奇心が恐怖に勝ったのだと思う。そして再度、消しゴムを手にとろうとする。今回は顔と手のひら、そして消しゴムが一直線にくるようにして、消しゴムが顔に当たるのを防いでいた。思った通り、消しゴムはまっすぐにこちらに飛び、パシッと小気味の良い音をたてて俺の手のひらに吸い込まれた。その時俺は確信した。

この消しゴムは俺の意思によって動いている！

なんてことだ。俺は俄然、この衝撃の事実を誰かに伝えたい衝動に駆られた。とりあえず一番仲の良い友人Aにメールすることに決めた。俺はケータイを取りに行こうと立ち上がり後ろを振り返った。

その瞬間、俺は2度目の眉間への攻撃を食らうことになった。今度は前のそれよりも数段威力が高かった。あまりの痛みに膝からくずおれた俺の目の前に落ちていたのは、俺が取りに行こうとしていたケータイそのものだった。

そんなことがあってから約3時間後。俺は部屋の中でワンマンキャッチボール（俺の顔面めがけて一直線に飛んでくる剛速球をグローブで華麗にキャッチする遊び。向こうにボールを投げても、俺がボールを手に取りたいと思えば勝手にこっちに戻ってくるのだ）をしてみたり、ティ

ッシュを手品みたいに次から次へと箱から飛び出させたり（飛び出したティッシュは俺の顔にピタピタ張り付く。鼻か口が塞がらないように注意が必要）と、この能力の特性を活かして楽しい超能力者ライフを満喫していた。

楽しい。今の俺はただただその感情で満たされていた。人生でこんなに浮かれたことあっただろうか。いや無い。よし、もっと面白い遊びを開発することにしよう。この世界で、超能力者であるこの俺にしか遊べない遊びを。

……とは言っても、この能力はけっこうなエネルギーを使うらしい。さっきから俺の腹は鳴りっぱなしだ。ちょっと腹ごしらえをしよう。そういえば、つい怠け癖が出て、ここ3日ほどはカップ麺ばかり食べ、まともな食事を作っていなかった。確か冷蔵庫に野菜と冷凍した肉はあったはずだから、ちょっと豪華なものでも作るとしよう。今日は俺という超能力者の誕生日なのだから。

さてと、包丁はどこにしまったんだっけ？確かここだったかな。

あとがき

初めまして、諸木と申します。小説を書くのは実質今回が初めてです。どうかお手柔らかにお願いします。

この小説の着想はtwitterでのある方のつぶやきでした。最初は幽霊ネタにしようと思っていたのですが、自分の能力でやっちゃうほうがいいかなーと思ってこうなりました。締め切り当日に書き始めてまさか間に合うとは思っておらず、わたくしも困惑しております。

今締め切り10分前です。そろそろ本当にやばいのでこれくらいにしておきます。読んでくださってありがとうございました。

シヨタ（もしくはロリ）のお遊戯

鯛漁逆冊

どうしたの？ お姉ちゃん？ 顔色わるいよ？ そんなんでボクと遊べるの？

そうだ！ お姉ちゃんにきかせたい、とっておきの話があるんだ！ とりあえずきいてよ。

三日前のことかな？

ボクがあるマンションの屋上に行くと高校生くらいの人がフェンスの向こう側で立っていたんだ。

「なにしてるの？」

ボクがきいたら「君に関係ないよ」って教えてくれないから、こうなりゃなにがなんでもでも答えてやるぞ！ て思ってきいてみたんだ。

「バンジージャンプ？」

「……そうだよ、紐なしのね」

ボクは答えが当たっていたし、うれしくてバンジージャンプについて知ってること、そのお兄ちゃんにいっぱい教えてあげたんだ。お兄ちゃん、「博識だね」ってほめてくれたんだよ。

「どこで教わってきたの？」

お兄ちゃんがボクにきいてきたからボクは親切に答えたんだ。だってそのとき、うれしい気分だったんだもん。

「インターネットだよ」

それからインターネットのこともいっぱい教えてあげたんだ。バンジージャンプのことは「ウィキペディア」で調べたこと、あとブログもやってそのおかげでたくさんの友達ができたとともに。

そしたらお兄ちゃんがこういったんだ。

「ブログは気をつけたほうがいいよ」

「なんで？」ってボクがきくと今度はお兄ちゃんのほうが教えてくれたんだ。

お兄ちゃんはブログのなかで女の子になりきっていたんだって。ある日そのことを知っているお兄ちゃんのお友達とけんかしてその友達がクラスみんなにブログのこと大声でばらしちゃったらしいんだ。そしたらクラスの人たちがお兄ちゃんをいじめるし、ブログにお兄ちゃんの名前やら住所やら載せちゃうし、電話番号やメアドもばらしちゃったから迷惑電話や迷惑メールがくるはで毎日大変だったんだって。ひどい話だよな。

「ネットで調子に乗っちゃったからこんな目にあっただ。君もネットだけで満足しないで、現実の世界にとことん向き合ったほうがいいよ」

最後にお兄ちゃんはボクにこういったんだ。

そしてボクはお兄ちゃんにきいてみたんだ。

「それって、シュミレーションゲームばかりやってないで実際にやってみろ、ってこと？」
そしたら「そうだよ」って答えてくれたからちょっと考えていたんだ。

「なにかやってみたいことがあるのかい？」

なんか悩んでるのが口に出ちゃったからかな？ お兄ちゃんがボクにきいてきたんだ。そのときボクちょっと驚いちゃったから思わずやってみたいことを口にしちゃったんだ。

あ、お姉ちゃんにはいわなくてもわかるよね。 ていうか、すごく恥ずかしいことなんだ！ だからあまりいいたくないんだよ！ ほかの人にはいわないでよ！

実際にそれきいちゃったお兄ちゃんも「えっ……」って戸惑ってたし。

「ほっ、ほかの人には内緒だよ！ ボクだけの秘密なんだから」

とりあえず内緒にしてもらえるように頼んでみたんだ。なにもいってなかったけど、内緒にしてくれるってことだよ？

知ってると思うけど、ボクがやりたいことってお兄ちゃんに協力してもらえばできることだったんだ。だからお兄ちゃんに遊んでもらえるか頼んでみたんだ。そしたらお兄ちゃん黙って屋上から走っていなくなっちゃったんだよ。結局バンジージャンプやらずにいちゃったなー。顔真っ青にしてたからトイレかな？

そのあと、いくら待ってもお兄ちゃんはこなかったんだ。なにもいってなかったから、返事は「はい」でいいんだよ？

でもね、そのお兄ちゃん、死んじゃったんだよ。

なんでも、イッサンカタンソチュウドク？ で死んじゃったんだって。

お巡りさんがいうにはお兄ちゃんの遺書もあるけど誰かに殺されちゃったんだって。

遺書どうりじゃなかったからかな？

あれ、まだ顔色が悪いね？ 平気？ 大丈夫？

……なんもいわないってことは、大丈夫だね？

じゃ、遊ぼうか？

「英雄にならないか」と誘われた男

鯛漁逆冊

「突然ですが、君には死んでもらいます」

「なんでですか？」

目の前のガキがなんかほざいてきた。ものすごい理不尽だ。

普通としか言いようのない一軒家の二階の、普通としか言いようのない俺の部屋には、俺と小さなガキとの二人がいる。そして俺はそのガキのことを知らない。

「じゃ一逆に聞きますが、なんで生きていますか？」

ガキが首を傾けながら聞いてくる。

見かけだけから判断してガキはおそらく九から十一歳だろう。あどけなさの残る可愛らしい顔をしている。髪は黒、瞳も黒、たった一枚で全身を覆っている服代わりの厚手の布やなぜか生えている背中の翼も黒かった。一言でいえば黒い天使だった。わっかはないが。

「……なんでだろうな？」

「でしょう。つまり君はここで生きる必要がないのですよ」

おまけに腹の中も黒そうだ。

「俺の他にも価値ない人間はたくさんいると思うぞ。例えば、オタクとか？」

「すごいですね、今の発言で世界中のオタクを敵に回しましたよ。いくら『萌え〜』としか言えないクズだからって、数多の軍勢を相手に、君は戦えますか？」

おい、こいつの方がさらにひどいことを言っているぞ。そしてオタクの皆さんごめんなさい。俺もオタクです、たぶん。

「でもこの世で一番無駄に人生消費するのは君なんです。なぜだか分かりますか？」

「……どうしてか教えてもらおうか」

彼女（ガキのこと）の会話を要約するとこうだ。

この世界（人間界）の人間が死ぬと地獄界か天界に連れて行かれる。（これは他の二つの世界でも同じ）しかしそれぞれの文化の発展具合の違いから、みんながみんな発展途上はおろか文明すら現れていない地獄界を避け、天界か人間界に行きたがるそう。 （人間界の住人が持つ地獄のイメージは完全に間違っているらしい）しかし昨今になってようやく力を持ち始めた「王」の役をこなす一族が現れた。それがこのガキの一族である。

しかし文明すらおいていない世界なので彼らは自分の世界のことですら無知であった。その「王」が民を率いて文化を発展させるのには力不足であった。

「……で猫の手も借りたい思いで人間界にきて、俺に死んでほしいと」

「そういうことです」

「お前は馬鹿か、なんでただの一般高校生の俺に頼む？ 他に頼るところがあるだろ！ 大学の

教授とか」

間違っているとはいえオタクという言葉を知っているんだ。大学が「頭の良い集団の集まり」ってことぐらい知ってて当然だろう。

「それが無理なんですよ！ 『キョウジュ』っていうのはあくまで人間界の法則に詳しい人でしょ？ 人間界と地獄界とじゃ物理法則とかすら違うんですから！ 『法則違うと無理』って言われましたよ！」

なるほど、一理ある。物理法則が違ければ彼らの知識や技術も役に立たないだろう。というか地獄界の存在信じたのか、その教授は？

「だいたいこの世界は自分たちの世界の法則を解明させ過ぎなんですよ、そのせいでほとんどの人が自分の知ることが絶対だと信じ込んでるし、知識人に関してはあのキョウジュ以外、地獄界や天界の存在を真っ向から否定する。あーそのせいでどんなに損することか。

まず人間界の住人がほかの世界に行く技術が完全に消え失せた。私はこうして安全に人間界に行けるのに、人間界の住人は死ぬ以外に他の世界に行く手段がない。

さらに仮に死んでも死後の魂は前世の記憶をかすかに覚えているから、子供のころに復習すれば前世の記憶を引き継げる。でも人間界の住人はその発想すらないから死んだらまた人生一からやり直しの大損を繰り返す。

それもこれも人間界しか世界がないと思っているからだ。器量が狭いぞコノヤロー！」

怒るな、もの投げるな、ってナイフ投げるな！ 当たったらどうすんだ！ ホントに殺す気か！

ようやく止んだ。どうやら見た目と実年齢は同じようだ、三十秒ほどの殺意の猛攻はどうか避けられた。ガキは肩を上下に動かしながら話を続ける。まだ終わらないんだ。

「でもあのキョウジュはこう言っていました。『だったら未知の現象から法則性を見つけられる頭の柔らかさを持つ人に頼んだらどうかな？ 例えば高校生とか』って」

ホントにその教授は頭がいいのか、わるいのか、分かんないな。もしかしてロリコン？

「それでちょうどよさそうな高校生を探していたら、暇している君を見つけました」

それで俺に目をつけたって？ ふざけるな。

「それでいろいろ調べてみたら、君ってガッコウの成績結構いいんですね。学年四位。絶対こんなつまらない世界で終わる人物じゃないですよ、君は」

マジで調べたのか、怖いな。てか過大評価しすぎ。

「あと、君はこの世界における法則をバリバリ無視した『魔術』を信じてるんですね。なんです？ この『エデンの書・ゼウス編』って」

「うおおおおおおおい！ なんで二つの意味で中二の頃のものを君が持ってんの？」

怖い、ホントに怖い、マジで怖いぞこいつ。

「返せ！ 早くこっちに渡せ！」

頭を下げて頼み込むのは俺。あれはホントに危ないものだ。

頭を下げたままガキの方をチラッと見ると、人を見下したような笑顔があった。なるほど、地

獄界の住人は悪魔と呼ぶのだろう。

「返してほしいですかー？ だったら……死んでください」

そう来たか、だが俺は死なない。

「ぎ、残念だな！ そ、そりゃそこまでは、恥ずかちくねーんだよ！」

俺はぎりぎり勝利を確信した。俺はこのガキに勝ったんだ。なんの勝負かかなり疑問があるが、とにかく俺は勝ったんだ。

しかし、その刹那、

「『ポセイドン編』・『ハデス編』……」

「ぎゃあああああああ！ なんでそれらまで！」

「ふふふふ、弱点(これら)を大切にするなんて、君はなんて愚かなのでしょうか」

まさか厨二病潜伏期の『ゼウス編』のみならず、発症期の『ポセイドン編』や末期の『ハデス編』まで相手の手中にあるとは。

「さあ、もう一度聞きます。これらを公開してほしいなら、私たちに協力しなさい」

それってつまり死ねってことだろ？ どうすりゃいい？ 地獄行きを防ぐ方法は二つある。

一つ、『エデンの書』の公開を認める。しかしこれは気分的に死んでしまうだろう。却下。

二つ、彼女を口止めする。しかも口で言って素直にうなづく性格でないから、力づくになるだろう。だがそれも危険だ。ばれたら捕まる。ばれなきゃいい？ いや、ばれない自信がない。

……あれ、俺ってどう転んでも死ぬしかなくね？ ウソだろ、こんな理不尽なことがあるかよ。なんで俺なんだよ。なんで俺以外の奴じゃないんだよ。

……ん？ あ、いいこと思いついた。

「おい、お前」

「どうしたんですかあ」

俺が呼びかけると、ガキは余裕に満ちた声で返事をする。彼女は勝った気でいるのだろう。実際俺は彼女に勝てない。しかし俺が負けない方法がある。

「いいことを教えてやろう」

絶対勝てない相手に負けない方法それは、

「俺より適任なやつがいるぞ」

戦わず、他人に全部押し付けることだ。

「どういうことですか？」

彼女は相変わらず余裕の表情を見せる。まあ、劣勢ではないしね。

「俺の友達にロリコ、お前みたいな子が好きなやつがいるんだ。お前の頼みなら聴いてくれると思うぞ。しかもこの人間界に不満を持っている。成績も俺より上の第二位。どうだ、俺より適任だろう？」

「本当ですか、それ？」

彼女は俺の話に喰らいついてきた。それもそうだろう。言うことをきかない俺より、忠実で優秀な奴の方がこいつもいいに決まっている。こいつの世界もかかっていることだしな。

「本当だ」

「じゃ、その人の場所教えてください」

勝った。内容は試合放棄だが俺は勝ったのだ。

そいつの場所を教えると、そのガキは黒い翼を使って飛んでいった。「あの翼、飾りじゃなかったんだ」と思いながら俺はガキの後ろ姿を見送った。

その後ガキは俺の前に現れなかった。俺がそのガキに教えた奴はその後行方不明となったが、ただの偶然だと考えることにした。そしてあのガキのこともただの夢だと思うようになっていった。

そして十三年後

*

「久しぶりですね」

黒髪黒目黒翼の女性が俺に話かけてきた。時間は早朝六時、一人暮らしのアパートの一室での出来事だ。

「私のこと、覚えています？」

「えっと、地獄界からきたあのガキ？」

正直自信がなかった。八年前と雰囲気は全く違うのだから。たしかに美人といえる美しい顔には八年前の面影が残っている。しかし十三年前と明らかに違うものがあつた。服だ。

八年前は厚手の黒い一枚布だったのに対し、今ではカラフルな浴衣のようなものを着ている。十三年でそこまで変わるものだけ？

「貴方が教えてくださった方のおかげで、私たちの世界の法則がたくさん判明し短期間での発展を可能にすることができました」

俺はただ感心していた。たった一人の高校生が文明のない状態から服をつくる技術が存在するレベルにまで発展させることができるのかと。

「本当にあの方を私に教えただいてありがとうございます」

少女は行儀よくお辞儀をしている。十三年前じゃ創造できない姿だ。いや、当たり前か。

「いや、どうも。あー、あいつは今どうしているの？」

生贄に捧げたとはいえ一応友達だったのだから、単純に気になった。

「あの方は今、急激な発展による問題の解決に一生懸命です」

さらに驚いた。そこまで立派にやっているとは。

しかしさらなる衝撃が俺を襲う。

「妻としてはもう少し体を大事にしてほしいんですけど」

「……え、妻？」

「はい。まー実際に結婚するのはまだ先ですけど、結婚そのものは決まっています」

「ふーん、そうなんだ」

そのあと彼女は十三年前の無礼を詫びていたが俺の耳に入ってこなかった。

彼女が帰った後、俺は一人で考えていた。

もしかしたら、世界を発展させた偉人として尊敬されたのかもしれない。気前のよい美人と結婚できたのかもしれない。だったら.....

一般企業でいまだ上司に頭下げてる独身は眩く。

「地獄界に行ってりゃよかったかなー」

〈あとがき〉

ただいま締め切り前三十五分前。本文および推敲の任務完了、しかしあとがきに空白有り。応援を要求する。

あとタイトルが決まらない。どうしよ。

斯くして世界は揺るがない

雛夏至

「世界征服をしようと思うの」

七月も中旬に迫った昼下がり。大学のカフェで彼女――三咲朱音は唐突に、けれどもどこか必然的にそんなことを言い出した。

「……眠っているのか」

「寝言じゃないわよ」

「夢遊病か」

「だから寝てないって」

朱音はスッと息を吸い、続けた。

「いい？ わたしからすると、いま世界は重大な危機に瀕していると思うの。戦争、飢餓、自然災害、天変地異。それらは確実にこの瞬間も地球の人口を削っているわ。だから、わたしがこの世界を統治してその危機を脱しようというわけ」

「どういう楽観的な物の見方をしたらその残念な思考に辿り着くんだ。一度医学部のやつに頭を調べてもらうことを強く推奨したい」

嘆息し、俺はカップに残っていたコーヒーを飲み干した。

「第一、世界征服なんてしても、それで解決するのは戦争が終わるってことだけ。それに伴う食糧不足の解消なんかも考えられるかもしれないが、自然災害や天変地異なんてものはどうしようもないだろう」

「大丈夫よ。きっと世界の科学力が統合すれば災害を防ぐバーンとした装置も発明されるから！」

バーンって……。時々――というか正確にはかなりの頻度で思っているのだが、本当にこいつの精神年齢は大学生に達しているのだろうか。

しかしまあ信じがたいことに、この三咲朱音、実は理学部における学年別実力テスト第三位という驚異的な学力の持ち主だったりする。そりゃあ最下位がいれば一位も三位も出てくることは百も承知なのだが、こんなやつが三位を取っていると、自分の頭が欠陥品なのではないかと疑いたくもなる。

いや、すこし論点がずれたな。いまは俺の成績の悪さをこいつのせいにはしている場合ではない。とりあえずはこの頭の弱い天才を説得することが重要なのだ。

俺が止めずとも他の誰かが止めると思うが、やると決めて計画を立ててしまうと本当にこいつはそれを実行しかねないからな。

「三咲」

「――で、この壮大な作戦が成功した暁には、NASAにロケットを打ち上げさせてわたしの銅像を月に飾って――って、なによ今いいところなのに」

俺の思考中も延々と自分の世界征服について語っていたらしい三咲は、ムスツとした顔でこちら向いた。

「三咲、俺が思うに世界征服ってのは、いくらなんでもスケールが大きすぎるんじゃないか？」

「いいのよ、そのくらい大きな目標じゃないと、やる気も出ないでしょ」

「いやいや、だが世界を手に入れる前には、この日本をまずは治めないとダメだろ」

「まあ、そうね。その辺りも抜かりはないわ。最初は日本、その次に韓国、マレーシア辺りを落としていって――」

「で、その日本を手に入れるにはまず都心を押さえないといけないだろ。つまりは東京だな」

「まあ、そうね。けどそれも大丈夫。その辺りも抜かりはないわ。まずは――」

「だがその前に、他の地域もまとめておいた方が後々楽だろうからな。まずはこの町の支配から始めたらどうだ？」

「え、ええ……わたしの考えにはなかったけど、そういうのもアリ、かな？」

「しかし町をひとつ支配するにしても一人では難しいだろうな。協力者が必要になってくるはずだ。そこでだ三咲、どうだろう、まずはこの俺を落としてみるというのは」

「ええ、そうね……って、ええええええっ！」

いきなり奇声を上げて立ち上がった。

「な、なな、なにをいきなり言い出すのよ！ いきなりすぎよ！」

「いきなりの度合いではお前の右にでるやつは早々いないと思うが……まあなんだ、友達ひとりの人心くらい掌握できないで、世界征服なんて語るなって話だよ」

「ともだち……うう、結局ともだちどまり……」

「ん、なに俯いてんだ？ そろそろ授業始まるだろ。行こうぜ」

俺たちはコーヒーカップを片付け、カフェを後にした。

講義室までの道のり、三咲は妙に溜め息ばかりをつき、先ほどまでのような世界征服を語る元気はどこかへいってしまったようだった。

ひとりの人間が抱く思いは、わずかながらに世界に影響を与えている。

それは流行だったり、発明だったり。

感動だったり、絶望だったり。

夢だったり、愛だったり。

でも、たったそれだけのことで揺らぐほど、この世界は小さくない。

――斯くして、世界は揺るがない。

～あとがき～

どーも雛夏至です。正直短編ってすごく苦手。だからといって長編小説も完成させたものはごくわずかなのですが。

そんなわけで約二ヵ月ぶりに（こういった形で掲載されるのは二年近く間を空けているのですが）書いた小説です。楽しんでいただけただしょうか？ 誰かの心の片隅に1フレーズでも文章を残せたら、それで満足ですかね。

本当にありそうで怖い話

落谷アツムネ

「オサム、このままじゃ大学は難しいぞ？」

三者面談で渡されたのは、没収されていたマンガと厳しい現実だけだった。

「...はあ」

母さんの車に揺られて、窓の外の景色が泳ぎ回る。ふと、金魚になりたいと思った。彼らのように与えられた餌を喰って泳ぐだけで一生を終えるのも善いかもしれないな、と。

「進路、どうするつもり？」

「.....就職しようかな」

「本気？」

「うん」

友達の父さんが居酒屋をされていて、いざという時は働かせてもらう約束をしていた。たかが口約束ではあったけれど。

「そう簡単に正社員になれると思わないでね」

「分かってる」

遠回しに進学を強制している事くらい、十七年も子供として過ごしていれば口調だけで親の本心など容易くわかってしまうものだ。

「.....切ないな」

あれは小六の十月だったか。隣のクラスの担任にいじめられていたことを担任に相談して「死にたい」と打ち明けたときの返答が凄かった。

「大丈夫。人間、そんな簡単に死なないから」

呆れた。目の前の人間が、急にタンパク質の塊に見えた。

そんなわけでそれ以来、先生というものを信じたためしがない。中三の時の担任は少しだけマシだったが、まあそれだけ。.....よく考えてみれば、人のことをタンパク質の塊だなんてのたまう小学生をだれが快く思うんだか。

「ただいま」

そう言えば世の中は年末で、茶の間では下宿先から帰っていた兄が音楽番組を見ていた。

「おかえり」

「あ、ああ」

春休みと盆と正月、すべて足したところで年に四十日ほどしか兄とは顔を合わせない。だからここ数年、兄との距離感は全く分からなくなってしまった。

「.....風呂、入るか」

湯船につかると足先から熱に体を犯されてゆく。ザラザラした喉を舐めまわすように、たっぷ

りと湿った空気が肺を満たした。

「ふう」

最近、心から安らげる場所は本当に少なくなっている。クラスメートとバカ騒ぎしている時とか、自分の部屋でグダグダしている時とか、こうして温泉まがいの湯の中で一日を振り返る時とか。前はよく女友達とメールしていたけど、向こうに恋人が出来てからは自分から身を引いた。申し訳ないと思ったから。

「何かオサム、今日は元気ないんだな」

台所で母さんと兄が立っているらしく、話し声が漏れてくる。

「ほら、今日は三者面談だったから」

「そんなショックなこと言われたの？」

「先生にね、『本当にお前に小説家の才能があったら今頃とっくに有名になってる筈だ』って」

「うわぁ可哀想(笑)」

「まあ、そういう事。あんまり触れないであげてね」

「わかってるよ」

別に応援してくれとも期待してくれとも頼んだ覚えはない。ただ、これほどまでに無機質にあしらわれてしまうと流石にキツイものがある。いっそ、この中で溶けてなくなれたら善かったのに。

髪を洗って、体を洗って、風呂から上がったのが九時くらいだったか。晩ご飯は何だったのか、それどころか食べたかどうかさえ思い出せなかった。

眠りに入る五歩手前の虚ろな頭で、ハンス・ギーベンラートと自分を重ねてみる。ヘルマン・ヘッセの『車輪の下』は、今日の僕を象る有象無象の中でも特に大きな割合を占めていた。主人公のハンスはレベルの高い神学校に入学し、思い描いた理想と現実との格差に苦しみ、なれの果てに酔った勢いで川に飛び込み十数年の生涯を閉じる……。両親に高校を決められてしまった点は違えど、今の僕はハンスの人生をそのままなぞっているようなものだった。

『学校と、親や二、三の教師の残酷な向上心とが、純粋な子供たちの、その前にあどけなく広げられた魂を、何のいたわりもなく踏みにじる』そんな遠い昔のフレーズがおぼろげながら未だ脳裏にこびりつくのは、僕がどれだけその文章に感銘を受け、引き込まれたかの証明に他ならない。

いっそ酒でも飲んで、その辺の川にでも身を投げてしまおうか。太宰治のように愛人など連れだって、欄干よりフウワリと下駄で蹴り上がって。何と粋な最期でしょうかね。

こうして僕は昨日と同じように目を閉じる。朝が来るのを止める事など出来る訳もなく、せめて夢の中だけでも理想に満ちた自分に会える事を願って。

留帝紫亜（るていしあ）は、一旦そこで葉をはさんだ。

「……オサム、か」

この作品が書かれたのが二〇一三年、今から四半世紀ほど前のこと。その頃の高校生がみんなオサムのように過ごしたわけではないのだろうけれど、社会の授業で「狼狽の十年」と説かれるあたり生活はあまり安定しなかったのかもしれない。

「ルティシア、赤ペン持ってないか？」

隣の席の銃虞理斧音（がんだりふおん）が身を乗り出してくる。

「ヤダ。あんた借りたモノすぐ失くすじゃない」

「今回は大丈夫だって」

「……凸瓊（でこ）ちゃん、ガングリフォンが赤ペン借りたいてさ」

小柄な女の子が顔を上げる。

「バカ。何でアイツに振るんだよ」

「もしかして嫌だった？」

「いや、そんなことは……」

「はい、どうぞ。別にもう一本あるから、そのまま貰っちゃっていいよ」

「あ、ありがと」

彼女は何もなかったように自分の席へ戻って行った。

「オレ、大切にする」

「よかったね」

幼馴染の恋の行方は見ていると楽しい。……自分の思いが絶対に届かないのは、少し胸が痛いけど。

もしも今オサムと話ができたなら、この苦しみも少しは和らぐのかな……。

彼女は、ファンレターを書こうと思った。

・あとがき

『本当にありそうで怖い』の解釈をどうするか、読者に任せる形に書いてみたつもりですが、ちょっと意味不明だったかなと反省。

高校二年の時に模試で酷い点を取って、その結果が返ってきたときの三者面談が軽くトラウマ。あんな空気は二度と味わいたくないものです。

恋愛 (Puney Loran Seapon)

恋愛

Puney Loran Seapon

「つまねーな」

映画館で、木村(きむら)勇氣(ゆうき)はそう呟く。社会人になり立ての彼が見ているのは今話題の、主人公の男の子と幼馴染の女の子が、紆余曲折を経て結ばれるというストーリーの恋愛映画だ。感動のラストシーンに差し掛かった時の、勇氣のそんな発言に、周りで見ていた人、特に勇氣の隣で座っていた勇氣と同じくらいの年の女性が勇氣を睨む。この女性は、伊藤(いとう)まゆみ。勇氣の幼馴染だ。

「……」

「……？」

無言でまゆみに睨まれ、勇氣はキョトンとする。そんな勇氣の反応に呆れたのか、まゆみは溜息をついた。

「お……面白かったね」

日がそろそろ落ちる頃、映画を見終わって、映画館から出た時、まゆみが勇氣にそう言った。まゆみの方が勇氣よりも頭半個分低く、まゆみは勇氣の顔を少し見上げる。そんな彼女の発言に、勇氣は首を傾げる。

「そうだったか？ あんなの、ただ単に自分と同じように冴えない男が、リア充になっていく様を見るだけの映画だっただろ」

「そ……そんなことないよ。特にラストのシーンなんか、すごくよかったと思わない？」

「ん？ ああ、喧嘩別れしたあとの、主人公の男が女の唇を強引に奪うシーンか？ あれはリアリティーがねーな。普通、喧嘩した相手に許してもらいたければ、土下座で平謝りが一番じゃね？」

「ゆ……勇氣、もう少しあんたはロマンチックな展開を……映画なんだし」

だんだん心が折れかかってきていたが、まゆみは何とか勇氣に恋愛映画の良さを知ってもらおうと、そう言った。だが、

「そこなんだよな。恋愛映画だからって、最後は必ず二人が結ばれるってのが気に入らん。いっそ皆別れてしまえばいいのに」

というセリフに、まゆみの心は完全に折れた。

「……はあ」

「ん？」

溜息をついたまゆみに、勇氣は再び首を傾げる。どうやら、彼は会話の地雷を踏んでしまったことに気づいていないようだ。

「と……ところで勇氣」

気を取り直し、まゆみは勇気に可能な限りの笑顔を向け、話しかける。なにせ、今日は特別な日なのだ。まゆみとしては、今日は勇気とできるだけいい雰囲気になるように過ごし、なんとしてでも勇気から『あの言葉』を言わせたかった。

「お腹空かない？」

だが、まゆみが頑張って言ったこのセリフも、勇気には通用しない。

「……そうか？」

「わ……私はちょっとお腹すいたかな。勇気、なんか奢って」

「そんな金ねーよ。つーか俺、もう帰るわ」

勇気のそのセリフに、まゆみは衝撃を受けたような表情をする。まだ夜は始まったばかりなのだ。しかし、勇気は彼女の気持ちに気づいてはいないようだった。

「……え、ちょ……ちょっと、まだ八時にもなってないじゃん！ それに、明日は休日だし！ もう少し一緒に」

「俺は休日でも早寝早起きする、健康的な毎日を送る男なんだよ。今から帰らないと、十時までに布団に入れないだろうが」

「で……でも、少しくらいの夜更しなら」

「分かってないな。その『少し位』が生活の乱れを……」

まゆみは必死になって勇気を引き止めようとする。だが、彼女の必死の抵抗も虚しく、勇気は『健康的な生活』について、得意げに話し始めた。

「……というわけで、まゆみももう少し健康的な毎日を送らないと、そのうち後悔するぜ？ 気をつけろよ」

そう言い終わって、満足したように勇気は自宅へと向かおうとする。

「ゆ……勇気！」

そんな勇気をみて、まゆみは慌てて勇気の服の袖を掴んで引き止める。

「ちょっとあんた、今日が何の日か分かってる？」

少し強引だったが、まゆみはこんな方法で勇気に今日が何の日か、を思い出させようとする。幼馴染なのだから、流石にこれで分かるだろう、と思ったまゆみの耳に信じられない言葉が飛び込んできた。

「ん？ なんかあったっけ……って、どうした？」

まゆみはわなわたと肩をふるわせていた。そんなまゆみに何かあったのかと勇気が顔を覗き込んだ瞬間だった。突然、風船が破裂したかと思うような音がしたと同時に、勇気の視界がぶれる。気づけば、勇気はあさっての方向を向いていた。大きな音だったのか、周りにいた人が、何かと二人を見ている。どうやら、勇気はまゆみに顔を思いっきりひっぱたかれたようだ。

「勇気のバーカ！」

勇気が今の行動について抗議する暇も与えず、まゆみはなぜか少し涙目で勇気に向かってそう叫んだ。そして、呆然と立ち尽くす勇気をその場に残し、まゆみは早足で何処かへ立ち去って

しまった。気のせいかな、涙が見えたような気がした。

「……ただいま」

ここは勇氣の家。あれから映画館付近を探し回ったが、結局まゆみは見つからなかった。勇氣の家の隣はまゆみの家だが、明かりがつかないところを見ると、どうやら家にも帰っていないらしい。

「あれ、おかえり勇氣。思ったより早かったね」

居間から、勇氣の姉、絵里(えり)が顔を覗かせた。少し驚いたような表情をしている。

「ただいま。姉さん、どうしたの？」

そんな絵里の様子に、勇氣は首を傾げる。勇氣としては、まゆみを探していたので、予定していた時間より、大夫遅くなってしまった感じがする。なぜ「思ったより早かった」なのだろうか。

「……？ 今日帰ってこないと思ったのに」

首を傾げた勇氣に、絵里も同じように首を傾げた。

「そんな訳あるかって。ただ映画見に行っただけだぜ？」

「……えっと、勇氣、今日何の日か覚えてる？」

絵里は訝しげな目つきで勇氣を見る。そんな絵里に対し、勇氣は再び首を傾げた。

「姉さんまで……。教えてくれ、今日何の日だ？」

「……まさか、覚えてないの？」

呆れたような声でそう言われても、勇氣には何のことか、さっぱり分からない。

「な……なんかあったっけ？」

「……自分で考えなさい」

なぜか不機嫌になった姉は、そう言って居間へと姿を消した。

「あれ、おにいちゃん、もう帰ってきたの？」

今度は階段の方から、驚いたような声が聞こえた。妹の凜(りん)だ。

「凜……だから、『おにいちゃん』って呼ぶなって」

小学校高学年にもなって、ちゃんと『お兄ちゃん』と呼べるはずなのだが、凜は勇氣のことを『おにいちゃん』と呼ぶ。まあ、勇氣もあまり強く言わない。もう何回も注意しているが、治らないからだ。とはいえ、勇氣はこのまま許容するつもりもないが。

だが、今はそんなことを言っている場合ではない。凜も絵里と似たようなことを言う。

「凜、今日って、何かあったっけ？」

こいつなら何か知っているかと思った勇氣は、凜に尋ねる。だが、そんな勇氣の発言に、凜は目を丸くする。

「えっ……おにいちゃん、今日って」

「ダメよ、凜」

もう少しで今日がなんの日か分かりそうなところで、居間から再び顔を出した絵里が邪魔をする。

「勇気、自分で考えなさい。そして、ちゃんと謝りなさい」

「俺、何か悪いことした？」

だが、絵里は勇気の質問には答えず、居間に戻ってしまった。

「ごめんね、おにいちゃん。でも、おにいちゃんが悪いんだよ？」

絵里の今の発言に納得したのか、普段は今にも甘えてくるような目をしている凜が、呆れたような目に変えてそう言った。

「ちょ、凜！ 教えてよ！」

無情にも部屋へと戻ろうとする凜に、近所迷惑も気にせずに勇気は叫ぶ。だが、凜は答えてくれなかった。

「……ったく、何なんだ？」

誰もいなくなった廊下で、勇気はそう呟いた。

「まゆみちゃん、ごめんね」

次の日の朝、まゆみが木村家に朝食を作りに来た時だった。まゆみが家の中に入った瞬間、まだパジャマ姿で眠そうな顔をした絵里が、目を擦りながら誤ってきた。

「何のことですか？」

まゆみが(本人には直接言えないが)ぐーたらで家事を一切やらない絵里の代わりに、朝食を作ったり掃除をするために勇気の家に来るのは、いつものことだ。まゆみには、謝られた理由が分からなかった。

「いや、昨日の勇気のこと。あいつ、忘れていたんだって？」

絵里の発言に、まゆみの顔がとたんに不機嫌になる。

「ごめんなさい、絵里さん。今は、あの馬鹿の顔を思い出したくないんです！」

頬を膨らませて、まゆみは文句を言った。

「……そ、そう」

そんなまゆみの様子に、絵里の眠気も一気に吹き飛ぶ。ちょっと怖い。

「まゆみおねえちゃん、どうしたの？」

まゆみの声が聞こえたのか、奥から凜が姿を現す。こちらは絵里と違って、ちゃんと服に着替えていた。まゆみの様子に、少し怖がっているような顔をしていた。

「あ……おはよう、凜ちゃん。ごめんね、なんでもない」

そんな凜の様子に気づいたのか、慌ててまゆみは笑顔を作る。頭に来ているのは勇気に対してなので、この二人に当たるのは筋違いだったと、まゆみは反省した。

「あ、そうだ。まゆみおねえちゃん、ごめんね」

まゆみが慌てて作った笑顔に安心したのか、凜も笑顔で、そして少し申し訳なさそうにまゆみにそう言った。

「おにいちゃん、あのこと忘れていたんでしょ？」

凜がそう言った途端、まゆみは笑顔が強張らせる。そんなまゆみの様子に、凜は後ずさりした

「さ、張り切って朝食を作りましょ！ 凜ちゃん、何が食べたい？」

まゆみは、そう言いながらキッチンへと向かう。どうやら、凜が昨日の勇気について触れたことに関しては、聞かなかったことにしたらしい。

「え……っと、じゃあ、パンと目玉焼きとウインナーで」

「絵里さんもそれでいい？」

「あ……はい」

二人はまゆみの勢いに少したじろぎながら、居間で朝食が出来るのを待った。

「そういえば、勇気は？」

朝食を食べている最中、まゆみが絵里と凜にそう聞いてきた。先程まで「勇気の話はしないで」といった雰囲気を出していたのに、一体どうしたのだろうか。絵里と凜は、顔を見合わせる。

「え……っと、おにいちゃんはまだ寝てる」

「はあ？」

凜が、申し訳なさそうにそう言った瞬間、まゆみがテーブルを思いっきり叩く。二人は体を強張らせる。

「あいつ、昨日私に『健康的な生活』について散々語ったくせに、実践できてないじゃない！」

いきり立つまゆみ。そんな彼女の様子に、二人は何もできずにいた。

「ふん！ いいもんね！ あいつの分の朝食と昼食と夕食、作ってやらない！ 起きてから後悔するといいわ！ ざまー見なさい！」

頬を膨らませてそっぽを向いたまゆみに、絵里と凜は溜息をついた。

「まゆみちゃん、ごめん」

「まゆみおねえちゃん、ごめんね」

「ふん！」

勇気の代わりに謝った二人だったが、その声はまゆみには届いていないようだった。

「ぎゃははははははwww」

週明け、昼休みに、勇気は同僚と一緒に昼食をとっていた時のことだ。二人は新米刑事で、勇気と話しているのは、同僚の佐々木(ささき)康(こう)介(すけ)。そのふっくらとした見た目から通称『ブタ』と呼ばれている彼は、勝ち誇ったように高笑いをしていた。白米を口に含んだまま高笑いをしているので、勇気の顔がご飯粒まみれになっている。ちなみに、「www」というのは、ネット用語だ。意味は「笑」を略したもので、康介はよく日常会話でネット用語を使うのである。

「き……汚いな！ ご飯粒こっちに飛ばしてんじゃねーよ！」

ご飯粒をティッシュで拭き取りながら、勇気が怒鳴る。

「つかブタ！ ネット用語を日常会話で使うんじゃねーって、何回言わせりゃいいんだ？」

「し……失礼な！ 少なくとも、顔文字は止めてあげたろう！ 我慢したまえ！」

康介の言うとおおり、彼は最近、顔文字は使わなくなった。苦情が殺到したためだ。

「会話のテンポが悪いんだよ！ つーか、質問に答えろよ！」

康介がここまで大笑いしていたのは、先週末の謎について、勇気が康介に相談を持ちかけたからだ。話は、勇気がまゆみに引っぱたかれたところである。

「俺、何かしたのか？」

結局、あれからまゆみとは一言も口を聞いていない。ほとんど困り果てた勇気は、仕方なく康介に相談を持ちかけたのだが、彼の判断は間違っていたと言わざるを得ない。

「なるほど、いつもはまゆみさんの手作り弁当を食べている君が、今日はコンビニ弁当なのはそういうわけかwww」

ダサイ丸縁メガネを不気味に光らせながら、康介は気持ちの悪い笑を浮かべる。

「おい、人の質問に答えろよ！」

「まあ、答えてあげてもいいんだがねえ、一つ条件がある」

「……なんだ？」

思いっきり嫌そうな顔をして勇気はそう言ったが、康介はニヤニヤしながら言葉が続けた。

「僕と奈津(なつ)美(み)が復縁する手助けをする約束をしてくれたら、君がまゆみさんに引っぱたかれた理由を、k w s k 教えてあげようwww」

「うごっ……」

奈津美というのは、康介の元カノだ。勇気も会ったことがある。少し気が強いが、容姿は恵まれている方だと勇気は記憶している。なぜあんな子が、康介と付き合っていたのだろうか。勇気としては、正直なところ、そんな面倒なことには付き合いたくない。康介には悪いが、このままにしておいた方が、奈津美さんのためでもあると思う。だが、まゆみがなぜ怒っているのかを知りたいと思っているのも事実。

「わ……分かったよ」

渋々、勇気は康介の要求を飲んだ。

「ふっ……それでこそ、勇気君だ。では、教えてしんぜよう。まずは、手帳をだし給えwww」

「……分かったよ」

上から目線の康介にイラっとしながら、勇気は手帳を取り出した。警察手帳ではなく、普通の手帳だ。

「映画を見に行った日付のところをだし給えwww」

「出したけど？」

「何か書いていないか？ 読み上げ給えwww」

溜息混じりに、勇気は書いてある文字を読み上げる。

「午後四時半に映画館前集合」

「他には？」

「いや、何も？」

勇気がそう言った瞬間、康介がゴミを見るような目をした。なぜこんなやつに、こんな目で見られなければならないのか。そんな事を勇気は思う。

「マジで？」

「……なんだよ」

「勇気君。さすがの僕でも、ちょっと引いているんだけど。本当に書いてないのかい？ それとも、覚えていないのかい？」

「は？ 何を？」

そう言った瞬間、康介が溜息をついた。そして、いつになく真剣な目つきで、勇気の方を見る。

「勇気君、一つ忠告だ」

「……？」

「このままだとまゆみさん、他の男に取られるよ？」

「……別によくね？」

勇気は首を傾げる。

「いいのかい？ あんな可愛らしい子、君は今後出会うことはないかもよ？」

「か……可愛らしい……かね」

康介の発言に、さらに首を傾げる勇気。そんな彼を気にすることなく、突然康介は語り始めた。

「可愛いでしょ！ 猫のような大きくて黒い目と、すっと通ったやや高めの鼻。そして、それらのパーツを収めている、やや色白な小顔。さらにその顔を際立たせる、黒くてちょっと長めなポブカットはところどころ少し跳ねており、頭のとっぺんから飛び出たアホ毛が全体を印象づけている。体型はややスレンダーだが、そこがまたいいっwww」

「……」

語りが長すぎて、途中から聞く気力がなくなった勇気は、仕事に戻る準備を始める。そんな彼の様子に気づいたのか、康介は呆れたような目を勇気に向けた。

「勇気君、人の話を聞いているのかね？」

康介にそう聞かれ、勇気は正直に首を横に振る。

「すまん、途中から聞く気力が無くなった。あいつが怒っている理由も話してくれなさそうだし」

「ガーン！ し……仕方がない、本来なら自分で気づいて欲しいところだが、特別にヒントを与えよう」

「ダイレクトに答えを教えてくれ」

勇気としては、出来ることなら、さっさとまゆみの機嫌を直しておきたかった。久しぶりにコンビニ弁当を食べて思ったことだが、まゆみの作った弁当の方が栄養価も高く、うまい。

「HAPPY B(ry)」

「……は？」

「HAPPY B(ry)」

一瞬間き間違いかと思って、勇気は聞き返したが、同じ答えが返ってくる。

「もしかして、『誕生日』って言いたいのか？」

「良くできましたwww」

「俺に、『誕生日おめでとう』って言ってもらえなかったのに、腹立ててんのか？」

正直、勇気はまゆみの誕生日なんて覚えていなかった。去年も一昨年もその前も、「誕生日おめでとう」の一言も言った覚えがない。なぜ今になって怒っているのだろうか、そう勇気は思った。

「僕は全てを知っているが、それも理由の一つだなwww」

「理由の一つ？」

だが、勇気が答えを聞こうとした時、昼休みは終わってしまい、康介はニヤニヤしたまま、何も答えてくれなかった。

「……ぷっ、あはははははは！」

次の日の昼休み。カフェテリアで、勇気は今度は同じ相談を、科捜研の古谷藤二(ふるやとうじ)、通称『TOUJI』に持ちかけた。康介に大笑いされたところで、藤二も大笑いする。

「……何がおかしいんだよ！ こっちは大変なんだぜ？」

「で、康介君にはなんて言われたんだい？」

「ああ、あのブタには……」

勇気は、昨日康介に言われたことを藤二に話す。そして、再び大笑いされた。

「いやあ、若いねえ」

「笑っていないで教えてくれ藤二。たかが誕生日くらいで、あんなに怒るかね？ 他にも理由があるみたいなんだが」

「こらこら。僕の名前を呼ぶときは、ちゃんと『TOUJI』って呼んでくれなきゃ」

「音的には同じなんだよ！ いいからさっさと教えろよ！」

「うーん、どうしようかな」

わざとらしく悩み始める藤二。そんな彼の様子に、イライラしていた勇気は『切り札』をだすことにした。

「おいこら藤二。てめえこの間の事件、誰のせいで始末書書くハメになったと思っているんだ？」

この間の事件というのは、一ヶ月くらい前に起きた、この近くで露出魔が出た事件だ。計六人も女性が被害にあい、勇気たちが犯人を捕まえた。そこまでは良かったのだが、勇気は藤二のせいで、道路を破壊してしまったのだ。

「ゆ……勇気君自身のせいじゃないかな！ スイッチを押したのは君だ！」

そう言った藤二だが、顔は引きつっている。

「てめえが押せつつたんじゃなかったっけ？」

勇気は、藤二の胸ぐらを掴み、顔を近づける。そして、できるだけ笑顔で口を開いた。

「あれさあ、正直に始末書に書いたら、お前ふざけてんのかって言われたんだけど？」

「そ……それについては、僕も一緒に説明したじゃないか！」

「説明はして当たり前なんだよ！ 責任とれ！」

勇気は、藤二の顔に唾をまき散らしながら怒鳴る。興奮する勇気を、藤二は手で制した。

「わ……分かった。教える、教えるから！」

「最初からそういえ」

そう言って、勇氣は手を話す。藤二はコホン、と咳を一つして、割と真面目な顔で勇氣を見る。

「勇氣君、子供の頃の事って覚えている？」

「……お前との付き合いは、中学からだだったと思うが、そのあたりのことか？」

そのあたりなら、勇氣もある程度覚えている。だが、藤二は首を横に振った。

「幼稚園の頃の事なんだけど……」

「……はあ？」

そんな昔のこと、当然勇氣は覚えていない。そもそも、幼稚園の頃に、勇氣は藤二と出会ってすらいないのに、なぜ藤二が知っているのだろうか。だが、勇氣のそんな疑問をよそに、藤二は語り始めた。

「丁度、まゆみさんの五歳の誕生日の頃だったかな。この近くの公園で、君達二人はある約束をした。覚えているかい？」

「……覚えている訳ないだろ」

そう言って、勇氣は頭を抱える。「覚えていない」と言ったものの、この先の展開に予想がついたからだ。

「ジャングルジムの頂辺で、君はこう言ったそうだね。『大人になって、ちゃんとお金がもらえるようになったら、結婚しよう』と」

「……」

「それに対して、まゆみさんはこう答えたそうさ。『じゃあ、仕事を始めた一年後の私の誕生日に、プロポーズして』と」

「それが、先週だったと？」

「思い出した？」

勇氣は顔を上げ、そして頭を横に振った。

「知らん。つーか、なんでお前が知ってるの？」

当然の疑問を、藤二にぶつける。すると、さっきまで真面目な顔をしていた藤二の顔が、突然少し曇った。過去を振り返るような遠い目をして、藤二は口を開く。

「実はさ、勇氣君には悪いと思ったんだけど、僕中二の頃、まゆみさんに告白したんだよね」

「なっ……初耳だぞ！ お前ら、付き合っていたのか？」

「いや、振られちゃった。でも、今の話、その時に聞かされたんだよね」

「……そ、そうなのか？」

つまりまゆみは、言った本人でさえ忘れていたような約束を、ずっと覚えていたらしい。藤二は勇氣の質問に頷いた。

「まあ、幼稚園児の頃の記憶なんて、普通は覚えていないよね。だから、勇氣君が今までこの事を忘れていたことに関して、僕は責めるつもりはないよ。でも、彼女はずっと覚えていた」

そう言い終えた藤二は席を立つ。

「ちゃんと、話をした方がいいんじゃないかな？」

藤二は友人の肩をポン、と叩いて、研究所の方へ帰っていった。

「ただいま」

夕方、遅く帰って来たわけではなかったが、小さな声で勇氣は自分の帰りを知らせる。藤二にああ言われてから、仕事が手につかない。勇氣はあれからずっと、まゆみのことで悩んでいた。

誰かが何かを言ったようだったが、勇氣は無視して真っ直ぐ自分の部屋へと向かう。

「……はあ」

正直、勇氣には自分の気持ちがよく分からなかった。藤二の言ったことを整理すると、どうやらまゆみは自分の事を好いているらしい。確かに、思い当たる節が無いわけではない。いくら幼馴染とはいえ、少し一緒にい過ぎたと思う。

「……俺は？」

一緒にいて、勇氣自身、まゆみに好意を持つような事があったかという、そういうわけではないと思う。ただの口うるさい友人、そんな程度にしか思っていなかった。

「……でもなあ」

藤二にああ言われてから悩んだ結果、強い罪悪感を覚えたことも事実。

「……なんで？」

まさか、幼稚園の頃に交わした約束を、今日まで覚えているとは思わなかった。だが、不思議と迷惑だと感じることはない。

「好きなのか？」

勇氣がそう思った時、胸の奥がちくりと痛くなった。やがて、その痛みはだんだん強くなっていく。堪らず勇氣は布団にダイブする。

「……俺は？」

もしかしたら、とんでもない事をしてしまったのではないかという思いが、勇氣を襲う。

「……あいつは？」

ふとそう思い、勇氣は部屋を出て、居間へと向かう。入ると、そこには絵里と凜がいた。

「あ、勇氣、おかえり」

「おにいちゃん、おかえり」

「あー、姉さん。あのさ、今日ってまゆみは来た？」

凜は学校として、姉はニートなので、ずっと家にいたはずだ。パソコン画面の中の王子様に夢中になっていれば別として、まゆみが家に来ていれば分かるだろう。そう思った勇氣は、絵里に尋ねた。勇氣の質問に絵里は頷く。

「どんな様子だった？ いつもと変わりなかった？」

勇氣は絵里にそう聞く。なぜか、答えを聞くのが怖かった。

「いつも通りといえば、いつも通りだったと思う。でも」

絵里も話すのが怖いのか、少し考えてから、ゆっくりと口を開く。

「少しだけ、寂しそうな目をしていたと思う。目が少し赤かったから、泣いていたように見

えた……って、勇気？」

絵里がそう言い終わったと同時に、勇気は家を飛び出していた。

「……はあ」

まゆみは溜息をついた。ここは、先日勇気と恋愛映画を見た映画館の前だ。平日なので、夕方でも人はほとんどいない。

「……仕方ないか」

あの時は勇気の事をひっぱたいてしまったが、思えば勇気が約束を覚えていないのも無理はない。(それでも、誕生日くらいは覚えていて欲しかったが)あれは、自分の我儘だったように思える。それに、もう少し粘っても良かったとも思う。

「……でも」

頭の中では分かっているが、どうしてもショックだった。目のあたりが、突然熱くなる。あの日から、ずっとこんな感じなのだ。

「……明日、謝ろう」

まゆみがそう呟いたとき、突然、ポッケに入っている携帯電話が震えた。

「……？」

携帯の画面に映った名前は、ここ最近ずっと口を聞いていない相手だった。

「……来た」

勇気が公園のベンチに座っていると、向こうからまゆみがやって来るのが見えた。もう夕方なので、公園の中にも近くにも、人はいない。

「……よう」

近くまで来たので、勇気は立ち上がり、手を挙げて声をかける。

「……ふん」

まゆみはそっぽを向く。さっきは「謝ろう」と思っていたまゆみだったが、いざ本人を前にすると、どうしていいのかわからない。

「えっ……とだな」

そんなまゆみの様子に冷や汗をかきながら、勇気はこれからどうしようかと悩んだ。思わず家を飛び出してきてしまったものの、ノープランだった。

「いや、そりゃ言い訳か……」

「……？」

気持ちは、いまゆみの前に立った時に決まった。ずっと自分の気持ちに気づけなかった勇気だったが、いい加減、気づくべき時が来たのだろう。さっきまで感じていた、胸の中の痛みはもうない。あるのは、胸の中で高鳴る鼓動だけだった。

「まゆみ！」

勇気はそう叫ぶと、地面に膝と手をつき、頭を地面に擦りつけた。

「ちょ……勇気？」

「ホントすみませんでした！」

「は……はあ？」

土下座は予想していなかったのか、まゆみは目を白黒とさせている。構わず、勇気は続けた。

「幼稚園児の頃の約束とはいえ、忘れていた俺が馬鹿でした！ 許してください！」

「え……ええ？」

先日「許して欲しい時は、土下座で平謝り」と言った通り、勇気は心の底から申し訳ないという気持ちで謝っていた。

「ゆ……勇気、顔あげて」

勇気の気持ちが通じたのか、まゆみは勇気に優しくそう言った。勇気は顔を上げる。だが、まゆみはまたそっぽを向いてしまった。

「ま……まゆみ？」

「勇気」

「……？」

「あのさ……その……本当に、思い出してくれたの？」

そっぽを向いたまま、まゆみは勇気にそう聞く。沈みつつある夕日のせいなのか、まゆみの顔はほんのり赤かった。

「ああ」

まゆみの質問に、立ち上がった勇気は頷き、そう言った。

「じゃ……じゃあさ」

ここで初めて、まゆみは勇気に顔を向けた。上目遣いで見つめているせいなのか、それとも声が少し震え気味なせいなのか、勇気にはまゆみがいつもより少し小さく見えた。

「……き？」

「……ん？」

声が小さくて、聞こえない。

「私の……き？」

「……すまん、もう一度言ってくれ」

またよく聞こえなかったので、勇気が聞き返すと、まゆみは恥ずかしそうに頬を膨らませた。

その反応で、勇気は全てを理解する。

「私の事、好……！」

はっきり聞こえるように大きな声を出したまゆみだったが、言葉は最後まで続かなかった。開いた口を、何かで塞がれたのだ。まゆみにはそれが、一瞬何なのか分からなかった。

「……！」

数秒たって、まゆみはようやく、自分が抱きしめられ、自分の口が勇気の唇で塞がれていることに気がついた。

その行為はたった数秒の出来事だったが、二人には随分長い時間、その行為をしていたように感じられた。勇気が目を瞑っていたので、まゆみもそれに倣って目を瞑る。

「ゆう……き？」

「えっと……これが俺の答えなんだけど……ダメか？」

唇を離した二人の顔は、真っ赤だった。それは、夕日のせいだけではない。お互いに、それを理解した。ふいに、まゆみの目から熱い液体が流れ落ちる。

「ちょっ……まゆみ？」

「勇気の……勇気のバーカ！」

「ええっ……！ わ……悪い！」

慌てて謝る勇気だったが、動作を封じるかのように、今度はまゆみが勇気に抱きついた。勇気の体に顔をうずめているため、どんな顔で泣いているのか、勇気には見えなかった。だが、そんなまゆみの行動に安心した勇気は、抱きつくまゆみの頭を撫でる。

「ホントごめんな、まゆみ」

「ばあか……勇気のばあか……！」

「悪い悪い」

「待っていた……待っていたんだよ、ずっと、あの日から……。私も我儘だったなあって……思っていたけど、やっぱり聞きたかった……」

嗚咽混じりにそう言ったあと、まゆみは顔を上げて勇気を見つめた。泣いたせいか、目が赤い。だが、勇気は不思議と安心感を覚えた。

「まゆみ」

勇気は、まゆみの肩に手を置いた。

「俺と、結婚してくれないか？」

まゆみは答える代わりに、勇気の背中に回した腕に力を込めた。

「痛っ！ 痛いって！」

「ねえ、勇気」

腕に力を込めたまま、まゆみが上目遣いで勇気を見つめた。

「もう一回……してもいい？」

「ったく、仕方ないな」

勇気はまゆみの発言に少し笑って、再び二人は唇を近づけた。

落ちる夕日が、二人を紅に彩っていた。これから始まる二人の愛を、祝福するかのよう。

後日。

「おいブタ、本当について行かなきゃダメか？」

建物の前で、勇気は足を止めて、改めて康介の顔を見る。ここは、康介の元カノ、奈津美が勤めている会社の前だ。先日、まゆみが怒っている理由を教えてもらう代わりに、康介たちの復縁の手助けをする約束をしたからである。

「何を言っているんだね、勇気君。怖気づく気かい？」

鼻息を荒くしながら詰め寄る康介に、怯んだ勇気は本当の事を言うことにした。

「正直に言おう、その通りだ」

なんとなく結果が見えているような気がしている勇気は、今すぐにでも帰りたかった。しかし

、そんな勇気の気持ちも知らずにか、康介は勇気の腕を掴む。

「大丈夫だよ。君の役目は、奈津美をここまで呼んで来ることだけだ。僕じゃあ連絡つかないからね。そこから先は、誰の手を借りるつもりもないよ」

「そ……そうか」

康介の波ならぬ覚悟を感じて、勇気も腹をくくった。

「じゃあ、行ってくる」

深呼吸をして、勇気は建物の中に入る。受付の人に奈津美につなぐよう言うと、彼女はすぐに出てきた。

「ブタ、連れてきたぞ」

「何の用？」

ある程度の事情は話しているので、少しは話がスムーズに進むかもしれないが、それでも奈津美は大夫不機嫌だった。そんな奈津美の様子に、康介は腰にすがりつく。

「許せ、奈津美！」

「ブ……ブタ！　ここでか？」

周りには、人が大勢いた。そんな中での康介に、白い目を向ける人もいれば、クスクスと笑う人もいる。

「ママ、あそこに変な人がいる！」

「見ちゃダメよ」

こんな声まで聞こえてくる始末だ。

「許して？　何を？」

奈津美は、明らかに不機嫌だった。だが、ついには泣きだした康介は、口を開いた。

「『たまにはMの気持ちにもなってみ給え』なんて言って、悪かったあ！　復縁してくれ、奈津美！」

「そんな理由で別れたの？」

思わずツッコミを入れた勇気は、奈津美の方を見る。だが、不機嫌なままかと思いきや、そっぽは向いていたものの、少し照れているような表情をしていた。

「……仕方ないわね」

「いいのかい？」

「マジですか……」

笑顔になった康介をみて、勇気は思わずそう呟いた。

「それじゃあ勇気君」

急に奈津美に話しかけられた勇気は、思わず姿勢を正す。

「な、なんでしょう」

「棒と縄とライターを持ってきなさい」

「は、はい！」

目が光った奈津美を見て、勇気は身震いをする。この人、ドSだったらしい。

「おっかねえ夜になりそうだな」

勇気は、手放しで喜んでいる同僚に向かって、溜息をついた。

【あとがき】

お久しぶりです。Puney Loran Seaponです。まさか、前作の続きっぽいものを書く事になるとは思いませんでした。楽しんで読んでいただければ、幸いです。後日談は、蛇足だったかもしれません。少し反省しています。

そういえば、よく「〇〇は俺の嫁」という言葉を聞きます。私の主観では、友紀は歩の嫁、空は祐太の嫁、楓は真一の嫁、優香は拓馬の嫁、そしてまゆみは勇気の嫁だと思っています。当然異論は認めます。ちなみに私に嫁はいません。良いのか悪いのか。すいません、妄言です。気にしないでください。

それでは、次回作でまた会いましょう。

証拠 [evidence]

高天美月

目の前に男の死体が転がっている。

まるで食べ残された魚の骨のように、それは、ぴくりとも動かない。

私は、ポケットに手を入れたままその物体を見下ろす。そうすると、額に丸い孔が開いているのがわかった。血で汚れた、小さな孔、それが……、死因。

つまり、この男は銃殺されたのだった。

私が思ったのは、本当に、ただのそれだけ。全く、何の感慨も湧き出てこない。

「おい、君」

すると、突然、背後から声をかけられた。咄嗟に振り向くと、暗くてよく見えないが、どうやら警官のようだ。

「ちょっと、署まで来てくれないか？」

そう言って、男は、全く自然な手つきで私の手首に手錠をかけるのだ。がちゃり、と音を立てて、冷たい金属の感触が両手首に染みる。

「え？ ちょっと、待ってくださいよ……、もしかして、あなた、僕がこの人を殺したと思ってるんですか？」私は慌てて言った。

「現行犯逮捕だ」男は無感動に言う。

「それ、本当に言ってるの？ 君……」私はおどけて言う。

「当然だ」

男が真面目くさってそう言うので、私は小さく舌打ちをした。しかし、ここは黙って彼に従うのが得策だろう。それに、第一、「私が殺した」という証拠など、何もないのだから……。

「君が殺(や)ったってことは、もうわかってるんだから、白状した方が身のためだ」男は、取調室に入るなりそう言った。今時、こんな台詞を言う奴がいるとは。テレビドラマの中でしか聞いたことがないぞ。

「だから、私は殺してない、って言ってるでしょう？ 証拠は、あるんですか？」私は、ジェントルな声で応える。

すると、男は、くつつつと喉を鳴らして笑った。

「そうか、それなら、見せてやろう……、これが、証拠だ」

そう言うと、男は、額にかかった髪をかき上げて、丸い、小さな孔を示した。

私は……、それに見覚えがあった。男は言う。

「俺はな……、お前に、殺されたんだ」

不意に訪れる静寂。私は息を呑んだ。

「なるほど、これは……、ああ、素晴らしい証拠だ」

私は、そこで、思わず口笛を吹いた。手錠さえなかったら、スタンディング・オベーションで

もしたい気分だった。

「完璧だ」

しかし、私は、笑いを堪えきれずに、遂に、思い切り吹き出してしまふ。

「ですがね……、あなたは、ひとつ、重要なことを忘れています。つまり、あなたは、私を罪に問うことはできない、ということです。なぜなら」

そうして私は、さっきの男と同じように、額にかかった髪を上げる。すると、みるみるうちに、男の顔が歪んでゆく。

「なぜなら……、私は、もう、死んでいるんですから。いいえ、あなたに……、殺されたんです」

男の視線は、私の額に釘付けだった。今までの高慢な態度が嘘のように、蒼白な顔つきは、憐れむくらいに惨めだった。

「この傷に、見覚えがありますよね？ まさか……、ない、とは言わせませんよ」

そして、私は、机の上に身を乗り出して微笑んだ。

「そこですね、ひとつ、提案があるんです。あのですね、ここは、お互いに、復讐なんて忘れて、潔く死にませんか？ 証拠なんて、そんなもの、あなただって、もうどうだっていいでしょう？ 銃だって、ほら、そこにあるんだから……、ね？」

あとがき [Postscript]

「この私が、金やちやほやされるために『あとがき』を書いていると思っているのか！」高天美月はコーヒーを飲み干すとそう言った。「私は、『あとがき』って奴が大ッ嫌いなんだ！」

「え、でも、これは……？」そう言って、如月椎奈はノートパソコンの画面を指差す。そこには、『あとがき』と題された文書ファイルが立ち上がっている。「『あとがき』ですよ？」

「そうだよ」ふん、と鼻で笑いながら、高天美月は続ける。「ただし、『あとがき』というタイトルの小説だ」

「え？」

「まあ、とはいえ、だ。この冊子の目次を見てみたまえ……、恐らく、この『あとがき』という項目はないはずだ」

「えっと……」如月椎奈はページを捲る。

「きっと、冗談だと受け取られたか、そもそも、読まれてすらいないか、のどちらかだろう」高天美月は肩を竦める。

「いや、待って下さい、載ってますよ！」如月椎奈は言った。

「えっ、本当かい？」

高天美月は身を乗り出すと、そしてこう言った。

「何てこった、うちの編集者は、冗談もわからないのか？」

ジェネラル・ガーリッシュ

外衛眞希

東南アジア某国 臨時首都近郊

過ごしやすい季節でもあるためか、朝の空気は澄んでいた。小鳥の鳴き声と相まって、草原地帯はのどかな風景を演出している。その中を少々物々しい車列が黙々と進んでいる。先頭に重機関銃を載せたジープ、その後ろに数両の装甲車が続いていた。一定の速度を保ったまま、この国ではありふれている未舗装道路を、土埃を上げて。

その道路からさほど離れていない丘陵の稜線ギリギリの位置で、数人の兵士が腹這いになっていた。皆、完全な戦闘装備だった。その中に双眼鏡を構えている人間が一人だけいる。まだ若いその眼には決意が漲る一方で、口元は苦々しく歪められていた。無理もない。彼女らがこれから攻撃しようとしているのは、つい数日前まで味方であったはずの人間たちだからだ。だが、彼女に容赦するつもりだけは無い。救うべき人間が車列の三台目、銃塔の取り外された装甲護送車に乗せられているから。

彼女は傍らに置いてあった野戦通信機の受話器を掴む。

「トーヤよりコモロ。いい朝になると思います」

『コモロ了解。鳥はまもなく囀る』

待っててね、王女様。

極東列島、蝦夷島にある国立大学。その大学院修士課程に所属する臼淵瞳子の不運は、学部生の時に始まったと言っていいだろう。それはすなわち軍短期現役将校課程(R O T C)の受講であった。

これは学業と両立して四年間軍事教育を受ければ、年に二個「優」以上の成績を取得できるというものであり、奨学金も出る。しかも卒業後二年間、軍で勤務すれば奨学金を返還する必要もない。再就職も有利で競争率は高いが、臼淵はこれを突破した。厳しい初期教育を潜り抜け、お客様待遇の現役二年間を終えて、中尉で予備役に編入されると、彼女は院試を受けて院生になった。あとは年一回招集されて、訓練を受け続けるだけのはずだった。

ところが、である。年次招集を終えてすぐの事だった。

「臨時招集？」

「ウチの管轄じゃアンタだけだよ。災難だね」

札幌軍務局に出頭を命じられた臼淵は、軍務局長からそのように言われた。課長はもう定年間近といった風で、厄介事を早く終わらせたい一心のようであった。

「直接アンタに手渡せと言われていてね。何でこう特別扱いなのかは皆目判らん。普通は手紙一枚で仕舞いだし、そもそも在学中の予備役をわざわざ召集するなんて」

ハア、とだけ答えて臼淵は各種書類を受け取った。配属命令や、休学についての軍からの証明書など。記憶にある限り必要なものは揃っている。過不足が無いか確認させられた後、臼淵は追い出されるように庁舎を後にした。

現役に復帰した彼女を待っていたのは、いきなりの海外派遣だった。反政府勢力により政情不安の著しい東南アジアのとある王国には、国際連盟の平和創造軍が派遣されている。平和維持軍とは異なり、積極的な戦闘活動を通じて紛争を解決しようとするものであり、列島軍もこれに参加していた。首都は未だ反政府勢力の下にあるが、王国政府は地方都市に臨時の首都を置いて内戦を継続していた。

国際空港と称されているその飛行場には、建物のそこかしこに砲弾の撃ち込まれた跡が今もある。臨時首都の重要箇所が旧正月に一時占拠された事件の際、国軍が撃ち込んだものだ。平和創造軍に参加しているケベック軍の輸送機に便乗した臼淵は、今度は列島軍の物資トラックに便乗した。

「君も不運だね。まさか招集どころか、派手に外国に飛ばされるなんて。聞いたことがないよ」
派遣部隊指揮官の熊ヶ谷中佐は、列島隊司令部が置かれた郊外のキャンプ地の一室で臼淵を迎えた。彼は厳しい顔をした熊の様な男で、顔面には裂傷の跡がハッキリと残っていた。
「だがまあ、前ほど厳しいわけじゃない。一先ず迫っていた反政府軍を叩き返すことには成功した。今、前線は一進一退だが、近く合衆国軍が到着するからすぐ首都を奪回できる筈だ」
「それで、自分の配置は……」
「特に無い」
「……え？」

臼淵が予想もしなかった返答に啞然とするのを見て、熊ヶ谷中佐は申し訳なさそうに言った。
「無いんだ、本当に。元々欠員が出たわけでもないし、なぜ君が来たのかも分からん始末だ。案外本国の方で書類ミスでもしたのかもしれないな」

そんな事で人ひとり戦場に送り込むのか。臼淵は悪態をつきたくなかったが流石に自制した。そんなミスは世の中どこにでもあるのだ。彼女が本来属する組織にすら。海外手当が貰えるだけ、まだマシだった。

「君は現役の時、装脚部隊にいたそうだが、あいにくウチの手持ちは小隊規模で、欠員も無い」
装脚兵器は歩兵支援用の歩行兵器である。装甲車の車体から生えたような二本から八本の脚を持ち、車両では走行出来ない不整地を踏破し、機関砲や対戦車ミサイル、場合によっては戦車砲などで武装している。高価であるため配備は限られているが、無人機などと共に近年急速に普及した新兵器である。臼淵は現役だった頃、これを運用する部隊に所属していた。それどころか操縦資格も有している。

「しかしまあ、君を遊ばせておく余裕があるわけでもない。早速明日から仕事だ。街頭警備に立

ってくれ。古参の曹長を付けるから、助言には耳を傾けるように」

臨時首都の中心、臨時王宮の近く。人通りの多い交差点の角に土嚢を積み、機関銃を設置し、全高六・三メートルで仁王立ちする装脚兵器や数人の歩哨と共に臼淵は立っていた。他にも四か所が臼淵の指揮下にある。

薩摩の出身だという古参の曹長は「何かありましたら、遠慮なく聞いてください」と臼淵に言っていた。要するに自分だけで勝手に判断するなという事だな、と彼女は解釈していた。

確かに予備役から復帰したばかりでいきなり外地に飛ばされてきた奴を信用する気には誰だってならんよな。精々それっぽい姿で立っているしかないか。

そうやって早々と諦めを付けた彼女は、時折陣地を巡回しながら時間を潰していた。反政府軍残党によるテロ攻撃も時折あるものの、結局のところ街頭警備など平和創造軍の示威活動でしかない、と曹長が教えてくれたからだ。それゆえ一応はヘルメットも防弾ベストも着用し、拳銃も携帯しているものの、四方八方に目を配る様な警戒心は無かった。

こんだからROTC出の将校は馬鹿にされるんだな。彼女がそう自虐に浸りながら立っていると、車も人も少ない狭い通りから、一台の幌付きジープが近づいてきた。緑、茶、黒の三色迷彩に、知っている者は遠目からでもガリア軍のものだと気付く。

欧州の農業大国であるガリアは、この国に積極的に関わっていた。ガリアは帝国主義の時代、列強の一翼として世界各地に植民地を有していた。東南アジアも例外ではなく、多くの地がガリアの三色旗の下に統治された。この王国は最後まで保護国であり、植民地として正式にガリア領になったわけではない。それでもガリアの影響力は強く、保護国当時から政府顧問としてガリア人が雇われるなど、強く食い込んでいた。大戦後も植民地主義的な行動を好むガリアがこの国に軍を派遣したのも当然という見方が多い。その上、平和創造軍で一番多く戦力を派遣しており、ガリア軍が各国軍を指揮していると言っても相違の無い様な状況だった。それ故に、あまり好感を抱かない者も多い。ガリアによる介入が、より大きな混乱をもたらすことも度々だったという事情もあるが。

そういった嫌悪感を臼淵は持ち合わせていなかったが、それでもガリア軍のジープが自らの目の前に止まった時は、面倒事を持ち込まれる予感に顔を顰めた。異変に気付いた曹長の駆け寄る音を背に、臼淵は車から降りるガリア軍人に敬礼した。アジア系の小柄な中年男だった。男は手の平を前へ向ける独特な敬礼をして口を開いた。

「君が噂のマドモワゼルかな？」

臼淵の目が点になった。英語でもガリア語でもなく、列島語で話しかけられたからだ。そのガリア軍人は、そんな臼淵を見て気さくに笑った。

「そんなに驚かなくてもいいだろう？ 私はガリア第二外人歩兵連隊のフランソワ・ベルヌ大尉だ。……昔は山田卓郎と言ったんだがね」

「……列島の方でしたか」

「今はガリア国籍を持つガリア人だよ。そうか、君が……」

「臼淵中尉殿、何か問題でも？」

曹長がさり気無く臼淵に耳打ちする。臼淵はかつての同胞から目を離さないまま小声で答える。

「ん？ いや、外人部隊の方が——」

すると、かつての列島人は親しげな声で曹長に話しかけた。

「やあ曹長！ なんだ、君が彼女のお守りを？」

「ハッ、ベルヌ大尉殿。大尉殿もご壮健そうで何よりです」

「君こそ、な。ええと……マドモワゼル。彼の言う事をよく聞いておけばここじゃ大過無く過ごせるはずだ。しっかりな」

「はい」

そう答えたところで、臼淵はふと訊いた。

「ところで、何のご用件でしょうか？」

「ああ、それなんだが……」

ベルヌ大尉は深刻そうに眉間に皺を寄せ、臼淵と曹長に顔を寄せるよう手招きをし、周囲に聞かれないよう小声で言った。

「今日の夜は首都の中心街……特に王宮には近寄らんほうがいい。いいね？ 理由は聞かないでくれ。マドモワゼル、君からも上官に伝えておいてくれ」

立哨を終えナポリ軍に引き継いだ後、臼淵と指揮下の部隊は郊外の駐屯地へ戻った。臼淵は曹長に「あの人の言う事は聞いといた方が良いです。これまでも何度も世話になりました」と言われていた事もあり、すぐに上官に報告した。

彼女はその後夕食まで何をして時間を潰すか考えていたが、すぐに熊ヶ谷中佐に呼ばれる羽目になった。

「すまんがすぐ制服に着替えてくれ。王宮に参上せねばならん」

何やら忙しく机の引き出しを開け閉めしている中佐を前に、臼淵は啞然と立ち尽くしていた。王宮に随行しろというの？

「失礼ですが中佐殿、今日自分はガリア軍の大尉から——」

「聞いちゃいるが、かと言って会食の誘いを蹴るわけにもいかん。何せ王族の招待だからな。非公式なもんだが、断れば下手すりゃ外交問題だ」

「では何故、自分が随員なのですか？」

「相手は十五歳の女の子だぞ。俺は行くしかないが、筋肉バカの男共ばかり連れて行くわけにもいかんだろう」

「王女殿下ですか……」

確かに年が近い方が話は続きやすいかもしれないが、儀礼の場では話せることだって限られるし、そもそも王女と大学院生の予備将校では、中年男性と女子中学生の会話と同じくらいぎこちなくなるだろうに。

「礼装でなく常装でいい。念の為、拳銃も携帯しろ」

日の沈む頃、中佐と臼淵の二人を乗せたジープは首都官庁街の中心、王宮の正面玄関に横付けした。臼淵はその間、昼間とは何かが違うように感じていた。

中佐の斜め後ろを歩いて宮殿内に入った彼女は、その豪華さに目を見張った。シャンデリア、絵画、装飾の数々。下品にならない程度に金銀を用いて、効果的に場を演出していた。

臨時王宮でこれか。臼淵は思った。金持ちだとは聞いていたけど、この調子じゃ本当の宮殿はどんなものだったのやら。

衛兵による検査の後、二人は一室に通された。バルコニーのある広い部屋。そこには一人の少女がドレスを着て立っていた。威厳さえ感じさせる凜とした姿。

「ようこそ。熊ヶ谷中佐、臼淵中尉。招待をお受けいただきありがとうございます」

再び流暢な列島語だった。

「いえ、こちらこそ、ご招待いただき大変光栄に存じます」

そう中佐が答えて、会食が始まった。

フレンチのマナーをある程度は覚えていたおかげで、臼淵は恥をかかずに済んだ。ここまで上等なものは一生で今回だけかも、などと考えていると、王女に話しかけられた。

「臼淵中尉は、ついこの前まで学業をされていたとの事ですが、何を学ばれていたのですか」

「西洋文学、特にシェイクスピアを」

臼淵がそう言うと、王女は少し考え込んで言った。

「……獲物は飛び出した(The game is afoot)」

一瞬臼淵は迷ったが、すぐに察しを付けて答えた。

「はやる心についてゆけ(Follow your spirit)。……『ヘンリー五世』ですね」

「やはりご存知でしたね。私、好きなんですよ」

むしろこっちが驚いたよ。臼淵はそう心の中で溜息をついた。精々聞かれてもロミオとジュリエットかと思ったのに。やっぱ王女様は違うか。そう思ってしばらく使ってなかった知識を引っ張り出していた時だった。

何やら騒がしかった。大人数が駆ける音。軍靴の音だった。

臼淵は思わず身構えた。腰に拳銃は、ある。どうしようか。臼淵が迷っていると、一発、鋭い銃声が宮殿内に響いた。

熊ヶ谷中佐と視線を交わし、二人で立ち上がる。王女を横目で見ると、表情こそ毅然としているが、その眼は不安の色を湛えている。

「中尉、王女殿下をお守りしろ」

「ハッ」

臼淵はそう答えて王女を背にする。中佐は拳銃を手に駆け出し、部屋の荘厳な扉の脇に張り付いた。足音が近づく。中佐がそっと手をドアノブにかけようとする、その瞬間、外から蹴り飛ばすように扉が押し開けられた。中佐は不意を突かれたように跳ね飛ばされ、床に転げる。

同時に扉を押し開けた人間たちが部屋になだれ込む。それは先ほど臼淵達の検査をした衛兵たちだった。彼らは小銃を臼淵、そして熊ヶ谷中佐に向ける。臼淵も反射的に拳銃に手を伸ばして

いたが、抜いたとしても勝敗は明らかだった。

彼女が状況に困惑していると、遅れて一人の男が入ってきた。丸眼鏡をかけた、目つきの鋭い国軍将校だった。彼は真っ直ぐに臼淵、そして王女の方を向き、敬礼した。

「陸軍大尉のソンティであります。王女殿下、あなたを逮捕いたします」

「いったい何の真似だ、大尉！」

熊ヶ谷中佐がそう言うと、その大尉は澄ました顔を向けた。

「志を持つ者による国家体制の刷新であります。王族による国家経営は既に破綻しております。国内に敵を抱えて内戦を戦う今、軍主体の国家体制を作り上げ、外国に依存しない力を手にしなければなりません。諸外国のヒモ付きの支援を受けてばかりではいけないのです。……例えば、列島の対外有償援助であるとか」

熊ヶ谷中佐の表情が曇る。臼淵は初耳の話だったが、どうやら列島もまったく無関係という訳ではないらしい。

中佐が呻くように抗弁する。

「徒に混乱を招くことになるぞ。それこそ利敵行為だろうに」

「王族による経済の独占や、警察力の乱用が利敵行為ではないと？ それこそ問題でしょう。必要な予算も賄われずに何故内戦に勝利できますでしょうか」

熊ヶ谷中佐はそれ以上言い返すことが出来なかった。大尉の言う事が全くの正論であったからだ。大尉は王女に向き直る。

「殿下、ご同行を」

沈黙が辺りを包む。臼淵にはそれが一分近く続いたようにも思えた。その沈黙を破ったのは王女の声だった。

「分かりました」

静かな答えだった。その声をすぐ後ろから聞いた臼淵には、微かな震えも伝わった。王女はすれ違いざまに臼淵に向かって呟く。

「眼前の恐怖も(Present fears)、想像力の生みなす恐(Are less than)怖ほど恐ろしくはない(horrible imaginings)」

伝わってくる王女の覚悟と恐怖。無力感と、不安が縋い交ぜになった感覚に怯えながら、大して考えもせずに、臼淵の口をついて言葉がこぼれる。

「必ずお助けします、殿下」

王女はその一瞬立ち止まり、再び歩き出し、兵に囲まれて姿を消した。その姿を見届けた大尉は、再び二人に向き直る。

「お二方には駐屯地に戻っていただきます。来た時に乗っていたジープはまだ玄関にいるかと思いますが」

そのまま二人は銃口を向けられたまま、待機していたジープに乗り込む。運転兵は突然の事態に困惑しながらも、大尉が告げる片言の列島語に従って、帰路についた。その段階で初めて、臼淵は宮殿に入った時の違和感が、何に起因しているのかに気付いた。

宮殿警備のガリア兵が一人もいなかったのだ。

事態に国連軍は騒然とした。臨時首都の各所で国軍が蜂起したとの情報や、市街戦をしているなどの怪情報が飛び交い、国王が射殺されたという情報が確実と知れるや、戦闘態勢に入っていた。列島隊も同様で、すぐ近くに駐留するジャワ隊と連絡を取り合い、総員起床をかけて駐屯地の警備を強化していた。

「とりあえず情報収集しかない。ヘリを出して監視させろ」

熊ヶ谷中佐は一通り指示を出すと通信幕僚に向き直る。

「本国は」

「まだ何も」

「国王が射殺されたんだぞ。グズグズしてたら王族は皆殺しだ」

「とは言っても……。それに、警戒すべきなのは国軍だけではありません」

「……ガリアか」

「ガリア軍の将校には、国軍の将校と懇意にしている者もたくさんおりますし……。場合によっては、ガリア軍がクーデター支援に動くかもしれません。いや、現にクーデター軍の王宮突入を見逃すかのように、彼らは撤退しています」

「ではクーデター鎮圧に動いた場合、ガリア軍との衝突もありうる、と？」

「——はい」

翌日の朝、王国国営放送は放送開始時間から繰り返し同じ映像を国内外に向けて放送した。

国軍の軍服を着た男が原稿を手にして強い口調で一方向的にまくしたてるその映像は、王政の廃止、首都戒厳令、憲法の停止、臨時の軍事政権樹立を宣言し、昨夜、逮捕に抵抗する国王を止む無く射殺したと発表した。

国連は緊急の安全保障理事会を開き、これを武力による国家転覆と見做し、正当な政府として認めない旨を決定した。

現地国連軍司令部——即ち事実上のガリア隊司令部——は、一先ず情報収集に努めて事態を静観することとした。国軍との武力衝突を恐れてのこと、だった。

だが、大半の国連軍はガリア軍の昨夜の行動を知っていた。各国部隊に「何らかの電話、があったからだった。

ガリアに対して反感を抱く各隊指揮官達は秘密裏に集合。行動を開始した。それはすなわち王族の奪還とクーデター軍の鎮圧であった。これに賛同したのはケベック隊、ナポリ隊、ジャワ隊、そして列島隊だった。

だが、もう一つ独自に動いている国があった。

合衆国である。

「軍事介入、か」

ガリア軍は困惑を強めていた。クーデターに手を貸したはいいものの、圧倒的な力でこれを押し潰さんとする合衆国には成す術がなかった。

そのガリア軍からのいわば使者として、列島隊にベルヌ大尉が派遣されてきたのは、各国部隊が行動を開始しようとする五時間前だった。

熊ヶ谷中佐をはじめとする列島隊の将校達を前に、彼は司令部が得た情報を話した。

「既に合衆国の海兵隊を乗せた揚陸艦が出港しました。ルソンの空軍基地に駐留する航空部隊も動きを活発化させています。最後通牒は国連軍司令部につい先ほど届きました。二十時間以内に事態に改善の兆しが見られない場合、首都を空爆すると」

「馬鹿な、山ほど死人が出るぞ」

誰かが呻く様に言った。おそらく合衆国軍は誘導爆弾や巡航ミサイルで精密爆撃を行うだろうが、それでも誤爆はどうしても起こる。

それに空爆で破壊されるだろう数々は王国の防衛に必要な設備や装備の数々なのだ。気持ちのいいことではない。

「ガリア隊は……その、恥ずかしながら内部に対立を抱えておりまして、身動きが取れません」

「いつからガリア軍は議会制になったんだ？」

「おい」

幕僚の誰かがそう毒づいたが、大尉は全く意に介さなかった。

「いえ、そう言われても仕方ありません」

そう言ってさらに突っ込んだ話をする。

「一先ずガリア隊は、本国から介入がない限りはととも動けません。抗命すら起こっています」

「そんなにひどいのか」

熊ヶ谷中佐がそう言うと、ベルヌ大尉は俯いた。

「面目次第もありません」

中佐は腕組みをしたまま目を閉じて押し黙っていたが、やがてゆっくりと腕を解き、ベルヌ大尉をまっすぐ見つめて言った。

「わかった、我々で何とかする。君らは事態が悪化しないよう全力をお願いしたい」

「承りました。……感謝します」

その敬礼はガリア式ではなかった。

ヘリの偵察、そして首都内に残っていた協力者、そしてクーデター軍内部からの情報が次々と入ってきた。クーデター勢力の内部は一枚岩でないことは明らかだった。一人や二人ではなく、多くの将校が国王の殺害に反感を抱いているようだった。

その大半が同じ情報を流してきた。それはすなわち、王女の首都からの移送だった。

白淵は車列に突入する部隊に組み込まれた。歩兵戦闘車(IFV)を装備した機械化歩兵二個小隊だった。彼女は道路からさほど離れていない丘陵の稜線ギリギリの位置で腹這いになっていた

そして、彼らはやってきた。

「起爆用意」

臼斑が傍らで起爆スイッチを握る曹長に言った。彼も臼淵の面倒を見るために組み込まれたのだ。

「用意」

曹長は安全装置を解除した。臼淵は目印代わりの木を一心に見つめる。その目の前の道路には、対戦車地雷が埋めてあった。

そして、そこに、先頭のジープが。

「爆破！」

臼淵がそう叫ぶと、下士官はスイッチを二度押した。その瞬間、車列の先頭部分が丸ごと爆炎に包まれた。宙に浮かぶひしゃげたジープ。五〇トン以上もある戦車も摺り寄せられる大型地雷は、十分すぎるほどの威力だった。一瞬遅れて腹の底を押し込むような轟音。もう一度臼淵は双眼鏡を構える。

車列は足を止めていた。

『総員搭乗、前へ！』

救出部隊指揮官の声がインカムを通じて響く。

「曹長、我々も行くぞ」

臼淵も割り当てられたIFVに乗り込み、前進する。車両の脇の銃眼から小銃を突き出し、兵士が射撃を加える。のみならず、IFVの二五ミリ機関砲も火を噴く。IFVの砲塔に横付けされた対戦車ミサイルが白煙とともに発射され、車列を守るように前進してきた敵のBMPに命中した。

だがBMPは完全に撃破できていたわけではなかった。その主砲である七三ミリ低圧砲は既に狙いを定めていた。

仕掛け花火のような発射煙を吐いたその先には、装脚兵器がいた。七三ミリ成形炸薬(HEAT)弾は補助ロケットブースターでさらに加速し、一直線に飛び、着弾した。確かに命中した。

しかし直撃したのは周囲に取り付けられた柵状装甲だった。成形炸薬が効果を発するのは僅か数十センチであり、柵状装甲であればほぼ無効化できるはずだった。被害は機材ではなく人に出た。身を乗り出していた装脚小隊長が破片で負傷したのだ。情報は直ちに臼淵へも伝わる。

「装脚兵器(アシツキ)がやられました！」

「あのBMPを仕留めろ！」

間髪入れずにATMがもう一度撃ち込まれる。今度はBMPの砲塔が宙高く吹き飛んで爆発した。

「行け！」

IFVを護送車の真横に止める。敵歩兵はこちらの射撃で身動きができない。護送車はタイヤがパンクして身動きが取れない。あまりいいタイヤではなかったらしい。

「降車！」

後部のハッチを開き、一気に雪崩れ出る。その間もガンポートからは絶え間なく機関銃で援護射撃が行われる。もはや発砲しているのは列島隊の兵士だけだ。

臼淵も短機関銃を手に駆け出した。護送車のハッチを小銃を構えた兵士が取り囲む。他のIFVからも次々に兵士が吐き出される。

「開きます」

曹長がハッチに手をかける。臼淵は唾を飲み込んだ。沈黙の一瞬。一気に重いハッチが開かれる。時間が凍ったような感覚。それから頭が一気に情報を飲み込み始める。狭い車内には四人の人間がいた。二人は男で、国軍の将校だった。

二人とも銃を構えているが、勝ち目のない状況に身動きが取れないようだった。もう二人は女性で、一方は身なりのいい中年女性だった。侍女らしい。

最後の一人である少女は、一番奥で憔悴した顔を臼淵に向けていた。ロングスカートの衣服は簡素だが上品なもので、その地位を裏付けていた。

その少女は最初怯えるような目——いつか見たような目——を向けていたが、やがてその色は驚きと、少しばかりの喜びに変わった。臼淵は戦場の空気で固くなった顔に、無理やり笑みを作り、声をかけた。

「お迎えにあがりました、王女殿下」

国連軍有志は、首都進撃の構えを見せていた。これが動き出したのは合衆国が設定したタイムリミットの六時間前であり、王女の身柄を奪還した列島軍主力が合流してからだった。臼淵は負傷した小隊長の代わりに装脚小隊の指揮を執るよう命じられていた。ケベック隊と列島隊は西から、ナポリ隊は川を挟んだ南から前進を開始。迅速に市内の要所を突き、放送局や宮殿を奪還し、一刻も早く政権の正統性を回復したことを示そうという計画だった。しかし、事はそう上手くは運ばなかった。

クーデター軍のうち、抵抗する部隊は決して多くなかった。しかしその抵抗は苛烈で、国連軍が市街地への大規模な砲撃を躊躇したこともあり、前進は困難だった。その最たるものはナポリ隊で、川を渡る唯一の橋の前面で前進を阻止され、それどころか橋そのものが爆破されてしまったのだ。

予備隊として後方に拘置されていた列島隊は、早々と前線に投入され、臼淵率いる装脚小隊も一台ごとに分割されて歩兵支援に回っていた

二五ミリ機関砲が破裂するような発射音と共にバリケードを粉碎する。抵抗はもうない。

「伍長、五〇メートル前進」

「了解」

操縦手の伍長にそう命令し、臼淵は車長ハッチを開けて身を乗り出した。装脚兵器が動き出し、大きく揺さぶられる。装脚乗りの間では、両端で踏ん張れるようになって一人前という冗談があるが、臼淵は両手を使わなければ頭をぶつけそうだった。

ふと、一直線の通りの向こうに鳥のような影が見えた。

「敵機！」

そう叫んで車内に滑り込む。

可変翼の特徴的な機影を、臼淵は捉えていた。ミグ23。冷戦期に東側陣営が開発した大型戦闘機であり、この周辺地域に於いては国軍の航空部隊が装備しているのみだ。つまりは、クーデター軍は首都に陣取る部隊だけでなく、空軍基地、あるいは空港の部隊にもシンパがいるということになる。そして何より重大なのは、頭上を押さえられることにより、さらに作戦が困難になるということだ。国連軍の地上部隊は、反政府軍が航空機を保有していないこともあり、ヘリが相手ならまだしも、音速で飛ぶ航空機を相手にできる対空兵器が殆ど無い。

舌打ちする間もなく、臼淵は砲塔を向ける。

「伍長、物陰へ！」

「ちと距離がありますぜ」

「しばらく持ちこたえるしかないか」

機影が旋回し、こちらに向かってくる。臼淵は、より精度の高い射撃をしようと照準を修正する。敵機と正対(ヘッドオン)。緊張の一瞬。トリガーを引く。二五ミリ機関砲が唸りを上げて弾を吐き出す。

だがお互いに動きながらでは中々当たらない。おまけに敵機も腹を括ったのか、怯むことなく突っ込んでくる。間に合うか？ 冷たいものが背を流れ落ちる。そう思った瞬間、敵機の後ろに白く濃い煙を曳いて、光の花が咲く。マグネシウムをベースに燃焼する、赤外線欺瞞用のフレアだ。一瞬遅れて敵機がグラリと揺れ、やがて火を噴き、そのまま進路を逸らしていった。

当たった？ 臼淵の顔に一瞬歓喜の色が浮かび、しかしすぐに消えた。違う、こちらの弾じゃない。臼淵は再びハッチから頭を出し、忙しなく周囲を見回す。そして見つけた。

敵機が飛来したのと同じ方角から、同じような小さな幾つかの影がみるみる近付いてきた。臼淵はそれを見てすぐに悟る。アレがやったんだ。

瞬く間に近付いたそれは、何十年も前に東側で設計された国軍のミグとは大きく異なるものだった。機首の空中給油プローブを除けば美しく滑らかで、無尾翼かつ近年の欧州機の特徴である主翼の三角翼と機首のカナード翼を組み合わせた(クロスカップルドデルタ)、一つの芸術品と言っても良いデザイン。そして何よりも、その編隊が臼淵の真上を飛び去る時にはっきりと見えた、外側から赤、白、青の円形章(ラウンデル)。ガリアの多用途(マルチロール)戦闘機、ラファールだった。

ラファールは地上から昇る煙を意に介さず、次々に空対地ミサイルを発射した。その度に地上で爆発が起こる。先程とは打って変わって、国連軍が頭上を抑えたのだ。

臼淵は、体の力が一気に抜けたような気がした。戦闘はもう長くは続かないだろう。ひょっとしたら、装脚小隊の支援すら要らないかもしれない。

「ガリアの連中、騎兵隊のつもりですかね。あいつらがもっと早く動いていりゃ……」

「伍長、それ以上言うな」

臼淵はそう言ってたしなめたが、内心は同じだった。

無線からは、戦闘停止が命じられていた。

クーデター事件から一週間が経った。

宮殿には傷一つ付いていなかったが、撤去の手が回らないバリケードの残骸が未だ生々しく残っている。明後日には王女の女王即位式が行われることもあり、その準備で慌ただしかった。その中、一台のジープが裏口に止まる。降りたのは列島軍の上層を着用した臼淵だった。実戦を経験しても尚、学生を軍服に押し込めた感は拭えなかったが、少しやつれていた。

彼女は明日帰国するよう命令を受けていた。

親衛隊ではなく、ケベック隊の兵士による検査を受け始めて王女と出会った部屋で、再び王女に謁見する。王女は臼淵に輪をかけて疲れを滲ませていたが、臼淵の姿を見るなり顔を輝かせて駆け寄ってきた。王女は華美なドレスなどではなく、国軍の迷彩服を着ていた。

「突然お呼び立てして申し訳ありません。三十分だけでしたね」

「いえ、お構いなく。……しかし、その服は？」

「国の上に立つのです。上の人間が戦う意思を示さなければ」

そう言って彼女は腕を広げて一回転してみせる。

「似合います？」

「……あまり」

言った後で、しまったと思う。どれだけ疲れてるんだ私は。

しかしそんな臼淵に、王女は可笑しげにクスリと笑った。

「私もそう思います」

それから彼女は、窓際のテーブルに歩み寄り、臼淵に手招きした。テーブルの上には高級指輪でも入っているかのようなケースがあった。王女がそれを手に取って開けると、色のくすんだ、だが輝きは失われていない、精巧な勲章が姿を現した。

臼淵はその勲章を知っていた。かつての国王がメディアに露出する時、必ずその胸に着用していた。王国名誉大星輝章なる大仰な名前を付けられた、この国の最高勲章だった。

「それは——」

臼淵が口を開くや否や、王女が勲章を取り出しながら言う。

「お父様の形見です」

そして、それを臼淵に差し出した。

「あなたに、これを差し上げます」

突然の事に言葉を失う臼淵に向かって、王女は構わず続ける。

「本当は公式に授与式の一つも行うべきだとは思いますが、あなたは明日にも発ってしまわれるとのことですから、せめて渡すだけでも、と。熊ヶ谷中佐には既に承諾も得て——」

「お、お待ちください」

臼淵は咄嗟に王女を止める。

「自分にはその勲章を授与される資格があるのですか？　自分は一介の中尉に過ぎませんし……」

「王が、最大の栄誉を与えるに相応しいと判断した人物にこれを与える」

王女はそう言って笑いかける。

「それだけがこの勲章の唯一の資格条項です。つまり、私の一存という事ですね。まあ、日付は明後日以降になりますけど」

それから彼女は真剣な面持ちに代わる。

「あなたは、私に約束してくださいました。必ず迎えに来る、と。そしてそれを見事に果たした。ですから、私もそれに応えたいのです」

そして再び、柔らかい笑みを浮かべた。

「何より、あなたにこそ、この形見を持っていてほしいのです」

そこまで言って王女は口を閉じた。つまり、あとは私の返事次第という事か、と白淵は悟る。

国王の勲章か。白淵は思う。国王は決して評判の良い人間ではなかった。クーデターが起こったことがその証拠だ。独裁的だったとさえ言ってもよいのだろう。しかし……。

白淵は王女を見る。きっと列島であれば、彼女はいたって普通の中学生だろう。友達と遊んで、勉強を投げ出して、恋にうつつを抜かして。そんな彼女にとって、死んだ国王は国王云々以前に、まず一人の父親なのだ。ならばその形見を私が拒否するなど、それこそ失礼極まりない行為だろう。

「分かりました。そういうことであれば、謹んで」

「よかった」

そう言って少女は、白淵の胸元にずしりと重い勲章を付けた。

うん、重い。何グラムあるんだろう。そう白淵は取り留めのないことを思う。きっと、同じ重さの何かを付けても、この勲章の方が重いんだろうな。

ケースも白淵に手渡した王女は、少し離れた位置に立ってクスリと笑った。

「あまりお似合いではありませんね」

「自分も、そう思います」

白淵は照れくさくなって破顔した。

「或いはそれゆえにこそ、あなたに相応しいのです。将軍(ジェネラル)」

「え？」

今、彼女なんて言った？　将軍？

「殿下、自分は中尉(ファースト・ルテナント)ですが……」

「その勲章を付ける人間は如何なる地位であれ、この国では将軍と呼ばれ、我が国の全ての軍人から先に敬礼を受ける立場になるのです。それに」

それから王女は顔を近づけて、悪戯っぽく笑った。

「この国では将軍にさえなれば、王族に呼びつけられるだけでなく、自ら王族の下へ出向くことも堂々と出来ます」

ああ、そうか。このお姫様は。

「またいつか、会いに来てくださいね」

少しこっちも、からかってあげるべきなのかな。

「私も公人ですので、確約は……」

「いやです」

王女は、ずいっと寄せた顔を赤くして言う。

「約束してください」

そんな彼女の様子を見て、臼淵は少し、嬉しくなった。

「……では、必ず」

「ありがとうございます」

そして王女は臼淵から一步離れた。時間が迫っている。

「わがまま言ってごめんなさい。でも、あなたが発つ前にどうしても言っておきたかったのです」

「申し訳ありません、何分、辞令が急だったものですから」

「いえ。あまりお引止めしてもいけませんね。それでは、下がって結構です、将軍」

「さようなら、殿下」

「さようなら。……遠き友」

帰国のための便は、列島軍の輸送機だった。風の噂では、ガリア軍の輸送機には他国軍の人間はもはや誰も乗らないという。ガリアの国連軍内部でのイニチアシブは大きく低下していた。

輸送機の準備ができるまで、臼淵は空港内の小さなバーに居た。酒は飲むにも飲めないのもので、ジュースをちびちびと飲んでいると、ふと背後に人の気配がした。

彼女が振り返ると、そこにはベルヌ大尉がいた。

「大尉殿！」

慌てて臼淵が敬礼すると、大尉は笑いながら答礼した。

「元気そうだね、中尉。よかった」

「よくこの場所が分かりましたね」

「曹長に教えてもらったのさ」

「……ガリア軍の方は今、どうです？」

「大変だよ」

大尉は苦笑して溜息をつく。

「本国もここも荒れてる。何人も首が飛んだ」

「大尉殿は」

「まだ大丈夫かな」

疲れたような乾いた笑みを浮かべて、大尉は話題を変える。

「君は、国に帰ったら何をするんだ？」

「自分が元々、大学院生だってことはご存知ですよ。ですから、まあ、研究に戻ります」

「頑張って大博士になってくれよ。将軍」

なんだ、この人も知っていたのか。

「それじゃ、失礼するよ」

そう言って今度は大尉が敬礼した。もうすぐ搭乗時間だった。

一週間後。臼淵は復員し、大学に復学した。

<fin>

※作中に登場する人物、国家、組織等は全て架空の物です

<あとがき>

Q. 王国はガリア文化圏なのに、「将軍」は英語？

A. 君のような勘の良いガキは嫌いだよ。

歯車の町

木材

油の匂いが香る、狭い路地裏。私はこの香りが好きだった。

不意に蹴ったネジが、左側の空き家の入り口まで転がっていった。追って行って、拾い上げる。錆び付いていて、使い物にはならなさそうだった。

空き家の二階を見上げると、窓の横、家の側面に、大きな歯車が半身むき出しになっていた。前は小さな工房だったのかもしれない。が、今ではもうその歯車も錆び付いていた。たぶん、外すともう半分は綺麗なままなんだろうな。と、私は思った。

ネジを横の歯車に向かって投げつけた。こつん、という音がして、ネジは歯車の内側の隙間に入っていった。それから、かつん、かつん、という音を出しながら、機構部分のその奥へ。そのうちに、音は止まった。

もしまた歯車が動くことがあれば、たぶん大事になる。けど、今までのように、これからもきっと、動くことはないだろう。

私の住む街は、ただ「街」と呼ばれていた。歯車とパイプと配線の並ぶ、機械の街。ここ以外の街は知らなかったし、知ることもなかったから、その呼び方で支障はなかった。

路地の奥で、目的の店を見つけた。その前には、普段そこでは見ないような、大型の人型機械が置かれていた。体長二メートルはあるだろうか。珍しかったのでそれを眺めつつも、本来の目的を果たすために、店の奥に声をかけた。

「じっちゃん。いるー？」

「あいよう。……あんじゃい、口ナかい」

声は人型機械の裏から聞こえた。同時に、白いひげを蓄え、細長い顔をした老人がそこから出てきた。ツナギの裾で鼻の油汚れをぬぐったのだが、汚れが広がって余計汚くなった。

「……意外だ」

「何がじゃ」

「じっちゃん、機械いじりはもう引退したかと思ってたよ」

「何を失礼なこと言うとするこのクソガキが！ 現役じゃからこうしてパーツ屋やっとするんじやろうが！」

そう、ここはパーツ屋だ。天井も狭苦しくて、サビ臭くて、物理的にも経営的にも今にも潰れそうな店だが、一応こうして営業している。

店主であるじっちゃんの言い分では、「品揃えとサービスの良さで隠れた名店としてやっつとるんじやよ」ということだった。店員が店主一人しかいなくて、その店主が毎日のようにカウ

ンターで眠りこけている店に、サービスがいいもへったくれもないと思ったが、それでも確かに品揃えは良かった。私が知っている店の中では、一番だ。何階層もあるような巨大パーツ店でも取り扱っていないようなマイナーな品まであった。

「で、今日は何じゃ。回路基板でも欲しいんか？」

「うん。基盤と素子とか他もろもろが欲しいんだけど……。それよりもさ、何？ これ」

私が人型機械を指さして聞くと、じっちゃんは顎に手を添えて、ううむ、と唸った。

「汎用作業用の大型駆動機械(ロボタ)、じゃと。外壁で作業してて、『海』に落ちちたらしくてな。もう使い物にならんから、うちで引き取ってくれと。……まあ、半分押し付けられたんじゃ」

「ふーん……」

駆動機械(ロボタ)、か。それ自体は、この街では珍しいものではない。四つ脚に車輪のついた移動用駆動機械(ロボタ)——まあ、私たちは『クモ』と呼んでいるのだが——が、中では一番一般的なものだろう。他にも、工事作業とか、修理業とかで駆動機械(ロボタ)が使われているのは見たことがある。のだが。

「……こんな大きい二足歩行タイプ、初めて見たよ」

「わしも実際にいじるのは初めてじゃわい。わけの分からんバランス機構しとるし、遺跡(イセキ)まで使われとる。こりゃ解析はしばらくかかりそうじゃの」

「遺跡(イセキ)っ！ 本当に！」

声を上げた私に、じっちゃんは苦い顔をして目を向けた。

「……あー、その」

「なんじゃお前、また『ガラス眼』のとこ行っとるのか……。駄目とは言わんがの、もうちっと役に立つことしたらどうじゃ」

「役に立つことって……。何さ、トジの話だって役に立つもん」

「あの遺跡(イセキ)バカの話が何の役に立つっていうんじゃ。口を開けば、やれ外の世界がどうの、やれ滅びた文明がどうの、どこぞのエセ学者みたいなことを言いよる。現実を見ておらん」

「げんっ……！ そんなことない！ 現実を見てるからトジは外に出ようとしてるんだよ！ そのくらいじっちゃんだって分かるでしょ！ ばか！」

一気に言ったが、じっちゃんは言葉を返さなかった。目だけをこっちに向けて、じっと私を見ていた。その目がなんだか私を責めているようで、威勢よく喧嘩を売ったはずだったのに、その気持ちは段々としぼんでいって、耐えられなくなって、私は目を伏せた。流れる沈黙が辛くなって、どうしようと思っていた時に、じっちゃんがため息を付いて、口を開いた。

「はあ。で、何が欲しいんじゃ？ どうせこいつは手が掛かる。持ってくもんだけ先に持ってけ」

「う、うん……」

返事をするのもばつが悪かった。いそいそと必要な物を店の中から選んでいく。回路基板と、それに付ける素子いくつかを、引っ掴んでカウンターに置いた。オーバーオールポケットから銀貨を一枚取り出し、それも一緒に置く。

「で、これで全部か？ ロナよ」

「あ、ううん、まだあるんだ」

と言って、店の脇の床に置いてある並んだ一斗缶のうちの一つから、両腕に収まるくらいの中型ジョイントを二つ、取り出してカウンターに並べた。

「……そんなん持って行くんかい」

「うん。必要なんだもの」

じっちゃんがまたため息を付いた。私と、カウンターの雑品と、それから銀貨を見て、店の裏手へ入っていった。戻ってきたじっちゃんの手には、油污れの染み付いた布が握られていた。

「これ、持ってけ」

渡されたので広げてみると、それは手提げ鞆だった。いや、私のサイズだと、手提げでなく肩がけにした方が良さそうだ。試しにかけてみると、右の腰のあたりの、しっかりと来る位置に収まった。

「手で抱えて持ってくよりは、何かに入れて持ってった方がいいじゃろ。どうせ大したもんじゃない、持ってけ」

「わあ、油染みだらけで本当に大したもんじゃないね！でもありがと！大事に使うよ」

「……いつかお前に礼儀を叩きこまにゃならん日が来るとは思うとるんじゃがのう」

眉間に皺を寄せながら強引な笑みを作るじっちゃんを尻目に、私は鞆に買った品物を詰め込んだ。鞆の位置を整えなおして、店の出口に向かう。

「じゃ、じっちゃん、ありがと！また今度ね」

「おうおう、待て、待て」

じっちゃんの呼び止めに、振り向いた姿勢のまま足を止める。姿勢を変えずに、後ろ歩きで近づく。

「……何？」

「これから機械作業するんじゃろ。お前も一応女の子じゃ、身だしなみにくらい気を使え。せめて髪くらいはな」

差し出された手にあったのは、髪留めのゴム紐だった。あんまりいい品じゃなく、むしろ使い古されてボロボロだった。

「……女々しいもん持ってんね、じっちゃん」

「口の減らんクソガキじゃ。いらんならいらんと言え」

「いるいる、いるってば。……へへ、ありがと」

受け取ったゴム紐を咥え、自分の短い金髪を後ろでまとめる。まとまった所で、ゴム紐を使ってそれを結わえた。

「どう？似合う？」

「あーあー、似合うとる似合うとる。じゃからさっさと行け」

「なんだよその適当な返事はー」

愚痴を叩きながら店の外へと小走りする。通りに出て、体を反転させて、後ろ走りになって、じっちゃんに手を振った。

「じゃ、またねー！」

「おうおう、またのう！」

また体を反転させて、前へとかけ出す。路地を曲がった所で、じっちゃんの店と人型の駆動機械(ロボタ)は見えなくなった。

走っていると、どことも知れない廃工場の窓ガラスに、自分の姿が写った。ちょっと通り過ぎてから、戻ってきて、立ち止まって、ガラスに映った自分の姿を眺めた。私の青の瞳が、私を見つめる。ちょっと右を向くと、結わえた後ろ髪と髪留めのゴム紐が映った。いい気分になって、ちょっとにやけた。正面を向いて前髪を整えてみたが、あんまり整わなかった。いいや、と思っ
て、いつも通りに流して、また駆け足で走りはじめた。

階段を登って、梯子を登って、また別の階段を降りて、建物に入って、階段を登って、建物から出て……。

上がったたり下がったりを繰り返して、東の大型工房の三階と居住アパート群を繋ぐ棧橋に出てきた。工房の建物の壁に寄りかかる。小走りし続けて疲れたので、休むことにした。

「はー……」

一息ついて、今出てきた工房を見上げる。のっぺりとした白い壁と、四角張った構造と窓で、いたく無機質な印象だ。視線を戻して居住アパートを見る。増設に増設を繰り返されて、元は四角形だったはずの建物は、今やいびつな球形になっていた。街の人達に『ハチノス』と呼ばれているそれからは、工房と違って、やたら有機的な印象を受けた。やっぱり、いつもの工房と『ハチノス』だった。

左を見やると、『ハチノス』や工房並の高さの建物がずらずらと並んでいる中に、一際高い塔が見えた。塔の突端は、山高帽のように鋭くて、その下には巨大な時計が付けられていた。時計塔だ。この街で最も高い、機械と、歯車がひしめく塔。

更に奥、時計塔より大分遠くには、高い壁が見えた。時計塔の半分くらいの高さだ。とは言っても、『ハチノス』の最上階くらいには匹敵するのだが。右を見ても、建物の奥には壁がある。こちらの方が近いので、より高さが実感できた。

この街は、壁に囲まれている。理由は簡単、その外に『海』があるからだ。二十センチくらいの深さの水溜まりが、延々と地平の果てまで広がっている。らしい。

『海』の水には、毒が溶け込んでいる。あらゆる機械を錆びさせ、腐食させ、溶かしてしまう。らしい。人の体に触れれば、それも溶かしてしまう。らしい。溶けないといえば土くらいのもので、だから街が出来た時に、それに触れないように、と土の壁で街を覆ったそう。それから、やれ『海』からの風が怖いのだ、毒の溶けた水なんて見たくないだとか言われて、壁はどんどん高くなっていった。だから、壁の上の方は、鉄と機械で出来ている。

このことは、全て誰かから聞いたことだった。私は壁の内側で生まれて、壁の内側でずっと育ってきた。だから、『海』がどんなものなのか、見たことはない。

時計塔の中の巨大な螺旋階段を登る。すると、途中で天井の低い円形の部屋に登りついて、それ以上は上がれなくなる。その部屋の八方には切り抜いて出来たような窓があって、外が眺められる。ほとんど街が一望できるといい。

でも実は、そこは時計塔の半分ほどの高さだ。窓の中の一つに、外に狭い足場（ベランダとも言おうか）が付いているものがある。それを足場に外へ出ると、外壁に金具で作られた粗末な梯子があるのを見つけられる。その梯子の先には、扉、というより四角形のフタのようなものがある、そこから再び時計塔の中に入ることが出来る。

ところで、外付けの梯子を登るときは、決して下を向かないこと。これにだけは、注意した方がいい。これだけは、本当に、やめた方がいい。

フタから時計塔の中に入ると、巨大な歯車たちが、お互い噛みあいながら、地鳴りのような音を立てて回転していた。入ってすぐ下に、鉄パイプと鉄板で出来た粗末な足場がある。頼りないもそうだが、そこに立つと、回っている歯車の歯が頭の真横に来る。かなり怖い。気合を入れて、梯子だったり、鎖吊りの階段だったりを使って、塔の内側を登っていく。最後に、大きな横回転の歯車の横を梯子で切り切ると、石の天井に、中に入ってきた時と同じようなフタがある。それを開けて登ると、そこには小さな部屋くらいの空間がある。そこは、秘密の部屋だった。私とトジの、秘密の部屋だ。

「ふうっ」

フタを開けて、部屋に登り込む。肩がけの鞆を下ろして、部屋の地べたに座り込んだ。部屋を見渡す。大小様々の机が不規則に置かれていて、その上によく分からない見たことのないものが置かれている。スタンドの上に筒が付いているものは、ポーエンキョという遠くを見るものだと、この間教えてもらった。他は.....スタンドの上で模様をついたボールが串刺しにされていたり、棒の先端でバランスを取る振り子があったり、鮮やかに四角形に色の分かれた箱（しかもねじるとその部分がぐりぐり回転する！）があったり.....。本も何冊かあるのだが、私に読めない字で書いてあった。とにかく、よく分からない色々なものが置いてある。

部屋の中央には、小さくて低いテーブルがある。その周りに、二人がけのソファと、二つの丸椅子と、一つの背もたれのある椅子と、一つの肘掛け椅子がある。

肘掛け椅子には、もう人が座っていた。膝に布がかかっている。その布の先から見える足は、両方とも機械で出来た義足だ。肘掛けに乗せている腕も、同じように機械で出来ている。癖のついた黒い前髪の間から、彼の目が見える。右目には透明なガラスのようなものが入っていて、部屋のランプの明かりをぼんやりと反射していた。

「遊びに来たよ、トジ！」

「いらっしゃい、ロナ」

私の挨拶に、彼はにこりと上品に笑って応えた。

『時計塔に、変人が住み始めた』。いつだったか、どこからか、そんな噂が流れ始めた。彼が

時計塔に住み着き始めて間もない頃だったそうだ。噂を聞き、時計塔に近寄る人たちがいた。その人たちの中の何人かは、時計塔から降りてきた彼を見た。例外なく、その人たちは彼の右目にはまったガラスのようなものに驚いた。同時に、機械で作られた四肢にも驚いた。彼と話をした人は更に、彼の持っている価値観にも驚いた。だからそのうち、変人というレッテルは彼に馴染んでいった。

街の人が彼に付けたあだ名は、『ガラス眼』。眼にガラス玉が入っているから、ガラス眼。そのまんまだった。

噂が立ってからしばらくして、私にも彼を見る機会が訪れた。噂通りのガラスの目玉と機械の手足の青年。確かに気味が悪いな、と私も思った。ただそれ以上に、好奇心の方が勝った。「どんな人なのかな」。そんな興味が、私を突き動かした。彼の後をつけ、螺旋階段を登り、恐る恐る時計塔の外壁を通り、巨大歯車をしげしげと眺めながら、私はその部屋へ辿り着いた。

場違いな客だった私に、最初は彼も相当驚いた様子だった。しかし、部屋に入ってやたらにはしゃいだ私を（初めて見るものが視界いっぱい飛び込んできたからだ）見て、たぶん彼は冷静になったんだろう。私の意識が彼に戻ってきた時には、既に歓迎の準備がされていた。

部屋にあったものに興味津々だった私に、彼はそれらのことを丁寧に説明してくれた。んだと、思う。私にはちんぷんかんぷんだった。何を言っているか、全然分からなかった。でも、それでも、楽しかった。全然分からなかったけど、理解できるように頑張っけて聞いた。それが、楽しかった。

そのうちに、私と彼は仲良くなった。彼の話、私はよく聞きに行った。というか、今も来てる。まだ半分以上がよく分からないけど、それでも聞いてると楽しい。

そういえば、彼の名前も分からないものの一つだ。なんて呼べばいいか、と聞いた時に、最初彼は『ガラス眼』でいい、と言った。しかし私は納得行かず、しつこく名前を聞き続けた。そのうち、彼は観念して本名を教えてくれた。トジ、なんかかんとか、とか言ったと思う。よく分からなかったの、トジ、と呼ぶことにした。彼は、違うけど、それでいいよ、と言った。

「今日は、髪、まとめてるんだね」

「変かな？」

「ううん、かわいいよ」

「へへー、ありがと」

ちょっとした会話をしながら、私は奥のソファに腰掛けた。ふわっ、と体がソファに沈む。そうしたら、持ってきた鞆が視界に入った。慌てて取ってきて、テーブルに置き、再びソファに掛け直す。

「これはー……」

「欲しいって言ってたもの、買ってきたんだよ。ほら、基盤と、素子と、ジョイント。言ってたよね？」

「え、ほ、本当に買ってきてくれたの？ 参ったな、お使いさせようってつもりじゃなかったんだ

けど……」

「私にだってそのくらい出来るもんねー。ほら、これでいいかどうか確認してよ」

袋をトジの膝にどん、と乗せた。トジは一瞬困ったような顔をしてから、その中身をおそるおそる確認し始めた。一つ一つつまんで取り出し、じっくりと眺めて、それからテーブルに並べていく。途中で中型ジョイントを取り出すと、トジは口元を押さえて苦笑した。

「……すごいね。大分揃ってるよ」

「でしょー。……大分？」

「うん。ちょっと抵抗素子が多すぎたり、圧電素子が足りなかったりするんだけど、それでも大分揃ってる」

「……あれ？ 足りなかったり、って……」

昨日遊びに来た時に、トジはこれこれが欲しい、と呟いていて。私が覚えてる限り全部買ってきたんだけど。

「……間違ってた？」

「ちょっとね」

「う、うわー、やっちゃったかぁ……。どっかに書いとけば良かったかなぁ」

両手で顔を押しやる私。を見て、トジが微笑んだ。

「……ね、ねえ、その買ってきたやつさ、何に使うの？」

指の間からトジを覗き見ながら聞いてみた。すると、予想外だったのか、トジは目を丸くして（ガラスでない方の目だ）、それから腕組みをして、難しい顔になった。

「……話していいかなぁ」

「何をさ？」

「ちょっとまずい気もするんだけど」

「だから、何を？」

「……うーん、話しちゃおうかなぁ」

「もー、もったいぶらないで早く教えてよー」

トジが腕組みをしたまま、私を見た。私に目をやり、基盤に目をやり、天井に目をやり、またちょっと考え込んだ。やがて、観念したように笑みを浮かべ、呟いた。

「これはね……外の世界に出るために必要なものなんだ」

この街の周りは、『海』で囲まれている。そしてそれは、どの方向へも地平線まで広がっている。世界はそこまでだ、と言う人がいる。『海』の果てに世界はなく、この街が全てだ、と。

それは、半分は嘘ではない。何故ならば、今まで『海』を渡った人はいないからだ。薄く、広く張った毒水は、歩いて入れば足をただれさせ、機械で入ればそれを溶かす。その遠い彼方まで、歩いてでも機械でも、行けた人間は一人もいない。

しかし。広がる毒水の先に、別の街は存在している。らしい。それもたくさん存在しているはず。らしい。『海』が出来た時に、地上にいる人々は小さく集落を作って生活していた。それが『海』から逃れるために、それぞれ離れた場所の、侵食の遅い箇所に集まっていった。だから

遠くに行けば、ここは別の街を見つけられる。らしい。

これは全部、トジから聞いたことだ。トジの興味は、外の世界に向いていた。外の世界に何があるか、どうやったら外の世界に行けるか、トジはしばしば口癖のように話してくれた。

同様に、この世界の過去のことにも、トジの興味は向いている。そちらの話は、また後に語ろうと思う。

「行けるのっ、外の世界に！」

トジの言葉に、私は興奮して飛びついた。話に聞くだけの外の世界は、私の目にはとても魅力的に映っていたのだ。

「まだ、かなり先の話になると思うんだけどね。でも目処が立ってきた。そのための準備を、今してる」

「ほへえー……。ね、ね、どうやって行くの？」

「話しちゃったからね、秘密にしてるわけにはいかないな。そこの後ろの箱、どけてごらん」

示されたソファの後ろには、厚紙で出来た丈夫な箱が何個か雑多に積み重ねられていた。後ろを向いてソファの上に膝立ちして、一番上の箱を持ち上げる。思ったよりも軽い。脇にあった空いている机の上に乗せて、次の箱に取り掛かる。それを持ち上げると、後ろの壁に材質の境目が見えた。

「……扉？」

「そう。秘密の部屋から、秘密の秘密の部屋に繋がる扉。今までは君にも言ってなかったけど……見せる時が来ちゃったね」

トジの言葉に、気分が高揚するのを感じた。心臓が早く脈打っていた。未知の大冒険に挑むかのようだ。

箱を急いでどかすと、扉の取っ手が現れた。人が入れるだけのスペースを確保し、ソファを乗り越える。取っ手に手を添えて、息を呑み、トジの方を見やった。

「いいよ、開けてごらん。先に進むと、部屋があるから」

顔がにやけた。視線を扉へと戻す。取っ手を回し、扉を押し開ける。開けて一步踏み出したら、すぐ前に壁があった。道が右に伸びている。人一人通るのがやっとの、狭くて天井の低い石造りの通路だった。

少し進んで、角を曲がると、狭い上り階段があった。そこを登ると、すぐに空間が開けた。トジの部屋より少し広い（ものが大量に置かれていて狭く感じるだけで、本当はあの部屋も同じくらいの大きさかもしれない）くらいの、石造りの正方形の部屋だ。壁の一面、降りてくる時に目に入った正面の壁だけは、大きな鉄板で出来ていた。部屋の内側に目をやる。脇には、小汚い小さな机と、その上に何枚かの紙が置かれている。中央には、大型の機械があった。丸っこい胴に、四足の脚が付き、その先に車輪の付いた、よく見る駆動機械(ロボタ)だった。

「……『クモ』？」

浮っていた気持ちが、羽がなくなったみたいに、急に空中から地面に戻ってきた。肩透かし

を食らったような気分だった。我ながら、拍子の抜けた声が出たと思う。

階段の下から、こつ、こつと音が聞こえた。トジが杖をついて歩いてきている。壁に手をつけて、一步一步足を持ち上げるように、階段を上がってくる。途中で手を差し伸べて、掴まってもらって、引っ張り上げた。

「ちょっと殺風景だけど、秘密って感じ、するよね。どうかな？」

部屋に着いたトジが、私に言った。私はというと、無言でトジから目を逸らしていた。

「……もしかして、お気に召さなかったかな？」

その様子を見たトジが、困ったような声を出す。

「……そりゃ、召さないよ」

「どうして？」

「だって、クモだったんだもん！ もっとすごいものがあるって思ってたのに、こんなの、どこにだってあるよ！」

そう言って、私は顔をつんと背けた。少しだけ大袈裟すぎたかな、と思ったが、このくらいは言ってもいいと思った。トジはしっかり秘密の秘密の部屋とまで言って、でも実際、あったのはただのクモだった。これじゃ、割に合わない気がした。

うーん、と背後からトジの悩ましげな声が聞こえる。振り返ろうかとも思ったが、よすことにした。目を合わせたら気まずくなるだろうし、期待させたトジの方が悪い気がする。

ふと、こつ、こつとトジが杖をついて歩く音がした。どうしたんだろう、と思って、少し迷ったものの、ちょっとだけならと、盗み見するように後ろを覗いてみた。トジは小さい机の横に立って、その上の紙を見ているみたいだった。ふとトジがこちらを向いて、私は慌てて視線を元に戻した。

「ロナ、ちょっと来てごらん」

呼びかけられた。怒るなり困るなりしているかなと思っていたのに、その声があんまりにも普通な様子だったので、拍子抜けしてしまった。振り返ってみると、トジは笑顔で小さく手招きしている。何とも言えない不満を感じつつも、気になるものは気になるので、トジの横まで歩いていく。

「何？」

「見てごらん。これ」

指さされた紙には、クモの絵が書いてあった。いや、絵と言うよりは図だろうか。前と横と上から見た三つの図。それに、いっぱい線が引っ張られて、たくさんの文字（読めないけど、たぶん説明だろうか？）が付けられている。

「クモの、設計図？」

「半分正解。設計図ってのは合ってるけど、クモのじゃない」

首が傾がる。改めて図に目を向けたが、やっぱり見慣れた四つ足のずんぐりむっくりだった。

「え、でも……この図に書いてあるのって、どう見ても、あれだよな？」

そう言って、私は部屋の中央のクモを指さした。トジはそれをちらりと見たが、それでもやっぱりニコニコを崩さない。

「うん、その通り。この図に書いてあるのは、それだよ」

さらに私の首が傾いた。何言ってんの？ って言おうと思って、いやいやでもトジだから、と思いつまんだ。ちょっと考えてみて、やっぱりおかしいと思って、何言ってんの？ と言おうとしたら、トジの口の方が先に開いた。

「実を言うとね、ロナ。僕は、海の腐食に耐える金属の作り方を見つけたんだ」

口が開きかけたままの形で止まる。何を言ったらいいか分からなくなって、とりあえずそのまま口を動かした。

「え、の、な、何言ってんの！」

「え、ええ？」

直前に言おうとした言葉がそのまま出てきた。自分でもびっくりしたが、トジも相当驚いた顔をしている。

「あ、えと、違って、ちょっと待ってね、トジ……」

手を振りながら大きく深呼吸して、改めて口を開く。

「すごい！ すごいよ、トジ！ その金属があれば、海に出ていけるってことだよ！ 本当なの、トジ？」

「ああ、う、うん、本当だよ。かなり前から海の成分は研究してたんだけど、その成果が少し前にやっと出たんだ」

少し戸惑った様子で、トジが答える。私はというと、それを尻目に図とクモを見比べながら興奮していた。

「あっ、そっか！ ってことは、クモの金属をそれに変えればいいんだ！ そしたら、それに乗って海に出られるんだね！」

納得が行って、手を打った。ここにあるのは、外の世界に出るためのもの。そう、トジは言っていたじゃないか。

「うん、その通り。ただ実際は、金属の張り替えだけじゃなくて、内部機構のすげ替えもしなきゃいけないんだけどね。クモの基本機構は貧弱だから、これもまた大変だろうなあ」

大変だと言いつつも、トジはどこか嬉しそうな表情だった。

「……でも、それさえ終われば、この『アメンボ』も完成する」

トジがこちらの方を向いた。ガラスの瞳に私の瞳が写る。

「外の世界は、すぐ近くにあるんだよ」

トジは、改造するクモを、『アメンボ』と名付けていた。トジの故郷にいる、水の上を滑るように移動する生き物のことらしい。この場合は、海の底に足を着けるのだけれど。

改造には、かなりの時間と労力が必要らしかった。パーツもまだまだたくさん必要で、私の買ってきた分だけでは到底足りないらしい。遺跡(イセキ)すらいくつかな必要になる、とトジは話していた。

遺跡(イセキ)というのは、過去の遺産だ。具体的には、現在は滅びたという過去の文明が作ったモノを、総称してそう呼ぶのである。見つかるのは機械部品がほとんどだったが、その一つ一つが今の技術力では解明できないほど、高度で緻密な技術を持って作られていた。出来たのは、その使い方を探るくらいのことだけ。遺跡(イセキ)は、ブラックボックスのまま使われていた。

以上が、トジから聞いた、遺跡(イセキ)についての受け売りだった。トジは、遺跡(イセキ)の研究もしていた。私の知っている誰よりも遺跡(イセキ)の使い方に詳しく、誰よりも遺跡(イセキ)について興味を持っていた。

クモの運転席から足元に潜り込み、機関部に繋がるパネルを探す。見つけるのは簡単だったが、狭いのが問題だ。パネル止めのボルトにレンチをかけたものの、そこから回すスペースがない。仕方なく一旦立ち上がって、両手で力を込めて回した。

「どう、やれそう？」

トジのかけてきた言葉と同時に、丁度ボルトが外れた。

「んー、このくらいならたぶん、大したことないよ。じっちゃんとかの手伝いで、機械いじりはやってる方だしね」

二つ目のボルトにレンチをかけながら答えた。言葉を終えたところで、そのボルトも外れる。そのまま苦労なく残り二つも外し、パネルを取り外した。

さっきの話の後、私は何か手伝えることがないかと、トジに訊ねた。トジは遠慮したものの、しつこく詰め寄った結果、クモの内部基盤を調べる仕事を私にくれた。今すぐやることでもないらしかったけど、私も何かしたかったのだ。

外したパネルから、中を覗き込む。何本も配線がある中に、クモの中枢らしき鉄の箱があった。手元のレンチをドライバーに持ち替える。

「ロナは、手伝ってくれるんだね」

「んー？ それは、まあね。私だってトジの力になりたいし。それに何より、私自身が、外の世界に出てみたいから」

「……そっか。それは、いいことだよ」

話している間に箱の蓋を取り外して、中の基盤部分に手をかける。繋がっている配線をさくさくと外して、基盤を取り外す。

「よっ……と。出来たよ、トジ！ はい、これ」

運転席から顔を出し、側にいるトジに基盤を差し出した。トジは目を丸くしながら、それを受け取った。

「……いやあ、手際がいいね、ロナは。たぶん、機械いじりに関しては、僕じゃ勝てないな」

驚いて、ふへっ、っていう感じの、変な声が出た。こういうことでトジに褒められるのは、珍しい気がする。トジは、私よりずっとすごい人だと思ってたから、不思議な感じがした。

「そ、そうかな？ そっか、嬉しいな。へへへ……」

「うんうん、これからはクモの改造は、全部ロナに任せちゃおうかな？」

「もー、自分だけ楽しもうってわけにはいかないからねー？」

言いながら、クモの運転席から飛び降りる。口ではそう言ったものの、今は純粋に、トジの力になれることが嬉しかった。

「そういえばさ、ここって時計塔の最上階だよね？ どうやってこんなとこまで、クモを運んできたの？」

ふと思いついたので、質問する。基盤を眺めていたトジが顔を上げて、空いている左手を顎にやった。

「あー、そうだね。それに関しては、教えておいたほうがいいかもしれないかな」

そう言って、トジは部屋の脇の方に向かっていく。教える……。なんだろう、言葉には出来ないけど、妙な違和感を受けた。ただそれを気にしているうちに、トジは目的の場所に着いたみたいだった。

「じゃあ口ナ、これ持っててくれないかな。それから、その壁からも少し離れててよ」

部屋の鉄の壁のすぐ脇、石の壁の中ほどに、クランクの機械があった。言われた通り、基盤を持って、鉄の壁から離れる。

クランクに手をかけたトジが、ぐっ、と力を込める。手伝おうかとも思ったが、すぐにそれは回り始めた。ぎちぎち、がたがたという音が鳴る。何のクランクだろう、と思っていたが、すぐにその答えは分かった。部屋の一面の、鉄の壁が、上から開き始めて(･･････)いた。

床と壁の間を蝶番に、鉄の壁が奥に倒れていく。閉じきっていた部屋に、外の空気が勢い良く流れ込む。時計塔の最上階からの景色が、私の瞳に飛び込んでくる。

「この壁はこうやって開くようになってるんだけどね。ここから何本かワイヤーを使って……」

脇で何か喋ったトジの言葉すら耳に入っていなかった。

町にある全ての建物が、眼下にあった。壁すらも、今まで高いと言っていたのが嘘みたいに、足元のずっと下にあった。

壁の向こうには、とてつもなく鮮やかな、極限まで澄んだ青の地面が、ずっとずっと遠くまで広がっていた。それは地平の果てで、空の色と一本のラインを作って、視界の端を超えて、永遠と言えるほど水平に伸びていた。

生まれて初めて見た海は、私が今まで見てきたものの中で、何よりも綺麗だった。

「……素敵だよ」

いつの間にか、トジが説明をやめて、隣で同じ景色を眺めていた。答えようとして上手く言葉が出なくて、必死に頷いてトジの言葉に応じた。

「世界は、こんなにも広い。壁の中の、歩いて一日の庭なんか比じゃないほどに」

トジの顔を見た。横顔の中で、癖のある髪の間から、細めた瞳が見えた。ずっと遠く、空と海の境目を見ているみたいに見えた。いや、本当にそこを見ているのだろうか？ もっと遠くの、どこか別の場所を見ているのかもしれない。不思議と、私はそう思った。ガラスの方のトジの目に、何が写っているのかは、私からはよく見えなかった。

「ロナ」

トジが目線だけを私に向け、口を動かした。

「君は君の意志で、外に出るんだ。僕が僕の意志で外に出るように、ね」

こちらを向いたトジの顔は、笑っていた。けれども、どこか悲しそうにも見えた。

以前トジに、どうして外の世界に出たいのか、どうして過去のことを調べたがるのか、訊ねたことがある。

「うーん、まあやっぱり、好きだからってのはあるね。僕は、そういう研究自体が、性に合っているんだ」

トジは何かの書き物をしながらそう答えた。好きだからにしてはすごすぎる、と私が言ったら、トジはそうかな、と言って、考え込んだ。しばらくしたら、ペンを置いて、笑いながらこう言った。

「そうかもね。僕にとってそれは、使命でもあるんだ。人生の目的でもあって、生きる意味でもある。僕がこんな手足と目になってまで生きているのは、そのせいだよ」

思えばその時のトジの笑顔は、今のと同じだった気がする。

それから、私とトジは、一緒になって『アメンボ』を作っていた。トジが指示を出して、私がそれをする。そんな、共同作業。時折、設計図に書いてある文字の読み方を教えてもらったりもしたのだが、正直なところ、さっぱり覚えられなかった。

改造を始めてから、一週間くらい経った日の事だ。私がいつものように秘密の部屋へと行くと、トジはそこで死んでいた。自分の肘掛け椅子に座って、眠るようにして死んでいた。

葬式は行われなかった。トジに身寄りはいなかった。義手と義足を外されて、共同の墓地に、体だけ埋められた。

私は数日間、時計塔の最上階、トジとの秘密の部屋に、一人で閉じこもった。

トジが死んでから数日して、私は『アメンボ』の作成を続けることにした。作業は難航した。金属の成分や、改造の方法なんかは、全てトジの残したメモや本に書いてあるようだった。しかし、それは私には読めなかった。どうやら、街では使われていない文字が使われているらしかった。

そして、八年の月日が流れた。

「はいはい、どいたどいたー！」

人の多い大通りを、ワイヤーの片端を持って走り抜ける。私の声に驚いて退く人もいれば、少

し離れて野次馬のように声をかけてくる人もいる。

曲がり角に着いて、ワイヤーのもう片端のある時計塔の頂点の方を見る。建物にワイヤーが引っかかっていないかを確認するためだ。そうして再び走りだそうとしたら、目の前に現れたクモにぶつかりそうになった。

「う、わっと！」

とっさに跳ねて、足の一本を踏んづけて着地する。やりすごして走り出したところで、背後から怒声が飛んできた。

「なあにしてくれてんだ！ 弁償しろばあかやろう！」

「ごめんごめん！ あとでやるからさ！」

半身振り返りながら、片手を上げて謝る。クモに乗っているおじさんが、ぶつくさ言いながらも前を向いたのを見て、私はそのまま体を反転させて、通りをまた駆け始めた。

外壁の階段を一段飛ばしで駆け上がり、目的地へとたどり着く。壁中下層、他より少し広い足場のあるそこには、壁に約三メートル四方の凹みがある。正確に言えば、移動用リフトが止まっていてそう見えるだけで、そこは長い縦穴だ。

壁内エレベータ。と、私たちは呼んでいた。壁の頂上まで登る簡単な手段であり、同時に壁の外に降り立つ、唯一の手段でもあった。壁の下層に、外と中を繋ぐ扉は存在しない。海が満ちてきた時に、その侵入を防ぐため、らしい。だから一度階段を登り、壁内エレベータから地上へ降りなければ、海へ行くことは出来ない。

リフト内の操作レバーの前では、椅子の背もたれに体を預けて、読みかけの娯楽本を顔に被せながら、一人の男が寝ていた。気にせずに、ワイヤーの端を持ってリフトに乗る。リフト奥の壁の金具にワイヤーを引っ掛け、入り口にあった巻取り機を持ってくる。音を立ててワイヤーが巻き取られる。その間に、時計塔の方を確認しようと入り口から出ると、男が上体を起こし、眠そうに半目を開いていた。娯楽本が下に落ちている。

「ロナ、お前……。何やってんだよ、こんなところで」

気にせずに、一緒に持ってきていたコンプレッサ（空気入れ器）と、空気を抜いたクッション用バルーンの束を、リフトの中へ持って入る。

「待て待て待て、無視するな！ お前、何持ってきてんだ！」

「まったく、気が短いなあ。こんなちょっとしたことで驚いてたら、人生持たないよ？」

腕を引き止められて、仕方なく応じた。長身だが細身で、力は大して強くない。ここでレバーの上げ下ろしの仕事しかしてないせいだろう。

「で、そのリフト操作員のマルクさんは、私に何かご用ですか？」

掴まれていない左腕でコンプレッサの準備をしながら、私が言った。マルクの方は、呆れたような表情で、掴んでいた私の右腕を離す。

「さっきから言ってるだろ、ここで何やってるか聞いてんだよ。リフトの中で勝手されたら俺が怒られるんだぞ」

質問の間に、巻き取られていたワイヤーを固定する。そのまま、準備の出来たコンプレッサで

バルーンに空気を入れ始める。

「前から言ってるでしょ？ 私は外に出るための研究をしてる、って。ってことはつまり、外に出ようとしてるんだよ」

「はぁー、これだから全く、時計塔の変人二号さんのご意見は……。俺が聞いているのは、そのワイヤーとかコンプレッサとか仰々しい機械、何に使うんだって話だよ。具体的に言え」

マルクがワイヤーを親指で差した。張りを確認するために、指さしたところをぐいぐいと私が引っ張る。

「まあ、もうちょっとだけ待っててよ。そうしたら、お披露目できるものが来るからさ」

「お披露目？ 何言ってんだ、お前」

空気の入ったバルーンからコンプレッサを外し、ついでに一緒に巻取り機も持って、リフトの外へ出た。

「あ、一旦リフトから降りた方がいいよ？ 椅子も持ってね」

マルクが訝しげな顔になる。表情から「何言ってんだお前」と言いたいのが見て取れたが、それを口から出す前に、私が指で示した先を見て、マルクの顔がみるみる青ざめた。大慌てで座っていた椅子を抱えて、リフトから出てくる。

直後、四足の金属の塊が、ワイヤーを伝って、ものすごい勢いでリフトへと突っ込んできた。リフト内に吸い込まれていったそれは、ばすん！ という激しい音を立て、リフト上で止まる。マルクの方を見たら、眉間に皺を寄せた何とも言えない表情で固まっていた。

「よし、紹介しようか、マルク。これは『アメンボ』。外の世界へ出て行くための駆動機械(口ボタ)だよ」

八年が経過し、私も色んな点で成長した。背も高くなり、様々なことを覚えた。その間、私はしつこく時計塔に通い、『アメンボ』を作り続けた。いつしか、トジの持っていた「時計塔に住む変人」の称号は、私の方に与えられるようになっていた。

八年の間に、トジの残した研究ノートも、大分解読出来るようになってきていた。海に溶かされない金属の製法や、機械の中枢部の組み立て方なんかは、今では空で言える。それでもまだ、文章の多くは読めないのだが。

一つだけ、読めるようになった文がある。トジの名前だ。の、読み方だけ。「トウジ・ニシザキ」。それが、トジの本名だった。まあ、私にとっては、トジはトジなんだけれど。

数日前、私はついに、『アメンボ』を完成させた。ノートの解読が済んでしまった後は、かなり早かった。そして今日が、『アメンボ』を使い、外に出て行く日になる。

「どうせ止まるぜ。金貨一枚賭けたっていい」

リフトのレバーを操作しながら、マルクが言った。少し体が重くなって、リフトが止まる。目の前に、扉の四角で切り取られた砂地と、遠くまで続く海が見えた。

「はは一ん、そんなこと言っているのかな、マルクくん？ 金貨一枚って、半月分の給料じゃ

なかったっけ？」

「そんだけありえねえ、ってことだよ。俺が今まで何回、海に落ちた駆動機械(ロボタ)を見てきたと思ってんだ」

操作パネルの下、『アメンボ』の起動キーをまさぐっていた私に、運転席を覗きこんだマルクが言う。私は、ちっちっ、と開いた左手でマルクに向かって指を振った。

「これを今までの駆動機械(ロボタ)と一緒にしてもらっちゃ困るよ。私が手塩にかけて作った、海に出るための駆動機械(ロボタ)なんだから」

マルクはまるで信じていないような顔で、はっ、と鼻で笑った。私の作っていた余裕の笑みが固まる。やれやれ、と言ったマルクのジェスチャーをひと睨みして、私は『アメンボ』の起動キーを回す。

「マルク！ その笑ったの、絶対後悔することになるからね！ ちゃんと見てろよ！」

前進レバーを倒しながら、私はマルクに指を突きつけた。『アメンボ』が、大きな駆動音を上げながら、砂地に入り進んでいく。慣性でふらついた私の指の先で、マルクは手を口元に当てて、押し殺したように笑っていた。

マルクの目は大きく剥かれて、顎はぽかんと開かれていた。

「どおーだっ、見たか、マルク！」

『アメンボ』の運転席で、私が立ち上がって振り返りながら叫ぶ。『アメンボ』は、海に入って数メートルの所で、地上と同様の駆動音を上げていた。

「うっそ……だろ……」

絶句しているマルクに、私は頬を釣り上げて、小さくガッツポーズを作った。再び前を向いて、前進レバーを入れようとした時に、背後からマルクの声が飛んできた。

「おい、ロナ！ これ持ってけ！」

振り向いた私の目に、こちらに飛んでくる小さい光るものが写った。思わず右手を出してそれを受け止め、損ね、慌てて出した左手の掌に、なんとかそれは収まった。

金貨だ。太陽の光を受けて、それは金色に輝いていた。

「賭けはお前の勝ちだ！ 外の世界で役に立つかどうかは知らねえけど、くれてやるよ！ けど、俺の半月分の給料だからな！ なくしたりしたら承知しねえぞ！」

マルクが砂地で、口に手を添えて叫んでいた。不意に口元が緩みそうになって、私はマルクに背を向けた。前進レバーに手をかけながら、ぐっと左腕を上げて、親指を立てた。

しばらく進んで、顔だけで振り返る。大きな壁と、その上から小さく時計塔が顔を出している。まだいたマルクは、表情は見えなかったが、こちらに向かって、私がさっきしたように、左腕を上げていた。

「ありがと。行ってくるよ、みんな」

自分にしか聞こえない程度にそっと呟く。広がる青い地平線に向き直り、私はそれをしっかりと見据えた。

(終わり)

神楽～秋～

東かおり

雪(せつ)良(ら)は夢を見た。

遠い故郷の、雪輪の舞う国に立っていた。

跳人(はねと)の国は雪に覆われた銀世界である。四方を雄々しき峰に守られ、霊山から流れる雪解け水を得て跳人は暮らしている。神々の降りる清らかな頂には、決して解けることのない純白の冠を蒼天に向かって鋭く突きあげていた。

目に映る空の鮮やかな青と地上の雪の白さがまぶしくて、雪良は神々しい風景におもわず深く礼をした。

「雪良」

声のほうへ振り返ると、白銀の景色がかすんだ。あたりは暗くなり、柔らかな雪原はごつごつとした黒っぽい岩場になった。ところどころ穴が開いているようで、吹き出す煙とともに硫黄のにおいがする。真正面にどん、と黒い壁が立ちはだかっていると思ったら、それは坂道だった。頂へ通じる急斜面の両脇には、岩をくりぬいてつくった祠の中のろうそくがか弱く道を照らしている。

「霊山」

雪良は今いる場所を見てそうつぶやいた。神々しい峰々のうちの一つであり、跳人の力の源である『幽世(かくりよ)』に一番近い場所。跳人の長は、この霊山に集まる死にゆく魂の声をきいて、生ある者に伝える役を担う。『幽世』の神の依代である長を守ることが、雪良の一族の役である。

雪良は、あたりに立ち込める硫黄のにおいで胸が苦しくなった。冷汗が背中を伝う。思わず背中に触れようとしたが、柳(やなぎ)葉(は)刀の気配がないことに気づき心細くなった。ここを上れば長様に会える。胸に広がる恐怖心を懸命に押し殺し、岩場の坂を上りはじめた。頼りなげに揺れる炎は雪良が通るたびに大きく震えた。時々聞こえる低く唸るような音に、何度か歩みを止めた。道を照らすこともままならず、手を壁に沿わせてゆっくりと足場を確認しながら上っていく。あの頂上へ行く少し手前に洞窟があって、そこが長のいるところだ。はやる気持ちとこの暗闇から抜けたいという気持ちがいっしょくたになって、どうして自分がこんなところにいるかすら、気にかけることがなかった。

「ああ！」

突然手が空を押した。岩場の壁はそこで途絶えていたらしく、真っ暗で何も見えなかった。その勢いで雪良の体は大きく傾き、岩場の中へ転げ落ちた。ただ下へ落ちているのだという感覚が、抑え込んでいた恐怖心とともに雪良の全身を駆け巡った。

突然下のほうから、朱色の光の塊がせりあがってきた。そのまばゆさに、雪良は思わず目を

つむった。瞬間、ぽたり、と上から水が滴って雪良の額を濡らした。

「え？」

「待っていましたよ、雪良。さあこちらへ」

やさしい声が雪良の名を呼ぶと、恐怖で萎縮しきった心を緩めた。隼人(はやと)の地へ向かう託宣を言い渡したあの声がよみがえる。雪良は静かに目を開けた。

落ちたところはとても広かった。大蠟燭を壁際にずらりと並べ、煌々と中を照らしている。それでも天井のてっぺんは真っ暗なままだ。大蠟燭に囲まれた真ん中に、ぽつんと老婆が座っていた。真っ白な肌に長い耳、身の丈に余るほどの銀髪。そして銀色の目がこちらをじっと見ている。長のほそ腕が伸びて手招きした。

「さあ、お入りなさい雪良」

雪良はゆっくりとろうそくの結界の中へ足を踏み入れた。じりっと炎が揺れる。不思議だったのは、隼人の土地に足を踏み入れた時と同じ感覚がしたのだ。自分がどこにいるのかわからない。けれど見ている世界は少し歪んで見えるだけで何も変わっていない。『幽世』とこの世をつなぐ存在は、姿は見えるが手の届かない、まるで月のようだった。

「久しぶりだね。雪良。最後にあったのは春のころだろう。そのときはこの世界に入ることはなかったね」

「……はい。長様もお変わりなく」

深く息を吸おうとすると胸につかえるのに、息を吐くと体中の気が抜けていくようだった。冷たい空気が肌に触れると、すっぽりと包み込まれるようで、不思議と心が安らいだ。これが、『幽世』の世界なのか。

「長様、これは、現実ではございませんね」

「ああ。現実ではないね。お前の体は遠く隼人の土地にある。白兔がここへ来たがっていたようだから、私はそれにこたえてお前の魂を呼んだだけだ。だから夢とも言えないね」

「白兔？」

こっくりと長はうなずいた。蠟燭の炎が揺れる。長の背後から一人の跳人が現れた。容姿は雪良と同じだが、白一色の装束を身にまとい、瞳が爛々と紅く燃えて純粋な殺意をたたえていた。にじみ出るような殺気で空気を焦がす勢いのはずが、今はかなり和らいでいる。いつも心の奥底で必死に封じ込めていたその存在が、今日の前にいる。

洞窟の壁を伝う水の音や蠟燭の炎の音が聞こえるほど静まり返った。

「これが、白兔……？」

「そうだ。白兔とはお前の中にある『幽世』の力の一つだよ。操人はそれを、『白』と言って支配しようとしたがね」

内に封じ込めていた、雪良自身の守護のための純粋な殺意の具現。本人ですら止めることのできない力の存在。それが『幽世』の力の一部であり、雪良の否定する望まぬものの正体。

「じゃ、じゃあ、本当に私は『死を纏う』跳人ということなのですか？」

雪良の中で淀んでいたものが形を持って浮かんでくるようだった。操人(みさと)のあやが言っていたことは本当だったということか。死を具現する『白』。つまりあのとき長から託宣されたこ

とは真実……。

雪良は懐にしまっている紙を取り出した。橋姫からもらった、『白』と墨で書かれた紙。今見れば生々しく、されこうべがこちらを見て笑っているようだった。

—それは違う—

「え？」

長の口を借りて白兎がしゃべったのだ。長の言葉で雪良に訴える。

—『白』とは操人の言葉でいう、死を意味するものの一つにすぎぬ。白兎とはそのような小さな器に収まるものではない—

やはり死を具現する存在だったんだ。いないほうがよかった……。雪良はそう思った。

—それは違う。死は生と相対するものだが、それ以上に深い意味を多く持つ。生以上に畏れられることもあれば、生以上に魂の眠れる世界ともなる。生の安息を、結界にて守る力の根源が『幽世』であることが、何よりの証拠だ—

白兎の言葉は雪良の頭の中、そして体にしみこんでいくようだった。雪良の頭の中で浮かんだ疑問を白兎が察して教えてくれる。

—雪良。我を否定したい気持ちはわかる。だがお前を守ることが私の役目であり、守ることの真の意味を受け入れることになる—

「だめだ！ あんな時ですら抑えられなかったのに、これ以上……怖いよ」

飛揚との立合いで恐怖が爆発したとき、血への渴望が駆け巡った。意識は「殺意」に染められて、相手の命のこと以外考えることができなかった。それなのに、受け入れることなどできるのだろうか。

頭を抱えうなだれる雪良に長が静かに近づいた。雪良の頭を、長の手が伸びてなでた。子供をなだめる母親のように。

—一度出たら最後ではない。だからこそ隼人から戦い方を学ぼうとしたのではないのか？ それでよいのだ。それが受け入れることなのだから—

自分の心を鑑て、運命を知ってしまった飛揚に向かって、何と言ったか。「神の意志を変えよう」と言っていたのではないか？ 飛揚は『白兎』を止めることができた。雪良の心の中を鑑たからだけではない。『殺意』と斬りあうだけの技量があり、それに『生』を理解し『死』を受け入れていたから。

運命を変えるために、また白兎の暴走を自身で止められるように、戦い方を学ぼうとした。柳葉刀を使いこなせるようになると決めたのではないか。ただ結界をはって守ればよいのではない。守ることは防ぐことだけではない……。

雪良ははっとした。運命は変えられぬものばかりではない。ありたい運命を守るために、来るべき運命に立ち向かうこと……。逃げてばかりではだめなのだ。飛揚のように『死』を受け入れて斬りあわねばならない。

「飛揚さんからたくさん教えてもらっていたんだな……。受け入れるのに、時間がかかるかもしれない。それでも、いい？」

—ああ—

雪良が見上げると、白兔がほほ笑んだ。長もほほ笑んでいた。

—『御神渡(おみわたり)』で神々を慰めるために、運命を変えるために、隼人の地で『兎の遊び』を奏でよう—

白兔はそう言い残し、かすんで消えた。

雪良の中で一つ形が生まれた。これまで混沌としていたものをすっとと収めることができた。危うい刀を収める鞘をみつけることができた。

長は莞爾と笑い、細い指で雪良の向こう側をさしていった。

「さあ、お帰り。元の体へお戻りなさい」

景色の輪郭がにじんでぼやけていった。長の顔も、硫黄のにおいも、岩場も雪景色もみんなかすれて流れていく。首の後ろを引かれるように、やさしい流れのままに意識を任せ、目を閉じた。

。

ぽたん。

柄杓から甕にしずくが落ちる音がして、雪良は目を開けた。

陶器の甕は黒々と光っていた。引き戸の隙間から光が漏れて、土間にすうっと青白い筋を通わせている。起き上がって戸を開くと、冴え冴えとした月が、秋更けた銀露の夜を照らしているのだった。

ブレイキングルール

祐輝

昔から手のかからない子だと言われてきた。学校でも親戚の前でも大人しくしていたから、親は嬉しそうにそう言っていた。その反面、やんちゃで手のかかる弟のことを挙げては悪く言っていた。でもそれがまた楽しそうで、嬉しそうだった。

僕と弟は、全く違う生き方を選んだ。僕は当たり前のように偏差値の高い高校を目指して入学し、今もまた偏差値の高い大学を目指している途中だ。年子の弟はといえば、ろくに勉強もせず、それに見合った高校に行ったために今も遊び呆けている。大学進学なんて考えられないような高校で、そこの生徒の大半がそうなるように、弟もきっと専門学校か就職かの二択になるのだろう。

それに伴って、性格も全然違った。弟は明るく朗らかで、何にも縛られない。対して僕は、人見知りでお世辞にも明るいとは言えず、何をするにも親の望むようにしてきた。けれど僕たちは仲が悪いとかギクシャクするようなことはなくて、どちらかといえば仲が良い方だった。

でも、ある日を境に僕は弟のことにに関して過敏に反応するようになってしまった。

その日は珍しく塾が休みで、早く家に帰ることができた。うっかり母に連絡を忘れてしまったので、夕御飯の準備を頼まなければならないと思い、急いで家に帰る途中だった。塾がある日は、いつも外で済ませていたのだ。

母は、家の前で近所の人と立ち話をしていた。僕は近づいてから挨拶をした。ただいまと言ってから、こんにちは。母も近所のおばさんも快く迎えてくれて、そのまま素通りして玄関へ入ろうとした。

しかし、そこで聞こえてきたのだ。

「今のが上の子でしょ？ いいわねえ、頭が良いってよく聞くわよ」

「そんなこと全然ないのよ、高校だってまぐれのようなものだし。今だって、まだ二年生なのに勉強ばかりして」

「あらでも手がかからなくていいじゃない。下の子はやんちゃなんでしょう？」

「そうねえ。下は本当に困った子で……」

僕は玄関で立ち尽くしてしまった。弟の話をする母はすごく嬉しそうだ。困った風に話しているが、とても楽しそうだ。手のかかる子供の方が親の愛情を受けやすいというのが、本当だったようだ。そんなことをぼんやり考えた。

正直に言って、ショックだった。もちろん母が謙遜で僕のことを悪く言っているのだろうということにはわかっていた。しかし僕は自分の実力で親の勧める高校に入ったし、勉強ばかりなのは

母がうるさくなるのが嫌だからだ。どちらも、母のせいだ。

なのに僕が悪く言われなければいけない筋合いというのはあるのだろうか。すごくモヤモヤする。

そして僕はその日から、弟に対してコンプレックスを抱くようになった。母が弟に対して何か世話を焼く度にそれが嫌に目について、唇を噛んだ。そして次第に弟と接することも少なくなっていった。もちろん、学力コンプレックスも感じた。逆学力コンプレックスというべきか。僕は大学受験をしたくなくなって、塾を休みがちになった。当然母に怒られたが、どうせ弟の方が好きなくせに、僕に構わないで欲しいという思いでいっぱいだった。

僕は、遅い反抗期を迎えていたのだと思う。

しかしそんな誰もが通る道を、僕はまたもや弟に奪われた。隣町の学校の生徒と喧嘩をして、弟は十日間の自宅謹慎処分を受けたのだ。

僕はどうあっても弟を超えることができないと思ってしまった。悪いことをしようとして、勉強をサボることしかできない優等生と、特に意識せずに行動した結果、停学になった不良。それがひとつ屋根の下に住む兄弟だなんて。僕は自分が小さく思えて恥ずかしくなった。

そして謹慎処分中の弟は暇を持て余して僕の部屋によく来るようになった。弟は不良のくせに本を読むのは好きで、僕の部屋にある小説を以前はよく読みに来ていた。

「兄ちゃんさあ」

静かだった弟に声をかけられて振り向いた。僕はこれまでの分の遅れを取り戻そうと、塾の教本を必死にめくっていたところだった。

「何？」

「また、勉強始めたんだ」

少し、ドキッとした。でもそれを表情に出さないように、なるべく素っ気ない声で、まあね、と答えた。

「もしかして、なんか嫌なことでもあったの」

「別に。ちょっと、気分転換してただけだ」

「そっか」

弟は再び本に目を落とした。僕も机に向き直った。しかし話はまだ終わってなかったようで、弟はしばらくしてからまた声をかけてきた。

「俺さ、兄ちゃんのこと羨ましかったんだ」

「……なんで」

「やっぱりさ、優等生じゃん。勉強できるし、品行ホーサーってやつ？ 昔から、親が自慢でき

るのは兄ちゃんだった」

「そんなことないよ。なんだかんだ言って、手のかかるお前の方が母さんたちも気に入ってたと思うよ」

「俺、母さんに駄目な子だって言われるの、昔は結構気にしてたんだよな。今はもうそんなことないけど。でも、母さんたちが期待してるのは、やっぱり兄ちゃんの方だと思うんだ。俺じゃ大学すら行けないし」

だからさ、俺の分まで頑張ってよ。

暗にそう言ってるように聞こえた。母さんたちのような一方的な期待じゃなくて、どことなく縋るような声だった。僕は何故だかわからないけど、弟のためにも頑張らなくてはいけない気持ちになった。

「じゃあ、お前は僕に分まで暴れてくれよ。そういうのは任せた。でも、家族と社会に迷惑がわからない程度にな」

弟は謹慎中の自分に苦笑して、おう、と答えた。

おわり

案山子 2013年夏号

<http://p.booklog.jp/book/75498>

著者：新潟大学文芸部

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/sindaibungei/profile>

今回の執筆者

ソロメロン 幼花 石川うさぎ Erii Blue 黒月藍 落谷アツムネ Sincot9
川名とけ 夏村晋 如月杏 今畑鏡 山吹弓穂 諸木夕 鯛漁逆冊 雛夏至 高天美月
Puney Loran Seapon 外衛真希 芳野朔 秋月夢人 木材 東かおり 祐輝

製本版 発行： 2013年 7月 12日

電子書籍版 発行： 2013年 8月 22日

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/75498>

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/75498>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのパー (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社：株式会社ブックログ